

博士論文

内モンゴル農耕地域における「伝統文化」の形成と変容

—通遼市における婚姻習俗を事例として—

鹿児島大学人文社会科学部地域政策科学

韓艶麗

内モンゴル農耕地域における「伝統文化」の形成と変容
—通遼市における婚姻習俗を事例として—

序論:問題意識と本論の位置づけ.....	1
第一節 問題意識と対象地域の選択	1
第二節 先行研究の検討と研究目的	3
2.1「伝統文化」に関する議論のレビュー	3
2.2「農耕モンゴル人」地域社会の形成・変容についての先行研究.....	9
2.3 モンゴル族の婚姻習俗に関する研究.....	11
2.4 研究目的	14
第三節 研究手法と論文構成.....	15
第一章:内モンゴル東部農耕地域の成立と独自の「伝統文化 B」の形成過程.....	17
第一節 内モンゴル東部農耕地域.....	17
1.1「東部モンゴル」の歴史的状況.....	17
1.2 東部農耕地域の盟・市における旗、県について	18
1.3 東部農耕地域の漢族村落	25
第二節 20 世紀前半期内モンゴル東部農耕村落社会の形成について.....	28
2.1 満州国時代「東モンゴル」に関する資料.....	28
2.2 ランブントブ村落の概要.....	30
2.3 ランブントブ村落の形成過程	31
2.4 ランブントブ村の各世帯の移住事例.....	36
2.5「農耕モンゴル人」村落の特徴.....	44
第三節 モンゴル族の伝統文化	51
3.1 モンゴル族の伝統文化説	51
3.2 モンゴル族の「伝統文化 A」	52
3.2.1 現地の人々のモンゴル族の伝統文化の語り.....	53

3.2.2「伝統文化 A」における婚姻習俗.....	59
3.3 牧畜地域の婚姻習俗の事例.....	61
3.4 「伝統文化 A」と牧畜地域の伝統文化との比較.....	64
3.5「農耕地域モンゴル人」における「伝統文化 B」の形成.....	67
第四節 小括.....	69
第二章:「農耕モンゴル人」の婚姻習俗の歴史的変遷(1950－2000 年代).....	70
第一節 1950 年代から 1990 年代までの婚姻習俗の事例.....	70
1.1 新中国政府成立時代の婚姻習俗の事例.....	70
1.2 文化革命時代の婚姻習俗の事例.....	73
1.3 1980 年代の婚姻習俗の事例.....	76
1.4 1990 年代の婚姻習俗の事例.....	78
第二節 婚姻習俗の連続性と変化.....	79
第三節「伝統文化 A」におけるホルチンモンゴル婚姻習俗.....	84
第四節「伝統文化 A」における婚姻習俗と「伝統文化B」における婚姻習俗の比較.....	88
第五節 小括.....	93
第三章:現代「農耕モンゴル人」の婚姻習俗.....	93
第一節 現代「農耕モンゴル人」婚姻習俗事例.....	94
1.1 農村における婚姻習俗の事例.....	94
1.2 都会地域居住者の婚姻習俗の事例.....	104
第二節 2000 年以前と現在の婚姻習俗の比較.....	113
2.1 婚姻習俗の連続性や変化.....	115
2.2 婚姻習俗の変化の原因.....	119
第三節 経済発展.....	121
3.1 出稼ぎ・大学進出.....	122
3.2 業者の隆盛.....	125
第四節 小括.....	126

第四章: 司会業の隆盛にみる都市発の「伝統文化」の創出傾向.....	127
第一節 都市「農耕モンゴル人」の司会業.....	127
1.1 フフホト市における司会業の事例.....	128
1.2 通遼市における司会業の事例.....	140
1.3 ホルチン左翼中旗における舎伯吐の司会業の事例.....	149
第二節 司会業のネットワーク.....	154
2.1 司会者、婚礼文化メディア会社、結婚する人との関係.....	154
2.2 司会者の弟子養成と師弟関係.....	158
第三節 都市「農耕モンゴル人」の「伝統文化」の創出傾向.....	160
3.1 司会者の「伝統文化」と「伝統文化 A」.....	160
3.2 司会者の「伝統文化」と「伝統文化 B」.....	166
第四節 小括.....	167
第五章: 農耕地域独自の「伝統文化」.....	168
第一節 都市発の「伝統文化」の文化の客体化.....	169
第二節 農耕地域独自の「伝統文化 B」位置づけ.....	171
第三節 なぜ「伝統文化 A」は権威付けされたのか.....	172
第四節 なぜ「伝統文化 B」は無視、無自覚なのか.....	174
第五節 「伝統文化 A」と「伝統文化 B」のバランス.....	176
終章 総括と今後展望.....	177
謝辞.....	182
参考文献.....	184

序論：問題意識と本論の位置づけ

第一節 問題意識と対象地域の選択

中華人民共和国（以下、中国と表記する）は、改革開放以降、経済発展やグローバル化が進行する一方、少数民族の観光の振興やそのための民族文化の復活が推進されている。それとともに、内モンゴルのモンゴル民族も文化を見直す行動や「伝統文化」を主張するようになってきている。

内モンゴルの自治区といっても、モンゴル人のみではなく、漢民族は多数を占め、他の少数民族も多数いる（第一章に詳述する）。さらにモンゴル人の中で、西モンゴル人・牧畜モンゴル人、東モンゴル・農耕モンゴル人とわけられ、西地域のモンゴル人は、「われわれはチンギスハーンの後代で、牧畜生活を営んでモンゴルゲルに住み、羊肉を食べ、ミルクティを飲み、標準語のモンゴル語をしゃべっているので「本物のモンゴル人」であり、東のモンゴル人は、完全に漢化しているモンゴル人だ」という。それに対し、東の農耕地域のモンゴル人は、「われわれは、チンギスハーンの子であるハブトハサルの後代なので、ホルチン文化を持って、モンゴル人に偉大な貢献をあげている」というプライドを持ちながら、一部のホルチン人は標準モンゴル語を一生懸命勉強し、モンゴル服を着て、羊肉を食べ、「本物のモンゴル人」になろうと行動する人たちが現れている。

以上のように、内モンゴルの中で、西モンゴル人・牧畜モンゴル、東モンゴル人・農耕モンゴルと分けられ、牧畜地域に生まれ育ち、標準語のモンゴル語をしゃべる人たちは、「伝統文化」を保存している、「正統」なモンゴル人であり、それに対し、農耕地域に生まれた東地域のモンゴル人は、「伝統文化」をなくし「漢化」したという見方が存在している。東地域のモンゴル人は、モンゴル人の中で、「不平等」な地位に陥り、一部の「知識人」たちは、「伝統文化」を求めて、「伝統文化」の特徴的なものであるモンゴルゲル、羊肉、モンゴル服などを持ち出し「本物のモンゴル人」のイメージを演じ、「伝統文化」を主張しているが、多数の地方の人たちは、「漢化」したと思込んでいる。それによって、モンゴル人としての自信やアイデンティティをなくしている傾向が現れている。

近年のモンゴルに関する研究といっても、モンゴル歴史、牧畜民に関する研究が進んでいるが、農耕モンゴル人に関する研究が非常に少ない。農耕モンゴル人に関する研究といっても、牧畜民から変化してきたモンゴル人、「伝統文化」が変化したモンゴル人としての研究しか上げられない。だとすれば、農耕モンゴル人は、モンゴル人の「伝統文化」がないのか、「伝統文化」はいったい何を以て言っているのか。

実は、内モンゴルのモンゴル人の中で、過半数以上のモンゴル人は、東モンゴル農耕地域に居住している。すなわち、過半数以上のモンゴル人が、前述した重大問題点を抱えているといえる。いうまでもなく、前述した問題点は、モンゴル民族のみではなく、中国のほかの少数民族や、ほかの国々にも存在している。つまり、人々は常に「伝統文化」を持って、国家や民族のイメージとして取り上げられている。外側から見たイメージの「伝統文化」、「ステレオタイプ」化した「伝統文化」で、一つの民族、一つの国を判断しがちである。それによって、現地の人々も、その言い方になじんで、「騙されて」自分自身の位置づけ、自分自身のアイデンティティをなくす危うさが存在している。つまり、「伝統文化」という言葉、意義自体に問題があると思わざるを得ない。それゆえに、筆者は、「伝統文化」を再検討し、より現実の現地人のリアリティを取り上げることが重要だろうと思う。

筆者は、上述したように、重大な問題点を抱えている東モンゴル地域を調査対象地域として選択した。東モンゴル地域といえば、主に、通遼市、赤峰市、ヒンガン盟（東モンゴル地域について第一章において詳述する）である。その中で、通遼市を対象地域として選んだ理由は、一つは、モンゴル人が集中して、モンゴル人の人口が一番多い地域である。二つは、モンゴル人の普段の生活や居住・衣が漢民族と区別できないぐらい「漢化」した地域と言われている地域である。三つ目は、筆者は通遼市出身なので、地元のところに行き、調査しやすい。四つ目は、満州国時代の『朗布窩堡調査報告書』は、通遼市ホルチン中旗の朗布窩堡という村落において調査し、現在からさかのぼり、100年前の、東モンゴルの農耕地域の村落のあり方を伺える。その資料の内容について、第一章の第二節において詳述していきたい。

既述したように、東地域のモンゴル人は、自分のところの「伝統文化」は保存していない、「漢化」したという認識を持ち、「伝統文化」を自覚していないのである。一方、牧畜地域のあらゆるものは、全部「伝統」的という見方が普遍的に存在している。このような、状況に直面した農耕地域のモンゴル人の文化といえば、なんだろうか。つまり、農耕地域のあらゆるものは「伝統」的ではないと否定されている。それゆえに、筆者は、農耕地域を研究対象にしたが、いったい何を事例として、選択していくのが至難なことになった。

以上の問題点にかんがみ、筆者は、婚姻習俗の事例を主要調査対象とした。なぜならば、婚姻習俗は、大人であれば、みんな経験したことがある。そして、それは人間にとって意義深い、忘れられない儀式なので、人々の記憶に深く残っている。たとえば、筆者は、1950年代の婚姻習俗を知るために、80歳以上90歳以下の人たちにも、聞き取り調査した際に、彼らは、20代のときに経験したことをはっきり覚えて、筆者に詳細に答えてくれた。その

¹ボルジギン・ブレンサイン氏によれば、内モンゴルの338万人の三分の二が東モンゴル地域の通遼市、赤峰市、ヒンガン盟に暮らしている。

上、2000年代以降に結婚した人たちは、婚礼のビデオ撮影記録も残っているので、詳細な調査ができる。すなわち、現在生きている人たちに聞き取り調査するのに、婚姻習俗の事例は、最適の事例になるし、1950年代から現代までの、彼らの実践された習俗を、記録することができる。そして現地人のリアルな生活状況や、実践された習俗を婚姻習俗の事例からうかがえる。

第二節 先行研究の検討と研究目的

以上のように、筆者は、内モンゴル自治区の東地域の農耕モンゴル人を対象に、婚姻習俗に関する聞き取り調査を中心に、「伝統文化」を考察するにあたって、まず、「伝統文化」に関する議論を再検討する。ついで、農耕地域のモンゴル人の地域社会の形成・変容に関する先行研究を整理し、地域社会の状況を把握する。その後、モンゴル族の農耕地域における婚姻習俗に関する研究をまとめ、筆者の研究の位置づけを表明したい。

2.1 「伝統文化」に関する議論のレビュー

1980年代以降、エリック・ホブズボウムは、特に近代化の過程における民族と国家とのかかわり、労働組合の形成や展開などのテーマを伝統という語を用いて取り上げている。ホブズボウムは「伝統とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものもある」（ホブズボウム 1992 : 9）と指摘し、そして更に「創り出された伝統」は実際に創りだされ、構築され、形式的に制度化された「伝統」であれ、更に容易にたどることが出来ないが、日付を特定できるほど短時間—おそらく数年間—に生まれ、急速に確立された「伝統」をさし、「創られた伝統」を「通常顕在と潜在とを問わず容認された規則によって統括される一連の慣習であり、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質。事実、伝統というものは常に歴史的につじつまのあう過去と連続性を築こうとする」（ホブズボウム 1992 : 10）と捉えている。そして「創り出され伝統」の特殊性を「新しい状況に直面した際古い状況に言及する形をとるか、あるいは半ば義務的な反復によって過去を築きあげるかといった対応のことなのである。それは近代世界の恒常的な変化および革新と、社会生活の少なくともある部分永久不変のものとして構造化しようとする試みの対象性なのである」と定義している（ホブズボウム 1992 : 10）。

ホブズボウムは、伝統を「本来の伝統」と「創り出された伝統」とわけ、「旧来の慣行（本来の伝統）は、特定の拘束力の強い社会的慣行である。創り出された慣行は、印刻した集

団の成員資格の価値や権威や義務の性質、つまり「愛国精神」「忠実生」「義務」「規則遵守」「学校の精神」などである」(ホブズボウム 1992: 20-21) と定義し、その区別や関係性について「昔のやり方が生きているところでは、伝統が復活したり、創りだされたりする必要がない。伝統が作り出されるのは、古いやり方が通用しなくなるからではなく、故意に用いられなくなるからであり、新たな目的のために、古い材料を用いて斬新な形式の伝統が構築されるのである。新たな伝統は、旧来の伝統と接木され、公的儀礼や象徴体系の宝庫から借り入れられて案出されるが、重要なのはそれらの過去との連続性がおおかた架空という点である」と指摘している(ホブズボウム 1992: 18)。そして「慣習」(カスタム)とは判事が行うこと、「伝統」は彼らの鬘や職服その他正式な飾り、そして彼らの職務上の所作にまつわる儀礼的行為である。法律家の鬘は他の人々が鬘をつけるのをやめて初めて近代的な意義を持ちえた」(ホブズボウム 1992: 11-14) という。

ホブズボウムの事例では、スコットランド伝統の象徴となっている民族衣装タータンチェックのキルトやバグパイプなどは、それまで野蛮の印として否定的なイメージしか持たなかったが、スコットランドが他者としてのイングランド、アイルランドに対抗し自らの象徴を持つ必要性から近代に意図的に「創造」された「伝統」であるという。このようにホブズボウムは、具体的な歴史や民族誌からさまざまな伝統の創出の要素が見られる。そして、観察者の立場から見た客観的な表象として見られる。すなわち、ホブズボウムの取り上げる、「伝統文化」は、国家や民族レベルでのイメージとなる「伝統文化」しか出していないといえる。つまり、ホブズボウムの論では、現地人の実践した習俗となる「伝統文化」を見逃している点が指摘できる。本論では、おもに、農耕モンゴル人地域の「伝統文化」の形成から変容を取り上げ、ホブズボウムの伝統文化論に補充内容になりうる研究になる意義がある。

ホブズボウムの「伝統」に関する議論を引き継ぎ、「伝統文化」を多方面での視点で見た研究が現れてきた。それらの研究を整理して見ると、一つめは、現地人の「伝統」の語りの研究、二つめは、現地人の主体性を強調した文化の客体化論、三つめは、「伝統」と「近代」論である。

1) 現地人の「伝統」の語り

渥美氏は、観察者側の客観的な視点から見た「伝統文化」とカナダ先住民が主観的に捉える『伝統文化』と区別して論じる必要があると指摘した。そして特に先住民の主観的に捉えている『伝統』に焦点をあて、太田氏の「伝統文化は発生の語り口」という概念を採用しつつも、先住民としては、『伝統文化』が常に変化していると思っていないと強調した。つまり、太田氏は、伝統文化が変化し、意識的に客体化されているのに対し、渥美氏は、『伝統文化』を語る主体は変化していないと考えていると議論を展開した。そこで、カナダのサーニッチ族は復興している神話、地名、個人名を考察することにより、先住民の『伝統

文化』は、過去にあったと「想像」される伝統と今日までに「創造」してきた伝統である。そして先住民の伝統が継承するだけの固定的伝統ではなく、二つの仕方で「ソウゾウ」された伝統文化は、「主観的」に「語る」行為も、本来持っていたものではなく、先住民がユーロカナディアンとの接触した結果生まれたものである。先住民が「正しい」（彼らが思う）イメージを選択し、『伝統文化』の「名乗り」を正当なものとするために、『伝統文化』を復興していることを解明している（渥美一弥 1996：105-125）。渥美氏は、伝統文化を語る相手によって、異なると指摘し、現地人は伝統文化が変わっていないと主張している原因やその伝統文化の作り出された過程を論じている。「伝統文化」を主観的に語る人たち、つまり現地人の伝統文化の語りや認識を取り上げている。渥美氏は、「伝統文化」が復興している例として、神話、地名、個人名の事例を取り上げているが、それは、結局みんな意識している、認めている民族レベルでの「伝統文化」をさしている。すなわち、現地人の実践された習俗が見逃されているといえる。

柄木田氏は、あらゆる文化・伝統は、人類学で操作的構成された現実を他者のカテゴリに押し込めた議論を批判し、文化・伝統は多文化的状況化の虚構である、特定の社会内において、創られた伝統に批判が生じている、そのため、伝統文化の本質主義を調査地側の立場に立って、「表象する権利は誰にあるのか」を検討する必要性が問われていると指摘した。柄木田氏は1986年、1993年にヤップ州の環礁で、近年の社会変化に伴い伝統文化を再確認し、実践する首長会議の内容を考察した。二つの会議は、伝統を議題とし、特にタブ概念を再確認し実践することで、近年の社会変化に伴う混乱に対抗しようとする試みだった。しかし、会議が開かれることによって、島間の海面権に関する不一致・対立を噴出させた。つまり、特定の社会内においても、創られた伝統に対する批判が生じている。それは各島の多面的文化確認を無視したからである。ここから、伝統文化の再生産は一枚板では捉えられない、他者を表現する権利は誰にあるのかという問題は、研究者と調査地の間にだけでなく、調査地に競われる問題であると指摘した（柄木田康之 1997：87-99）。柄木田氏は、伝統文化の本質主義を調査地側の立場に立って、「伝統文化」を「表象する権利は誰にあるのか」を検討し、伝統文化は多方面が持っている指摘した。しかし、なぜ、島々の間の対立問題が出てきたのかを考察していないままになっている。

則竹氏は、政治的な文化表象としての伝統概念を批判し、地域社会の日常生活における「伝統」認識それ自体の独自性や多様性は見逃されてきていると指摘した。そしてミクロネシア・ヤップ社会の「伝統」に相当する概念として、ヤレン・ユ・ワアブ（ヤップの人の決まり、やり方、関係）、ヤレン・ニ・カクロム（昔のやり方）、ヤアン・ユ・ワアブ（ヤップの人の格好）という三種類の概念を記述した。ヤレン・ユ・ワアブは他地域のヤレンとの差異に基づいてそのつど客体化される、全体化されない共時的概念である。ヤレン・ニ・カクロムは各地域のヤレン（決まり、やり方、関係）がまとまりなく混在する現状において新たなヤレンすなわちヤレン・ニ・ベエチ（新しいやり方）との対比を通じて「忘却されたヤレン・ユ・ワアブ」として逆説に秩序化・全体化される通時的概念であると指

摘している。ヤアン・ユ・ワアブは、ヤレンとは無関係に成立する外見上の概念である。則竹氏は、前述した事例を考察することにより、ヤップ社会では、共時的比較に基づく「伝統」と通時的比較に基づく「伝統」が区別されていると人類学における新たな伝統概念を提供した（則竹賢 2003：87-105）。則竹氏の事例から、ヤップ社会の現地人は「伝統文化」を語り、強く認識し、自覚しているといえる。しかし、それは、すべて人々は「伝統文化」を意識しているのか。彼らの指す「伝統文化」は、何を意味しているのかが不明である。筆者は東モンゴル地域のモンゴル人が、忘却危険性がある「伝統文化」を取り上げたい。つまり、筆者は取り上げた事例と、則竹氏が取り上げた事例の性質は完全に違うので、則竹氏が取り上げた文化人類学の概念は筆者の取り上げた事例に通用しないといえる。

福井氏は伝統文化の真実性と歴史認識について、島民たちの考える「かつての姿」を歴史資料を用いて多面的考察するが、彼らの認識は必ずしも「事実」ではないかもしれない。ただし「事実」かどうかではなく、伝統文化を図るときのメクルマールとして実際に機能している（福井 2005：47）と指摘している。すなわち、歴史の本、民族の本といっても「事実」といえないと指摘した。福井氏の研究は、「伝統文化」を記録している歴史の本、民俗誌とは、すべて「事実」とはいえないという指摘は、筆者の「権威」付けられた「伝統文化」を考察する際に、示唆的な研究になる。

以上の「伝統文化」に関する研究を整理すると、渥美氏は伝統文化が常に変化しているが、伝統文化を語る主体は変化していないと考えていると指摘し、その実態を解明している。柄木田氏は伝統文化を一枚の板で捉えるのではなく、多方面で捉え、調査地の人々実態を取り上げて議論するべきであると指摘した。則竹氏は、伝統文化を取り扱う際に、現地人のエリートと言説ではなく、現地人エリートではない人々の言説や実践に注目し伝統文化の新しい概念を提示した。福井氏は、現地人は、民族誌、歴史を「伝統文化」を図るメクルマールとしている。つまり、上述した研究は、現地人を主体に「伝統文化」を取り上げている。しかし、彼らの指す「伝統文化」は国家や学者の語る「権威」付けられた「伝統文化」しか指していない。実際現地人の実践された習俗の「伝統文化」を取り上げて考察した研究がみななしといえる。一言で言えば、ローカルの昔の実践された習俗である「伝統文化」が見逃されている。

シンジルト氏は、青海省の河南蒙旗におけるモンゴル民族の語りを「権威的語り」（「国家型語り」「学者型語り」）と「自家製語り」とわけ、実体論的モンゴル地域研究を「国家型語り」と唯名論的民族論を「学者型語り」と呼び、総じて「権威的語り」と読んだ。それは学問や政治の世界における民族の語りが、民族をめぐる語りの体系の上層をなしてきた事実を認識することである。それと対置されるべき存在として民族的状況を生きる生活者の語りを「自家製語り」は少数民衆の自家製の語りが重要であると指摘している。そして、民族の虚構性に過度に傾斜する理論研究およびモンゴル学という地域研究におけるモンゴル（人、族）を本質的に表象してきた主流的な言説を批判し、現に民族的状況を生き

る生活者の語りを強調した。そして主に河南蒙旗における現地のモンゴル人の民族の語りを中心に考察し、民族のカテゴリーは流動的で、時代の発展に伴って、柔軟な対応をとっていると解明している（シンジルト 2003）。

以上のように、シンジルト氏は、モンゴル民族を国家や学者の言い方を「権威的な語り」と実際の地域に生活している人たちの民族の語りを「自家製語り」と読んでいる。筆者は、本論において、「伝統文化」を国家や民族レベルでいう歴史関連の本、テレビ等のマスコミを中心に流布している表象群である「伝統文化 A」と、現地人の実践された習俗を「伝統文化 B」とわけて論じていきたい。「伝統文化 A」はシンジルト氏の「権威的な語り」といってもよいが、「伝統文化 B」は、現地人の語りではなく、現地人が自覚していない、忘却可能性のある実践された習俗をさす。

2) 「文化の客体化」論

「文化の客体化」についての議論は、1980年代以降、エリック・ホブズボウムとテレンス・レンジャーの「伝統の発明 The Invention of Tradition」論の興隆と相まって、盛んに行われるようになった。「伝統の発明」論は、ナショナリズムの成立以降、文化や伝統の多くが創り出されているという現象に注目し、近代国家成立後、「創られた伝統」とそれ以前からある習慣を「本物の伝統」と区別した。一方の「文化の客体化」論は「伝統の発明」論に見られる伝統と近代、「創られた伝統」と「本物の伝統」の区別を西洋と非西洋、文明と未開といったオリエンタリズム的二分法と否定し、その上で客体化を実践する主体の重要性と、そうした主体の意識的・選択的操作へと焦点をシフトしてきた。（駒井 2004：3）。

ついでに「文化の客体化」という概念を本格的に日本へ導入したのは太田好信である[山本 2008：51]。彼は文化人類学の「純粋な文化」「伝統」が過去に存在し、それが外部からの影響により失われ、人たちの文化生産・創造を「非真正な」行為としてネガティブに評価していることを批判した。そして文化の客体化という概念を提示し、文化の客体化を観光というコンテキストにおいて、観光を担う「ホスト」側の人々、様々な形で文化を客体していることを検討している。また文化の担い手が自己の文化を操作の対象として客体化し、その客体化のプロセスにより生産された文化を通して自己のアイデンティティを形成する過程について分析した。その結果、伝統的な文化要素という実体は存在しないことで、文化の客体化によって作り出された「文化」は、選択的、かつ解釈された存在である。いわゆる主体により恣意性・操作性によるものであることを解明している[太田 1993：383-410]。

筆者の研究内容を見ていくと、近年内モンゴルのモンゴル族の結婚披露宴はほとんど結婚披露宴の運営会社に頼んで、司会者²が重要な役割を果たしている。司会者たちは、結婚披露宴の舞台を「モンゴル風」³に装飾し、結婚披露宴をモンゴル族風で司会し、民族性を主張し、モンゴル人の間に非常に流行されている。彼らの行動は、中国における多民族社会、漢民族中心社会にモンゴル民族としてのアイデンティティを主張し、自民族の文化を結婚披露宴に意図的、意識的に、操作的に取り入れている。すなわち、文化を担う主体が文化を意図的、操作的に取り入れていると言える。司会者たちは、結婚披露宴に「伝統文化」を取り入れる行為を、筆者は本論で、大田氏の文化の客体化という概念を借用していきたい。筆者はさらに、司会者たちは、文化の客体化している行動している「伝統文化」は何かを解明していきたい。

3) 「伝統」と「近代化」について

伝統と近代化について、十九世紀の自由主義や最近の「近代化」論に対し、そのような形式化がいわゆる「伝統」社会にのみ限定されるのではなく、なんらかの形で「近代」社会にも存在するのである（ホブズボウム 1992： 11-14）という。つまり、「伝統」とは、近代において「創り出された」ものであり、近代の必要性によって作り出されるのである。近代化の動態的過程における民族間の関係や民族と国家とのかかわり、更に市場の拡大といった現象が交差する中で伝統が作り出されるのであると指摘している。

富川氏は、近代化について、特定の民族文化における「伝統スポーツ」が社会の近代化に伴って、当該社会の文脈の中で、「主体的な営み」によって仕掛けられた「歴史」的過程であると定義している。そして「伝統」と「近代」を対比的な視点で捉えるのではなく、ブフの伝統は長い歴史の中で養われた確信的な「文化遺産」として定義している。そして伝統は自動的過程ではなく、むしろ意識的な選択行為であるというR・レンソンの理論に基づき、ブフという運動形態だけではなく、ブフとかわりあいを持つ人々の行為や概念にも着目し、彼らが行っている一連のブフ改革を「意識的選択行為」として捉えた。

富川氏は、文献資料とフィールドワークを結合し、ブフ文化を文化人類学、スポーツ人類学の視点から捉えている。彼は今までの研究で扱っていた「伝統スポーツ」と「近代スポーツ」は歴史的文化的に対立関係を有しているものの、両者間に相互関係・緊張関係が存在し、その相互関係において、前者から後者への変化・変容過程が中心的に扱っていた議論を批判した。そして、「伝統的ブフ」の近代化過程において、「伝統」は一方向的に「近代」

²新婚夫婦の結婚披露宴を主催する人を指す。

³中国では、欧米式の結婚披露宴、漢風の結婚披露宴、モンゴル風の結婚披露宴など、いろいろと分けられている。「モンゴル風」というのは、モンゴル族の特徴的なモンゴルゲルなど草原のものを結婚披露宴の舞台を装飾するの指す。

すり変えられていくのではなく、逆に「近代的なもの」を「伝統」の中に引き込んだ「伝統の近代的再生・発展」であると指摘した(富川 2002)。当研究では、モンゴル国のハルハ・ブフと中国内モンゴルのウジュムチン・ブフを「伝統スポーツ」として位置づけ、その一連の改革を単なる「近代スポーツ」への『中心』志向ではなく、『中心』を『周辺』へ受け入れる「主体的営み」となし、「伝統の近代的再生・発展」、つまり伝統を再構築するプロセスと捉える動態的概念として用いた。

現代のモンゴル人は近代化より、伝統を主張し、アピールしている。実は彼らは近代社会で近代の要素が入って、近代化を知りつつも、伝統文化を言いたがるのである。富川氏の研究は、近代化は伝統の中に植え込んでいるといいながら、伝統文化についての概念や解釈を見逃されていると思う。つまり「伝統文化」すべてをひとつとしてみている結果になる。しかし、富川氏は「モンゴルブフの近代化における内実は、ブフに共通する「失ってはならない」「内なる精神」であり、その「内なる精神」は民族の文化伝統に深く根づいている精神文化であり、その「内なる精神」を失わない限り、ブフの「伝統」はいつの時代にも維持されると考えられる」(富川 2002: 177-183) という言い方は、なぜ人々は伝統と強調しているのかの原因の一つになるので、筆者の研究に示唆を与えた。

2.2. 「農耕モンゴル人」地域社会の形成・変容についての先行研究

従来からモンゴル族の歴史や伝統文化、牧畜生活に関する研究は数多く存在したが、近年、内モンゴルのモンゴル族の農耕化や定住化が深刻な問題となっていくにつれ、農耕モンゴル人に関する研究が蓄積されている。主に、王玉海(1992、2000、2001)、ボルジギン・ブレンサイン(2002)、闫天灵(2004) 珠楓(2009)、王志清(2010)、李宏・陳永春(2014)らの研究があげられる。

王玉海は、東モンゴル調査報告書や、地方誌などを参照し、清時代の内モンゴルにおける農耕村落形成を五つの種類に分けている。第一は、山東、山西、河北、陝西地域における漢人の個人移民によりできた村落。第二は、漢人の商人や工芸者の移住により形成した村落である。第三、清政府から官庄、公主府、軍屯、駅などの設立により、その周辺にできた村落である。第四は、清政府からの土地開墾という政策により、他地域の漢人は土地を目当てに移住した人々により形成した村落。第五に、漢人の移住や、土地開墾により、牧畜をしていたモンゴル人が開拓した村落。王氏はさらに、内モンゴル農耕村落の形成過程での特徴を三つ取り上げている。一つ目は、内モンゴル南部から北部の順に農耕化された村落が形成されている。二つ目は、村落は商業中心地近隣にでき、主に血縁関係や地縁関係の移住民によって成り立っている。三つ目は、村落は最初に個人や家族の出稼ぎ者の開拓により出来上がっている。前述のように、王氏は清時代における内モンゴルの農耕村落の形成過程における村落の種類や特徴を分類している(王 1992: 28-35)。王氏の研究は、

筆者は、モンゴル人が形成した村落と漢人が形成した村落を比較する際に、参考になる内容となる。

王玉海は、清時代における内モンゴル東部のジエリム（現通遼市）、ジョスト盟（現遼寧省の一部）、ジョウオダ盟（現赤峰市）の三盟を対象に史料を分析し、東モンゴル地域の生産方式、土地関係、社会階級、民族関係の変化を解明した。王氏は清時代のモンゴル人の生産方式の変化、すなわち牧畜から農耕への変化は、清時代の不適合な政策の産物であると批判的に指摘している。そして王氏は、清時代の内モンゴル東部地域の農耕村落の住居特徴について、一つの村が 30 世帯から 50 世帯まで規模を保ち、非常に密集して居住していると指摘している（王 2001 : 41-44）。王氏の研究は、農耕モンゴル人は、牧畜から、農耕への変化は、不適合であるということを読み取れる。すなわち、牧畜から農耕への変化は、歴史的に過ちの道であるという意味になる。

闫天灵は清時代における漢人移民が、近代の牧畜モンゴル社会に変化をもたらした重要な原因であると指摘している。そして漢人移民により、モンゴル人が牧畜という生産方式から変化し、多様な職種を持つようになったが、土地利用権利をだんだん失ってきていると指摘している（闫天灵 2004 : 18-22）。

株颯は、文献史料や地方史料を分析し、清朝時代から満州国時代までの内モンゴル東部地域への漢人移民の移住理由、経緯、定着、農耕牧畜の交差、モンゴル人漢人の混住した社会の形成により、東モンゴル村落社会の牧畜から農耕への変化過程、モンゴル社会の変遷を解明している（株颯 2009 : 217-227）。闫氏、株氏の研究も、牧畜民から農耕に変化した原因を考察しているが、現代農耕モンゴル人の現状について触れていないのである。

ボルジギン・ブレンサインは『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』において満州国時代に日本人が調査した実態調査報告書、特にランブントブ実態調査報告書を中心とした文献史料とフィールド調査を結合した。主に、ホルチン左翼中旗の蒙地開墾の歴史を乾隆時代にさかのぼって整理し、蒙地開墾の本質とランブントブ＝ガチャーの村落の形成過程を解明している。ボルジギン氏はホルチン左翼中旗地域の農耕化、地域社会の形成過程、移住民の移住ルーツを十分に検討し、当地域の中心物を取り巻く通婚関係や各民族の関係を解明している。ボルジギン氏は、ランブントブ村成立の 1919 年から 1999 年まで各農家の構成員の移住史を長年のフィールド調査を通して分析することにより、農耕モンゴル社会は広範囲かつ複雑な経歴を持つ人々によって構成されていることを解明した（ボルジギン・ブレンサイン 2003）。ボルジギン氏の研究は、筆者はランブントブ実態調査報告書の検討する際、貴重な先行研究であると思われる。

李氏らは、内モンゴル通遼市ホルチン左翼中旗の腰林毛都鎮塔林アイルと白菜営子村の漢人である李氏一族の 1950 年前後の移住歴を取り上げている。漢人はモンゴル村落に移住するもっとも手近な方法は通婚を通じて、姻族関係で移住している（李ら 2014 : 130-131）と指摘している。李氏らは、漢人がモンゴル村落に移住し、代々モンゴル人との通婚関係

を通してモンゴル化し、モンゴル人村落に変化をもたらしたと取り上げている。

以上のように、清時代における漢人移住の過程や漢人移住によりモンゴル人へ影響についての研究、満州国時代における漢人移住についての研究は比較的多いが、満州国時代のモンゴル人の移住を中心に行った研究は手薄な分野である。満州国時代に内モンゴルの東地域において多数の日本人が行った現地調査報告書が日本に保存している。そのため、筆者はその報告書と上述した研究を参照に、農耕モンゴル人が形成した村落の独自性を解明していきたい。

2.3 モンゴル族の婚姻習俗に関する研究

モンゴル族の婚姻習俗に関する研究といえば、モンゴル族婚姻習俗の民族誌、モンゴル族の婚姻習俗の変化についての研究、モンゴル族の婚姻習俗の旅行価値についての研究があげられる。

1) モンゴル族婚姻習俗の民族誌

モンゴル族の婚姻習俗についての研究の中では、内モンゴルの各地域の婚姻習俗の民族誌が多数を占めている。たとえば、青木富太郎（1952）、愛岩松男（1990）、烏力吉図（1996）、呼日樂巴特（2012）、古日拉沙（2014）上げられる。

青木富太郎は、1943年秋及び1944年秋の2回にわたり、綏遠省ウランチャブ盟ハルハ右翼旗（現包頭市ダルハン・モーミヤンガン旗）で実態調査を実施し、モンゴル牧畜民の婚姻儀礼に男性側から女性側にあげる婚資、結婚後の分家について取り上げた（青木富太郎：1952：113-128）。筆者は本論で、1950年代以降の婚姻儀礼の流れとその各要素について聞き取り調査を行ったが、1950年代以前の婚姻儀礼の流れ及びその各要素を検討するための聞き取り調査については、インフォーマントが存在していないので、1940年代の婚姻習俗について、青木氏の研究を参考したい。

フリーランドの研究は、1920年前後の西北モンゴルナロバンチン寺領におけるモンゴル社会について述べ、その地域社会集団、生活と技術、血縁組織と財産等について細かく論述している。また1920年代のモンゴル民族婚姻儀礼の制度や儀礼の流れを論じ、当時の結婚の前提となる族外婚の規制を分析し、結婚相手同士が知り合う時から結婚までの過程を詳細に取り上げている（フリーランド1990：375-473）。フリーランド氏の研究は、筆者は1920年代の婚姻儀礼について検討する際に、重要な参考資料となると思われる。

呼日樂巴特氏は、ホルチン地域の各旗の地域の概要を紹介し、ホルチン地域の生業、正月、食事作法、民族服、宗教、教育、婚姻習俗などを整理している。その中で、ホルチン地域の婚姻儀礼の流れを詳細に記録しているので、筆者は本論で、ホルチン婚姻習俗と筆

者は調査した婚姻習俗と比較してみたい（呼日樂巴特 2012：1）。

『中国少数民族の婚姻と家族上巻』には、中国各民族の婚姻習俗を記録している。烏力吉図氏は、内モンゴルのモンゴル人の婚姻習俗の、知り合ってから結婚後まで、全部の過程を詳細に記録している（烏力吉図 1996：68-83）。それは、筆者は、民族レベルで取り上げている「伝統文化A」における婚姻習俗として取り扱い、現地人の実践した婚姻習俗と比較していきたい。

古日拉沙氏は、ホルチン地域の形成から変容の歴史やホルチン人の牧畜生活、牧畜、農耕習俗、食生活、住職、民族服、婚姻習俗、家庭生活、などを詳細に取り上げている（古日拉沙 2014）。筆者は、特にホルチン人の婚姻習俗を筆者の調査した事例と比較してみたい。

2) モンゴル族の婚姻習俗の変化についての研究

近年モンゴル族の文化の変化に関心が高まるにつれて、婚姻習俗の各要素の変化に関する研究、漢族とのモンゴル族の混住による婚姻習俗の変化に関する研究が現れてきた。たとえば、黄利霞（2006）、王志清（2008）、郝亞明（2008）、姚慧（2010）等の研究が上げられる。

黄利霞氏は阿拉善巴彥浩特市における中華人民共和国成立から現代までの、50年間の婚姻習俗の変化と伝統文化と現代化発展の衝突によって、伝統文化が変化していると指摘している。1960年代から1970年代、中国は文化大革命時代だったので、民族文化特に婚姻習俗は断絶された状態だった。1980年代は、モンゴル族の伝統文化が復興傾向の時期だった。しかし、漢族文化の影響を受け、モンゴル族の婚姻習俗に多数の漢族文化が混じっていた。1990年代は、伝統と現代が並行していた時期である。モンゴル族の婚姻習俗は伝統文化の復興もあれば、現代要素を取り入れているものもある。それは、伝統と現代は完全に対抗するのではなく、現代化過程で伝統は阻害でもないことを解明した（黄 2006：76-77）。そして、伝統文化復興の原因を取り上げている。その原因のひとつは、国家や政府からの伝統復興に支持や保護対策をとること。二つ目は、人々自身が積極的に伝統文化の復興活動に参加し、認めることが一番大事なことである。三つ目に、テレビメディアの宣伝である。黄氏の研究は、モンゴル族の伝統文化が復興していると取り上げているが、伝統文化についての概念が不明であり、伝統文化の復興といっても「伝統文化A」を指し、「伝統文化B」を見逃していると思う。

王志清氏は、遼寧省のモンゴル人村落の婚姻儀礼の変化を、文化大革命時代と現代の婚姻儀礼を比較し、聞き取り調査によれば、文化大革命時代には、婚姻儀礼の流れに国家政策の要素が入るようになったという。たとえば、モンゴル族が火、空に拝礼していたが、当時必ず毛澤東に拝礼するなどである。そして当時非常に貧困だったので、婚姻儀礼を華やかに行うことが出来なかった。現代になって、結婚披露宴を業者に頼むようになったので、民族の伝統文化の喪失がひどくなりつつある。モンゴル族と漢族が混住により、モン

ゴル族の伝統文化が漢族の文化の影響を受け、モンゴル族の民族要素が明らかに変化している。その一方、当地の住民が伝統文化に意味を与え、伝統文化を発明している傾向がある（王 2008：46-52）。王氏は伝統的なモンゴル族の白色や青色のハダックは結婚披露宴に赤色のハダック代用されているという事例を取り上げ、その使用過程を考察している。王氏は、その現象は、当地域のモンゴル人は、モンゴル族の伝統文化を忘れ、漢族文化を認め、農耕モンゴル人の村落は、蒙漢文化融合文化空間であると指摘している。また王氏は、伝統と現代について、現代化により、伝統文化の伝承は大きなプレッシャがある状態であると悲観的に論じている。

このように、王氏は、現代社会のモンゴル人の婚姻儀礼の変化は、漢族との混住による漢族の影響が多いことや、グローバル化社会における各サービス業の発展になり、伝統文化が破壊されている。その一方伝統の発明が現れているが、漢族の影響が大きいき、伝統文化と現代化が衝突していると指摘している。王氏は指摘しているのは結局、「伝統文化 A」の喪失や現地人の「伝統文化 A」を忘れ、「漢化」していること示している。しかし、現地人の「伝統文化 B」を完全に否定し「漢化」したという結論になっている。

郝亜明氏は、内モンゴル通遼市の四つのモンゴル族村落で 1996 年と 2005 年に実地調査を実施し、モンゴル族と漢族混住地域において、族際婚姻の比率が高いと解明した。そして族際婚姻により両民族の友好関係や両民族の文化融合を促進し、中華民族間の友好関係や団結をかためられると指摘した（郝 2010）。郝氏の取り上げている、国家政策や民族政策村落の出稼ぎ状況は筆者の研究に参考になる。

姚慧氏は新婦の烏仁套克陶（ウリントコト）新郎の敖登宝日（オドンボロ）二人の内モンゴル錫林郭勒盟東烏株穆沁旗薩麦蘇木霍爾其格嘎查に行われた結婚式の流れを細かく記録しながら、昔の婚姻儀礼と比較してある。その結果、内モンゴルのモンゴル民族の伝統的な習慣を完璧に保存されていると思われる烏株穆沁モンゴルも現代社会の発展と伴って伝統的な元素が変化してある。その中で特にモンゴル民族の婚姻儀礼に歌われる独特な長調という歌が現代流行歌曲に代行されている。しかもモンゴル人であれば民族歌で感情交換する習慣さえ変更していなかったらモンゴル民族の伝統的な習慣が永遠に伝えていくことを楽観的に述べている（姚 2010：44-53）。姚慧氏の研究は、筆者は、牧畜地域の婚姻習俗の事例と「伝統文化 A」に記録している婚姻習俗と比較する際に、重要な研究になる。

上述した研究を整理してみると、グローバルな社会や漢族との混住により、モンゴル族の「伝統文化」が変化し喪失しているという見方が多い。つまり彼らの指している変化している「伝統文化」は、国家や学者が語る、民族のレベルで抽象化された「伝統文化 A」を指しているが、現地人の実践された習俗である「伝統文化 B」が見逃されているといえる。

3) モンゴル族の婚姻習俗の観光価値についての研究

近年民族文化が国家非物質遺産に登録されることによって、民族文化は全国的に注目さ

れ始め、婚姻習俗の観光価値に関する研究も現れてきている。たとえば、阿榮高娃（2010、2013）、唐孝輝（2011）、張桂娜 張麗萍（2013）李静宇・阿榮高娃（2013）、等があげられる。

阿榮高娃氏は、ホルチン婚姻習俗は2008年に国家級非物質文化遺産名簿に入り、2010年上海世博の舞台に演劇の形式で演じ、草原の文化は世間の人々の注目を浴びたことを取り上げた。ホルチンモンゴルの婚姻習俗は、モンゴル族の飲食、服装、居住、音楽、踊り、祭儀、宗教、礼儀などを含んでいるので、それを旅行者に対し、可視化としての旅行商品をつくるのは、ホルチン地域の旅行を発展させ、伝統文化の保護や伝承有意義であると指摘した（阿榮高娃2013：15－18）。阿榮高娃氏は、ホルチン婚姻習俗の民族特徴や文化要素を取り上げ、その観光価値を考察している。

張桂娜・張麗萍は、ネット社会の現代に、オロドス婚姻習俗を可視化することを目前の課題として取り上げ、オロドス婚姻習俗の可視化する意義、現状、施策を考察している（張ら：2013：189－191）。それにより、オロドス婚姻習俗の可視化することにより、民族文化の伝播を促進し、民族文化産業の発展や国家非物質文化遺産を保護できると指摘した。

李静宇・阿榮高娃は、ホルチン婚姻習俗の観光開発の中で、存在している問題点を指摘し、今後婚姻習俗旅行開発にどのような施策が必要であるか、どのように開発したら合理的であるかを解明している（李ら2013：25－29）。

これらの研究は、政府や地域のエリートの人々の立場に立って、観光価値や経済的な利益的な立場に立って論じている。すなわち、「伝統文化 A」の価値、観光価値を取り上げているが、実際現地のモンゴル人の立場に立って論じていないし、現地人地域の住民の事例考察をおこなっていない。

2.4 研究目的

以上に取り上げた先行研究を踏まえ、筆者は、1950年代から現代までの農耕モンゴル人の婚姻習俗を事例として、調査することによって、「伝統文化」を再検討していきたい。つまり、歴史関連の本、テレビ等のマスコミを中心に流布している表象群である「伝統文化 A」と現地の人たちにより実践された習俗である「伝統文化 B」を比較することによって、「伝統文化 B」の位置づけ、重要性を解明していきたい。それとともに、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」のバランスを保ちながら、一つの民族、国家の健全な発展の重要性を解明していきたい。

「伝統文化」と言い出すと、どこ地域、どこの国においても、「伝統文化 A」は「権力」的で、一つの民族、一つの国家のイメージを出している。しかしその一方「伝統文化 B」は、本やテレビなどに宣伝していない、実際の現地の人々の日常生活に存在している。現在「伝統

文化 A」をあまりにも強調している結果、「伝統文化 B」を認識しない、知らなくなっている恐れがある。ゆえに、現地人の実践された習俗を記録し、後代に伝える価値がおおいにあると思う。更に「伝統文化 B」を伝える、知ることによって、一つの民族や国のことを素直に理解でき、今後の紛争や戦争を避けることができるだろう。

第三節 研究手法と論文構成

以上の研究目的を持って、筆者は、特に、農耕モンゴル人の婚姻習俗を事例として取り上げ、文献資料を考察すると、フィールドワーク調査、ウィチャット⁴聞き取り調査を利用した。筆者は、2011年から2016年までに、五回帰国して、毎回2ヶ月間、現地に滞在して現地のインフォーマントとの話を録音して、記録する形で調査した。しかし、日本に戻ってきて、実際に事例を書き、考察するとき、補充調査が必要なので、特に、ウィチャットでの聞き取り調査方法を利用した。なおここで、特に注意しておきたいことは、モンゴル語の発音のカタカナ表記は、当該地域のモンゴル語の発音に応じて記した。

筆者は特に、司会者たちの聞き取り調査で、ウィチャットを利用した。司会者たちは、ウィチャットのタイムラインに、「モンゴル風」の結婚披露宴の司会の様子や、宣伝を行っている。それによって、司会者たちの行動を伺うことができる。さらに、司会者たちは、ウィチャットを利用して、グループを作っているのので、筆者は、そのグループに入り、結婚披露宴の司会者、婚礼メディア会社、結婚披露宴での出演者たちの関係を伺うこともできる。ウィチャットで調査は、調査内容を文字で打ち込み、インフォーマントは時間があるときに音声メッセージでお願いする形で聞き取り調査をした。しかし、あるインフォーマントはすぐ返事がくるが、ある人は忙しいのですぐ返事がこない。そのときに筆者は、電話をして、ウィチャットに返事できる時間を確認する。ウィチャットでの調査は写真やデータを受け取れるし、音声メッセージを何度も繰り返し聞くことができるので、筆者の調査に非常に役立った。

第一章では、農耕地域の形成と農耕地域の独自性を解明していくために、特に、満州国時代の調査報告書を綿密に考察した。第二章は1950年代から2000年代のインフォーマントに対して、2012年10月に帰国して調査した内容になる。その補充調査を電話で聞き取り調査した。第三章では、2012年から2015年までの3回、帰国して、現代の結婚披露宴に参加

⁴現在中国において、ウィチャットを持って連絡を取っている。それはLineと同じような使い方である。筆者は、結婚披露宴の司会者をウィチャットで友人登録して、主に、聞き取り調査を実施した。。ただし、2013年以前は、ウィチャットは、まだ普及していなかった。現在50代の人もウィチャットを持って、連絡を取ることができる。

調査し、その後、ウィチャットや電話で聞き取り調査をした。第四章では、主に、司会者を中心に調査したので、2015年10月から11月までに、参与調査や聞き取り調査を実施し、日本にいる間は、司会者たちとウィチャットでやり取りして、詳細な調査を実施した。

以下では、本論における論文の構成を整理していきたい。

第一章では、東モンゴル地域の概況を紹介し、満州国時代の調査報告書、主に『ランブントブ実態調査報告書』を綿密に考察して、モンゴル人が形成した村落の特徴を解明する。それを、先行研究で取り上げている漢人が形成した村落を比較する。それによって、モンゴル人が形成した村落と漢人が形成した村落との相違点を解明する。そして、民族レベルで語る「伝統文化 A」はどのように、歴史の本や、民族の紹介書に書かれているのかを考察して、それは、農耕地域のモンゴル人や牧畜地域のモンゴル人にどのように反映されているのかを解明する。最後に、農耕モンゴル人地域の「伝統文化 B」の形成過程を考察し、農耕地域のモンゴル人の独自性を解明していきたい。

第二章では、農耕モンゴル人地域の通遼市ホルチン左翼中旗地域を中心に、1950年代から1990年代まで、即ち36歳から85歳までの11人のインフォーマントを1950年代の婚姻習俗、文革時代（1966-1977）の婚姻習俗、1980年代の婚姻習俗、1990年代の婚姻習俗に分けて、それぞれの事例を提示していきたい。そして各年代の婚姻習俗の具体的な事例から、その連続性と変化を考察する。それによって、「伝統文化 A」における婚姻習俗と「伝統文化 B」における婚姻習俗を比較して、その相違点を解明して、農耕モンゴル人の実態である「伝統文化 B」のあり方を解明する。

第三章では、現代の「農耕モンゴル人」の婚姻習俗の事例を取り上げ、第二章第一節で提示した1950年代から2000年代までの婚姻習俗と比較し、婚姻習俗の連続性と変化を考察する。そして、その変化した原因やそのあり方を解明していきたい。

第四章では、第三章で、現代「農耕モンゴル人」の婚姻習俗の事例を提示し、その事例を第二章で提示した2000年以前の婚姻習俗の事例と比較してみた。その結果、現在は結婚披露宴を、地元へ一度実施してから、都会の勤務地に再び実施する人が多くなってきた。すなわち結婚披露宴は婚姻習俗の中で重要な地位を占め、それを全部業者に頼むようになっている。それは、2000年以降の国家の各政策元での著しい経済発展により、現代の農耕モンゴル人は、出稼ぎ、進学（特に大学進学）が増加し、地元で暮らす人は激減している理由が挙げられる。特に大学卒者のモンゴル人が結婚披露宴を「モンゴル風」で華やかに実施している点が興味深い。ではそのような結婚披露宴を企画している司会者や文化メディア会社の人はいかにして結婚披露宴の舞台を装飾し、流れを作っているのか。本章で「モンゴル風」の結婚披露宴の司会者と業者の事例を取り扱い、司会者はいかにして、結婚披露宴を企画し、モンゴル族の諸要素をどのように取り入れようとしているのかを解明していきたい。そして司会者が言う結婚披露宴に取り入れた「伝統文化」とは何を指しているのか、そして都市ではどのように「伝統文化」を創出しているのかを解明してい

たい。

第五章では、都会発の「伝統文化」と農耕地域の独自の「伝統文化B」は自覚していないままになっているのはなぜなのか、そして「伝統文化A」はどのように「権威」付けられているのか。どうしたら「伝統文化A」と「伝統文化B」をバランスよく保つことができるのかを検討して「伝統文化B」の位置づけを解明していきたい。

第一章 内モンゴル東部農耕地域の成立と独自の「伝統文化B」の形成過程

本章では、東モンゴル地域の概況を紹介し、満州国時代の調査報告書、主に『ランブントブ実態調査報告書』を綿密に考察して、モンゴル人が形成した村落の特徴を解明する。それと、先行研究で取り上げている漢人が形成した村落を比較する。それによって、モンゴル人が形成した村落と漢人が形成した村落との相違点を解明する。そして、民族レベルで語る「伝統文化A」はどのように、歴史の本や、民族の紹介書に書かれているのかを考察して、それは、農耕地域のモンゴル人や牧畜地域のモンゴル人にどのように反映されているのかを解明する。その後、農耕モンゴル人地域の「伝統文化B」の形成過程を考察し、農耕地域のモンゴル人の独自性を解明していきたい。

第一節 東部農耕モンゴル村落社会の独自性

1.1 「東部モンゴル」の歴史状況

内モンゴル自治区は中国北部に位置し、118.3 万平方キロメートルの面積で、新疆ウイグル族自治区、チベット自治区に次ぐ中国三番目広さの地域である。内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の生活様式は、概ね牧畜生活、半農半牧生活、都市生活の 3 つのタイプがある。

内モンゴルという名称について、ボルジギン・セレゲレン氏は、「清朝の「内扎薩克蒙古」＝「ウブル・ザサグ・モンゴル」に由来する。ウブルはモンゴル語で「南、ふもと、内部」を意味し、ザサグは清朝の内モンゴル行政制度を表し、モンゴル語で「行政」「旗長」に匹敵する。この名称を漢籍文献ではその地理的位置がモンゴル高原のゴビ沙漠の南に位置することから「漠南蒙古」と記述した。また清朝建国以前から満州人貴族と親密な関係を持ち、西域モンゴル・漠北モンゴル人地域と比べて比較的早期に満州人と同盟を結び、外藩内部モンゴルであることから「内蒙古」とも記述した。清末、民国期になると「内蒙古」という名称が定着した、後に内モンゴル地区・内蒙古高原と称した」と解釈してい

る（ボルジギン・セレゲレン 2007：75）。「内モンゴル東部」とは、清代内モンゴルの東三盟すなわちジリム（哲木盟）ジョーオダ（昭烏達）盟、ジョソト（卓索）盟を指す。しかし現在興安盟、通遼市、赤峰市の範囲に縮小し、中華人民共和国の内モンゴル自治区の東部を構成している（吉田順一 2007：3）。では、内モンゴル東部地域はどのように形成されたのでしょうか。

チンギスハーンの異母弟ハプト・ハサル（またはジュチ・ハサル）に所属した部族（後のホルチン部）は 16 世紀の半ば頃までエルグネ河やオノン河流域に牧畜していた。その範囲におおよそ東西は大興安嶺からバイカル湖の東岸まで、南北は外興安嶺からフルンボイル南部やハルハ川南部までの広大な地域を占めている（ボルジギン・ブレンサイン 2003：26）。16 世紀の末期から 17 世紀初頭にかけて遼東半島の満州諸部族と遼河領域の北元（明朝勢力によって万里の長城以北に後退した従来の元朝勢力を指す）ホルチン部族のモンゴル貴族と交流があった。その後お互いに血縁関係を築き、満州諸族内部と周辺のモンゴル諸族へ勢力を伸ばしていた。1616 年に現在の中国東北部に満州部族のノルハーチが満州諸部族を統一し金国を建国した。ノルハーチの三男ホワンタイジが後継した後も、モンゴルホルチン部の支援を背景に勢力拡張戦争を続けた。1636 年に国名を「大清」とした（ボルジギン・セレゲレン：75）。清朝は内モンゴル牧畜していた牧地の範囲をもとに 10 旗に分割した。しかし、ホルチン部は、モンゴル各部の中でもっとも早く満州人と同盟を結んだことによって、その後の清朝によるモンゴル各部族に対する征服戦争、対明戦争、ジュンガル平定戦など数々の征服戦争に常に欠かせない軍事力として加わり、その王公たちは多大な功績を立てることが出来た。その上、清朝皇室との密接な婚姻関係によって、清朝支配下に入ったあらゆるモンゴル部族の中でホルチン部王公の爵位、俸禄、待遇が遥かに上回ることになったのである（ボルジギン・ブレンサイン 2003：31）。19 世紀末頃から 20 世紀の初頭にかけて、北東アジア地域の覇権をめぐる日本とロシアとの争いの中で、東部内モンゴルは一躍国際舞台に登場するようになり、また清末の「移民実辺政策」によって東部内モンゴル地域はそれまではそれまでにない急変の時代を迎えるのである（ボルジギン・ブレンサイン 2003：5）。1902 年から始まった官主導の開墾によって、わずか十年も経たないうちに、シラムレン河流域にいくつもの県がつくられ、モンゴル牧畜民は優良牧草地から徹底を余儀なくされ、牧畜生活の破産と農耕生活への転換を強いられた（ボルジギン・ブレンサイン 2003：5）。

では現在の東部モンゴル地域はどのような地域なのか、以下それについて記述していきたい。

1.2 東部農耕地域の盟・市における旗、県について

内モンゴル自治区には 49 の民族、2481.71 万人（2011 年統計）が居住している。その内

訳が、漢族が 19273558 人 (78.16%)、モンゴル族が 4472026 人 (18.14%)、その他の民族が 128 万 7679 (3.7%) である (内モンゴ統計年鑑 2012 : 101)。このように、内モンゴルと言っても、漢民族が圧倒的な割合を占め、モンゴル民族は五分之一しか占めていない。中国領内に暮らす少数民族の中で、モンゴル民族の人口は約 480 万人である。そして約 80% を占める 338 万人が内モンゴル自治区に居住している。更に内モンゴル自治区のモンゴル人の三分の二がその東部地域の通遼市、赤峰市、ヒンガン盟に暮らしている (ボルジギン・ブレンサイン 2003 : 2)。各市における総人口及びモンゴル族人口の割合を表 1 のように示すことができる。そして各盟・市における旗、県の詳細を表 2 で示している。

表 1. 内モンゴル東部三盟・市の総人口とモンゴル人口の割合 (単位 : 万人)

	総人口	モンゴル族人口	モンゴル族の占める割合
興安盟	158.3	61.7	38.98%
ジリム盟 (通遼市)	290.9	123.4	42.27%
赤峰市	426.5	71.0	16.66%
合計	876.7	256.1	29.2%

出所 : 内モンゴ統計年鑑 2012 : 101 により作成

表 2. 内モンゴル東部三盟・市における旗、県

盟	所属する旗	所属する県
興安盟	ホルチン右翼前旗、ホルチン右翼前中旗、ジャライト旗	突泉県
ジリム盟 (現通遼市)	ホルチン左翼中旗、ホルチン左翼後旗、ジャライト旗、フレイ旗、奈曼旗	開魯県、
ジョーオダ盟 (現赤峰市)	バーリン左旗、バーリン右旗、ヘシクテン旗、アルホルチン旗、オンニュード旗、オーハン旗、ハラチン旗	寧城県 林西県

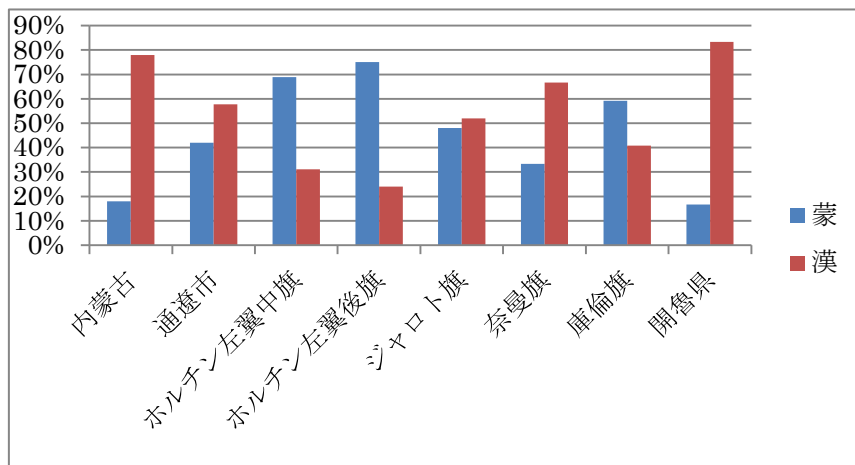
出所 : モンゴル研究所 2007 : 6 をより作成

表 2 に示しているとおおり、盟・市の下に旗と県が所属している (表 2)。旗と県の下級行政組織は、蘇木 (ソム) と郷 (シャン) があり、ソムが主にモンゴル人が集住地域に置かれるのに対して、シャンは漢人が集中している地域に置かれる。別に鎮もある。鎮は旗政

府、県政府の所在地及び人口二万人前後以上で、そのうち非牧畜人口と非農業人口が 10% 以上または 2000 人以上の蘇木や鎮に設置が認められる（モンゴル研究所 2007：5-6）。かつて旗には蘇木だけあった。しかし今や、興安盟では蘇木 36、シャン 21、鎮 12、通遼市では蘇木 86、郷 45、鎮 26、赤峰市では蘇木 43、郷 124、鎮 58 で合計すると、蘇木 165、郷 190、鎮 106 であり、郷の方が多いためである。鎮も 106 とかなり数が多いが、鎮にも郷から昇格したものが多い（モンゴル研究所 2007：5-6）。前述したように、鎮や郷の数が徐々に増加し、漢人が多くなっていることがわかる。では各地域でのモンゴル人、漢人の人口はどのような割合で居住しているのか。筆者は、図表 1 から図表 5 まで、通遼市における各旗・県、鎮、蘇木・郷、村・嘎查のモンゴル人と漢人の人口の割合を並べた。

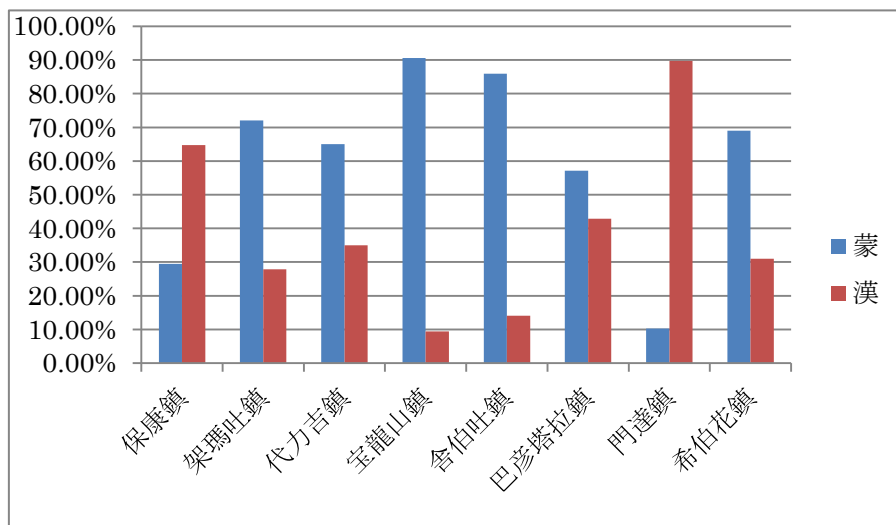
前述したように、通遼市では 42.27% がモンゴル族で、漢族の割合が圧倒的である。では過半数以上の割合を占める漢人はどの地域に住んでいるのか、図表 1 に通遼市における各旗・県であるホルチン左翼中旗、ホルチン左翼後旗、ジャライト旗、フレイ旗、奈曼旗、開魯県の人口の割合を並べてみた。その結果、他の旗にも漢人がある程度の割合で居住しているが、開魯県において圧倒的数の漢人が住んでいることが明らかである。また更に筆者は、主にホルチン左翼中の鎮において調査した結果を図表 2 に並べてみた。その結果、門達鎮、保康鎮、巴彥塔拉鎮など、吉林省や遼寧省など他県地域に近いほど、そして交通便がいいところに漢人が集中的に居住していることがわかる。鎮の下に蘇木と郷がおかれているので、その地域における民族人口の割合を図表 3 に並べてみた。そして蘇木にはほぼモンゴル人が集中的に住み、郷には漢民族が住んでいる。しかし吉林省から近い図布信蘇木における漢人の割合は、勝利郷に匹敵する。更に図表 4 と図表 5 に、村と嘎查とわけ、調べた結果、嘎查においてモンゴル人がほぼ 100% の居住地域が多い。しかし、漢人居住地域から近いほどモンゴル人と漢人の混住が現れてきている。前述したモンゴル族と漢族との混住の特例を差し換えてみると、モンゴル人村落と漢族村落は、モンゴル人集中地域と漢人集中地域として分かれて、居住していることがわかる。そして、漢人集中地域は、他省周辺地域集中地域や鉄道沿い地域に住んでいるのが多く現れている。

図表 1. 内モンゴル及び通遼市の各旗県における民族人口の割合



出所：内モンゴルの人口数字は『内モンゴル統計年鑑』2012：101により、他は『中国分省系列地図冊中国』2016：94-103により作成⁵

図表 2. ホルチン左翼中旗の各鎮における民族人口の割合

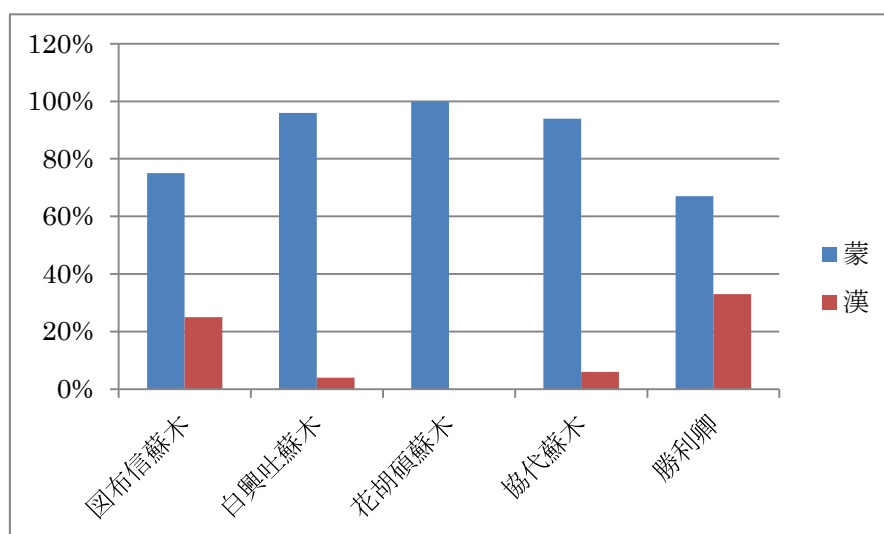


出所：『科爾沁左翼中旗地名志』2012により作成⁶

⁵各地名は地図 2 を参照。

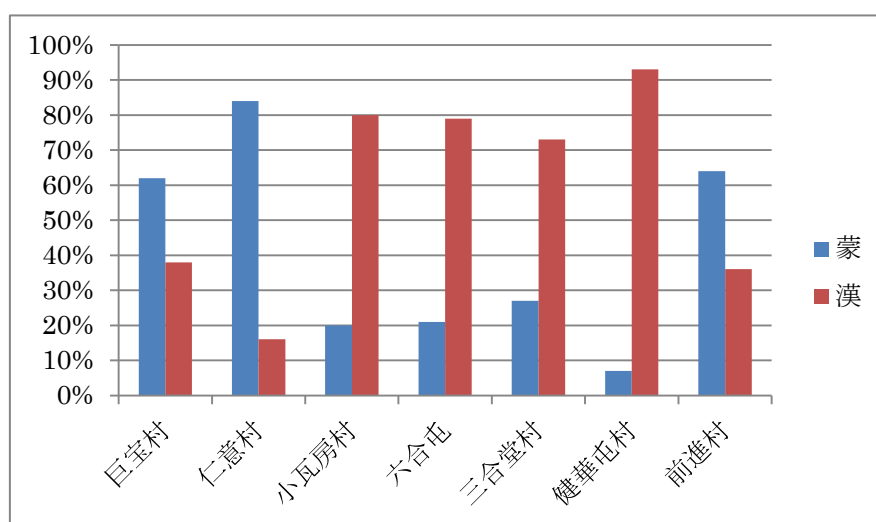
⁶各地名は、地図 3 を参照。

図表 3. ホルチン左翼中旗の蘇木における民族人口の割合



出所：『科爾沁左翼中旗地名志』2012 により作成 ⁷

図表 4. ホルチン左翼中旗の村における民族人口の割合

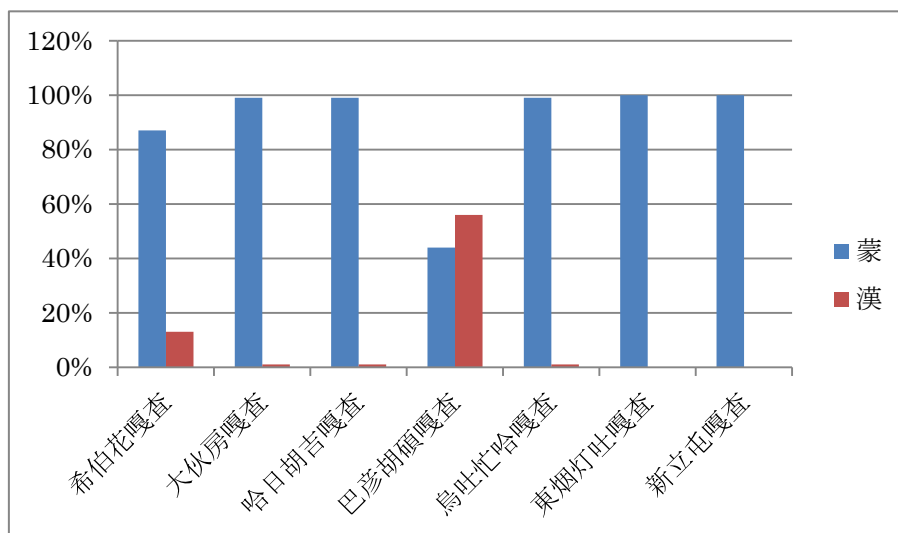


出所：『科爾沁左翼中旗地名志』2012 により作成 ⁸

⁷各地名は、地図 3 を参照。

⁸各地名は、地図 3 を参照。

図表 5. ホルチン左翼中旗の嘎查における民族人口の割合



出所：『科爾沁左翼中旗地名志』2012 により作成⁹

前述したように、東部農耕地域のモンゴル人、漢人の居住状況は、小規模の漢人とモンゴル人の混住状況を別にすると、ほぼ漢族の割合が多い地域、モンゴル人の割合が多い地域と分かれていることがわかる。そして漢人集中地域は県、郷において集中的に住み、蘇木や村、他省周辺地域集中地域や鉄道沿い地域に住んでいるのが多く現れている。このように、見ていくと、モンゴル人村落と漢人村落は集中居住している地域から、モンゴル人村落、漢人村落は、空間的な住まいの相違があることがわかる。

では本当に、内モンゴルの東部地域のモンゴル人は完全に漢化したのか、まずシャンである漢族村落を取り上げて考察して、漢族村落とモンゴル人村落を比較していきたい。

⁹各地名は、地図3を参照。

地図 1. 内モンゴルの位置と内モンゴルの盟・市の位置¹⁰



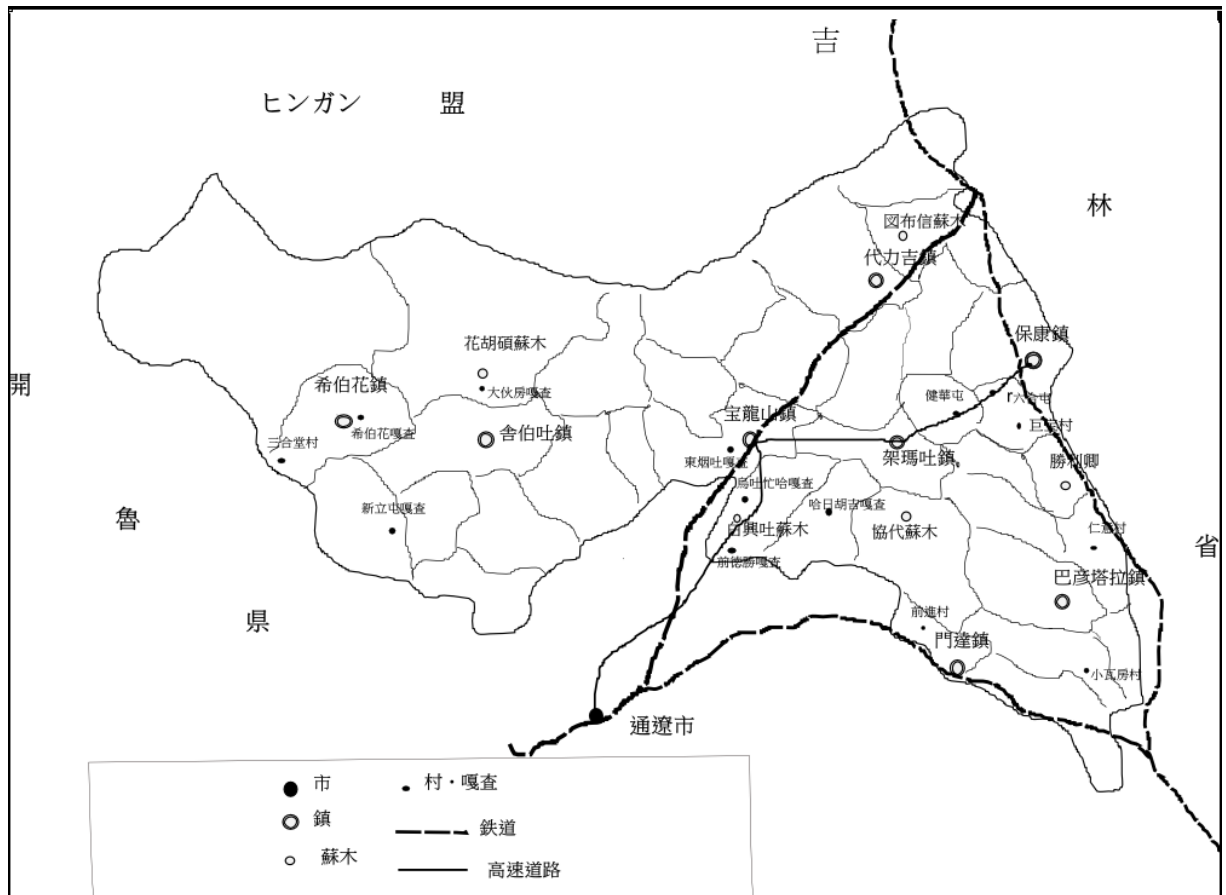
¹⁰盟・市の表記は、モンゴル語での発音の地名をひらがなで表記し、中国語での発音の地名を漢字で表記した。これらの地名は、ボルジギン・ブレンサイン氏の2003『近現代におけるモンゴル民族農耕村落社会の形成』風間書房と温都日娜2007『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の続縁婚姻に関する社会学的研究—』溪水社を参考した。

地図 2. 通遼市の各地域の地図



出所：『中国分省系列地図冊中国』2016：94－103 により作成

地図 3. 科爾沁左翼中旗の地図



出所：『中国分省系列地図冊中国』2016：94-103 により作成

1.3 東部農耕地域の漢族村落

王玉海氏は、清時代の内モンゴルにおける農耕村落形成を五つの種類に分けている。その中で漢族村落の形成については、第一は、山東、山西、河北、陝西地域における漢人の個人移民によりできた村落である。第二は、漢人の商人や工芸者の移住により形成した村落である。第三は、清政府から官庄、公主府、軍屯、駅などの設立により、その周辺にできた村落である。第四は、清政府からの土地開墾という政策により、他地域の漢人は土地を目当てに移住した人々により形成した村落である。第五は、漢人の移住や、土地開墾により、牧畜をしていたモンゴル人が開拓した村落である（王玉海 1992：28-35）。

筆者は本節で、漢族村落の形成過程において、聶氏の『劉堡』という著書を取り上げていきたい。聶氏は中国東北地方の遼寧省海城県の漢民族の村落である劉堡村の親族組織を社会人類学的な視点で、現地資料を調査して記述したのである。

劉堡という村落は、1651年に山東省蓬萊県劉家溝村から兄弟三人移住し、19世紀半ばころまで全部劉氏であったが、徐々に異姓の住民が移住してきて、今世紀、特に革命以降から移住が激しくなり、現在雑姓村になった（聶 1992：30）。では当村落において、異性がどのようにして移住してきたのか。

劉堡村落に住んでいる葛氏の移住については、葛の祖先は劉氏と同じ年1651年に山東から、海城県の北西に位置する川辺の低地に移住していた。しかしその地は洪水濫地で自然環境が悪かったため、19世紀半ば、葛氏の祖先は、劉堡に嫁いだ「姑姑」（父の姉妹）のもとに身を寄せた。また、王氏の祖先が百年前「姥姥門上」（母方の実家）を、金氏の祖先が80年前に「老丈人」（妻の実家）を、高氏が50年前に姉をそれぞれ頼んで劉堡に移住したのである。このように、他の異性も葛氏とほぼ同じように「親戚」に身を寄せる形で劉堡に移住したのである（聶 1992：31）。聶氏は劉堡村落の移住関係を以下のように考察している。

中国の親戚は、宗族以外の親族で姻族に相当する。洪水や害虫による被害がひどくて他の土地へ避難するとき、あるいは自然環境のよいところで移住しようとするとき、農民たちが見を寄せたのは、宗族内の女性の嫁ぐ先、あるいは嫁として宗族に入ってきた女性の実家であった。中国語では、親戚は、宗族以外の親族で姻族に相当する。洪水や害虫がひどくて他の土地へ避難するとき、あるいは自然環境のよいところで移住しようとするとき、農民たちが身を寄せたのは、宗族内の女性の嫁ぐ先、あるいは嫁として宗族に入ってきた女性の実家であった（聶 1992：31）。ここから、漢族村落の形成における異姓との混住は、姻族関係で移住したのが多数であることがわかる。しかし、劉堡村落に1651年に劉氏が移住し、村落が形成したころである1651年から19世紀半ばまでの年数を計算してみると、最低200年間劉氏一族の村落であったことがわかる。こうしてみると、漢族村落はかなり一族重視していたことも一目瞭然だろう。

海城県では、ある程度の規模をもつ宗族はすべて、名前の前に「老」を、後に「家」を加えて呼ぶ。「老」には、宗族の規模が大きければ、その勢力も大きいため、その宗族に対するある種の尊敬の気分を表す意味を含んでいる。「家」は「一族」（同一の宗）の人々の身体の「骨血」をすべて同じ祖先から受けているため、一族のみな「一家人」とみなされるという考え方から出ている。劉堡では、劉氏宗族の規模が後に転入した「老葛家」「老丁家」などよりはるかに大きいため、「一大戸」と呼ばれ、これに対して葛氏などは「小姓」と呼ばれている（聶 1992：36）。このように一族の人口が多いほど、その地域において影響力を持っている。そして漢族の間では一族あるいは同じ苗字同士との結婚を昔から禁じていたことも前述したことと関連があるのではないかと思う。更に結婚する家柄まで厳しく要求されていたようである。それについては聶氏「夫の家にとって、嫁の家と自分の家と「門当戸対」（家柄の釣り合い）すれば理想的で、婚姻はただ個人的なことではなく、「和両家之好」（家族の縁組）とみなされていた。相互扶助の親族関係を重視してい

た農民は何か困難にぶつかると、家族ばかりではなく姻族にもよく頼るため、よい縁組を整えるのは彼らに重要な意味を持っている。…省略…この地域では「窮結窮、富攀富」という諺のとおり、貧乏な家同士、金持ちの家同士での姻戚関係を結ぶのがごく一般的であった（聶 1992 : 76) 」。

以上のように、聶氏の著書から漢族村落の形成過程においては、一宗族中心で村落が形成し、だいぶ年数が経った後、自然災害などの原因により、姻族関係に頼った異姓が移住してきたのである。それにしても、宗族の人口や影響力で「老」をつけて「劉家」と呼ばれたりしている。一言で言えば、漢族村落は一族を一家族として見、一族同士との姻族関係を結ぶのを禁止されている。そして姻族関係を結ぶ両家族間の経済力も対等であることを要求していた。ではモンゴル人村落はどのような特徴や独自性を持っているのか、以下節では満州国時代の史料に基づいて、考察し、漢族村落と比較してみたい。

第二節 20 世紀前半期東部農耕村落社会の形成について

2.1 満州国時代の「東モンゴル」の資料

1932 年日本側は中国東北部に満州国を設立し、同年、満州国政府は、モンゴル人の自治区域を興安四省と設定した。内モンゴルの東側に位置する現在の呼倫貝爾市から興安盟、赤峰市、通遼市にかけての地域は満州国の興安北省、興安東省、興安南省と興安西省に属していた（尾崎 1996 : 234-248)。

当時興安省の日本人職員とモンゴル人職員が参加して、1939 年（康德 6 年）から 1941（康德 8 年）年まで、満州国國務院興安局を中心として興安四省の 11 地点において現地実態調査を行った（興安局 1939 : 1)。興安四省の全貌を把握せんが為種族的にハルハ、ブリアート、新バルガ、ダボール、ソロン等を対象とし、経済的に純牧畜より、農耕に至る迄の各段階を選ぶなど、異なった条件を備えた部落を選定し調査を行った（興安局 1939 : 1)。本節で、主に興安南省の科爾沁左翼中旗（東科中旗）ランブントブ村の調査報告書を取り上げ、ランブントブ実態調査報告書と同報告書に付属する「統計編」を詳細に考察していきたい。

ランブントブ村の調査報告書では、第一編は社会制度、第二編は土地関係、第三編は経済関係により構成され、「統計編」は、第一表農家概況表、第二表農家略歴表、第三表家族構成表、第四表家族構成図表、第五表屯内農家血縁関係図表、第九表撈青（農奴）関係図表など十八表の統計表があげられている（興安局 1939 : 1)。その中で、特に農家略歴表、屯内農家血縁関係図表、家族構成図表、貸借関係表が注目に値する。農家略歴表では、ランブントブ村の 48 世帯ごとの種族、出身地、移住年、移住ルートや移住理由を提示してい

る。この表は当村の 48 世帯の基本状況を確認する手がかりになる。屯内農家血縁関係図表は、当村の農家の親族関係や姻族関係を示している表である。しかしそれは各農家の移住後の親族関係や姻族関係しか確認できないのである。移住家族構成図表は、当村の各農家の家族の構成員と年齢を提示している。この図表は当村の各世帯における移住する際の年齢を計算できる表である。それは移住者の移住年齢を推測することにより、血縁関係図表に提示している姻族関係は、移住以前に結ばれたか、移住以降に結ばれた関係かを解明できる。貸借関係表では、当村の各農家の貸借関係人の親戚関係、知人関係を提示している。この表から筆者は、当時の貸方と借方は、いつ、どのような関係で現金や物の貸借を行っていたのかを確認できる。

ランブントブ実態調査報告書では、ランブントブ村の各農家の親戚関係を大きく二つのグループに分けている。第一グループは富農 1 の曹（ランブントブ村の中心人物）を中心として農家番号の 2、3、4、5、6、7、8、9、11、13、18、23、32、40、42 により成り立ち、本村の中心的な柱になっている。第二のグループは、農家 7 の金氏が中心的な人物で、農家番号の 5、10、12、17、33、44、48 により成り立っている（興安局 1939 : 121）。その中二件四戸の農家番号の 11 曹氏と 5 金氏、32 陳氏と 10 王氏が姻族関係を結んでいる（興安局 1939 : 30）。当報告書では、前述のように当村の農家をグループに分けて血縁関係や姻族関係を示しているが、それは結局、調査年の 1939 年時点での親戚関係を表しているので、各農家の移住時に機能した関係（移住関係）を示してはいない。また「統計編」の農家略歴表、血縁関係図表では各農家の移住関係を親戚関係、知人関係と分けて取り上げているが、親戚関係を親族関係と姻族関係に分けて論じていない。その上、誰を頼んで、どのような関係で移住しているのかが不明である。

以下では当時のランブントブ村各農家の移住関係を詳細に考察し、農村村落の各農家の親戚関係を解明していきたい。

地図4. 満州国の位置



地図5. 興安四省の位置



出所：www.google.co.jp/webhp（2015年9月5日閲覧） 出所：大満州国地図より筆者作成（2015年9月5日閲覧）より筆者作成

2.2 ランブントブ村落の概要

ランブントブという村落¹¹は、1919年に曹桑布（ソウサンブ）の一家が最初に本屯にトブ（假小屋）を建てて定着したのに始まる。村名は朗布（ランブ、曹桑布（ソウサンブ）の兄）の名を取って、ランブントブと呼ばれる。曹家一族は本屯の重要な構成部分を占めているが、曹家は幾代も以前から鄭家屯付近に居住して農耕生活を営んでいたものであり、それが、付近一帯が開墾されるに及んで、新天地を求めて、当村の開発に至ったのである（興安局 1939：121）。1939年当時のランブントブは、行政的にホルチン左翼中旗第六区第六村に属し、経済的には通遼や舎伯吐の市場と結びついていた。当村落の世帯数は59世帯¹²で、その付近において中等程度¹³の世帯数を持つ村である。経済面では富裕な村でもなく、貧困な村でもない、中位程度の村落である¹⁴。経済形態は農主牧従である¹⁵。

¹¹ 尾崎氏の研究では、興安四省の実態報告書における調査地の単位を部落という用語を使うのが不適切だと指摘している（尾崎孝宏 1996：236）。それゆえ本稿で村落という用語を使用する。

¹² 調査年の1939年の時点で48世帯であったが、1938年に11世帯の擄青は他屯に転出していた（興安局 1939：119）を参照。

¹³ 王氏の研究では、当時の村落の規模は10世帯から50世帯であると指摘している（王玉海 2001：42）。そのため、48世帯を持つランブントブ村の規模を中位程度と決めているだろう。

¹⁴ ランブントブ村は、生業の重要な部分は農業に依存し、牧畜は上層農家の場合に副業的に行われている（興安局 1939：151）を参照。

¹⁵ ランブントブ村は、生業の重要な部分は農業に依存し、牧畜は上層農家の場合に副業的に行われている（興安局 1939：151）を参照。

『ランブントブ実態報告書』では、当村の農家を農業耕作面積の大小に従い、富農群（100 晌¹⁶以上）、中農群（40 晌以上）、貧農群（20 晌以上）、極貧農群（20 晌未満）、撈青群、日工群（日雇い労働者）と大きく類別している（興安局 1939：123-125）。また各農家の出身地により、本旗人、外旗人、抜戸人、漢人と分けている。本旗人とは、ホルチン左翼中旗の戸籍をもつモンゴル人である。外旗人とは、本旗出身以外の他旗に属するモンゴル人である。本旗人は、非開放蒙地を自由に利用し得る権限をもち、資力のある本旗人が、土地を開墾し、本旗において外旗人や漢人を招いて耕作する（興安局 1939：69）。それに対し、外旗人や漢人の権利は、本旗人の権利に比べて稍薄弱なものとして、別個の取扱いを受けていた。（興安局 1939：51-55）。すなわち、本旗において、二名以上の外旗人が相互に保障して、警察署に移住の届を出し、旗当局に旗地開墾の申請し、屯長、屯民の了解を得た後ようやく土地を開墾できる（興安局 1939：50-53）。抜戸人とは、清朝初期、中期頃ホルチン左翼中旗の王公に降嫁した公主に付き添って移住してきた漢人あるいは満州人である。彼らは法庫県に居住しながらホルチン左翼中旗の戸籍をもち本旗人としての身分をもっている（ボルジギン・ブレンサイン 2003：190-198）。

ランブントブ実態調査統計編の農家略歴表によると、ランブントブ村には 48 世帯ある。その中で本旗人は、27 世帯で、外旗人は、19 世帯で、漢人は、2 世帯いる（興安局 1939：2-16）。興安南省扎賚特旗実態調査統計編の農家略歴表によると、茂利図村は 37 世帯がある。その中で本旗人は 26 世帯で、外旗人は 10 世帯、漢人 1 世帯いる（興安南省扎賚特旗実態調査統計編 1939：6-10）。興安西省奈曼旗実態調査統計編の農家略歴表によると、西沙カ好来村は 33 世帯がある。その中で本旗人 17 世帯、外旗人 7 世帯、漢人 8 世帯いる（興安西省奈曼旗実態調査統計編 1939：10-15）。興安西省阿魯科爾沁旗実態調査統計編の農家略歴表によると、ハラトクチン村には 20 世帯ある。その中で本旗人は 19 世帯いて、外旗人は 1 世帯いる（興安西省阿魯科爾沁旗実態調査統計編 1939：5-11）。このように、これらの村落は本旗人が多数を占め、外旗人や漢人が小人数を占めている。では、これらの本旗人、外旗人、漢人はどのような関係を持ち当村に移住し、一つの村落を形成してきたのか。以下では、ランブントブ村の 48 世帯を例として取り上げその移住関係を考察していきたい。

2.3 ランブントブ村落の形成過程

既述したように、ランブントブ村は、1919 年頃ランブ（サンブの兄）兄弟が移住してから始まった。当村は、曹氏一族以外の他の移住者の中にも、曹氏と同じような経緯で移住

¹⁶晌は 1ha である。

してきた者も少なくない。彼らの場合農耕は既に幾代も以前から生業となっていた（興安局 1939：1）。こうしてみると、当該地域は曹氏一族を中心とし、曹氏及び外の移住者の幾代も前から農耕化され、農業を主として営んできたのである。ではなぜ当時当該地域は開墾され、多くのモンゴル人が移住を余儀なくされたのか、そしてなぜ当該地域は既に農耕化されていたのか。ボルジギン氏は『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』という著書で、すでに解明している。ブレンサイン氏は、ランブントブ村に寄り集まった移住民たちの移住ルートを移住先から移住元へ遡って考察している。20世紀の初頭頃、ホルチン左翼中旗の未開墾地域におけるモンゴル人村落社会の形成には、蒙地開墾で故郷を追われた本旗モンゴル人、外旗モンゴル人、清朝の初期頃からモンゴル王公に降嫁した清朝皇室の公主についてきた、「抜戸人」満州人、と直接モンゴル人村落に割り込んできた漢人などである（ボルジギン・ブレンサイン 2003：224）。本旗人と外旗人の移住を簡単に整理すると以下の通りである。

ボルジギン氏は本旗人の移住については、ホルチン左翼中旗における蒙地開墾によって、旗の東南部地域が漢人によって埋め尽くされ、原住民のモンゴル人はそこを離れ、旗内の未開地域へ移住したと述べている（ボルジギン・ブレンサイン 2003：224）。

外旗人に関しては、やや事情が複雑である。清朝の「借地養民」政策（モンゴルの旗地を借りて内地の難民を養う）により、山東や直隸（現在の河北省）からの被災した大勢の漢人が雍正初年からジョスト盟に移住した。そして年々そういった移住者が増え、清朝末ごろになると、ジョスト盟の大半が既に漢人居住となった。モンゴル人も農耕民である大勢の漢人の強い影響を受け、牧畜業を放棄し、農耕化していったのである（ボルジギン・ブレンサイン 2003：175）。このように、当該地域は圧倒的に多い漢人社会と人口の少ないモンゴル人社会になり、小人数のモンゴル人が漢人を支配していた。このような状態が続く中、漢人とモンゴル人の間に鋭い対立が生まれてきたのである。清朝の末期になると、漢人は宗教的な色合いの武装蜂起である「金丹道暴動」という大きな騒動を起こした。それで一万人以上のモンゴル人は虐殺され、十数万人のモンゴル人が破産し故郷を追われた（ボルジギン・ブレンサイン 2003：185－189）。このような歴史的な背景を持ち、数多くの外旗人は、故郷から追われ移住を余儀なくされてきた。外旗人の居住地は比較的早く開墾され、農地化が実現されていたので、外旗人は農耕技術を習得していた。彼らの移住は、ホルチン地域の農耕化を急速に推進させた（ボルジギン 2003：224）。

既述したようにモンゴル人村落の形成には、本旗人、外旗人、抜戸人、漢人などの構成がある。では彼らはどのような関係でランブントブという村落に移住してきたのか。

さて以下の表では「統計編」の（農家略歴表興安局 1939：10－16）を取り扱い、表3のように、ランブントブ村の各農家の移住年の順番で、農家番号、姓、群別、種族、出身地、移住地、移住関係を整理する。そして各移住者の移住関係をランブントブ実態調査報告書「統計編」農家略歴表、屯内農家血縁関係図表、家族構成図表、血縁関係図表、貸借関係

表をもとに考察していきたい。筆者はその移住順番を①から⑫まで並べているが、各移住者の移住年代によって分類したものである。その中で、⑤番と⑦番の移住年代が混ざっているのは、移住人数が少ない為一つにまとめたためである。移住関係の欄に不明という表現は、移住関係が分からないということをごここで特に明記しておく。

表3 ランブントブ村の48世帯の情報

移住順番	移住年	農家番号 ¹⁷	姓	群別	種族	出身地	移動地	移住関係
①	1919	1	曹	富農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→ネーモンデ ⁽¹⁸⁾ ⑩) →本屯 ¹⁹	本人
		3	曹	中農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→ネーモンデ ⑩) →本屯	親戚関係
		4	曹	中農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→ネーモンデ ⑩) →本屯	親戚関係
		42	張	撈青	蒙	本旗人	ジャンレンボ屯→本屯	親戚関係
②	1920	7	金	中農	蒙	本旗人	遼源縣→本屯	親戚関係
		9	華	貧農	蒙	本旗人	ネーモンデ(⑩) →ホンホルオボ(①) 本屯	親戚関係
		13	曹	貧農	蒙	本旗人	梨樹縣→東夾荒→本屯	親戚関係
③	1921	12	金	貧農	蒙	本旗人	イントルト→本屯	親戚関係
		14	曹	極貧農	蒙	本旗人	遼源縣ホルトル→本屯	親戚関係
④	1922	10	王	貧農	蒙	本旗人	ハシヤト屯→本屯	親戚関係
		34	車	撈青	蒙	本旗人	ゴーホドク→本屯	知人関係

¹⁷ 農家番号は、実態報告書で貧富レベルの順番で並べている通りで作成した。

¹⁸ 地図6に提示している番号を指す

¹⁹ ランブントブ村を指す。

⑤	1925	48	黄	日工 ²⁰	蒙	外旗人	吐默特左旗→東科後旗（アラハグン） 鄭家屯→本屯	親戚関係
	1926	5	金	中農	蒙	本旗人	ボムダ→本屯	親戚関係
		6	呉	中農	蒙	本旗人	五家子努圖克（⑧）→本屯	親戚関係
		2	曹	富農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→本屯	親戚関係
		11	曹	貧農	蒙	本旗人	ナヤンホトク→本屯	親戚関係
		18	呉	極貧農	蒙	本旗人	タブンゴル努圖克→本屯	親戚関係
⑥	1929	16	張	極貧農	蒙	外旗人	吐默特左旗ウルフ→ソール→本屯	親戚関係
		32	陳	撈青	蒙	本旗人	東科中旗ゲルホ屯→本屯	親戚関係
		44	チャル	撈青	蒙	外旗人	吐默特旗→オボネル→本屯	親戚関係
⑦	1930	17	韓	極貧農	蒙	外旗人	蒙古鎮→本屯	知人関係
	1931	39	曹	撈青	蒙	本旗人	ネーモンデ（⑩）→モドンアイ ル（⑤） →本屯	親戚関係
		40	陳	撈青	蒙	本旗人	パイダнда→タブンジャロン 屯（⑦）→本屯	親戚関係
	1932	8	曹	中農	蒙	本旗人	ネーモンデ（⑩）→モドンアイ ル（⑤）→本屯	親戚関係
⑧	1933	21	何	撈青	蒙	外旗人	吐默特左旗→アンタン窩堡→ 本屯	知人関係
		23	張	撈青	拔戸人 ²¹	本旗人	康平縣ポアル吐→本屯	親戚関係

²⁰ 日工も農奴であるので、本稿で日工を撈青として扱うことにしたい。

²¹ ボルジギン氏の研究によると、拔戸人は本旗人としての身分をもっていると指摘しているので、本論では

		26	胡	撈青	蒙	外旗人	東科後旗オラインス→本屯	知人関係
		31	海	撈青	蒙	外旗人	吐默特左旗→本屯	親戚関係
		47	呉	撈青	蒙	外旗人	喀爾沁右旗→舍伯吐→本屯	親戚関係
		46	李	撈青	蒙	外旗人	吐默特左旗→アンタン窩堡→ 本屯	知人関係
⑨	1934	25	包	撈青	蒙	本旗人	ジョルゴガン廟→ホンゴルオ ボ(②)→本屯	親戚関係
		30	包	撈青	蒙	本旗人	茂林廟→本屯	不明
	1935	20	李	撈青	蒙	外旗人	蒙古鎮→チモト→舍伯吐→本 屯	親戚関係
		28	戴	撈青	蒙	外旗人	吐默特左旗→西科中旗→本屯	知人関係
⑩	1936	15	高	極貧 農	蒙	本旗人	巴音塔拉→本屯	親戚関係
		29	海	撈青	蒙	外旗人	吐默特左旗→本屯	親戚関係
		36	ト ウ チ	撈青	蒙	本旗人	法庫縣→ナインゴロ→ロー トチャン→ボルト→ 本屯	知人関係
		37	衞	撈青	蒙	外旗人	東科前旗 チョンブ→ネー モンデ(⑩)→エレネアイ ル→本屯	親戚関係
⑪	1937	19	陳	撈青	蒙	外旗人	蒙古鎮→本屯	親戚関係
		22	佟	撈青	蒙	外旗人	喀爾沁右旗→茂林廟→本屯	知人関係
		27	李	撈青	漢	康平縣	康平縣→通遼縣三家子(⑨)→ 本屯	知人関係
		33	白	撈青	蒙	外旗人	庫倫旗→本屯	親戚関係
		35	王	撈青	蒙	外旗人	庫倫旗→圖什業圖→本屯	親戚関係
		38	包	撈青	蒙	外旗人	吐默特左旗→オボアイル (④)→本屯	知人関係
		45	鄭	撈青	漢	遼源縣	没牛泡子→本屯	知人関係

本旗人の数に入れることにした。

⑫	1938	24	張	撈青	抜戸人	康平縣	康平縣 →三家子 (⑨) →本屯	親戚關係
		41	李	撈青	蒙	本旗人	法庫縣王爺領→ボルト→本屯	知人關係
		43	洪	撈青	蒙	外旗人	東科前旗→八家子→本屯	親戚關係

地図 6. ランブントブ村の各移住者活動地域



出所：満州国国務院公安局（1939）『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』と同報告書「統計編」を参照し作成した

2.4 ランブントブ村の各世帯の移住事例

① 1919年のランブントブ村の移住世帯

表3からみると、ランブントブ村の開拓年の1919年には、農家番号の1曹氏、3曹氏、4曹氏、42張氏が皆「親戚關係」で移住している。ボルジギン氏は、その四世帯の關係について、農家番号の1、3、4三世帯の曹氏は兄弟關係で、張氏は当時撈青として移住したと指摘している(ボルジギン・ブレンサイン 2003:161)。しかし、血縁關係図表と家族構成図表によると張氏の母は農家番号3の曹氏の姉であり、1939年の時点で張氏は18歳である(興安局 1939:29)。そうすると張氏は移住年の1919年には、まだ生まれていないことになる。

こうしてみると、張氏の両親が曹氏と姻族関係で移住したのではないと思われる。それゆえランブントブ村の開拓年の1919年の移住者の富農1曹氏、3曹氏、4曹氏は親族関係で、42張氏は富農1曹氏と姻族関係にある。

② 1920年のランブントブ村の移住世帯

農家番号7の金氏、9の華氏、13の曹氏の三世帯も皆「親戚関係」で移住している。彼らの移住関係については以下のように分析できる。

7の金氏は、血縁関係図表によれば、当村における「親戚関係」が見いだせない（興安局1939：30）。前述したように、1919年には農家番号1の曹氏、3の曹氏、4の曹氏、42の張氏の四世帯が移住している。王玉海氏の研究では、当時村落に何の関係もない人を受け入れないと指摘している。また王志清氏の研究でも、村落の移住者の多くは姻族関係を頼っていると指摘している（王志清2010：191）。こうしてみると、金氏はその四世帯の誰かと「親戚関係」にあるのだろうと思われる。1919年の移住者は皆富農1の曹氏と親族ないし姻族関係である。だとすると、金氏も同様に富農1の曹氏と何らかの関係があるものと思われる。更に家族構成図表によると、農家7の金氏は、1939年時点では39歳であり、移住年の1920年には20歳である（興安局1939：26）。こうしてみると、1920年に移住する際、金氏は20歳の若年だったので、両親の意志で移住したのだろうと思われる。そこで、金氏の両親の誰かが1の曹氏と姻族関係だろうと思われる。前述した推測から見ていくと、金氏が富農1と姻族関係であろうと思われる。

9の華氏は、血縁関係図表によると、富農1の曹氏と「親戚関係」にある。そして農家略歴表によると両世帯の移住元の地域はネーモンデであった（興安局1939：10）ため、華氏と曹氏はおそらく移住元の地域で姻族関係を結び、1919年の曹氏の移住により、華氏は1920年に曹氏の後をついて移住してきたのではないかとと思われる。

13の曹氏は、血縁関係図表によると、富農1の曹氏、3、4の曹氏と親族関係である（興安局1939：30）。それらの曹氏の中で富農1の曹氏は一番の権力者であるので、13の曹氏は、富農1の曹氏との親族関係を頼んで移住したのだろうと思われる。

上述のように、1920年の移住者の中で7の金氏、9の華氏は富農1と姻族関係、13曹は富農1と親族関係で移住してきたのだろうと思われる。

③ 1921年のランブントブ村の移住世帯

農家番号の12の金氏と14の曹氏は当村に「親戚関係」で移住している。

12の金氏は、農家略歴表によると、親戚の富農1の曹氏を頼んで移住したと記録にある（興安局1939：10）。ところが、血縁関係図表には、12の金氏と富農1の曹氏の親族・姻族関係を確認できない。そこで家族構成図表によると、1939年の時点で金氏は62歳で妻も他界し、24歳の男の子と19歳の女の子の二人の子供がいる（興安局1939：26）。そうすると移住年の1921年には、金氏は44歳で、二人の子供は6歳と1歳位で、妻も健在してい

たと推測できる。こうしてみると金氏の妻は富農 1 の曹氏と姻族関係であった可能性が高いと思われる。

14 の曹氏は、農家略歴表によると「親戚を頼んで移住」と記されている（興安局 1939 : 13）。前述したように 1921 年の時点では、1、3、4、13 の曹氏一族と 42 の張氏、7 の金氏、9 の華氏は当村に移住している。既に解明したように、1921 年以前に移住した 7 世帯は皆 1 の曹氏と親族ないし姻族関係である。こうしてみると、14 の曹氏は富農 1 の曹氏と親族関係ではないかと思われる。

上述から分かるように、12 の金氏は富農 1 の曹氏と姻族関係、14 の曹氏は富農 1 の曹氏と親族関係で移住したと思われる。

④ 1922 年のランブントブ村の移住世帯

農家番号の 10 の王氏と 34 の車氏の移住関係については以下の通りである。

10 の王氏は、農家略歴表によると、「親戚を頼んで移住」と記されている（興安局 1939 : 13）。また血縁関係図表によると、10 の王氏は 7 の金氏と姻族関係である（興安局 1939 : 30）。王氏の移住関係を分析してみると、おそらく王氏と金氏は移住元で姻族関係を結んでおり、1920 年に金氏が当村に移住後、姻族の金氏を頼んで、当村に移住したのではないかと思われる。

34 の車氏は知人関係で当村に擲青として移住してきている。農家略歴表によると、移住元の誰と知人関係を持って移住したのかは不明である。

ここまでの移住者の 11 世帯の中で、1922 年移住の農家 10 の王氏、34 の車氏を除くと、みな農家 1 の曹氏と親戚関係で移住している。そして、車氏のように、当村において初めて知人関係で個人の擲青として働きにきている者がいる。これは、当該地域社会のネットワークが広がり始めたことを示しているだろう。

⑤ 1925 年と 1926 年のランブトブ村の移住世帯

1925 に 48 の黄氏が移住している。血縁関係図表によると、48 の黄氏は農家 5 の金氏と「親戚関係」であることが確認できる（興安局 1939 : 30）。家族構成図表によると、黄氏は 1939 年の時点で 50 歳（興安局 1939 : 28）であるから移住年の 1925 年は 36 歳であったことが計算できる。黄氏の長女は 18 歳（興安局 1939 : 28）であるので、黄氏は 30 歳前後で結婚したと考えると当村に移住する前に 5 の金氏と姻族関係を結んでいることが推測される。血縁関係図表によると、5 の金氏は 7 の金氏と「親族関係」である（興安局 1939 : 30）。当時 5 の金氏はまだ当村に移住していなかったため、黄氏は 5 の金氏を通して、7 の金氏と遠い姻族関係で移住したのではないかと思われる。

さらに、1926 年当村に移住した農家番号の 5 金氏、6 呉氏、2 曹氏、11 曹氏、18 呉氏の移住関係をみていこう。血縁関係図表によると、農家番号の 2 と 11 の曹氏は兄弟関係で、富農 1 の曹氏と親族関係であることが確認できる（興安局 1939 : 30）。6 と 18 の呉氏二人

は兄弟関係で、彼らは富農 1 と一世代上の姻族関係である（興安局 1939 : 30）ことがわかる。それで、その呉氏兄弟の二人は、親戚の富農 1 の曹氏のあとを追って移住したのではないかと思われる。

5 の金氏は、血縁関係図表によると 7 の金氏と親族関係で、48 の黄氏と姻族関係、農家 11 の曹氏と姻族関係である（興安局 1939 : 30）。すると当村に移住する際に頼りにした親族ないし姻族は誰であろうか。金氏家族構成図表によると、1939 年の時点で 5 の金氏は 39 歳で、妻は 21 歳であり、11 の曹氏は 29 歳で、妻は 30 歳である（興安局 1939 : 28）。こうしてみると 5 の金氏は当村に移住する際に、11 曹氏とまだ婚姻関係を結んでいなかったのであり、当村に移住後、婚姻関係を結んだのだらうと思われる。既述したように、黄氏が金氏を通して 7 の金氏と遠い姻族関係で移住したならば、金氏も 7 の金氏を頼んだ可能性が高いと思われる。

上述した移住者たちの関係を整理すると、48 の黄氏と 7 の金氏が姻族関係で、5 の金氏は 7 の金氏と親族関係で、2 の曹氏、11 の曹氏は 1 の曹氏と親族関係で、6 の呉氏、18 の呉氏は富農 1 の曹氏と姻族関係である。

⑥ 1929 年のランブントブ村の移住世帯

16 の張氏、32 の陳氏、44 のチャル氏はみな「親戚関係」で当村に移住している。

16 の張氏は、農家略歴表によると、義父を頼んで本屯に来住し、義父の元で撈青として働いていた（興安局 1939 : 12）と記録されている。張氏の撈青主となる義父は当村の誰かということについて撈青関係表を参照すると、張氏の撈青主は富農 2 の曹氏である（興安局 1939 : 38）ことがわかる。それで富農 2 の曹氏が張氏の義父であれば、16 張氏は 2 の曹氏と姻族関係で移住したことになる。

32 の陳氏は、血縁関係図表によると、陳氏の娘は曹氏一族と姻族関係を結び、息子は 10 の王氏と姻族関係を結んでいる（興安局 1939 : 30）。しかし家族構成図表によると、1939 年には陳氏 46 歳、息子 18 歳、娘 15 歳であるから（興安局 1939 : 28）、移住年の 1929 年には陳氏が 36 歳で、息子 8 歳、娘 5 歳であることが計算できる。それゆえ移住年の当時に、陳氏は曹氏一族や王氏一族との姻族関係を結んでいなかったと言える。農家略歴表によると、陳氏は、本屯の親戚を頼んで移住したと記録されているのが（興安局 1939 : 14）、頼んだ相手は明記されていない。それで撈青関係表を参照すると、陳氏の撈青主は、農家番号の 7 の金氏であり、金氏の元で 10 年間撈青として働いていたと記録されている（興安局 1939 : 40）。「統計編」は 1939 年の記録データなので、陳氏は金氏のもとで 10 年働いているのであれば、1929 年に移住して来た直後に親族もしくは姻族である 7 の金氏のもとで撈青として働いたと思われる。

44 のチャル氏は、農家略歴表によると、当村に叔父がいたので、叔父の家で働いていた（興安局 1939 : 15）と記録されている。血縁関係図表によると農家 10 の王氏はチャルの叔父にあたる人物である（興安局 1939 : 30）。そこで 44 のチャル氏は、10 の王氏と親族関係

で移住したと思われる。

上述した三世帯の移住者の移住関係を整理すると、16の張氏は富農2の曹氏と姻族関係、32の陳氏は7の金氏と何らかの「親戚関係」、44のチャル氏は10の王氏と親族関係にある。

⑦ 1930・1931・1932年のランブントブ村の移住世帯

1930年に17の韓氏は移住している。農家略歴表によると、韓氏は土地が良好だと聞いて、親戚がいないので、友人を頼んで当村に来住し、「最初の一年は撈青、次年度より小作10晌、次の年より小作20晌、康德五年度より10晌の荒地を開墾自作」とある（興安局1939：12）。血縁関係図表によると、韓氏は、当村にすでに移住している農家番号44のチャル氏と姻族関係にある（興安局1939：30）。家族構成図表によると、当資料の調査年の1939年の時点で、44のチャル氏は33歳で、その妻は20歳で、子供は3歳である（興安局1939：28）。こうしてみるとチャル氏は、23歳で当村に移住し、29歳ぐらいで結婚したのではないかと思う。そして、韓氏とチャル氏との姻族関係は、韓氏が当村に移住後に確立したのであろう。韓氏は当村に知人関係で移住したことが確実であるが、相手先は不明である。

1931年に39の曹氏と40の陳氏が「親戚関係」で移住している。

39の曹氏は、農家略歴表によると、当村に既に移住している富農1の曹氏、4の曹氏、9の華氏の移住元と同じくネーモンデからの移住者である（興安局1939：10-11）。そして撈青関係表によると、曹氏は4の曹氏のもとで5年間撈青として働き、「親戚関係」である（興安局1939：40）。統計篇のデータは、1939年の記録なので、39の曹氏は4の曹氏の元で5年間働いたのであれば、1934年から働いていたと思われる。しかし39の曹氏は1931年に移住したので、移住の直後に、4の曹氏の元で働いていたわけではなかった。それでもとにかく、39の曹氏は4の曹氏と親族関係である。また既に解明したように、富農1の曹氏と4の曹氏は親族関係である。すると39の曹氏は、富農1の曹氏とも親族関係であることが推測できる。

40の陳氏は、血縁関係図表を参照すると、陳氏の親は富農1の曹氏の伯父と姻族関係であることがわかる（興安局1939：30）。おそらく、移住元の鄭家屯では陳氏の親の世代が曹氏と姻族関係を結んでいたもので、陳氏は曹氏の後を尋ねて移住したのではないかと思われる。

1932年には8の曹氏が移住している。血縁関係図表によると、曹氏1と親族関係である。

上述したように、17の韓氏は知人関係で、39の曹氏、8の曹氏は富農1の曹氏と親族関係で40の陳氏は富農1と姻族関係で移住している。

⑧ 1933年のランブントブ村の移住世帯

21の何氏、23の張氏、26の胡氏、31の海氏、46の李氏、47の呉氏の移住関係については以下のように分析できるだろう。

26の何氏は、農家略歴表によると、本屯の撈青の条件がよいから知人の農家5の金氏を

頼んで来屯し、金氏の傍青となった（興安局 1939：12）。また血縁関係図表によると、何氏と 31 の海氏は姻族関係である（興安局 1939：30）。それで姻族関係の何氏と海氏は当村に一度に移住する際、何氏の知人である 5 の金氏を頼んで、金氏の元で傍青として働いたのではないかと思われる。

23 の張氏は、農家略歴表と血縁関係図表によると、富農 1 の曹氏と姻族関係で曹氏の傍青として働いていた（興安局 1939：28）。家族構成表によると、張氏は 1939 年の時点で 42 歳、妻 24 歳、長女 6 歳である。ここから張氏は遅くとも 1931 年前後に 34 歳ぐらいで結婚したと考えられる。そこで、張氏の富農 1 との姻族関係は、移住する前に確立したと思われる。ゆえに、張氏は姻族関係の富農 1 を頼んで移住したのではないかと思われる。

26 の胡氏については、農家略歴表によると、原住地が砂漠地のため知人を頼んで本屯に来住し傍青として働いていた（興安局 1939：12）。そこで胡氏は知人関係で移住しているのが明らかであるが、当村における相手先は不明である。

46 の李氏は、農家略歴表によると、本屯の土地が良好であることを聞き来住し、富農 1 曹氏の傍青であった（興安局 1939：16）。しかし李氏と曹氏の関係については記述がないので、知人関係ではないかと推測する。

47 の呉氏は、傍青関係表を参照すると、5 の金氏と「親戚関係」にある（興安局 1939：38）と記されている。また農家略歴表によると、「本屯に親族あり」と記されている（興安局 1939：16）。こうしてみると、47 の呉氏は 5 の金氏と親戚関係であることが分かる。

以上の各農家の移住関係を整理すると、21 の何氏と 31 の海氏は、5 の金氏と知人関係で、46 の李氏は富農 1 と知人関係、47 の呉氏は 5 の金氏と親戚関係である。また、23 の張氏は富農 1 の曹氏と姻族関係である。

⑨ 1934・1935 年のランブントブ村の移住世帯

1934 年に移住した 30 の包氏、25 の包氏と 1935 年に移住した 20 の李氏と 28 の戴氏らの移住関係を分析してみよう。

30 の包氏は、血縁関係表、傍青関係表を参照しても、当村における移住関係は不明である。

25 の包氏は、傍青関係表を参照すると、富農 1 の曹氏のもとで 4 年間働いている傍青であり、「親戚関係」である（興安局 1939：39）。しかし、包氏と曹氏は親戚関係か姻族関係かは不明である。

20 の李氏は、農家略歴表によると、原住地が開墾されたため「親戚」の 5 の金氏を頼んで移住していると記されている。

28 の戴氏は、原住地が土地不良のため、知人 25 の包氏を頼んで移住している。

上述の各移住者の関係を整理すると、30 の包氏は移住関係が不明であり、25 の包氏は富

農 1 と何らかの「親戚関係」、20 の李氏は 5 の金と親戚関係、28 の戴氏は 25 の包氏と知人関係である。

⑩ 1936 年のランブントブ村の移住世帯

農家 15 の高氏、29 の海氏、36 のトウチ氏、37 の初氏の 4 世帯の移住関係を考察してみよう。

15 の高氏は、撈青関係表を参照すると、富農 1 曹氏の撈青で、「親戚関係」にある。しかし、包氏と曹氏は親族関係か姻族関係かは不明である。

29 の海氏は、中農 7 の金氏の元で 3 年間撈青として働き、金氏とは知人関係である（興安局 1939 : 38）。すると、海氏は当村に移住してきた直後に、金氏の元で働いたと思われる。しかし海氏は当村に「親戚関係」で移住しているとある。そうすると、「親戚」が海氏を金氏に紹介し、金氏の元で働いたと思われるが、では「親戚」人はいったい誰だろうか。農家略歴表によると、29 の海氏は、当村に既に移住した 31 の海氏と移住元が同じく吐黙特左旗である（興安局 1939 : 14）。また撈青関係図表によると、31 の海氏も 7 の金氏の元で撈青であった（興安局 1939 : 40）。こうしてみると、31 の海氏が 29 の海氏を 7 の金氏に紹介した可能性が高い。すると 29 の海氏は 31 の海氏と親族関係で当村に移住したのではないかと思われる。

36 のトウチ氏は、貸借関係表によると、富農 1 曹氏の撈青である（興安局 1939 : 38）。そうすると、トウチ氏は富農 1 の曹氏と知人関係で移住していると思われる。

37 の初氏は、農家略歴表によると、「妻の実家の撈青となる」と記されているが（興安局 1939 : 14）、移住関係者は不明である。

上述した四世帯の移住関係を整理すると、15 の高氏は富農 1 曹氏と何らかの「親戚関係」、29 の海氏は 31 海氏と親族関係、36 のトウチ氏は富農 1 と知人関係、37 の初氏は何らかの「親戚関係」である。

⑪ 1937 年のランブントブ村の移住世帯

19 の陳氏、22 の佟氏、27 の李氏、33 の白氏、35 王氏、38 の包氏、45 の鄭氏の 7 世帯の移住関係を分析していきたい。

19 の陳氏は、撈青関係表によると、中農 7 の金氏と知人関係で、金氏のもとで 2 年間撈青を継続している（興安局 1939 : 38）。こうしてみると陳氏は当村に移住して来た直後に、金氏のもとで働いたのである。しかし、陳氏は金氏とは知人関係であるが、当村に「親戚関係」で移住している。では陳氏は当村に移住する際、親戚の誰に頼んだのか。表 1 を参照すると、陳氏と 17 の韓氏は蒙古鎮という出身地である。おそらく陳氏は韓氏と姻族関係であったのであろう。

22 の佟氏は農家略歴表によると、茂林廟（モウリンミョウ）から当村に移住している。既に当村に移住している 30 の包氏も茂林廟から当村に移住している（興安局 1939 : 13）。

そこで佟氏は同じ出身地の 30 の包氏と知人関係ではないかと思われる。

27 の李氏は、農家略歴表を参照すると、富農 1 の曹氏の傍青であったため（興安局 1939 : 12）、富農 1 の曹氏と知人関係ではないかと思われる。

33 の白氏は、傍青関係図表によると、傍青主と「親戚関係」として記録している（興安局 1939 : 40）。しかし傍青主は誰であるかが不明である。貸借関係表によると、傍青として働いて得た収入の用途は結婚準備という記録がある（興安局 1939 : 48）。また血縁関係図表によると、当村の移住者の 7 の金氏と姻族関係である。ここから分かるように、白氏は移住する際に「親戚関係」で移住したが、関係者が不明。そして移住後に 7 の金氏と姻族関係を結んだのである。

35 の王氏は、傍青関係図表によると、7 の金氏と知人関係で、金氏のもとで 2 年間傍青を継続している（興安局 1939 : 40）。王氏は当村に移住してすぐに、金氏の下で働いたと思われる。しかし王氏は当村に知人関係で移住したのではなく、「親戚関係」で移住したのである。では王氏は当村の親戚の誰を頼って移住したのだろうか。既述した 10 の王氏は 7 の金氏と姻族関係で移住している。35 の王氏は 10 の王氏と親族関係だとすれば、35 の王氏は 10 の王氏と親族関係で当村に移住し、10 の王氏と 7 の金氏の関係を通して、7 の金氏と知り合い、金氏の傍青になったのではないかと思われる。

38 の包氏は、農家略歴表を参照すると、包氏の居住地は銭家店北方で、富農 1 の曹氏の居住地も銭家店北方である（興安局 1939 : 10-16）。それゆえ包氏は同じ出身地の富農 1 の曹氏と知人関係ではないかと思われる。

45 の鄭氏は、表 3 を参照すると、居住地が災害に遭い生活困難のため来住し、富農 2 の曹氏の傍青であった。そこで、45 の鄭氏は富農 2 と知人関係だろうと思われる。

以上の当村の各移住者の移住関係を整理すると、19 の陳氏は 17 の韓氏姻族関係、22 佟氏は 30 包氏と知人関係、27 の李氏は富農 1 の曹氏と知人関係、33 の白氏と 7 の金氏姻族関係、35 王氏は 10 の王氏と親族関係、38 の包氏は富農 1 曹氏と知人関係、45 の鄭氏は富農 2 と知人関係である。

⑫ 1938 年のランブントブ村の移住世帯

24 の張氏、41 の李氏、43 の洪氏の 3 世帯の移住関係についてみていきたい。

張氏は、傍青関係図表によると、「富農 1 の傍青であり、関係なし」と記録されている（興安局 1939 : 38）。張氏は当村に「親戚関係」で移住したが、当村の親戚関係者は不明である。

41 の李氏は、農家略歴表を参照すると、李氏の居住地はボルトであり、36 のトウチ氏もボルトの出身である（興安局 1939 : 13）。それで李氏は同じ出身地のトウチ氏と知人関係で当村に移住したのではないかと思われる。

43 の洪氏は、家族構成図表を参照すると、すでにランブントブ村に移住している傍青 37 の初氏の妹と姻族関係を結んでいることが確認できる（興安局 1939 : 26）。家族構成図表に

よると、洪氏 23 歳で、妻 19 歳である。ゆえに洪氏は初氏の妹と移住する際に、姻族関係を結んで姻族関係で移住していると思う。

以上の移住世帯の移住関係を整理すると、24 の張氏は何らかの「親戚関係」、41 の李氏は 36 のトウチ氏と知人関係で、43 の洪氏は 37 の初氏氏と姻族関係で移住している。

2.5 「農耕モンゴル人」村落の特徴

以上のように、筆者はランブントブ村の 1919 年から 1938 年までの 20 年間の各農家の移住関係を考察してみた。以下ではまずランブントブ村の事例からモンゴル人が形成した村落の親戚関係をみていきたい。

当村の中心物である富農 1 の曹氏を取巻く移住関係を見ていくと、1919 年から 1921 年までの移住者 8 世帯は、すべて富農 1 の曹氏と親族ないし姻族関係にある。更に 1938 年になると、富農 1 の曹氏を取り巻く親族ないし姻族関係の移住者は、詳細な関係が不明なものを含め 18 世帯までに増加している。また第二グループの中心物となる 7 の金氏は、すでに解明したように 1 の曹氏と姻族関係である。つまり両グループ間にも姻族関係が存在している。こうしてみると、ランブントブ村で曹氏と親族・姻族関係を通じてたどれる世帯数は、23 世帯となる。このように全村の 48 世帯の約半分が移住当初から村内に親族・姻族関係を持っていたことがわかる。

表 4 ランブントブ村の 2 人の中心物の移住関係（考察の結果をまとめて作成した表）

第一グループ	移住関係		農家番号
富農 1 曹氏	親戚関係	親族関係	2、 3、 4、 11、 13、 14、 8、 39
		分類不能	25、 15
		姻族関係	7、 42、 9、 12、 6、 18、 40、 23
	知人関係	36、 46、 27、 38	
第二グループ 中農 7 金氏	親戚関係	親族関係	5
		分類不能	32
		姻族関係	10、 48、 33
	知人関係		

ではなぜ当該地域に数多くの親族・姻族関係者が集中したのか。既述したように曹氏は

ランブントブ村において、はじめて農地を開拓した人物である。それゆえ彼は当該地域の重要な地位を占めている中心人物である。農家略歴表を参照すると、曹氏を取り巻く「親戚」たちは、原住地が開墾され、災害や土地の悪化、生活困難等のために移住しているケースが圧倒的に多い（興安局 1939：10-17）。このように、当時、数多くの生活困難者は、曹氏のような有力な「親戚」を頼って移住していたのではないかと思われる。言い換えれば、当該地域は、影響力を持つ中心人物を取り巻く親族・姻族関係により成り立っていたのではないか。しかし親族・姻族以外の移住者に知人関係者の多数現れている。そして経済関係の掬青主と掬青との関係を見捨てることはできない。

一方漢人が形成した村落の移住関係を聶氏の『劉堡』という著書から見ると、劉堡という村落は 1651 年に山東省蓬萊県から劉氏三兄弟が、移住して形成したのである。そして 19 世紀の半ばころまで、約 200 年近く劉氏一族居住していて、1800 年代以降に異姓の移住が現れたが、それらの異姓の移住者たちは、洪水や害虫による被害があって避難するときに、姻族関係に頼って、劉堡村に移住したのである。そして、移住後の現代になっても、各宗族間では、「老劉家」、「老葛家」、「老丁家」とはつきり分けられている。ここからわかるように、漢人が形成した村落は、一姓宗族をかなり重視しているのである。しかし、前述したように、モンゴル人が形成したモンゴル人の村落であるランブントブ村落の例をみていくと、1919 年に曹氏三兄弟と姻族関係の張氏と移住して、村落が形成され、その次の年からどんどん異姓が入ってきたのである。このように、モンゴル人村落は村落が形成するとたんに異姓との混住により形成し、その次の年からもっと多くの異姓が、姻族関係や知人関係で移住したのである。

更に劉堡村の異姓移住者では、ほぼ姻族関係により移住しているのに対し、モンゴル人の村落は姻族関係より知人関係の移住者ははるかに多いのである。ではモンゴル村落の形成に姻族関係、知人関係の移住者はどのように入ってきたのか。

表 4 を参照すると、ランブントブ村における 1 の曹氏の「親戚関係」の移住者の中で、姻族関係による移住者の数と親族関係による移住者は同数である。一方、7 の金氏の「親戚関係」の中では、親族関係より姻族関係の移住者の数が上回っている。姻族関係の移住よりわかるように、移住者は元の地域で姻族関係を結び、姻戚の移住により、姻戚の後を追って移住してきたのだろう。このように、姻族関係は一つの村落を超えた空間的範囲に広がっていたと思われる。更に、図 6 を参照すると、1 の曹氏は 7 の金氏と姻族関係にあり、7 の金氏は 5 の金氏と親族関係にあり、5 の金氏は 21 の何氏と知人関係にあり、21 の何氏は 31 の海氏と姻族関係にあり、31 の海氏は 29 の海氏と親族関係にある。このように、当時の村落は、親族関係、姻族関係、知人関係の連鎖を通じて地域内から移住者を集めていたと思われる。また逆に言えば、そうしたネットワークの及ぶ範囲が地域なのであるともいえる。

図 6 を参照すると、1 の曹氏との姻族関係を確認してみると、7 人と姻族関係、金氏は

2人と姻族関係を結んでいる。富農曹氏1、曹氏2、中農金氏との姻族関係を結んでいる相手を、表1から確認してみると同等身分同士との姻族関係を結んだのがほぼなしに近い。しかし、劉堡という村落では、「夫の家にとって、嫁の家と自分の家と「門当戸対」（家柄の釣り合い）すれば理想的で、婚姻はただ個人的なことではなく、「和両家之好」（家族の縁組）とみなされていた。相互扶助の親族関係を重視していた農民は何か困難にぶつかると、家族ばかりではなく姻族にもよく頼るため、よい縁組を整えるのは彼らに重要な意味を持っている。…省略…この地域では「窮結窮、富攀富」という諺のとおり、貧乏な家同士、金持ちの家同士での姻戚関係を結ぶのがごく一般的であった」。ここからわかるように、漢族村落は一族重視し、「門当戸対」（家柄の釣り合い）との姻族関係を結ぶのと違って、モンゴル人村落では、家柄を重視しない、人柄を見て、姻族関係を結ぶのである。

更に、モンゴル人が形成した村落と漢人が形成した村落の大きな相違として、モンゴル人村落に見られる本旗人、外旗人という構成は漢人村落では見られない点も指摘できる。

漢人村落の経済関係について、聶氏は満州国時代の農村実態調査により、漢族村落である劉堡の経済関係を小作関係、「雇主」と「帮工」の関係及び「換工」関係として分けている。

小作関係とは、①銀納定租（銀円は民国及び満州国の貨幣）一契約の当初から単位面積あたりについて一定の現銀額が決まっている小作料のこと。②銀納分租一契約で地租の金額は決定しないが、収穫高の換価額を地主と小作人が一定の割合で分け合い、その場合の地主の取り分を意味する。③代銀納定租及び代銀納分租一上記の銀納定租と銀納分租と同じように、地租を貨幣の金額で毛一定するのだが、異なる点は、実際の支払いを貨幣ではなく金額に相当する作物で行う。④物納定租一地相としての穀物の種類と定額とが最初から契約されている小作料。⑤物納分租一収穫物分配の割合を決め、主要作物全部について収穫後所定の割合で分配する場合の地主の所得分。⑥撈青租一「撈青的」と呼ばれる半独立の小作人が納める小作料。家畜・農具・種子・肥料などの生産手段はすべて地主から貸与され、一定の小作地で半独立の耕作経営をし収穫物は地主と分配する、という小作様式における地主の取り方。⑦白租一小作料なしの小作であるが、きわめて少なかった（聶 1992 : 137-138）。

以上のように、銀納定租、代銀納定租及び代銀納分租、物納定租、物納分租、撈青租、白租などの形態である複雑で様々経済関係で結ばれていた。それ以外に「雇主」と「帮工」の関係及び「換工」関係である。その関係を以下のように整理できる。

「雇主」と「帮工」の経済関係とは、「帮工」には、「年頭工」「半年工」「季工」及び「月工」などの種類がある。年頭工とは雇用期間が一年の作男、半年工「季工」及び「月工」とは、「零工」と総称される雇用期間がそれぞれ半年、三ヶ月、一ヶ月の作男のことである。雇用される期間とは関係なく、作男は大体雇用先にの家に住み込み、食事もその家で提供される。「工銭」（賃金）は現金または食糧の、二種類の払い方がある、どっちにしても実

質的に同じである。「雇主」たちは「年頭工」と「半年工」をほとんど村内で雇用するのに対して、短期間の「零工」を「工夫市」と呼ばれる労働力市場で雇用することもある。劉堡の南の村落に「工夫市」があった。周囲の村落の貧乏な農民たちが集まって来て、雇用されるのを待っているような労働力市場である（聶 1992 : 138）。

「雇主」と「換工」とは、戸と戸の間の、労働力の協力、及び労働力と家畜力との交換のことで、区タイ的には二種類の「換工」がある。一つは「搭牛具換工」という（「牛具」とは家畜と馬車の総称）。この種の「換工」は、土地を持っているが、「牛具」がない戸と「牛具」も持っている戸との間で、前者が後者の「牛具」を借り、その使用代の代償として前者が後者の農作業の手伝いをする。「牛具」と労働力の交換ではなく、農作業の協力関係で、特に農繁期に詐害に協力し合うことである（劉堡 1992 : 140）。

聶氏は劉堡村落の経済関係と親戚関係をこのように考察している。「親是親、財是財、親財両分開」（肉親は肉親で、財産は財産で、両者は両立する）という農民社会の規範を典型的に表現したものである。そして村落では、各家族の往来がすべて経済的な原則に基づいて契約的な関係になるかという、そういうわけではなく、「親」はやはり存在しており、また特に近い親族の間では互いに援助し世話をしあうこともある。しかしそれは往々にして、契約関係とは明確に区別されていた。たとえば地主は、小作農が自分に近い親族などの援助してやりたいと思う場合、地租を減らしてやるという方法ではなく薪や食糧を与えるというやり方で援助する。つまり「親」は契約関係によって定められた双方の地位や義務を変えることが出来ず、「親」に基づいた一方から他方への援助や恩情は、経済的な諸関係を承認し保障した上で成り立っていたのである（劉堡 1992 : 144）。

一方モンゴル人村落であるランブントブ村の経済関係を満州国時代の実態調査である『ランブントブ実態報告書』によると、ランブントブ村落の農民を、富農群、中農群、貧農群、極貧農群、撈青群、日工群と分けている。そして全村には、48戸の中、撈青は30戸を占め、日工は1戸のみである。前述した漢族村落の経済関係と比較してみると、非常に単純であることがわかる。そして少数の富農が複数の撈青を雇っている。たとえば、第八表の撈青関係表を参照すると、富農1が、23人の撈青を雇い、富農2が16人の撈青を雇い、中農3が7人の撈青を雇っている（統計表 1939 : 48）。といった土地を持っている本旗人は、外旗人や漢人を撈青として雇っている。では撈青とはどのような概念であろうかについては、漢人村落の複数の経済関係の中での一種になるが、モンゴル人の村落ではほぼ同じ意味での経済関係になる。しかし、調査報告書では、以下の三つの種類に分けて紹介している。

一つは、撈裡青である。それは、雇主は、土地、役畜、農具等一切の生産手段を提供し、撈青は労力のみ提供する。種子は普通のもの全部東家が提供するが、一般に大豆、蓖麻の種子のみは撈青主が春期に前貸して、秋期収穫の中からその前貸分丈けを差し引いて残りを折半する習慣になっている。そして、一年の契約で、もっぱら、撈青主の家に住み込

み、給食もある（興安局 1939：138）。

二つは、撈外青である。それは、撈裡青とそれほど変わらないが、撈青主の家に住み込み、食事しないのが一般的で、一年中の契約を結ぶが、一年の二十日、二十五日、三十日、四十日という限られた日に行く（興安局 1939：139）。

以上のように撈裡青、撈外青と決めているが、撈青の実家は本屯や他屯によって、撈青主の家に住み込みを決めたりする。そして、撈青主と撈青が親戚関係の場合にも、撈裡青、撈外青と区別しない。

三つは撈頭青である。それは、一般の撈裡青、撈外青と共同でしないで、撈青主の地を一人で小作する。主に、撈青主の野菜などの作物を小作する。そして撈青主の家に住み込みや給食はしない。契約期間は、撈外青と撈裡青の契約より短い（興安局 1939：139-140）。

ランブントブ村落に一戸の日工群がいる。調査報告書によると、この地方では一般に日工を雇用することは少なく、純日工として生活しているのもまだまれである。本屯の雇用日工は多くは舍伯吐からきており、彼らは、撈青として他のものと一緒に労働する能力がないからやむなく、日工として生活するに過ぎないものである。その生活程度は撈青に比べて更に一段低い（興安局 1939：128）。

以上のように、満州国時代における漢族村落とモンゴル人村落の経済関係を並べてみたが、漢族の村の経済関係は非常に細かく分類して、複雑なであったことがわかる。一方モンゴル人の村落の経済関係は非常に単純で、一言で言えば、撈青と撈青主の関係であることがわかる。前述したような経済関係からわかるように、漢族村落の農業形態や雇用形態はずいぶん前から充実して、農業状態が非常発展していたといえる。モンゴル村落は、土地を持っている本旗人の富農群の人たちは、複数の撈青を雇って小作させ、農業形態それほど充実していなかったといえる。以下では、モンゴル人村落の撈青の移住関係を考察してみよう。

表 3 を参照すると、1919 年から 1929 年までの移住者はほぼ本旗人である。1929 年以降になると、外旗人の数が増えるが、その中で、労働者である撈青の数が圧倒的である。1938 年になると、当村における撈青の総数は 30 世帯もあげられる。しかもランブントブ実態調査資料では、調査年の 1939 年の時点で 48 世帯であったが、1938 年に 11 世帯の撈青は他屯に転出していた（興安局 1939：119）と記されている。要するに、撈青の数はランブントブ村の過半数以上を占めていたが、かなり移動性が高かったと思われる。さらに農家略歴表によると、撈青の移住理由については、土地が開墾されたため、生活困難のため、土地や条件が良いところへ移住したいため（興安局 1939：119）などが多くあげられる。つまり、生活困難ゆえに少しでも土地や条件の良い居場所を目指して、移住を頻繁にしているのだろう。では、それら数多くの撈青はどのような関係で当村に移住しているのか。

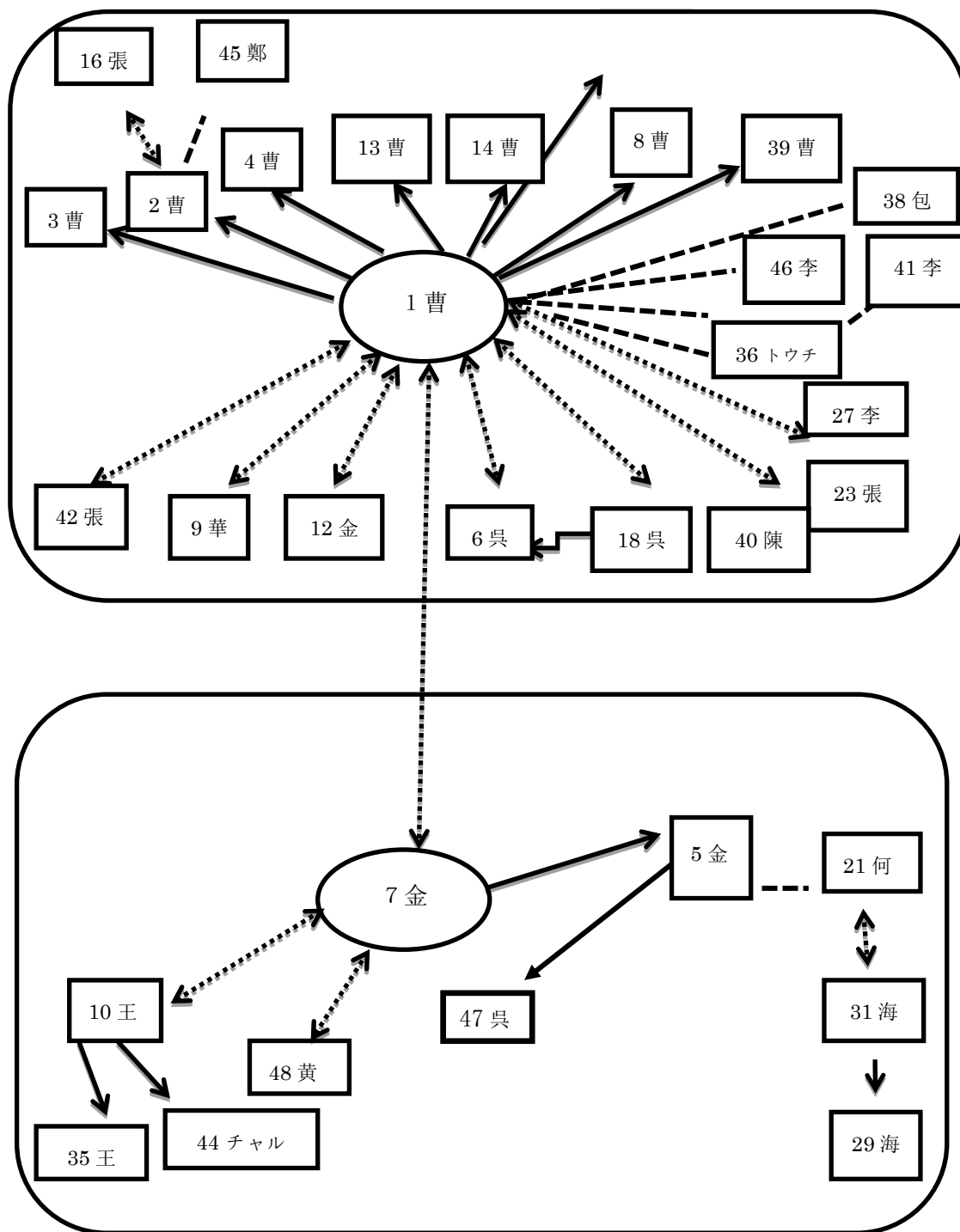
表 3 を見ると、ランブントブ村の 30 人撈青の中、外旗人が本旗人より圧倒的に多い。図 6 を参照すると、本旗人の撈青は 1 の曹氏との関係で移住しているのが多くみられる。他方

外旗人の撈青を見てみると、親族・姻族関係、知人関係の中で、知人関係での移住者が多い。一方で、多数の外旗人が本旗人と何らかの親族・姻族・知人関係で移住していることも事実である。また血縁関係図表に表記している外旗人 33 の白氏と本旗人 7 の金氏の姻族関係（興安局 1939 : 30）は移住後に結んでいることをすでに解明している。農家略歴表によると外旗人 16 の張氏は「本屯来住後は儀父の撈青として生活、康德四年 10 晌の荒地を開墾」、外旗人 17 韓氏は「最初の一年は撈青、次年度より小作 10 晌、次の年より小作 20 晌、康德五年度より 10 晌の荒地を開墾自作」（興安局 1939 : 13）という記録がある。すなわち彼らは、移住した際に撈青であったが、数年後に農地開墾を行い、極貧農にはあるが経済的に上昇できたのである。ここから分かるように、当時外旗人は当旗に移住後、本旗人と知人関係さらに姻族関係を構築、その後の旗内の移動に関しては、こうした関係性を頼る事例が多かったと言えるだろう。また両者間の関係が深まるにつれ、外旗人は当該地域で一定の地位を確保するようになり、外旗人の土地開墾の厳重な手続きが緩和されたのではないか。このようにモンゴル人村落では、知人関係や姻族関係で移住したあと、一定の地位や土地をもらうようになっている。既述したように、撈青主と撈里青と撈外青と定めているが、親戚関係の際に、明確にしないのである。しかし漢族村落は、「親是親、財是財、親財兩分開」（肉親は肉親で、財産は財産で、両者は両立する）とはっきり分けて、つまり親戚関係や経済関係を明確に区別していたのである。

表 5. ランプトブ村の撈青の移住関係

撈青	出身地	世帯数		移住関係	農家番号
	本旗人	11	親戚関係	親戚関係	39
分類不能				24、32、25	
姻族関係				42、40、23	
			知人関係	34、41、36	
			不明	30	
外旗人	17	親戚関係	親戚関係	44、47、35、29	
			分類不能	37、20、33	
			姻族関係	48、19、43、	
			知人関係	26、21、31、38、46、28、22	
漢人	2		知人関係	27、45	

図 6. ランプントブ村の親族関係、姻族関係、知人関係におけるネットワーク。



- ◄-----► 姻族関係
- 親族関係
- - - 知人関係

第三節モンゴル族の伝統文化

3.1 モンゴル族の伝統文化説

モンゴルといえば草原、ゲルは想起されるのと同じように、内モンゴルの人たちは他県に人々によく「馬に乗って学校に行っていたの、モンゴルゲルにすんでいたの、モンゴル人は酒が強いね、歌がうまいね」と聞かれる。内モンゴルのモンゴル人の間では、西モンゴル人・牧畜モンゴル人、東モンゴル・農耕モンゴル人という二分法が一般的に用いられ、牧畜地域のモンゴル人はモンゴル族の「伝統文化」を保存していると認識されている。その一方、他地域の人たちに農耕地域のモンゴル人は「漢化」された人間として見られているとともに、農耕地域のモンゴル人自らも「漢化」したとみとめている。そこで一部の「知識人」は「われわれは、チンギスハーンの弟であるハブトハサルの後代なので、ホルチン文化を持って、モンゴル人に偉大な貢献をあげている」というプライドを持ちながら、一部のホルチン人は標準モンゴル語を一生懸命勉強し、モンゴル服を着て、羊肉を食べ、「本物のモンゴル人」になろうと行動している。すなわち、「漢化」したという言い方から脱出しようとして、モンゴル人の「伝統文化」を探っている。

このように、内モンゴルの各地域において、多種多様のモンゴル人が、存在している。しかし、多様を主張する行為の背後にあるにある単一志向がそのイデオロギーの根幹にある以上、多様化した人々は必ず、変化せずモンゴル文化や伝統の真髄の担い手とされる「本物のモンゴル人」を想定しているのである。

以上の問題点に踏まえ、筆者は第一章の第二節まで、内モンゴルの東部地域のモンゴル人村落が形成した過程を論じ、漢人が形成した村落とモンゴル人が形成した村落を比較し、モンゴル人が形成した村落の特徴を解明した。このようにして、内モンゴルの東地域のモンゴル人村落は、漢人が形成した村落と居住している空間的な面から見ても、移住関係、親戚関係、姻族関係、農業形態の経済関係から見ても相当違っていることが明らかになった。しかし、既述したように、内モンゴルにおける、モンゴル人の間でも、牧畜地域のモンゴル人、農耕地域のモンゴル人、都会のモンゴル人と分けられていて、「本物のモンゴル人」について議論となっている。

では内モンゴルのどの地域モンゴル人が「本物のモンゴル人」なのか。内モンゴルで言われるように西地域の牧畜地域のモンゴル人は「本物のモンゴル人」なのか。それは何に基づいて、「本物のモンゴル人」を討論しているのか。筆者は本論では、序論に既述したように、「伝統文化」を二つ分けて論じる必要がある。それは、国内外でモンゴル人をステレオタイプ化している、民族レベルで抽象化されている伝統文化、すなわちテレビや本に書いているイメージ付けの伝統文化である「伝統文化A」と、現地人の日常生活の実践した習俗である「伝統文化B」である。では、モンゴル族の「伝統文化A」とはどのように、表現して伝えられているのか。そしてどのように人々に反映されているのか。以下

では、中国の民族紹介の本や日本に翻訳されている民族紹介の本で内モンゴルのモンゴル人をどのようにイメージ付けているのを見ていきたい。

3.2 モンゴル族の「伝統文化 A」

『中国少数民族』（人民出版社）では、内モンゴルのモンゴル人の伝統文化について以下のように述べている。

内モンゴルは広大な草原地域で、中華人民共和国の著名な、牧畜業の基地の一つである。牧畜業は、モンゴル人の昔からの生存のために依存していた経済的な収入源である。…<省略>…モンゴル人は子供のころから馬が好きで、馬の背に乗って成長してきたのである。彼らは一匹の走れるよい馬を持っていることで自分のプライドを守っている。烈馬を調教すること、弓を引くことはモンゴル人の趣味である。そして、常に、馬を調教する、競馬、モンゴル相撲、弓などを競争することによって、優秀な牧民の基準を決める。

毎年の7、8月にナーダム大会を行う習慣がある。それはモンゴル人の一年一度の盛大なモンゴル族の伝統的な祭りで、ナーダムとはモンゴル語の娯楽、遊戯という意味である。そしてナーダム大会で、競馬、モンゴル相撲、弓、囲碁、民族歌踊を披露し、モンゴルゲルの内外では、歓喜であふれる。

モンゴル相撲は、モンゴル牧民は、一日の辛労後の夕方になると、みんなでモンゴルゲルの前に集まり、お互いにモンゴル相撲をとるのが一般的である。これは草原上のモンゴル人の娯楽のための一つの運動である。

モンゴル人の民族服は夏、冬用と分かれ、布類で作られ長いコートを着て、シルクを帯としている。そして男女とも赤、黄色い、藍色を好んでいる。そして牛皮製の長靴を履き、腰に肉を食べるときに使うナイフ、嗅ぎタバコなどを掛けている。男性は藍、黒、褐色の帽子をかぶるのが多い、またはシルクを頭に巻く。女性も赤や青色の布で頭を巻く、冬になると帽子をかぶるのである。未婚女性は、髪の毛を二つにわけて結び、瑪瑙、珊瑚で飾る。後にモンゴル族の衣装に大きな変化が起こった。現在、布やシルクでつくられたで、動きやすい、外見上できれいな服装が求められるようになった。

牧畜地域では、牛、羊肉、酪農品が主食である。丸形のモンゴルゲルに住み、季節によって移動して生活している（国家民委民族問題五丛书编辑委员会 1981：73-79）。

『中国少数民族』という著書は中華人民共和国成立後、30周年を迎え、中国の各民族を統計し、各民族の歴史や習俗を記している。上述したように、モンゴル族についての紹介を整理してみたところ、やはり草原、ゲル、馬、モンゴル民族服、相撲、ナーダムが中心に紹介していることがわかる。

『内蒙古通史綱要』（人民出版社）では、モンゴルのこと、モンゴル族の習慣のことを以下のように述べている。

内モンゴル大草原は長い歴史の中で北部牧畜民族を育て、民族経済と民族文化の遊園地である。緑色に満ちた草原大地は、地下に豊かな資源が含まれている。…<省略>…牧民は一年四季に、水草のよいところにいき移動して牧畜する。牧畜民族のそのような牧畜方法は、自然によく科学的合理的である。牧民の生活には、モンゴルゲル、ハサグテレゲ（木

造の車)、オールガ(馬をつかまえる長い棒)などが使われている(郝維民 齊木徳道爾吉 2006: 773-776)。

『内蒙古通史綱要』内モンゴルの歴史を詳細に記している。そして内モンゴル大草原、牧畜民、移動する生活、牧畜民の移動生活は科学的合理的と書いている。ここから牧畜民、牧畜生活といった、モンゴル族の単一志向がそのイデオロギーの根幹にある以上、多様化した人々が必ず、変化しないモンゴル文化や伝統の真髄であるという考え方がわかる。

更に『中国少数民族の信仰と習俗』「4 モンゴル族」(第一書房)では、モンゴル族の習俗について以下のように述べている。

蒙古族地区の宗教活動の中心は各地のラマ寺院である。人々の宗教生活は家の中で仏を敬い、仏を祀るほかに縁日ごとに必ず寺院に詣りに行く。…<省略>…仏を拝もうと祭りに各地からやってきた牧民たちが雲のように群がる。老人や子供をつれて家族全員で来るもの、家畜を駆り立てて来る者、ララ車(木の車輪の粗末な牛車)に乗って来るもの、はるばる数百里の遠方から急いでくる者もいる。…<省略>…「オボ」を祭ることもモンゴル族の年ごとの重要な宗教活動である。オボは俗に「敖包」といわれ、蒙古語で「小さな丘」という意味。…<省略>…乗馬の者はオボに着くと馬からおり、ひれ伏して拝んだ後それを繞って行く。オボの近くに住んでいる牧民たちは乳を絞ったあと、あるいは朝茶を飲む前に、必ずオボの方角に向かって数的の乳または茶をまいて敬意を示す(王汝瀾 1993: 55-57)。

『中国少数民族の信仰と習俗』ではモンゴル族の宗教習俗を紹介している。ここでも、モンゴルゲル、ララ車、オボ、乗馬、家畜など牧畜生活、牧畜生活について紹介している。

筆者は以上の三つの本の中から、モンゴル族についての紹介を整理してみると、どちらにしても、内モンゴルは大草原、モンゴルゲル、馬、オボ、モンゴル相撲、牧民、ララ車について明記していることがわかる。

以上の三つの本でモンゴル族のことを紹介しているのは、筆者は序論で触れたように、国内外でモンゴル人をステレオタイプ化しているあるいは民族レベルで抽象化されていっている伝統文化、すなわち「伝統文化 A」といえる。内モンゴルは、大草原、モンゴルゲルといったものが主張されている。しかし、現在内モンゴルでは、草原が一部のところにしかない。モンゴルゲルは観光地で観光用として使われているのが多い。そして現在の人々に、モンゴルゲルに住んだという記憶が残っている人たちはわずかしかないのである。ではなぜ、「伝統文化 A」が内モンゴルのモンゴル人の伝統文化のシンボルとして存在しているのか、現地の人々はどのように思っているのか、彼らにどのように反映されているのか。

3.2.1 現地の人々のモンゴル族の伝統文化の語り

・農耕地域の人々のモンゴル伝統文化の語り

30代の女性 A は、通遼市の半農半牧地域出身、モンゴル族の民族教育を受け、大学院を

卒業、無職状態、現在結婚して庫倫旗に滞在している。A氏は伝統文化について以下のよう
に言っている。

モンゴル人の伝統文化については、「オボ、相撲、競馬、弓を引くことなどを知っているが、
ほかの文化をあまり知らない、今からネットから調べるよ」といってネットからコピーし
て私にメールの形で送信した。そして「民族のシンボルとなる伝統文化は、先祖から伝わ
ってきた伝統文化で、われわれが必ず保護し、発展させる」。伝統文化について知ったのは
「私は主に、歴史の本や学校の教育、先祖から伝わってきた文化や習俗から知った」。伝統
文化の現在の状況について「通遼市付近や農耕地域のモンゴル人は漢族と混住しているの
で、昔からの伝統文化を忘れ、漢化したのである」といった。

30代の女性B氏は、通遼市の半農半牧地域出身で、モンゴル族の民族教育を受け、大学
を卒業後、包頭市に居住している。

伝統文化については、「現在外にいたので、伝統文化についてはモンゴル族のチャガンイ
デゲ（直訳すれば白い食べ物で意味としては乳製品である）しか思い出せない。私の近所
の友人の中で、西地域のモンゴル人がいるので、彼女を紹介する。彼女はよく知っている
はず、きれいな標準語をしゃべっているから」。そして30分後に帰宅して、「私は漢族と結
婚しているので、モンゴル族と漢族はあらゆる方面で違う。たとえば、文化、習慣、考え
方などである。モンゴル族の伝統文化といえ、モンゴル人にしかいない日常で現れてい
る文化であると思う。西地域のモンゴルは、日常の生活、食品などは伝統文化に近いが、
我々農耕化したから伝統文化は変化した。それはしょうがないんだ。でも変化した原因は
主に時代が発展したからである」といった。

30代の男性C氏は、興安盟の農耕地域出身で、モンゴル族の民族教育を受け、現在日本に
滞在している。

モンゴル族の伝統文化については「モンゴル族の宗教、料理、祭天、オボ、民族服が伝
統文化なのである」。筆者はそれらの伝統文化をどこから知ったのと聞いたら「本、テレビ、
普段の生活からわかった」

50代の女性Dは通遼市の半農半牧地域に生まれ、現在も農業を営んでいる。

D氏は伝統文化について「モンゴル族の伝統文化を知らないし、考えたこともない」筆者は
「専門的な知識を聞いていない、個人調査なので、自分の知っていることを何でもいいの
で、言ってみてください」といったら「モンゴル族の家庭教育は漢族と違って、年配を尊敬
する。そして西地域のモンゴル人は純粋なモンゴル文化を保存していて、うちの東地域の
モンゴル人は半分以上は漢化したよ」。

30代の女性E氏通遼市半農半牧地域生まれ、モンゴル族の民族教育を受け、現在通遼市
に住んでいる。

「モンゴル族の伝統文化に、春節、ナーダム、モンゴル語などである、西モンゴル地域は

チンギスハーンの後代なので、純モンゴルであり、東部はもう漢化したところである」

30代の女性Fは通遼市半農半牧地域の農村で生まれ、中学校二年生のとき中退して、現在農業を営んでいる家庭主婦である。

筆者の伝統文化に関する問題にたいして、F氏は「私は知らないのですが、知り合いの先生から聞いてみる。ちょっと待ってね」といった。そしてまもなく答えを送ってくれた。それは「学校の教育で、モンゴルゲル、馬、馬の飾りのものを伝統文化として教えているが、実際の生活にかみ合っていないので、現在のモンゴル人が伝統文化に関する意識はなくなりつつある。西モンゴル地域と東モンゴル地域を比べてみると、西のモンゴル人は民族意識が強い、東モンゴル地域の人々は漢化している」

50代男性G氏は、通遼市の農耕地域生まれ、現在フフホト氏の民政局に勤めている。そしてあいている時間を利用して、宴会や結婚披露宴を「モンゴル風」で司会している。

モンゴル族の伝統文化については「モンゴル族の伝統文化は一つの宗教で、モンゴル人の正直、親切な習慣を育てることができたのである。モンゴル族の先祖から伝わってきているし、モンゴル族の多くの本から学習したのである」。「モンゴル風」の結婚披露宴について聞き取り調査は第四章に詳細に記録する。

以下では農耕地域生まれのインフォーマントのモンゴル族の伝統文化の語りを整理してみる。

筆者は、農耕地域の多くの人たちから、「モンゴル族の伝統文化に何があるか、どのくらい知っているのか、知っていたらどこから知ったのか」について聞いた結果、答えてくれない方が多い、そして、何回も追求して聞いてみたところ、民族教育を受け、都会に住んでいる女性A氏、女性B氏、男性C氏、女性E氏、男性G氏はモンゴル族の伝統文化についていってくれた。彼らの言っている伝統文化の内容はオボ、競馬、弓、草原、チャガンイデェゲ、牧畜、馬などがよく口から出てきている。彼らの言っている伝統文化の内容は、筆者は3.2モンゴル族の「伝統文化A」について紹介した「伝統文化A」の内容とほぼ合致していることが分かる。そして農耕地域の居住者である女性D氏はとF氏はモンゴル族の伝統文化を知らないと答えた。そして筆者はどうしても一言言ってくださいといったら女性D氏は、モンゴル族の家庭教育は漢族と違うといった。そして女性F氏は知っている方からたずねて私に答えた。そしてほとんどの方は筆者を「伝統文化を本から読めばわかるんじゃない」といっている。彼らの考えでは、モンゴル族の伝統文化は本にかいているので、本から分かるというのが非常に面白い。ここから分かるように、彼らの伝統文化に関する知識や考え方は本から来ているといってもよい。彼らは本に書いているモンゴル族のものはすべてモンゴル族の伝統文化であると信じ、本の内容に頼り、東地域の日常生活に現れているものを伝統文化と考えていないし、ほとんど漢化しているという考え方である。ここからわかるように彼らの伝統文化の概念、考え方は「伝統文化A」から来ている。それは、「伝統文化A」がかなり影響与えていることがわかる。そして、東地域の人々の語りで

は、たとえば女性 B 氏、E 氏の話では、東地域の農耕人は漢化し、西地域の人たちは伝統文化を保存しているといっている。では牧畜地域の人たちは、モンゴル族の伝統文化をどのように語っているのかを以下では見ていきたい。

・牧畜地域の人々のモンゴル伝統文化の語り

40 代女性 H は、バヤンノゴル市の牧畜地域生まれ、現在包頭市に住んでいる。家庭主婦である。

モンゴル族の伝統文化について「私はモンゴル民族で自分の民族の文化は祖先から伝わってきた。文化や歴史を保護して伝承するのは、われわれの役割である。私は牧畜地域に生まれ育ったので、ミルクティを飲み、酪農品を食べ、モンゴル服を着ていた。そして毎年ナーダムやオボの祭りがある。これはモンゴル人の伝統文化で、われわれ伝承すべきである。現在私の親戚は庭にモンゴルゲルを立て、子供たちにモンゴルゲルの形を見せ、客が来たらモンゴルゲルに招待している。私たちのところは、モンゴル雰囲気は非常に深い、モンゴル文化をきれいに保存している。そして、羊肉を食べ、ミルクティを飲み、酪農品を食べ、非常によいモンゴル習慣を保存している」。

30 代女性 I 氏は、オロドス市の牧畜地域の出身で、現在ウーシン旗の教育局に勤めている。その傍ら貿易もやっている。

モンゴル族の伝統文化について「モンゴル族の伝統文化と言えば、牧畜文化から始まったのだ。ナーダム、オボ、モンゴル族の婚姻習俗、モンゴル民族服、正月の習慣、火の祭りなどである。モンゴル族は自然、草原を愛する保護する習慣がある²²。我々牧畜地域の人たちはモンゴル文化をきれいに保護している」筆者はどこからモンゴル族の伝統文化を知ったのかについて「私の両親は普段の生活でモンゴル族の伝統文化で行っているのを知った。たとえば、火の神様を祭る、ナーダム、オボを祭るなどである。そして詳細については本、テレビから知った」現在のモンゴル族の伝統文化について「内モンゴルの伝統文化は失われている。たとえば、現在子供たちはモンゴル学校に行かない、年配の人にお辞儀して尊敬しない。このようにモンゴル族の言語、文字、文化、日常習慣などがなくなっている。現在の子供たちは、火を祭る、オボを祭ること、自然を守ることを知らない。漢人は自然を守らないし、自然を壊す。なので、現在のモンゴル人も自然を壊すのも増えてきた」西地域と東地域のモンゴル人について「西地域のモンゴル人は教育や知識が足りない。東地域のモンゴル地域は漢人たちと混住しいち早く経済、文化各方面で発展し、民族の文化が失ったのが多い。西地域のモンゴル人はまだ牧畜生活、牧畜生活しているから、モンゴル

²²I 氏は、モンゴル族の伝統文化と並べたのに、彼女は「自分の言っている伝統文化はすべて正しいとはいえない」と自信なさそうに言っていた。

族の伝統文化をある程度保存している。しかし東地域のモンゴル人は漢族と同じように農耕したので、伝統文化をなくしている。だから、伝統文化は生活環境と関係がある。私のふるさとの伝統文化は、以前より、だいぶ失われているの」。教育について「モンゴル人は子供を漢族の学校に行かせているのは、大反対である。モンゴル族の子供は漢族学校に行き、モンゴル族の伝統文化をどんどんなくしている。モンゴル学校で教えている教科書も漢族文化の成分がたくさん入っている」。

40代の男性J氏は、赤峰市牧畜地域に生まれ、現在ホシコトン旗の教育局に勤めている。

モンゴル族の伝統文化について「牧畜文化はモンゴル族の一番特徴となる伝統文化である。牧畜文化の中で、ナーダム、オボを祭る、現在の人たちはオボを祭る文化を知らないのが多い、モンゴル民族服、民族の芸術、タブンホシゴマル（ヤギ、羊、牛、馬、ラクダ）、西地域の牧畜地域は東地域と比較してみると、民族文化をよく保存していて、尊重している。現在伝統文化は非常に変化している。現在の人々は民族の伝統文化より経済的な利益を考えている、そして日常生活の中で、中国語で話してひどく漢化している。そして、最も重要であるモンゴル族の婚姻習俗は非常に変化している」伝統文化をどうやって知ったのかについて「私は普段よく本を読んだりしている。そして日常的な経験が深い」

50代の男性K氏は赤峰市牧畜地域生まれ、現在ホシコトン旗の小学校の教師である。仕事の傍らで、オボの祭りや「モンゴル風」の結婚披露宴の司会者として活躍している。

モンゴル族の伝統文化については、「モンゴル族の伝統文化は、モンゴル族にしかない、習慣文化、日常生活などは先祖から伝わってきた。伝統文化は変化したら絶対いけない、モンゴル族の伝統文化は変化したら他民族の伝統文化になるので、必ず変化させないように後代に伝えて、保護しなければならない。西地域のモンゴル、東のモンゴルは同じモンゴルなので、同じ伝統文化を持っている。しかし違う地域に住んでいるので、伝統文化に少々違いが出ている」。筆者は伝統文化をどうやって知ったのかについて「私はいつも本を読む、そして日常生活で見聞いた話である」

30代女性L氏はフロンボイル市牧畜地域生まれ、現在フロンボイル市の中学校に中国語の教師を担当している。

伝統文化についてどう思うかについて「私はモンゴル民族学校では中国語の教師を担当しているので、伝統文化をあまり知らない、でも伝統文化を知っている有名人を紹介してあげる、われわれの新左旗はバルホ伝統文化の里であり、モンゴル語担当の先生たちはモンゴル伝統文化の継承人である」筆者はL氏にどうしても自分の知っていることを言ってくださいといたら「私の父は漢族なので、漢文化の影響が深い。私はうちの民族学校のモンゴル語の教師を紹介してあげる。自分はモンゴル族のモンゴル語の構造さえも知らない、私は現在の学校に勤めてから、モンゴル族の伝統文化をちょっとわかるようになった。うちの学校では、純蒙古特色で、伝統文化を教える科目がある。そして学校のキャンパスにモンゴル語が建てられて、オボも作られている」西モンゴル人と東モンゴル人のどこ

の地域の文化は伝統であるかについてあまり知らない。しかし、今後モンゴル族は各地域の文化の交流を行い、ともに伝統文化を継承し、よい雰囲気を作ることを願っている」。

30代女性 M 氏フロンボイル市の牧畜地域生まれ、子供のころ牧畜生活していたが現在定住している。

伝統文化について「モンゴルチャガナイデゲン、習慣などである。私もあまり知らないの、よく知っている人を紹介してあげる。」牧畜生活はモンゴル族の伝統文化は都会ではなくなっている、草原の地方の地域ではモンゴル族の伝統文化を一番保存している。そしてモンゴル族は草原自然を大事にし保護してきた」。

以上は牧畜地域のモンゴル人に伝統文化の語りを述べてきた。6人に現在もモンゴルゲルに住んでいますか、またの出身地ではまだ牧畜生活を行っているかについて聞いたところ、50代の男性 K 氏と 30代の女性 M 氏は子供のころ牧畜生活をしていましたが、現在なしとっている。いわゆる 6人の牧畜地域生まれといっても現在牧畜生活していないのが事実である。女性 L 氏の話によると「伝統文化は生活環境と関係がある。東地域は早く漢族を習って農業をやったので、伝統文化をなくしたのがひどい」とっている。L 氏のような考え方が非常に多く存在している。東モンゴル人は農耕やっているいるので、伝統文化を失ったのであるといわれている。このように、東の人たち自身も、西の人たちも、東地域の人たちは農業をやっているので伝統文化を失っているという言い方が強い。

L 氏の話を見ていくと、彼女の父が漢族なので、モンゴル族の伝統文化をあまり知らないといい、今から尊敬し、勉強しようとしている。そして知っている人で牧畜地に住んでいる人 M 氏を紹介してくれた。しかし、M 氏は伝統文化についていってくれたが自信なさそうで「自分が言っている伝統文化はあっているかどうかかわからない」とっていた。彼らの話では、モンゴル族の伝統文化は牧畜文化からきて、牧畜地域ではよく保存しているが、現在変化していると言っている。そして彼らもモンゴル族の伝統文化を本や実際の生活からも分かったという答えが多い。

以上のように、牧畜地域でも、農耕地域の人でも、伝統文化を知っておこうとしたら、本から読みとるのが多い。そして本に書いてある「伝統文化 A」を標本として、伝統文化は変化したか、なくなっているのかを判断している。東地域の人々は牧畜地域の伝統文化＝「伝統文化 A」という意識が高いし、伝統文化に関する自覚性がない。牧畜地域の人々は、牧畜地域の伝統文化＝「伝統文化 A」という意識もある人もいれば、牧畜地域の伝統文化は変化しているので、「伝統文化 A」がなくなっているという。いわゆる牧畜地域の人たちは、自分のところの伝統文化には「伝統文化 A」を思い出すものがおおい、すなわち、彼らは自分の身の回りのもので「伝統文化 A」に当てはまる部分を言い出す。そしてその部分だけを自覚しているのが分かる。

「伝統文化 A」に関する調査について、筆者はさらに第四章と第五章で、司会業の繁栄によるモンゴル人の司会者モンゴル族の伝統文化を取り入れた結婚披露宴を司会している事

例を取り上げ、詳細に考察していきたい。そして、司会者たちは「伝統文化 A」をどのように認識しているのか、そして「伝統文化 A」彼らにどのように反映され、商品化にしているのか解明していきたい。

では、民族レベルで指している「伝統文化 A」は本当に、牧畜地域に住んでいる牧民伝統文化なのか、筆者は以下では、「伝統文化 A」で述べている婚姻習俗やその流れを提示し、牧畜地域の婚姻習俗の実際の事例と比較してみたい。

3.2.2 「伝統文化 A」における婚姻習俗

『中国少数民族の婚姻と家族上巻』「4 モンゴル（蒙古）族—内蒙古自治区」（第一書房）婚姻習俗のことを以下のように記している。

結婚までの過程

- ・求婚

旧社会では早婚の風があって、父母は子供が九歳になると、縁談をまとめるのに奔走した。婚約に当たっては通常男方が媒酌人を立てて女家へ縁談話を持っていく。もし女家が同意すれば、男方の父母と本人とが数回にわたって求婚に訪れる。女方が同意すると、若者は哈達（布）²³と馬乳酒、焦糖（黒砂糖とバターを煮つめたもの）の贈物を携えて娘の両親を拝し、古式ゆかしい「求婚の歌」を歌う。…<省略>…

- ・結婚の日を決める

しばらく恋愛の期間が過ぎると、男方はラマ僧に吉日良辰を選んでもらって婚礼の式を挙げる。通常男家は羊肉や美酒、果実、粗目糖、乳皮（ソフトチーズ）、黄油（バター）、奶果（チーズの一種）、巻タバコの大皿をずらりと並べ宴を張り、女家の父母、媒酌人と近親者、親友を招いてハタを交換し合う。裕福な家は婚約した新人の吉祥と幸福を願って、この日牛一頭と羊一頭の料理を振る舞い、称え詩を唄える。

- ・挙式のための準備

男方はまた未来の姻戚に純白のハタを贈り届ける。双方は酒を勧めつつ、麗しい称え詩を唄える。引き続いて威勢のいい掛け合い歌に移ると、座はいやが上にも盛り上がる。それから双方は婚礼の細目について正式取り決めるが、婚礼で飲まれる大量の祝い酒は男性が万端用意し、娘の持参財産は女方が整えるのがしきたりである。挙式が数日後に迫ると、男家は一、二の「モンゴル包」を掃き清め、もしくは新たに

23儀礼的な布。チベット族とモンゴル族は送迎や嫁娶り、神仏の拝礼、日常的な交際の礼節に帯状の絹布もしくは綿布を用いて、尊敬の気持ちを表す。長さはさまざまで、色も聖なる純潔を象徴する白が好まれている。

組み立てて美酒と巻きタバコを整え、モンゴル袍、モンゴル靴、馬鞍、モンゴル刀、金銀の食器を作りもしくは購入し、同時に親戚友人に結婚式の日取りを通知する。

・結婚式当日

花婿²⁴は真新しい装束を身につける。通常は赤い緞子地の冠をかぶり、もしくは赤い房のついた円錐型のブリヤート風の帽子をかぶり、赤い繻子の長い袍に金色の幅広い腰帯を結び、馬皮のブーツを履いて、弓矢を追うというりりしいでたちである。花婿に付き添う媒酌人と添い婿も盛装をこらす。親戚友人、隣人たちは次々にやってきて寿ぐ。花嫁迎えの行列の出立に当たって、花婿と添い婿とは歓呼の声の中で祝杯をかざし「花嫁²⁵を迎える歌」を歌う。…<省略>…

・花婿が花嫁を迎えに行く

花婿と花嫁迎えの行列は参加者の包囲と身送りを受けて、さっと駿馬に打ちまたがり、意気揚々と女家を目指す。

・女家の戸口が閉まる儀式

男家が女家につくと、パオの戸口はぴったりと閉ざされ、花嫁側の添い嫁と親戚友人がこの結婚を拒むように、戸口の前に半円形に立ちはたがっている。このとき、花嫁迎えの列から高德で、弁の立つ婚禮の「祝い人」が進み出て、女家に向かって丁重に民謡の問いかけする。…<省略>…

・花婿側が花嫁側のパオに入る

花婿は真っ先に釈迦仏と竈神に拝礼して花嫁の父母にハタと美酒の贈り物を捧げると、親戚友人と嗅ぎたばこの壺を交換して挨拶する。次に料理の並んだ宴席で、主客は花嫁花婿の幸せを祈って祝杯を挙げる。それから娘と若者たちによる花婿へのいたずらが始まる。内モンゴル西部の牧区では花婿の力と知恵を試すために煮込んだ羊の首を捧げて、その首の骨の真ん中花婿に割らせる。実は骨髄にはこっそり紅柳（落葉小喬木、砂丘にとぐろを巻く根は貴重な燃料となる）が差し込まれているが、このからくりを賢く見破った花婿はたちまちポッキリ骨を割る。…<省略>…

・花嫁を花婿側に送る

花嫁は大勢の娘たちの介添えで顔を真紅のベールですっぽり覆い、ピンクの袍を着て幅広い緑の絹帯を締め馬皮のブーツをはき、髪にはおびたしい真珠と珊瑚を綴り合わせて前に房を、左右に穂を垂らす。豊満な健康美とおっとりした美しいさが、匂いたっている。花嫁送りに祝いの歌の流れる最中、馬上的花嫁は生家のパオを三週して肉親と名残りを惜しむ。このとき、母親は泣きながら歌を歌うのが常で、…<省略>…父親は自分では歌わず、通常娘たちが変わりに歌ってあげる。父母の歌が終わると、花嫁は添い嫁と親戚友人に付き添われ、花婿と花嫁迎えの行列にしたがって、駿馬にうち乗り花婿の家へのかけ去って行く。花婿は誰よりも先に家につかなければならないのに、花嫁側の娘たちは、花婿の隙を見て足止め

²⁴筆者は本論で、新郎として表記する

²⁵筆者は本論で新婦として表記する。

食わせるような邪魔をするしきりがある。たとえば、花婿の帽子を奪ったりする。花婿側の家に近づくと、女方を接待するための酒席を設ける。

- ・花婿側に到着する

花婿花嫁は、花婿の家に到着すると、馬からおり、鞭をもったまま、えんえんと燃えさかる二つの篝火の間を並んで通る。…<省略>…それから羊の肩胛骨を持って天地を拝し、ラマ僧が新婚夫婦の幸せを祈って誦経をはじめ。花嫁花婿はパオに入って釈迦仏と竈神を拝し、父母と親戚友人を拝礼する。花嫁はただちに身だしなみを整えて義弟妹の一人ひとり顔合わせをし、互いに純白のハタを捧げあう。同時に花婿も花嫁の親戚友人に誼みを通じる拝礼をする。

- ・花婿側の酒宴

宴席には通常その姿のままの羊料理が出され、花婿は銀製の酒壺を花嫁は金碗銀盆を持って参列者の一人ひとりに酒を勧めて回るこのとき酒席は盛り上がり、胡拔斯（四弦琴）を爪弾く音や馬頭琴、四胡を奏でる音の響く中、飲みや歌う。その陽気な楽の音に誘われて若者たちと娘たちが酒杯と箸を手にとって軽やかに舞い立つと、満座の人々が傍らから歌を添える。このように、酒宴はしばしば二、三日続くが、一週間に及ぶこともある。

- ・花嫁の親戚が帰る

別れの日に花婿は女家の人々を三、四里（一里は五百メートル）ほど送って行って馬をくだり、かぎタバコの壺を交換して、心からの見送りとお礼の気持ちを表す。花嫁の母は十日から半月ほど（男性に）滞在してから、帰っていく。別れ際、母と娘は抱擁して尽きせぬ名残りを惜しむ（烏力吉図 1996：68-83）。

以上は、モンゴル族の婚姻習俗の流れを『中国少数民族の信仰と習俗』からとった。それは、内モンゴルにおけるモンゴル族の婚姻習俗だと述べているが、本当に、すべての婚姻習俗の流れや習俗は、前述したようになっているのか、以下では実際の牧畜地域で行った婚姻習俗の事例を提示していきたい。

3.3 牧畜地域の婚姻習俗の事例

姚慧 2008 「霍爾其格嘎查蒙古族婚姻儀礼と婚姻儀礼の歌の現状の調査と研究」 内蒙古大学芸術学院学報

姚慧氏は新婦の烏仁套克陶（ウリントコト）新郎の敖登宝日（オドンボロ）二人の内モンゴル錫林郭勒盟東烏株穆沁旗薩麦蘇木霍爾其格嘎查に行われた結婚式の流れを細かく記録しているので、筆者は姚慧氏の牧畜地域における婚姻習俗の流れを取り上げていきたい。

- ・調査時期、場所

2008年11月5日から6日まで、内モンゴル錫林郭勒（シリングル）盟東烏株穆沁（ウジムチン）旗薩麦（サマイ）蘇木霍爾其格（ホチク）嘎查で行われた婚姻儀礼である。

婚姻儀礼の流れは以下のようである。

・定親（縁談）

男性側からラマ²⁶のところに行き、相性があう女性を見てもらう。そして、男性側の近所の相性があう女性を探し、男性側から相性が会う女性の方に仲人を立て、女性側に行かせる。もし女性側から同意されたら次の段階に進行する。

・聘礼（結納品）

男家女家が婚約を決定後、男家から女家に結納品をあげる。そして女家に訂婚宴（婚約を決める儀式）を行い（この儀式は非常に重要であるから女性側の親戚みんなを集める）、結婚する際に男家から女家にあげる結納品について相談する。その結納品は牛、馬、羊とお金である。女家の親が結納品をもらったら、娘に金飾りの物を買ってあげる。

・結婚日を決める

男家は結婚予定日をラマにより決定させる。決められたら女家に知らせる。その後、両方側から親戚に結婚予定日を知らせる。両方から結婚する準備をし始める。

・ゲル立てる。

男家から景色のよい場所に結婚式を行うため、水草の豊なところを探しゲルを立てる。ゲルを立てる時に、女家から手伝って立ててあげる場合もある。

・女性側の結婚披露宴前の準備段階

2008年11月5日

7：30 花嫁の親戚の人たちが花嫁の荷物を包んであげる。そして花嫁を含み親戚みんな新しいモンゴル民族服を着る。チンギスハーン像の前に、バター灯、各食品などをまつる。

・結婚祝い品をもらう

8：00 花嫁は親戚（母、兄、母の分頭娘）から相ついで結婚祝いのプレゼント（モンゴル民族服、1000元、金のアクセサリ、チーズ、月餅、蒟蒻等）もらう。

9：15—9：35 花嫁は姉、妹とともに親戚のゲル（叔父さんの家、母の弟の家等）に行きお辞儀する。そして親戚から結婚祝いのプレゼント（モンゴルシルク、現代衣類、チーズ）もらう。

9：40 親戚みんなの記念写真をとる。

9：50 親戚みんなで羊肉のうどんとチーズを食べる。

10：00 花嫁は別の新しい民族服に着替える。

²⁶ラマのローマ字慣用表記 Lama；漢語表記：喇嘛とは、チベット仏教における僧侶の敬称の1つ。

10：40—12：35 遠い親戚からの結婚祝い品をもらう。

・花嫁側の儀礼

18：55—21：00 花嫁の側の客は、到着後、結婚披露宴を始め、歌いながら酒を飲む。

21：00 花嫁の親戚（女性）が花嫁の荷物を包み車に乗せる。

24：10 花婿の側から二人が先に到着する。花嫁の側からその二人に酒を一杯ずつあげる。

・娶親（嫁を迎えにくる）

24：35 花婿が到着すると花嫁の母が花婿の顔に口づけし、チーズをあげる。それと同時に、みんな酒をのみながら民族歌を歌う。

11月6日

01：20—03：10 男家が女家の親戚のゲルに相次いで入り、歌いながら酒を飲む。

・送親（女家の親戚から花嫁を送る）

03：30 女の親戚がもらった結婚祝い品を数えながら車に乗せる。その車は新婦より早く到着するようにする。

03：35 花嫁の母、兄、妹から花婿にプレゼントをあげる。

03：50 女家から花婿に羊頭骨を分けさせる。花婿は添い婿と共にそれを分ける。それが終わったら、女家の親戚に酒を勧める。

04：10 花嫁花婿二人がみんなに祝杯をあげながら歌を歌う。その歌は、花嫁が結婚するときの歌である。

04：24—4：45 花嫁を車に乗せ、出発する。

・迎親（花嫁を向かう）

8：45 花婿の家に到着する。

8：55 花嫁に髪を分ける儀式を行う。花嫁は自分の母から離れて未知の所に知り合いがないので、男家から髪を分ける母を紹介してあげる。それを花嫁は「分頭母」と呼ぶ。モンゴル民族の女性は結婚する前に髪を一つに組む、結婚したら髪を分けるという習慣がある。この儀式が終わったら、「分頭母」からプレゼントがもらえる。

・男家の結婚披露宴

9：10 結婚披露宴を主宰する人は、結婚式が始まることを発表する。そして、新婦新郎を火にお辞儀させる、年配人にお辞儀させる。それからお互いに握手させる。

9：20—9：30 花嫁花婿の両親が今後の礼儀正しさを教える。特に女家の両親が娘に嫁としての役割を教える。花婿は嫁の母に新鮮なミルクをあげる。

9：40 花婿の新しい家に女家の親戚が持ってきた結婚祝い品を男家にあげる。

9：50－11：30 宴会が始まり、酒を飲みながら歌を歌う。

- ・結婚式に手伝ったすべての人を招待する。
- ・洞房（花婿花嫁が自分の部屋）に入る。
- ・新婦の両親が娘と会いにくる。

以上のように、実際牧畜地域の婚姻習俗がどのように実施されているのかを並べてみた。では「伝統文化 A」とは内モンゴル全地域の伝統文化に通用するのか。まず牧畜地域のモンゴル人の婚姻習俗と比較して、解明していきたい。

3.4 「伝統文化 A」と牧畜地域の伝統文化との比較

『中国少数民族の婚姻と家族上巻』「4 モンゴル（蒙古）族—内蒙古自治区」（第一書房）婚姻習俗と内モンゴル錫林郭勒盟東烏株穆沁旗薩麥蘇木霍爾其格嘎查に行われた婚姻習俗の全部の過程を比較してみると以下のように、類似点と相違点を整理できる。

・類似点

婚姻習俗の流れとしては、①仲人を立てて、縁談をする。②訂婚の祝いをする。訂婚日に結婚披露宴をおこなう日をラマに決定させる。③男家、女家は結婚披露宴をおこなうための準備をする。たとえば、モンゴルゲルを立てたりする。④女家の結婚披露宴を行い、男家が花嫁を迎えに行く、女家の結婚披露宴に、花婿花嫁二人で酒を客に勧め、モンゴルゲルの中に、民族歌、楽器の音があふれる。⑤送親する。いわゆる女家が花嫁花婿を男家に送る。⑥男家の結婚披露宴といった点が類似している。ここから、婚姻習俗の流れとしては、ほぼ変わらない同じだが、以下のように、違う点が指摘できる。

・相違点

相違点としては、婚姻習俗の流れの中での各要素のところ、相違点が多いが、筆者は細かい点を見逃し、儀式に関する相違点まとめていきたい。①『中国少数民族の婚姻と家族上巻』「4 モンゴル（蒙古）族—内蒙古自治区」（第一書房）（以降婚姻習俗の本と書く）婚姻習俗では、女家の戸口が閉まる儀式があり、「男家が女家につくと、パオの戸口はぴたりと閉ざされ、花嫁側の添い嫁と親戚友人がこの結婚を拒むように、戸口の前に半円形に立ちたがっている。このとき、花嫁迎いの列から高德で、弁の立つ婚礼の「祝い人」が進み出て、女家に向かって丁重に民謡の問いかけする」という儀式がある。しかし、錫林郭勒盟東烏株穆沁旗薩麥蘇木霍爾其格嘎查に行われた婚姻習俗（以降シリングル盟の事例と書く）の事例には、前述したような女家の戸口が閉まるという儀式がなく、「花婿が到着すると花嫁の母が花婿の顔に口づけし、チーズをあげる。それと同時に、みんな酒をのみながら民族歌を歌う。」②婚姻習俗の本では、花嫁を送る団体は、花婿側の家に近づ

くと、男家は草原の上に女方を接待するための酒席を設ける。しかし、シリングル盟の事例では、前述したような儀式はなく、直接女家に行くのである。③婚姻習俗の本では、花嫁に髪を分ける儀式がないが、シリングル盟の事例には、花嫁に髪を分ける儀式を行い「花嫁は自分の母から離れて未知の所に知り合いがないので、男家から髪を分ける母を紹介してあげる。それを花嫁は「分頭母」と呼ぶ。モンゴル民族の女性は結婚する前に髪を一つに組む、結婚したら髪を分けるという習慣がある。この儀式が終わったら、「分頭母」からプレゼントがもらえる」。

以上のように、内モンゴルのモンゴル族の婚姻習俗と実際の牧畜地域の婚姻習俗と比較してみたところ、婚姻習俗としての流れが類似しているが、婚姻習俗の本に記している儀礼が実際の牧畜地域にすべてその通りで行われているわけではないがわかる。たとえば、女家の戸口が閉まる儀式、男家は草原の上で女方を接待するために行う酒席の儀式などはシリングル盟の事例になかったのである。そして、シリングル盟の事例では、花嫁に髪を分ける儀式はあるが、婚姻習俗の本には記していない。ここから分かるように、婚姻習俗の本で記している、いわゆるモンゴル族を代表している「伝統文化A」は、すべての牧畜地域の伝統文化とは言えない。すなわち「伝統文化A」＝牧畜地域の伝統文化とは言えない。では「伝統文化A」は何かとすると、筆者は3.2に述べたように『中国少数民族』といった民族紹介の本に、民族レベルで抽象化された説を指している。しかし他方で、民族レベルで抽象化された「伝統文化A」は、昔存在していた文化だと主張する方もいるかもしれない。それでは、1920年代と1940年代の牧畜地域の婚姻習俗の事例を取り上げて比較してみたい。

フリーランドの研究では1920年前後の西北蒙古ナロンバンチン寺領におけるカルカ蒙古社会について述べ、その地域社会集団、生活と技術、血縁組織と財産等について細かく論述している。また1920年代のモンゴル民族婚姻儀礼の制度や儀礼の流れを論じ、当時結婚の前提となる族外婚の規制を分析し、結婚相手同士が知り合う時から結婚までの過程を詳細に取り上げている。当時の婚姻習俗の流れを以下のように並べる。

- ①男性側は仲人を立て、女性側も仲人を立て、お互いに話合う。双方の意見が一致したら男性の側から女性の方に訪問する事を決める。
- ②男性の側から女性の方に七種の贈り物をする。それは、男性側から女性側にハダック、酒、チーズ、棒状の膠、柔らかく強靱な獣皮、鑪、新婦のテントの祭壇への供物を送る。
- ③男性の側から女性の方に結納品をあげる。主に家畜である。女性の側のそれと相当する送り物を準備する。
- ④結納品が済んだ数か月ないし一年間後婚礼の準備をする。新婦側には、花嫁宴会する。

出席する人

- ・両家族の尊敬する高年者
- ・新婦の母系の族人

規則

新婦・新郎は年長者に叩頭する。年長者が新人にハダックあげる。

⑤新婦を見送る。

- ・新婦の髪を分ける。
- ・帯を外す。
- ・新婦新郎の間酒牛乳を取り交して飲み干す。

⑥新夫婦の初夜

・テントの右側の床に寝る。左側に性関係の方面で経験がある bergen（兄の妻を指す）が寝る。

⑦新婦と両親の離別

- ・新婦のテントに 10 日から一か月暮らしたら新夫婦は新郎側にひきおっこす。
- ・新婦の母は同行しない。
- ・新郎の母系の親族が新郎側の宴会に出席する。
- ・新婦の父と親戚の方が出席する。

⑧新婦への訪問

- ・新婦の母が第一回訪問。
- ・新婦の父か兄弟が訪問。

以上のように、フリーランドは、1920 年代の牧畜地域の婚姻習俗を書いている。その流れは、上述したモンゴル族の婚姻習俗の本に記録している内容と類似している。しかし、その流れの中での諸要素を見ていくと、婚姻習俗の本では、花嫁に髪を分ける儀式がないが、1920 年代の事例では、髪を分ける儀式がある。そして、新婦の帯を外す行為もある。すなわち、本に記録していたものを、すべて昔は実施していたというわけではない。地域によって違う儀式が存在していたといえる。

西モンゴルの牧畜地域の人たちは我々こそ「伝統文化 A」を持って「本物のモンゴル」であるといっているし、東の農耕モンゴル人も、牧畜地域のモンゴル人は「伝統文化 A」を持ち、農耕地域は「漢化」したといっている。しかし、「伝統文化 A」は実際のところ、モンゴルイメージとして作った概念として言うしかない。内モンゴルは草原、ゲル、オボ、モンゴル相撲だけではなく、内モンゴルの各地域にそれぞれの環境にあった生活を送っているのである。すなわち、地域ごとにあった生活、習慣を保ってきている伝統文化は「伝統文化 B」である。しかし現在のほとんどの場合に、「伝統文化 A」が認められ、「伝統文化 B」が無視されている。「伝統文化 A」と「伝統文化 B」を混乱している現状がある。では「伝統文化 A」と「伝統文化 B」がどのような違いがあるのか。

3.5 農耕地域における「伝統文化 B」の形成

「伝統文化 A」と「伝統文化 B」についての区別を考察する前に、シンジルト氏の「民族の語りの文法—中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育」という著書における民族の語りを考察していきたい。

シンジルト氏は、青海省の河南蒙旗におけるモンゴル民族の語りを「権威的語り」（「国家型語り」「学者型語り」）と「自家製語り」とわけ、実体論的モンゴル地域研究を「国家型語り」と唯名論的民族論を「学者型語り」と呼び、総じて「権威的語り」と読んだ。それは学問や政治の世界における民族の語りが、民族をめぐる語りの体系の上層をなしてきた事実を認識することである。それと対置されるべき存在として民族的状況を生きる生活者の語りを「自家製語り」は少数民族の自家製の語りが重要であると指摘している。そしてモンゴル人の呼び方をチベット語で「ソッゴ」と呼び、モンゴル人の総称を「ソッゴM」、内モンゴルのモンゴル人を「ソッゴC」、チベット族と対象に河南蒙旗にすんでいるモンゴル人を「ソッゴH」と読んでいる。そして日常生活、牧地紛争、教育運動など様々な場合でのモンゴル民族の語りを考察している。そこで、河南蒙旗のモンゴル人は、ソッゴという自己認識を持ち、ソッゴMをモデル化したソッゴMからソッゴHの間で山型の形で、その山の一番すその部分に存在している。このようにシンジルト氏の結論としては、民族の虚構性に過度に傾斜する理論研究およびモンゴル学という地域研究におけるモンゴル（人、族）を本質的に表象してきた主流的な言説を批判し、現に民族的状況を生きる生活者の語りを強調した。そして主に河南蒙旗における現地のモンゴル人の民族の語りを中心に考察し、民族のカテゴリーは流動的で、時代の発展に伴って、柔軟な対応をとっていると解明している。

上述したようにシンジルト氏は、モンゴル民族を国家や学者の言い方を「権威的な語り」と実際の地域に生活している人たちの民族の語りを「自家製語り」と読んでいる。筆者は本論で本やテレビで宣伝しているモンゴル族の文化のことを「伝統文化 A」と呼び、実際の地域に住んでいる現地人の実践された習俗を「伝統文化 B」と読んでいる。筆者は本論この点において、シンジルト氏の民族における呼び名の分け方が現在のモンゴル族の文化の分け方に通用できると思う。しかし、河南モンゴル族の民族の自覚性は非常にはっきりしている。たとえば、河南の蒙旗の中でモンゴル族とチベット族ははっきり分けられ、背景や状況によって、民族の主張が人によって流動的になっている。一言で言えば、民族という言葉を、みんな自覚している。一方、東地域の農耕モンゴル人と西地域の牧畜モンゴル人のモンゴル文化について、インタビューしたところ、東地域のモンゴル人は牧畜地域の文化は「伝統文化 A」を保存し、東地域は漢化しているという認識である。すなわち、東地域のモンゴル人は自分のところの文化を自覚していないことである。牧畜地域のモンゴル人にインタビューした結果、牧畜地域の文化、「伝統文化 A」を混同している状況が分かる。シ

ンジルト氏の著書でも取り上げたように「ソッゴ H」が「ソッゴ M」をモデル化し、「ソッゴ C」を「ソッゴ M」として思い込んでいるのと同じように、内モンゴルの中で、「伝統文化 A」はモンゴル族の文化のモデルで、すべての文化を代表している。そして「伝統文化 A」を持ってどこのモンゴル人が「本物のモンゴル人」なのかを計る現象がはやっている。

上述したように内モンゴルでは、モンゴル人には単一の「伝統文化 A」が存在しているという考え方が多い。「伝統文化 A」に当てはまったら「本物のモンゴル人」あるいは「本物のモンゴル地域」といわれる。「伝統文化 A」はモンゴル族の「ピラミット」の上に存在し、牧畜地域を除く他の地域は、特に農耕地域は「逸脱」、「疎外」されたモンゴルとして見られている。とりわけ、内モンゴルの農耕地域のモンゴル人はこのような状況に陥っている。そしてこの地域の人たちも確か自分自身を漢化した者だと認識している。しかし、実際には「伝統文化 A」は本に記録している一部分の文化しかない。それを極端に強調することによって、「伝統文化 A」に当てはまらなかったら、「本物のモンゴル人」ではないと除外される。このようにいくと「伝統文化 A」に当てはまらない文化はだんだんなくなり、知られなくなり、民族の文化の多要素がなくなる危険性に陥っている。すなわち、各地域の文化、すなわち本に記録していない、現地人の実践された習俗「伝統文化 B」は、モンゴル族の文化として言われたい、さらに現地人も自覚していないといえる。では上述したような「伝統文化 B」がどのように生成したのか。

上述したように「伝統文化 B」は、本やテレビなどに宣伝していない、実際の現地人の日常生活に存在している。しかし、「伝統文化 A」をあまりにも強調した結果、「伝統文化 B」を認識しない、知らなくなっている。ゆえに、現地人の実践を記録し、後代に伝える価値がある。では、それはいつから形成したのかという非常に広い概念となっている。筆者は本論で、農耕地域の村落の形成から、農耕地域の「伝統文化 B」の形成として取り上げたい。

ランブントブ実態報告書によると、「当時すでに付近の部落には少数宛若干の農家が定着していた」という記録がある（興安局 1939 : 120）。それは、ランブントブ村落と同じように、当時、牧畜民のモンゴル人は移住し、盛んに定住形の農耕村落が形成していたと思われる。

ボルジギン・ブレンサイン氏は、当時の村落形成を、牧畜社会が崩壊し、地域社会が新たな形で再編成を余儀なくされる中、そして再編成の結果として生まれた（ボルジギン・ブレンサイン 2003 : 159）という。すなわち、1910 年代のときから、東部農耕地域はだんだん編成したのではないかと思われる。そして当時から本格的に、牧畜から定住生活のステップに踏み出したといえる。すでに第二節で触れたように、農耕地域のモンゴル人村落は、様々な背景を持つ人たちの集まりであり、一言で言えば、農地開墾による、外旗人の移住、賃貸労働関係の撈青群、漢人など移住により形成し、いわゆる経済圏の理由により形成といってもよい。ランブントブ実態調査報告書によると、ランブントブ村の戸数

は48戸、人口は290人、耕作面積は733晌、家畜は主に、牛、馬、驢、騾である（興安局1939：119）。人当たりの家畜を計算してみると、二頭に満たない。本章の3.2に提示した、『中国少数民族』によると、内モンゴルは広大な草原地域で、中華人民共和国の著名な、牧畜業の基地の一つである。牧畜業は、モンゴル人の昔からの生存のために依存していた経済的な収入源である。…<省略>…モンゴル人は子供のころから馬が好きで、馬の背に乗って成長してきたのである。そして、常に、馬を調教する、競馬、モンゴル相撲、弓などを競争することによって、優秀な牧民の基準を決める（国家民委民族問題五丛书編輯委員会1981：73）。しかし、ランブントブ村落の事例から、飼っている家畜はほぼ農業に使う家畜であり、肉食に使っている様子が見られない。筆者の知る限りでは、2000年代以前の農耕地域では、羊を飼っている農家は非常に稀であり、普段羊肉を食べられなかった。現在は経済発展にともないって、市場で買えることが出来るようになった。

上述したように、農耕地域の村落は定住してから、飼っている家畜は農業用に使うもので、肉食や畜産物を飲食していなかった様子が見られる。ここでは、定住後の変化をいちいち全部取り上げる必要がないが、主に指摘したいのは、農耕地域のモンゴル人の定住生活後に当該地域の状況に合わせて、柔軟な対応をもって、独特の文化「伝統文化B」が形成したといえる。

第四節 小括

筆者は第一章の第二節まで、内モンゴルの東部地域のモンゴル人村落が形成した過程を論じ、漢人が形成した村落とモンゴル人が形成した村落を比較し、モンゴル人が形成した村落の特徴を解明した。このようにして、内モンゴルの東地域のモンゴル人村落は、漢人が形成した村落と居住している空間的な面から見ても、移住関係、親戚関係、姻族関係、農業形態の経済関係から見ても相当違っていることが明らかになった。そして、第三節において、モンゴル族の「伝統文化A」を紹介した結果、草原、牧畜、モンゴルゲル、牛乳、馬、相撲といったものしか上げられていないといえる。では、内モンゴルのモンゴル人は、「伝統文化」をどのように思っているのかについて、筆者はインタビューした結果、牧畜地域のモンゴル人にしても、農耕地域のモンゴル人にしても、モンゴル人の「伝統文化」を「本を読む」、「ネットから調べる」「知らない」といった答えが多かった。とりわけ、農耕地域のモンゴル人は、「東地域のモンゴル人は漢化したので、牧畜地域の人たち知っている」一方、牧畜地域の人たちは「本を読まないと分からない」「モンゴル文化を知っている人から聞く」という。すなわち、農耕地域のモンゴル人は、「伝統文化」＝牧畜地域という考え方であり、牧畜地域の人たちは「本に記録している牧畜地域に関する文化」＝「伝統文化」という認識である。つまりどこの地域の人にしても「伝統文化A」を取り上げているといえる。

農耕地域のモンゴル人のいうように、「伝統文化」＝牧畜地域の文化なのかについて、

筆者は、牧畜地域の婚姻習俗の事例と、「伝統文化 A」に記載しているモンゴル族の婚姻習俗と比較した結果、相違点が多数存在していたことが明らかになった。つまり、「伝統文化」＝牧畜地域の文化ではない、各地域の「伝統文化 B」が存在しつつ、「伝統文化 A」はモンゴル族のイメージとして作られているといえる。その一方で農耕地域の「伝統文化 B」はどのように形成したのかというと、筆者は、村落形成してから、定住生活をし、農業を営み、時代、地域の状況に合わせて、柔軟な対応をとって、独特な文化を形成したのではないかと思う。

以下の章では、農耕地域の 1950 年代から 2000 年代までの婚姻習俗の事例を提示し、「伝統文化 B」の連続性と変化を考察していきたい。

第二章 通遼市における婚姻習俗の歴史的変遷（1950－2000 年）

本章では、通遼市ホルチン左翼中旗地域を中心に、1950 年代から 1990 年代まで、即ち 36 歳から 85 歳までの複数の方々に婚姻習俗の流れ及び各要素について聞き取り調査を実施する。

以下の節では、聞き取り調査した複数の方々中の 11 人のインフォーマントを 1950 年代の婚姻習俗、文革時代（1966－1977）の婚姻習俗、1980 年代の婚姻習俗、1990 年代の婚姻習俗に分けて、それぞれの事例を提示していきたい。そして各年代の婚姻習俗の具体的な事例から、その連続性と変化を考察する。農耕モンゴル人の婚姻習俗に関して本に記載している「伝統文化 A」と聞き取り調査した現地人の具体的な習俗の実践「伝統文化 B」を比較して、農耕モンゴル人の実態を解明する。

第一節 1950 年代から 2000 年代までの婚姻習俗の事例

1.1 1950 年代の婚姻習俗

事例 1

夫の楊左義（ヨウ ズウイ）は 24 歳で結婚し 66 歳で病気により死亡した。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木ホイトデルハンゲル（后徳勝）＝ガチャーの農牧民である。妻の邵秀英（タイ シュウエイ）は 22 歳で結婚し現在 78 歳（2016 年現在）である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木ホイトデルハンゲル（后徳勝）＝ガチャーの農牧民である。妻の話では「1958 年遼寧省のモンゴルジンからホイトデルハンゲルに移住した。そこに移住してから、夫側から私の家へすぐ仲人を行かせた。それで 1959 年 4 月に訂婚した。

婚資は150元もらった。1959年10月21日は結婚披露宴の日で、ウゾーチによって決めもらった。当時経済的に非常に貧乏であったので、アリヒアゴラがホ式を実施しなかった。

事例2

夫の王西林巴意拉（オウ シリンバイラ）は21歳で結婚し現在84歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャーの農牧民である。妻の林六月（リン ロクガツ）は17歳で結婚し現在80歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャーの農牧民である。

夫の話では「私たち二人とも同じ村にいて、当時私はとても貧乏であったため、村のお金持ちの家である地主に撈青²⁷として雇われていた。地主は私のことをとても気に入り、娘と私の婚姻を結ぼうと提案した。そして、地主から私の家に仲人を行かせた。婚約のことが決定してから、アリヒアゴラがホ式を実施した。当時女性側で実施していたので、妻の側に行った。1950年4月に結婚披露宴を実施し、結婚日をウゾーチによって決めもらった。妻に牛一頭を婚資としてあげた」。

事例3

夫の白敖博（ハク オボガ）は28歳で結婚し82歳で病気により死亡した。妻の白玉蘭（ハク ギョクラン）は18歳で結婚し現在76歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャーの農牧民である。

妻の話「私たちは仲人を通して知り合った。当時私はオルトマンハ＝ガチャーにいて、夫は同じ旗におかれているボハンジョにいた。親戚を通じて、夫と仲人が私の家に来た。しかし当時恋人同士の面会を戒めていた。私は窓から陰で見ただけだった。当時婚約が決定後、アリヒアゴラがホ式²⁸を実施した。当時女性側に実施していたので、私の側で実施した。結婚披露宴は、1951年12月28日は結婚披露宴の日で、ウゾーチ²⁹によって決めもらった。婚資は、現金はもらわなかった。洋服を作る布8枚ぐらいもらった」。

事例4

夫の韓朝格柱（カン チョウカクジュウ）は23歳で結婚し62歳で死亡した。妻の白龍堂（ハク リュウドウ）は21歳で結婚し現在79歳である。ヒンガン盟ホルチン右翼中旗

²⁷当時農牧業の地主か牧主に雇われていた労働者を指す。

²⁸男性側から女性側に婚資をあげる式で、ホルチン左翼中旗では漢語表現を使って「訂婚式」とも呼んでいる。1970年代までは女性側で実施していたが、その後男性側で実施するようになった。

²⁹ウゾーチは、仏教の背景を持ち、田舎地域で人気を集めている占い師である

シリガ蘇木ウランイリガ＝ガチャーガダンザラガアイルの農牧民である。妻の話では「私たち二人とも同じ村にいて、夫の方から私の家に仲人を行かせた。婚約が決定後、夫の方でアリヒアゴラがホ式を実施した。結婚披露宴は、1954年3月の日で、ウゾーチによって決めてもらった。婚資は、400元もらった」。

以上の四人のインフォーマントに、物価および年収、結婚披露宴での参加者の贈り物、婚姻習俗の流れについて聞いた結果を以下のように整理できる。

・1950年代の物価及び年収

酒 500g 7角、牛一頭 70元—80元、当時はあまり買い物をしていなかったなので、物価が分からないとう。事例1妻の邵、事例2夫の王、事例3妻の白氏は当時収入なく自給自足と答えた。しかし事例4妻の白氏は、年収1000元であった。白氏に家畜の数について聞いた結果「羊、ヤギ 60—70頭、牛 10頭位いたとっていた」。

・結婚披露宴に参加した客からもらう祝い品

四組の答えとも同じであった。遠くから来た客は、手ぬぐい、石鹸ケース、洗面器、小柄鏡等をあげ、同村人は何もあげないのが普通であった。

・1950年代の婚姻習俗の流れ

女性側は訂婚してから、男性側の親戚のために靴をつくり始める。作らないと男性側の親戚に悪口を言われる。そして結婚披露宴が近づくと、男性側から、結婚披露宴の日を伝える。牛車でいき、豚の半分肉か、4分の1肉と酒³⁰を乗せてシグスフルゲホ³¹していた。女性側に肉が届いたら、結婚披露宴の準備を始める。コック³²、主宰者を³³集め、また村から披露宴に使う道具などをも集める。男性の側では掛け布団や敷き布団をつくり始める。2枚ずつか4枚ずつぐらい用意する。そして披露宴の準備をし始める。女性側の結婚披露宴の前日に、新郎と添い婿³⁴が新婦側に到着する。そして女性側の披露宴の夜になると、村のみんなが来て、新郎添い婿に歌を歌わせる。そしていろんな冗談したりする。また村のホ

³⁰ 酒の量は不明、村の近所で酒を造っていたので簡単に買えると事例3妻が言っていた

³¹ 女性側の結婚披露宴に使う豚肉、酒を送る、それを送る際に必ず赤い色の細長い布で巻いて送る。

³² 村の料理が上手な人が担当するのが一般的である。

³³ 主宰者は村の様々な行事を主催した経験があり、主宰する能力がある人であればよい。その役割は、披露宴に来られるお客さんの人数を確認し、使う料理を計画し、使う茶碗の準備もする。そして結婚当日に、来た客席順を決める。

³⁴ モンゴル族の結婚披露宴では、新郎につく結婚していない若い男性で、歌、言葉が上手な人が担当するのが一般的である。

ゴールチン³⁵（四胡を弾く人）が来てホゴールを弾いていた。次の朝になると、新郎に新しい服を着せるのだ、その際、二人のベルゲン（兄の奥さん）が着せる。この際、新郎の靴を奪ったりする冗談をする。また新郎の帯を赤い布で巻き、その上に、ハダク（白い布）2枚、タバコの袋（当時他人から借りていた）などをかける。こうして、新郎の着替えは終わる。それから新婦側の結婚披露宴が始まる。次の朝に新郎側の結婚披露宴が始まるので、新婦側が新郎、新婦を送るのである。当時新郎、新婦が同じ村人であれば、歩いて送っていた。もし村が離れているのであれば、牛車で送っていた。

1.2 文革時代（1966年代から1976年代まで）の婚姻習俗

事例 5

夫包干珠日（ホウ ガンジュル）は20歳で結婚し現在65歳である。通遼市ホルチン区オルボク鎮ツルバングル（高林屯）の鉄路局の職員、現在退職している。妻の韓七斤（カン チジン）は20歳で結婚し現在65歳である。通遼市ホルチン区オルボク鎮ツルバングル（高林屯）、家庭主婦である。知り合ったときから結婚式までのことは、夫の話では「私は17歳の時蘇木の通信員の仕事し、19歳にツルバングルの鉄路局に就職した。私たちは同じ村に住んでいて、家は近かった。子供のころいつも一緒に遊んでいたもので、私のことを義理の母が気に入りに、17歳の時、仲人を私の家に行かせた。仲人は妻の親戚の姉であった。そして私が19歳の1967年5月に訂婚し、12月に結婚を決めた。結婚を決定後、アリヒアゴラがホ式は行われなかった。当時経済的に貧しかったので、そして文化革命時代に賑やかにしたらいけなかったからだ。そして訂婚する際に、彼女に現金500元、洋服をつくる布を8枚あげた。結婚披露宴は、1967年12月20日で、ウゾーチの所に行ってみてもらった。当時文革時代だったので、ウゾーチのことは迷信と言われ、禁止されていたが、陰で見てもらった」という。

事例 6

夫の董烏日図（トウ オルト）は21歳で結婚し現在61歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャー（地図参照）の農牧民である。妻の王阿拉坦其其格（オウ アラタンチチゲ）は23歳で結婚し現在63歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャーの農牧民である。知り合ったときから結婚式までのことは、妻の話では「私たちも同じ村に住んでいて、家は近隣であった。当時私は村の教師であり、彼は生産隊で働いていた。だから私

³⁵東モンゴル農耕地域のモンゴル人は、四胡を引くことをモンゴル語でホゴールタタホという。

は彼の事を気にしていたわけではなかった。しかし彼と彼の家族はみんな私の事を気にいり、私の家に3人の仲人を行かせた。当時私と母は、反対していたが、父と叔父は、彼がすごい働き者と断定し、気にいり、私たちの婚姻を認めた。当時自分の好きな人と結婚できるのは、稀であり、両親の意図で結婚することが多かった。結婚を決定後、アリヒアゴラがホ式を行った。当時私の経済状況は比較的によかったので行なった。しかし当時文化革命時代だったので、そんなに賑やかにしなかった。親戚、友人、隣人たちが集まっただけです。結婚の際、800元と要求したが(当時一番高かったのでみんなびっくりしていた)、結局200元くれた。洋服作る布を3枚くれた」という。筆者の質問「当時アリヒアゴラがホ式は女性側に行っていたのか」。妻の話「女性側に行っていた。そして男性側から式に使う豚肉や酒をもらえた。結婚披露宴は1973年12月10日で、分革命時代に華やかに行われなかった」という。

事例7

夫の韓那木斯来(カン ナムシライ)は22歳で結婚し現在59歳である。現在通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトマンハ=ガチャーの農牧民である。妻の包双玉(ホウソウギョク)は22歳で結婚し32歳で心臓病により死亡した。知り合ったときから結婚式までのことは、夫の話では「私たちは同じ村に住んでいて、当時生産隊で一緒に働いていた。そして、私は共産党員で隊長であり、妻は共青団員で副隊長であった。当時お互いに好きになり、20歳で結婚した。結婚する際に、私たちの側から村の知り合いに頼んで、仲人を行かせた。当時妻は両親がいないので、反対する人がいなかった」という。事例5夫の包氏と同様にアリヒアゴラがホ式は行われなかった。結婚を決定後、結婚する際に、彼女に現金700元と洋服作る布を7枚あげたという。

以上の三人のインフォーマントに、物価および年収、結婚披露宴での参加者の贈り物、婚姻習俗の流れについて聞いた結果は以下のように整理できる。

・文革時代の物価及び年収

当時の物価についての答えをまとめると、卵一個6分、豚肉一斤、3角から5角位、飴一個1分、汽車三駅までのチケット6角であった。事例5夫の話では「私は鉄路局職員だったので、月50元の給料をもらっていた」。事例6妻の話「私は村の教員であったが、給料としての現金をもらっていなかった。でも4元の補助金をもらっていた。一日あたり点数で換算していて、女性は8点、男性は10点であり、秋になると全部を統計してお金で計算してもらっていた。しかし日常の食べ物を生産隊からもらっていたので、秋の収入を計算しても、2元から10元しか残らない。正月の行事を2元で済ませていた。8点や10点はいくらになるかは、全村の収入により計算していた。もし収入がよい年であれば、8点は8角、10点は1元になる。逆だったら、もっと安くなる。収入がない場合、結婚披露宴にかかる料

金は、飼っている豚を、売ったり、他人から借金したりしていた。当時 1000 元位で結婚できていた」。事例 7 夫の韓氏の答えは事例 6 妻の王氏の答えとほぼ同じでした。

- ・結婚披露宴に参加した客からもらえる祝い品

事例 5、6、7 の答えは同じであった。当時お金をあげる人がほとんどいなかった。物をあげていた。それは、石鱈ケース、手ぬぐい、鏡（当時高級な品になる）などであった。

- ・文革新時代の婚姻習俗の基本的な流れ

女性側は訂婚してから、男性側の親戚に靴をつくり始める。10 足から 20 足ぐらい作る。作らないと男性側の親戚に悪口言われる。そして結婚披露宴の日が近づくと、男性側から、結婚披露宴の日を伝えにくる。馬車に四人で行き、馬車に豚の半分肉か、4 分の 1 肉と酒 30 斤（15 k g）か 50 斤乗せてシグスフルゲホしていた。女性側にそれが到着すると、結婚披露宴を準備し始める。コック、主宰者を集め、また村から披露宴に使う道具などをも集める。男性の側では掛け布団、敷き布団をつくり始める。2 枚ずつか 4 枚ずつぐらい用意する。そして披露宴の準備をし始める。女性側の結婚披露宴の前日に、新郎と添い婿が新婦側に到着する。当日の夜になると、村のみんなが来て、新郎と添い婿に歌を歌わせる。そしていろいろな冗談をしたりする。豚足の骨でかけまけの遊びをして、負けた方は歌を歌ったりしていた。筆者の質問「当時全部民族歌だったの」事例 6 の妻「全部民族歌だったのよ。また村のホゴールチンが来てホゴール（胡）を引いていた」。そして夜 10-11 時頃になると、新郎、新婦の餃子食べる時間になり、四人座って餃子を食べる。餃子を食べているうちにも、新郎、添い婿のいたずらをする。たとえば、ズボンと式布団を針でくっ付けたり、靴を奪ったりしていた。次の朝になると、新郎に新しい服を着せるのだ。その際、二人のベルゲンが床に式布団を敷き、上にアワで 卍 という形を描き、新郎を上座に座らせ、着がえさせてあげる。この際、若い人たちが来て靴を奪ったりして冗談する。また新郎の帯を赤い布で巻き、その上に、ハダク（白い布）2 枚、タバコの袋などをかける。こうして、新郎の着替えは終わる。それから新婦側の結婚披露宴が始まる。次の朝に新郎側の結婚披露宴が始まるので、新婦側が新郎、新婦を送るのである。当時文革新時代だったので、新郎と新婦だけ馬車にのり、他のみんなは歩いて、新郎側に行った。こうして新郎側に到着すると、庭の真ん中の高い位置に赤い布に毛沢東の像をかけてある。すると、毛沢東にお辞儀し、両親にもお辞儀し、村の村長、隊長たちにもお辞儀して家に入り、結婚披露宴が始まるのだ。主宰者は、この時席順を決め、村長、隊長、会計人、民兵連長などの人物は最初の席に座る。それから、世帯ごとに席に座る。結婚披露宴後の夜になると間洞房（新郎、新婦のいたずら）をする。当時遊ぶ物が少なかったので、新婦新郎の家に鳥を放したり、火の灰を入れたりしていたずらをしていた。

1.3 1980年代の婚姻習俗

事例8

夫の白六鎖（ハク ロクサ）は23歳で結婚し現在55歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャーの農牧民である。妻の呉哈申其木格（ゴ ハソンチムゲ）は24歳で結婚し現在56歳である、通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャーの農牧民である。知り合ってから結婚までについての夫の話は「私たちは一つの村にいて、生産隊で一緒に働いていた。私のほうから妻のほうに仲人を行かせた。その後アリヒアゴラがホ式を実施し、400元の現金と洋服2枚あげた。当時普通は200元であったが、妻の両親が400元要求し、当時とても高かった。結婚披露宴は1981年12月12日に実施し、その日を占い師によって決めてもらった」であった。

事例9

夫の韓拉拉（カン ラーラ）は23歳で結婚し現在50歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトマンハ＝ガチャー（地図参照）の農牧民である。新婦の包雲良（ホウ ウンリョウ）は22歳で結婚し現在49歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトマンハ＝ガチャーの農牧民である。知り合ってから結婚まで過程に関して妻の話は「義理の父（韓姓）と私の父（包姓）はイトコだったので仲良く交際していた。私が19歳の時に、義理の父は私たちの結婚を申し立てた。すると父は、私たちの婚姻を認めた。19歳はまだ小さいと言い、訂婚を許したが、23歳に結婚させようということで合意した。当時普通は仲人を通じて知り合うが、もともと親戚なので、親同士が結婚のことについて相談して、仲人を使わなかった。アリヒアゴラがホ式を実施したが、親戚なので経済的な面を考慮して簡単に済ませた。当時二人の訂婚は、二人は通遼市の近くの大林鎮に行き、写真（横5cm縦3cm位の黑白写真）を一枚撮り、洋服一枚買ってきて訂婚になった。当時訂婚写真を撮ったら、結婚が決定した事を示す。結婚披露宴は、1986年12月14日は、占い師に見せてもらった日である」であった。妻の話「結婚披露宴の半年前に400元の現金と洋服2枚買ってくれた。当時親戚だったのでお金は400元だった。普通は800—1000元だった」という。

以上の二人のインフォーマントに、物価および年収、結婚披露宴での参加者の贈り物、婚姻習俗の流れについて聞いた結果を以下のように整理できる。

- ・当時の物価及び年収

事例8夫の話「当時私は工場で働いていたので月36元の給料もらっていた」とい。

事例 9 妻の話「年収は 4000 元—5000 元、物価としては、牛一頭 80—100 元、卵一個 7 分—8 分現在一個 1 元位、トウモロコシ一斤（500g） 2 角等である」という。

・結婚披露宴に参加した客からもらえる祝い品

当時現金だったら 5—10 元くれていた。しかし現金が少なかった。物をくれていたのが多かった。たとえば、洗面器、鏡、魔法瓶、石鹸ケース、タオル等だった。

・当時の婚姻習俗の基本的な流れ

男性側女性側は結婚の相談を終了後、女性側の訂婚者から男性側の親戚に手作りの靴をつくり始まる。普通は、10 足から 20 足用意する。そして結婚日が決定したら、結婚披露宴三日前に、男性側から女性側に結婚日を伝えに行く。なおその日にシグスフルゲホをする。筆者の質問「結婚日を三日前に伝えても間に合うの。そして誰が何で行ったの」。事例 9 妻の話「当時十二月に結婚ということだけを知っていて、日付を知らなかったの、三日前でも大丈夫だよ。当時、夫、付添い婿、夫の一番目の兄、二番目の兄が馬車で行った。そしてシグスをフルケホして食事を済ませてから、夫の兄たちが帰り、夫と添い婿が残った」という。

男性側から女性側の結婚披露宴に使うシグスが到着後、客を招待し、コックと主宰者を探す。コックは村で料理が上手な人で、主宰者は村でおしゃべりが上手な人である。そして披露宴に使う茶碗、コップ、椅子、机等を村から借り、結婚披露宴の準備をし始める。男性側では結婚が決定後、結婚式の一週間前から、村の仲の好い婦人たちを集め、4 枚の式布団や掛け布団をつくり始める。そして、男性側の男性たちは都会に行き家具、鏡、洗面器、ミシン等を購入する。そして、結婚披露宴の三日前からコックと主宰者を探し、披露宴に使う茶碗、コップ、椅子、机等を村から借りて準備する。結婚披露宴の前日の夕方から、村の若い人たちが集まり、新郎、添い婿に歌を歌わせてもらったり、冗談したりする。そして夜になると 4 人（新婦、新婦の妹、新郎、添い婿）がオンドルに座り餃子を食べる。次の朝結婚披露宴の開始前に、フルゲンホビチラホ（新郎に洋服を着せる）をする。その時必ず二人のベルゲンがしてくれる。着がえている途中に、村の若い人たちが来ていろいろな邪魔をしたりする。たとえば新郎の靴を奪ったりする。フルゲンホビチラホ後結婚披露宴が始まる。また事例 9 妻によれば、新郎が新婦を迎えにくることと、フルゲンホビチラホすることはモンゴル民族独特の習慣であると言う。翌朝になると、新婦を新郎側に送るのである。事例 9 妻の話「当時トラクターもなかったし、私を送ると決めた人数は 40 人近くいたので、馬車で運べなかった。そこで父はトラックを借りて送った。男性側の家についたら、男性側の結婚披露宴が始まる。当日の夜になると、闇洞房が始まる。しかし私たちにはしなかった」。結婚披露宴三日後に、親戚の人たちが贈り物を持ってくる。すると義理の両親は料理作って招待する。また次の日も披露宴でいろんな役割分担をこなしてくれ

た人たちも招待する。

1.4 1990年代の婚姻習俗

事例 10

夫の王烏力吉（オウ ウルジ）は 23 歳で結婚し現在 42 歳である。通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャーの農牧民である。妻の張春梅（チョウ シュンメイ）は 26 歳で結婚し現在 45 歳である。結婚する前は、通遼市ホルチン左翼中旗ホダンゾ蘇木（会田召）のアバガアイルにいた。現在同旗のバイシント蘇木オリトデルハンゲル（前徳勝）＝ガチャーの農牧民である。知り合ってから結婚までの過程について夫の話「私たちは仲人によって知り合った。アバガアイルに私の親戚がいたので、紹介してくれた。結婚を決めた後、アリヒアゴラがホ式は、実施せずに、知り合ってから半年たたないうちに結婚した。婚資としては、現金 4000 元あげ、四種類の衣類、自転車買ってあげた結婚披露宴は、母は占い師だったので、1995 年 12 月 18 日をよい日として選定した。結婚披露宴も華やかに実施しなかった、当時経済的に貧しかったので、通遼市に三日間旅行に行き、戻ってきて、親戚たちと小規模な宴会を実施し結婚披露宴を済ませた」であった。

事例 11

夫の華銀龍（カ インロウ）は 23 歳で結婚し現在 37 歳である。通遼市のスーパーで働いている。新婦の韓紅霞（カンコウカ）は 23 歳で結婚し現在 37 歳である。通遼市で個人の床屋を経営している。二人はもともと通遼市ホルチン左翼中旗バイシント蘇木オルトマンハ＝ガチャーにいたが、2010 年から通遼市に出稼ぎに行った。知り合ってから結婚までの過程について妻の話は「小学生、中学生時代の友達であり、二人とも高等学校に行かずに、田舎で親の農業を手伝っていた。23 歳の結婚する年齢になると、華銀龍は以前から私のことずっと好きだったので、親に頼んで仲人を私の家に行かせた。結婚を決定後 1999 年 7 月にアリヒアゴラがホ式を実施した。ベレゲは現金 8000 元、四種類の衣類、金のアクセサリ、指輪等をもらった。結婚披露宴は 2000 年の 12 月 20 日に実施した。それは占い師にめでたい日を決めてもらった」であった。

以上の二人のインフォーマントに、当時の物価および年収、結婚披露宴での参加者の贈り物、婚姻習俗の流れについて聞いた結果を以下のように整理できる。

- ・当時の物価及び年収

トウモロコシ 500 g は 3 角から 5 角、卵一個 2 角、事例 10 一家族の収入は、8000 元位。事例 11 の一家族の一年の収入は、1 万 5000 元位であった。

- ・結婚披露宴に参加されたお客様からもらった祝い品

現金と物であった。親戚の人は 50 元で、一般人は 20 元位でした。当時物を送るのが少なくなった。事例 11 の妻の話「叔母から炊飯器をもらった」。

- ・当時の婚姻習俗の基本的な流れ

結婚が決定後、女性側の婚約者は男性側の親戚の農業する際に履く手作り靴を 10 足から 20 足位準備する。結婚披露宴の日が近づくと、女性側の結婚披露宴を準備し始める。たとえば添い嫁、コック、主宰者を探す。結婚披露宴二日前に、コックと主宰者、親戚の男性は披露宴に出す料理を計画する。そして結婚披露宴前日になると、親戚の女性と友人が野菜を洗ったりする。また親戚の若い男性は、村の親戚や友人の家に行き、披露宴に使う茶碗（いろんな種類の茶碗）を集める（披露宴後返す）。男性側では、新夫婦に新しい敷き布団や掛け布団を 2 枚ずつ準備する。それを準備する際、義理の母の親戚、仲の良い友人が手伝いに行く。また添い婿、コック、主宰者を探す。そして結婚披露宴の準備は女性側と同じである。添い嫁は、新婦と同じ年齢か年下で結婚していない女性であれば、誰でも担当できる。一般的には、新婦の友人あるいは妹が担当し、結婚式当日に新婦の世話をする。添い婿も添い嫁と同じ種類の人を選ぶ。役割は新婦側の披露宴に新郎と一緒にいき、新郎が新婦側の親戚にタバコを勧めると、火をつけてあげたりするなどの細かい手伝いをしてあげる。そして花嫁と浴い婿は、新婦側の披露宴の夜になると、歌を歌ったり、踊ったりして、若い人たちに冗談をされる。当時村に何人かの有名なホゴールチン（四胡を弾く人）がいたので、十人位の人が集まってホゴールを弾きながら民族歌を歌い、女性たちは踊っていた。事例 11 妻の話「当時とても賑やかであった。次の日になると、新婦を新郎側に送る、当時トラクターで送った。四輪車に新郎、添い婿が新婦を囲んで座り、親戚、友人全員二十人位で送った」。

前述したように、筆者は、内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼中旗を中心に、1950 年代から 2000 年代までの婚姻習俗の流れやその各要素に関して、聞き取り調査を実施した。以下では、婚姻習俗の連続性と変化を考察していきたい。

第二節 婚姻習俗の連続性や変化

- ・1950 年代から 1990 年代までの婚姻習俗の連続性

① 婚姻習俗の基本的な流れは変化していない。

事例 1 から事例 11 までの各年代の婚姻習俗の流れに変化が見られない。例えば、結婚が決定してから女性側が手作りの靴を用意し、そして結婚披露宴の日取りが決定した後、シグスが到着してから女性側の結婚披露宴の準備をするという一連の流れはどの年代でもほとんど同じである。男性側でも掛け布団や敷き布団をつくり、結婚披露宴の準備をする。そして女性側の結婚披露宴の前日に、新郎と添い婿が女性側に到着すると、次の日に結婚披露宴が始まるが、始まる前に、フルゲンホビチラホをする。当日の夜は、歌を歌ったり、踊ったり、ホゴールを弾いたりして賑やかに過ごし、翌朝、新婦を新郎側に送るという流れも同じである。

上述のように 1950 年代から 1990 年代までの婚姻習俗の流れに変化がないことが明らかである。勿論、各年代の婚姻習俗の流れの要素においては変化がみられているが、それについては後述する。

② 結婚披露宴の日取りをウゾーチにより、決定してもらっている点にも変化がない。

事例 1 から事例 11 までのそれぞれインフォーマントの聞き取り調査の中で、結婚披露宴の日取りの決定方法はいずれもウゾーチに決めてもらっている。文革時代には迷信や民族行事等をすべて禁止されていた。事例 5、6、7 は文革時代の時の婚姻習俗で、当時ウゾーチの存在そのものが禁止されていた。しかし当時はみんな陰に隠れてウゾーチに結婚披露宴のめでたい日を占ってもらっていた。結婚披露宴は、何よりも重要であるので、必ず吉日を選んでいく。1950 年代の結婚披露宴の日取りは、春の時期 3 月と 4 月、そして秋冬の時期の 10 月と 12 月になっているが、1950 年代以降の結婚披露宴の日取りは、ほぼ 12 月になっている。その原因を事例 9 の妻に尋ねると、農業を全部済ませるのは 10 月中旬ごろで、農作物を売り収入が入るのが 11 月ごろになる。そこで農民たちは 12 月ごろに余裕が出て、結婚披露宴を実施するのである。しかも婚姻披露宴を行う月日は必ず愚数であり、月の始まりに行うのが一般的である。だから奇数の月か、月末に儀礼を実施する人はほとんどいない。その上、日付も 2、4、6、8 などの偶数の日に行うが多い。以上のことからみると、ウゾーチにめでたい日取りを決めてもらうが、それが農業作業の時期を避けていること明らかで、半農半牧地域では、農業を中心としていることが窺える。

③ 各年代の男性側から女性側にあげる婚資の割合が変化していない。

以下では、1950 年代から 1990 年代までの婚姻習俗に男性側から女性側にあげた婚資、物価、年収を表で作成し、各年代の婚姻習俗に使う料金の割合を推測していきたい。

表 6. 1950 年代から 1990 年代までの婚姻習俗に男性側から女性側にあげた婚資、物価、年収

	事例	婚資	物価	年収
1950 年代	事例 1	150 元	酒一斤 (500 g) 7 角、牛一頭 70 元—80 元	・収入なく自給自足 ・事例 4 の年収は 1000 元
	事例 2	牛一頭		
	事例 3	8 枚の洋服作る布		
	事例 4	400 元		
文 革 時 代 (1966 — 1977)	事例 5	500 元	卵一個 6 分、豚肉一斤は (500 g) 3 角から 5 角位	・事例 5 の月給 50 元。 ・事例 6、7 は生産隊に働き年収は、2 元—10 元。
	事例 6	200 元と 3 枚の洋服作る布		
	事例 7	700 元		
1980 年代	事例 8	400 元の現金と洋服 2 枚、当時普通は 200 元	牛一頭 80 元—100 元、卵一個 7 分—8 分	・事例 8 の月給は、36 元。 ・事例 9 の年収は 4000 元—5000 元
	事例 9	400 元の現金と洋服 2 枚、当時普通は 800—1000 元		
1990 年代	事例 10	現金 4000 元、四種類の衣類、自転車	トウモロコシ 一斤 (500g) は 3 角から 5 角、卵一個 2 角	・事例 10 の年収は、8000 元位。 ・事例 11 の年収は、1 万 5000 元
	事例 11	現金 8000 元、四種類の衣類、金のアクセサリ、指輪		

上述した表から分かるように、男性側から女性側にあげる婚資のみが、当時の年収を上回っていることが明らかである。そして結婚披露宴を実施するまでの過程では、年収の何倍も多い相当なお金をかけて、結婚していたことが分かる。筆者は、それぞれのインフォーマントから当時収入がなし、あるいはごく少ない状況のもとで、どのようにして結婚していたかという疑問をいただき、質問した結果、当時家畜、畑から儲けたお金を貯金して、結婚の際に使用していたのである。また、娘がいる人たちは、娘を結婚させる時、もらったその婚資を残し、息子の結婚の際に使用していた。

上述のことから、婚姻習俗が昔から現代まで、社会的に重要な位置を占め続けてきたことがわかる。また娘の結婚の際にもらった婚資を、娘にあげないで息子の結婚にまわしていたことから、男女差別の存在がみてとれる。

④ 婚姻習俗において村全体の互助的な関係が変化していない。

各年代の婚姻習俗の流れでは、男性側および女性側で結婚披露宴を実施する際、村の親戚や友人たちから披露宴に使う道具などを集め、また彼らも自主的に手伝いに来てくれた。当時は婚姻披露宴を実施するのが村全体の行事となっており、村自体が密接な互助関係の存在するコミュニティとなっていたことが分かる。

以上のように婚姻習俗の連続性を 4 つの側面で考察した結果、結婚披露宴が何れの年代においても相当なお金をかけて実施されており、社会的に重要な位置を占めている事が明らかである。そしてそれが、村全体に互助関係がみられるコミュニティとなっていたことも分かる。

・ 1950 年代から 1990 年代までの婚姻習俗の変化

① 新婦を新郎側に送る際の交通手段の変化。

筆者の聞き取り調査では、新婦を新郎側に送る際、1950 年代には、牛車であり、文革時代には、馬車になり、1980 年代に馬車あるいはトラック（自分持ちのではなく、公社から借りたのである）になり、1990 年代にはトラクターになった。このように、各年代の交通手段の変化から農作業がだんだん機械化してきたこともわかる。郝亜明・包智明の研究では、中国政府の 1980 年代に土地改革で生産隊の土地を農民たちに平均分配し、農民たちの働く積極性を高め、収入を大幅に増大させた（郝・包 2010）。こうして、農民たちは自分の土地を持つようになり、年々の豊作により、牛馬による農耕よりもトラクターによる農耕の重要性が高まったのではないかと思われる。

② アリヒアゴラがホ式³⁶を実施する場所の変化。

1950 年代および文革時代は全て女性側で、アリヒアゴラがホ式を実施し、親戚や友人などを招待してご馳走するのみだった。当時結婚相手同士の訂婚をし、お金をかけたり賑やかにすることはなかった。しかし 1980 年代後半以降から男性側でアリヒアゴラがホ式を実施するようになり、村人を全て招待し、賑やかに行うようになった。男性側にアリヒアゴラがホ式を賑やかに行うようになったのは、既述した 1980 年代の土地改革政策との関係が大きく、農民たちの生活水準が高くなったことが窺える。そしてアリヒアゴラがホ式の場所の変化は、1980 年代以降女性の地位が上がったことがその要因ではないかと思う。その原因を次の④の結婚相手を決める際、親の関わり方の変化の所で、細かく論述する。

³⁶現在の訂婚式をさす。

③ 結婚披露宴に客からもらう祝い品の物から現金への変化。

祝いの品に関して、1980年代までは結婚披露宴に来る客は、みんな日常生活に使う物をあげ、1980年代には、現金と物をあげ、1990年代にはほぼ現金をあげるようになってきている。上に示した表からも分かるように、1980年代以降、農民たちの間で現金の収入が増えている。ゆえに、村内の重要な行事に現金を回すようになったのではないだろうか。

④ 結婚相手を決める際、親の関わり方の変化。

1980年代半ば以前は、事例で提示しているように親が結婚を決めていた。本人が結婚相手を気にいらなくても、親が気にいれば無理やりに結婚させていた。しかし1980年代の事例では、結婚相手を本人の意思で探す事もよくみられるようになった。親が結婚相手を気にいらず、反対する者もいたが、稀であった。事例6妻の王氏の話では、「私の家族は兄弟10人で、私は長女である。母は、二番目の娘までは全部自分が気に入った人と結婚させていた。しかし、妹は非常に家庭内暴力にあった。そして村の何人かの無理やりに結婚された人たちはすごい暴力にあった」という。このように、無理やりに結婚させ、莫大な礼金をもらって、息子の結婚や自分のために使っていた親は、自分の娘の結婚生活が幸福ではなく、夫に暴力を受ける等の悲惨なことが頻繁に起こるようになった。また1980年代後半になり、生活も比較的豊かになっていくにつれ、自分自身でも反省するようになった。また1980年代後半に、人々が経済的に豊かになっていくとともに、精神的にも開放されつつあった。それで、ホゴールタタホ（四胡を弾く）人が増え、それに内モンゴル東方地方の民謡を合わせて歌う事が流行するようになってきた。その民謡は、昔の悲惨な婚姻のことをモンゴル東方地方の言葉で歌い、無理やりに結婚させたことの悪影響や悲惨な結果を皮肉って歌っていた。そして当時テレビが普及し、テレビから恋愛のことなどいろんな情報が得られるようになり、人々の思想が解放されてきたと思われる。以上のような理由により、1980年代後半から、親が娘や息子の結婚相手を決めなくなり、結婚する本人が自分の好きな人を選ぶようになっただろう。

以上のように婚姻習俗の変化を4つの側面で考察した結果、婚姻習俗の各要素の変化は、1980年代の土地政策により経済的に豊かになったことと大きく関係しているようである。それらの変化の中で、婚姻に対する親の関わり方の変化の原因は、経済的な変化だけでなく、人々の思想面での開放も重要な原因となっているのである。

上述したように、筆者は現在生きている人たちに、聞き取り調査を実施した結果を整理し、その連続性と変化を考察した。では「伝統文化A」において、農耕地域のモンゴル人の婚姻習俗をどのように記載しているのか。「伝統文化A」と「伝統文化B」を比較して、農耕地域のモンゴル人の自覚していない「伝統文化B」の実態を解明する。

第三節「伝統文化 A」における「農耕モンゴル人」婚姻習俗

『ホルチン風俗』（呼日樂巴特、烏仁其木格 2012、内モンゴル人民出版社）と『ホルチン民俗』（古日拉沙 2014 内モンゴル科学技術出版社）といった著書にホルチンモンゴルの婚姻習俗記録があった。その二つの本に記載している、婚姻習俗の流れや各要素の内容はほぼ類似している。しかしそれぞれの著者の執筆した意図を見ていくと、呼日樂巴特氏は、中華人民共和国成立前のモンゴル族の地方の習慣を整理する意図で、ホルチンモンゴル族の習俗を各方面から紹介している。呼日樂巴特氏はホルチンモンゴル族の各習慣を復興する意図ではなく、それを記録することによって、モンゴル族の今後の文化、歴史、宗教、経済、社会科学など各分野の研究に資料として提供する意図であると指摘している（呼日樂巴特氏 2012 : 1）。

古日拉沙氏は 19 世紀から現在まで書かれた先行研究を整理し、今までの先行研究は各地方のモンゴル族の習慣を十分に論じていないし、モンゴル族を統一的に書かかれている傾向があると指摘した。そして地方の実際の状況に基づいて各地域の習慣を記録する重要性を取り上げた。古日拉沙氏は現在のモンゴル族の実際の状況に視点を置き、各地域のモンゴル族の個別の習慣を記載し、当該地域の実況をそのまま書くべきと指摘している（古日拉沙 2014 : 8-11）。このように、古日拉沙氏は地方の習慣を現地の実際に基づいて、各地域の習慣を書くときに取り上げているが、呼日樂巴特氏の『ホルチン風俗』における婚姻習俗の内容とほぼ一致している。二人の著者の取り上げた婚姻習俗の内容が同じなのに、二人の著者の意図や記述年代が違う。呼日樂巴特氏は新中国成立前のホルチンモンゴルの習俗と時代をはっきり示している。しかし古日拉沙氏は現代までホルチン地域の状況や実際の地方のモンゴルの習慣を取り上げると指摘している。そうすると古日拉沙氏の主張から昔（19 世紀）から現在までのホルチンモンゴル族の婚姻習俗は変化していないと読み取れる。呼日樂巴特氏の主張から新中国成立以前の婚姻習俗の状況を読み取れる。しかし二人の著者の主張している婚姻習俗の内容は一致している。そして、さらに二人の著者の論点は、ホルチンモンゴル人は牧畜民族、草原生活を中心に取り上げている。古日拉沙氏は、ホルチンモンゴルの形成から変化まで取り上げ、20 世紀からホルチン地域は農耕化した（古日拉沙 2013 : 19）と指摘しているが、ホルチン婚姻習俗を紹介では、農耕地域の特徴が見られているのか、筆者は検討する価値があると思う。以下では、前述した『ホルチン風俗』の本からホルチンモンゴルすなわち東部モンゴルの婚姻習俗を整理していきたい。

① 求婚の過程

ウンデゲンスイを決める。親同士がまだ子供が生まれていないときに、もし子供生まれたら、性別が同じときに、子供同士を中のよい友人にする。もし異性別の子供を生まれたら姻族関係を結ぶという予言をしておく。そして子供が成長して結婚年齢になったら、二人を結婚させるのである。または、もし、男家がウンデゲンスイの相手がいない場合に、

男性側がラマに何歳、どのような、どの方向にいる女性といった結婚縁談を見せてもらう。

② 仲人を決める。

ホルチン人は、女性側に仲人を行かせるときに必ず、仲人は必ず年配の人で、夫（あるいは妻）が健在していること。そして子供は息子娘両方がいることまで要求する。男方は仲人を女方に行かせるときに、よい日を選ぶ。仲人は男方に行くときに、ハダックを持っていき、男方のよさをアピールする。

③ 訂婚の準備

・小規模のアリヒアゴラガホ式—女方は男女の願いを承諾した後、男方の婚約の男生と両親、ヘレムチ（抗弁のよい年配の人）仲人は女方に行く。女方の親戚たちがみんな集まって男方を接待する。招待する際にかかる費用をすべて男方が出す。この式に婚約の男性が女方の親戚に酒を勧める。男方のヘレムチから、女方に酒、お菓子、布などを差し上げると同時に、女方と男方のヘレムチ同士が、めでたい言葉を言い交わす。

・大規模のアリヒアゴラガホ式—これは訂婚式という意味。この式を決めるときに男方がラマに行ってめでたい日を見てもらう。そして女方で小規模のアリヒアゴラガホ式のように行う。しかし、小規模のアリヒアゴラガホ式より多くの人々が集まる。女方の村の人々や親戚がみんな集まる。そして参加する客はプレゼントをもって行く。式に使う費用は全部男方が出す。式に男方と女方ヘレムチと両側の親戚は座って、婚資や結婚披露宴の時期などを相談する。婚約の男性は、席順に年配の方から酒を勧める。それ終わったあと、女方のベルゲンたちは、婚約の男性にゴトル（手づくりの長靴）をはかせ、タバコの袋（タバコの芯のきずを入れる）を腰にかけてあげる。この間にお互いに冗談する。

④ 男方が女方に結婚披露宴の日を伝える。

男方はラマにめでたい日を見てもらってから、女方に伝える。結婚披露宴の日は、もし女方にめでたい日ではなかったら、女方から改めてラマにめでたい日を見てもらう。鼠年、鼠月、鼠日や猿月猿日に女方は娘を結婚させないのが一般的である。結婚披露宴の日は冬の時期が多い。旧暦の12月23日から30日がめでたい日で、ラマに見せなくても大丈夫。それ以外の日はラマに見てもらう。

⑤ シグソトシヤホ³⁷—結婚披露宴の日が決定したら、結婚披露宴の何日前に、男方から女方に結婚披露宴に使う酒、肉などを送る。

⑥ 結婚のための準備活動

女方：オヨダルオヨホ 嫁になる女性は、男方の親戚に、手作りの靴、服や結婚用のかけ

³⁷『ホルチン風俗』の本ではシグソトシヤホと記載しているが、筆者のインタビューでのインフォーマントは、シグソフルゲホといった。ゆえに、本論で、シグソフルゲホを使った。しかも、同じ行為だが、地域によってシグソトシヤホというのあれば、シグソフルゲホというのもある。

布団、敷き布団などを準備する。女方は男方からもらった婚資である家畜を売り、結婚する娘に今後の日常に使うもの買ってあげる。

男方が婚約の女性を借りる習慣—男方が結婚する日が来る前に、婚約の女性を借りる。婚約の女性が男方に行く前に、母からいろいろな戒めを行ってもらう。そして行く際に、完成していない手作りのものを全部持っていく。

男方：サガダグモラダホ—花嫁を迎えに行く準備する。新郎は、火の神様に、酒をささげ、三回お辞儀し、結婚披露宴の全般が安全に実施であることを願う。その後、弓を背負って、馬に乗り、新郎の親戚、ヘレムチ、歌手たちが一緒に女方に向かう。

⑦ 女方の結婚披露宴

・女方が男女のサガダグモラダホ人たちを待ち、彼らが女方に着く前に、馬に乗り、ハダックボリヤホ（布を略奪する）行為をやる。

・ウゲデダラホ³⁸—男方が女方に到着すると家に入れないようにする。そして男方のヘレムチと女方のヘレムチと婚姻習俗について言葉のやり取りを行う。

・新郎が女方に到着すると、新郎を火の神様にお辞儀させ、新婦の祖父祖母、両親、叔父叔母に会い、酒を勧める。

・ホンダガホラボホ—ホリム—男方のヘレムチと女方のヘレムチは席の西側東側に座り、銀碗に牛乳を注ぎ、新郎新婦に牛乳を飲ませる。

・席に羊肉を置く。新郎と女方の若い女性たちが羊の足の骨をお互いに略奪する。新郎がそれを先に奪ったら、結婚後男の子生まれるという言い方がある。しかし奪われたら、歌を歌う。また女方は新郎に羊の首を捻らせる。それによって、新郎のすばやさを見る。

・フレゲンホビチラホ儀式、新郎をモンゴル民族服に着替えさせて、帯をつけ、帯にナイフ、タマヒオゴタ（タバコのきみを入れていた袋）、タオルなどをつけてあげる。そしてゴトル（モンゴル靴）を履かせる。そして新婦の両親から新郎に、弓と馬を与える。それを与えられなくても、ヘレムチがいなければならぬ。モンゴル民族服に着替えさせている間に、新郎と若い人たちの間で冗談を言ったりする。

・新郎側が女方にチャガンイデゲ（チーズ類）、現金、馬、牛をあげる。

⑧ 男方の結婚披露宴

・新婦を送る準備—女方がかけ布団、式布団、洋服、靴などを布に巻いて車に乗せる。新婦の顔を赤い布で被せて、若い女性とベレゲたちが、一緒に男性側に向かう、向かう途中で、「送親の歌」を歌う。

³⁸『ホルチン風俗』の本では、ウゲデダラホと記載しているが、筆者の筆者のインタビューでのインフォマントは、ウゲデブゲレホといったので、筆者は、ウゲデブゲレホを使った。

・新婦を送る途中にも若い人たちは新郎に冗談をする。たとえば、新郎の背負っている弓を奪ったり、帽子を奪ったりする。

・オッタゴル ホリム（男方が送親側を向かう儀式）一男方が送親側に到着しようとしているときに、草原に式布団を敷き、その上にテーブルを置き、テーブルに酒、肉、ハゴライボダガ（モンゴル族の独特のご飯である粟の形をしている）、チャガンイデゲなどを置く、火をつけて、送親側を待つ。この儀式が終わったら、男方がみんなを家に連れて行く。男方についたら、ミルクティ、チャガンイデゲ、ハゴライボダガで出してあげる。

新婦が車に乗っているときに、新郎の母が迎えに行き、牛乳、バタを食べさせ、車から家まで、式布団を敷き、新婦は敷布との上に歩いているときラマは教を読む。

・ウゲダダラホ儀式—新婦は新郎側の家に入るとき、ドアを閉めて入れないようにする。このとき、男性側のヘレムチと女性側のヘレムチはお互いに言葉のやりとりをしてから、やっと新婦を新郎の家に入れる。

・新郎側が新婦に、当村落からムルグラッサンエジ・アボ（子供がいる、夫婦であること、新婦と縁が良い人を探し、新婦の両親とする）を選んであげる。ムルグラッサンエジ・アボは、新婦を火の神様にお辞儀させる。そしてお空にお辞儀させる。お空にお辞儀する際に、テーブルにチャンイデゲ、農物の種、線香をつけ、新郎新婦は四方に向かって、お辞儀する。それからムルグラッサンエジは、新婦の髪の毛を二つに分け、新郎の髪を同じ楢でかく。それから新婦の髪の毛をくくってあげ、いろいろな飾り物を髪につけてあげる。

それはおわってから、新婦は新郎側の年輩の方々にお辞儀し、自分の手作りの靴やタマヒオゴタをあげる。

⑨ ウヒントシヤホ

新郎の両親、新婦の両親、親戚たちが一緒に茶を飲みながら、新婦側の一人が代表して、新婦が今後の生活に慣れるようにいろいろと教えてあげ、新婦の状況を伝える。その後、新婦を送親した人たちが帰る。新婦の親戚の一人が残って、三日間滞在してもよい。結婚披露宴の三日後、新婦側の親戚が、新婦と会いにくる儀式もある。送親側が帰るときに、新郎側のヘレムチと新婦側のヘレムチがハダックをあげながら、言葉のやりとりをし、歌を歌ったりする。

⑩ 新郎新婦はうどんやおかゆを飲む。

⑪ 闇洞房—新郎新婦が寝る部屋に行く。このときに村の若い人達がいたずらをやり始める

⑫ ウヒンイリギホ—結婚披露宴後の三日目に、新婦側の両親や親戚が娘の状況を見に来る（古日拉沙 2014 : 228—238）。

⑬ 新郎新婦のトゴリラター—新郎新婦は結婚披露宴を実施七日後、新郎側新婦側の親戚にプレゼントを持っていく。そして、親戚から祝い金がもらう。

- ⑭ ウヒンジゲレホー結婚披露宴実施後、一ヶ月が過ぎたら、新婦の両親から新郎の両親に娘を借りる申し立てをする。そして、娘を最低 40 日間借りるのである。

第四節「伝統文化 A」の婚姻習俗と「伝統文化 B」との比較

筆者は既述したように本やテレビで宣伝しているモンゴル族の文化を「伝統文化 A」として取り扱う。「伝統文化 A」では、モンゴル人とは、モンゴルゲル、モンゴル馬、牧畜生活など草原との関係がもっとも知られている。しかし、実際の内モンゴルでは、農耕地域のモンゴル人、牧畜地域のモンゴル人、都会地域のモンゴル人といった多種多様な生活を送っている。筆者は第一章で、農耕地域の村落の形成から考察した結果、すべての内モンゴル人は「伝統文化 A」に当てはまるのではない。その地域の具体的な習俗の実践である「伝統文化 B」が存在していることを指摘した。しかし筆者は第一章第三節 3.2.1 では、農耕地域の現地人に、モンゴル族の習俗を聞き取り調査したところ、「伝統文化 B」を自覚していないし、知られていない。さらに「伝統文化 B」は「本物のモンゴル人」の文化ではないといわれている。このような問題に直面している農耕地域のモンゴル人は、問題の危険性を自覚していないし、ものさらに「伝統文化 A」の方に偏っているのである。

筆者本節において、婚姻習俗の事例を通して、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」の関連性と相違点を比較していきたい。

表 7. 『中国少数民族の婚姻と家族上巻』における婚姻習俗の流れ

① 求婚
② 結婚の日を決める。ラマによい日を見てもらう。
③ 挙式のための準備をする。
④ 新郎が花嫁を迎えに行く
⑤ 女家の戸口が閉まる儀式
⑥ 新郎側が花嫁側のゲルに入る。
⑦ 新婦を新郎側に送る
⑧ 新郎側に到着する
⑨ 新郎側の結婚披露宴
⑩ 新婦の親戚が帰る

表 8. 『ホルチン風俗』「婚姻習俗」の流れ

① 求婚
② 仲人を決める
③ 訂婚の準備 アリヒアゴラガホする。
④ 男方が女方に結婚披露宴の日を伝える。
⑤ シグソトシヤホ 結婚披露宴の日が決定したら結婚披露宴の何日前に新郎側から新婦側に酒肉送る。
⑥ 結婚のための準備活動
⑦ 新婦側の結婚披露宴 ウグディダラホ（戸口が閉まる儀式）儀式
⑧ 新郎側が送親側を向かう儀式
⑨ 新郎側の結婚披露宴
⑩ 男性側のウグディダラホ（戸口が閉まる儀式）儀式
⑪ ウヒントシヤホ
⑫ 結婚披露宴後の三日目ウヒンイリギホ
⑬ 新郎新婦のトゴリラタ
⑭ ウヒンジグレホ

表 9. 筆者の調査した事例の婚姻習俗の流れ

① 求婚
② 仲人を決める
③ ゲルウジェホ 女性側が男性側の暮らしの状態を見に行く。
④ 訂婚の準備 アリヒアゴラガホ式をする（この式に男性側から婚約者に婚資を贈る。1950年代に洋服を作る布、現金を贈っていたが、2000年代ごろになると生活用品、金のアクセサリなどを贈るようになった）。
⑤ 男性側から婚約者の女性を借りる。
⑥ 男方が女方に結婚披露宴の日を伝える。
⑦ 結婚の準備（新婦側は手作りの靴、掛け布団、敷き布団を作ったり、新郎側も掛け布団、敷き布団を作る。そして結婚披露宴に使う、テーブル、椅子、茶碗などを村内から借りる。）
⑧ シグソトシヤホ 結婚披露宴の日が決定したら結婚披露宴の何日前に新郎側から新婦側に酒肉送る。

⑨ 新婦側の結婚披露宴
⑩ フレゲンホビチラホ儀式
⑪ 夕方に新郎新婦うどんや餃子を食べる。村内の人たちが集まって新郎添い婿に歌を歌わせたりする。
⑫ 送親する（新婦側が新婦を新郎側に送る）。
⑬ 新郎側の結婚披露宴
⑭ 新婦にムルゲレケサンエージ紹介してあげる（新婦に結婚先に縁起が会う母紹介してあげる）。
⑮ ウヒントシヤホ
⑯ 闇洞房
⑰ 結婚披露宴の三日後ウヒンイリギホ
⑱ ウヒンをジゲルホ（男性側が結婚した娘を借りる）。

上述の表で、「伝統文化 A」の『中国少数民族の婚姻と家族上巻』におけるモンゴル族の婚姻習俗と『ホルチン風俗』におけるホルチンモンゴルの婚姻習俗の流れを取り上げた。そして「伝統文化 B」の 1950 年代から 2000 年代までの農耕モンゴル人の婚姻習俗の流れを整理した。以下ではそれらの相違点を比較して考察してみたい。

三つの表で並べている婚姻習俗の流れを見ていくと、求婚、結婚の日を決める、結婚挙式の準備、女性側の結婚披露宴、男性側の結婚披露宴といった大まかな流れである。特に「伝統文化 A」に記載している『ホルチン風俗』における「婚姻習俗」と筆者が調査した 1950 年代から 2000 年代までの婚姻習俗の流れは細かいところまで非常に類似している。しかし、その各段階の要素を比較してみると大きな相違点が見られる。

『ホルチン風俗』における「婚姻習俗」では、結婚のための準備活動では、女性側が男性側からもらった家畜の婚資で娘に結婚後の、日用品を買ってあげる。すなわち、婚資は家畜であったことが読み取れる。そして男性側が花嫁を迎えに行く際に、火の神様に酒をささげ、三回お辞儀する。その後、弓を背負って、馬に乗って出発する。しかし、筆者の調査では、1950 年代の事例 2 の王氏は 1 頭の牛を婚資としてあげた事例以外、他は、ほぼ現金や衣類用の布を婚資としてあげていた。そして筆者の調査した事例には、新郎は弓を背負って馬に乗って新婦を迎えにいった要素が見られないし、農耕地域での馬は、乗馬用ではなく、農耕用に使っているのが多かった。そして筆者の調査した 1950 年代の事例では、新婦を新郎側に牛車で送っていた。

『ホルチン風俗』における「婚姻習俗」における、シグソトシヤホ儀式では、結婚披露宴の日が決定したら結婚披露宴の何日前に新郎側から新婦側に酒や肉を送る。筆者の調査

での事例ではすべて、豚肉の半分か四分の一を送るのである。

新婦側の結婚披露宴では、新郎が到着後、新郎新婦に牛乳を飲ませること、席に羊肉を置く。そして女性側の若い人たちと新郎は、羊の骨をお互いに奪うこと、新婦側が新郎の知恵を試すために、羊の首を捻らせることがあげられている。『中国少数民族の婚姻と家族上巻』では、内モンゴル西部の牧区では花婿の力と知恵を試すために煮込んだ羊の首を捧げて、その首の骨の真ん中花婿に割らせる（烏力吉図 1996：68－83）。しかし筆者の調査では、1970年代の事例では豚足の骨でかけまけの遊びを行い、まけたら民族歌を歌うのである。このように、農耕地域の人たちは羊の骨で遊ぶのではなく、豚の骨で遊ぶのは、現地から取れるものを利用していることがわかる。『ホルチン風俗』における「婚姻習俗」では草原の生活でよく現れる、羊肉、牛乳などが上げられ、とくに西地域の牧区でよく見られる、羊の首を新郎にひねらせる行為の記載も現れている。筆者は調査した11事例の中で、結婚披露宴の食卓に羊肉ではなく、豚肉や野菜がよく出てくるのである。ここからも農耕地域のモンゴル人は現地の状況にあった食生活を送っていることがわかる。

フレゲンホビチラホ儀式では、新郎にモンゴル民族服を着替えさせて、帯をつけ、帯にナイフ、タマヒオゴタ（タバコのきみを入れていた袋）、タオルなどをつけてあげる。そしてゴトル（モンゴル靴）を履かせる。新婦の両親から新郎に、弓と馬を与える。それを与えられなくても、ヘレムチが言葉でいわなければならない。モンゴル民族服に着替えさせている間に、新郎と若い人たちの間で冗談を言ったりする。筆者の調査した1950年代から1990年代までの事例では、フレゲンホビチラホ儀式で、新郎に布用の手作りの新しい服を着せていたが、1990年代の市場や経済発展に伴い、新郎はスーツを着るようになった。しかし、モンゴル民族服や民族の長靴に着替える話はなかったし、2000年代までに筆者の経験でも見たことがない。

新郎側が送親側を向かう儀式において、男性側では、女性側の送親団体が到着しようとしているときに、草原に式布団を敷き、その上にテーブルを置き、テーブルに酒、肉、ハゴライボダガ（モンゴル族の独特のご飯である粟の形をしている）、チャガンイデゲなどを置く、そして火をつけて、送親側を待つ。この習慣は、筆者はシンリンゴル盟の婚姻習俗を現地調査していたとき、一人のインフォーマントは、シンリンゴル盟地域では、女性側の送親団体が男性側に到着する際に、草原で接待するという儀式があると言ってくれた。しかし、それはホルチンの婚姻習俗に記載していたのが不思議だと思う。筆者の11人の調査事例では確認できなかったし、筆者は農耕地域出身だが、この儀式はホルチン地域に行われていたことを聞いたことがない。

以上のように、『ホルチン風俗』でホルチンモンゴルの婚姻習俗の流れが筆者は実際に調査した流れとほぼ類似しているが、各要素を比較してみたところ、牛乳、羊肉、馬に乗って新婦を迎えに行く、そして弓を背負っていく、モンゴル民族の服や靴をはく、草原に敷き布団を敷き、テーブルにモンゴル族の食品を置くなど牧畜地域の暮らしでよく現れる要

素が現れている。前述したあらゆる要素は、筆者は調査した農耕地域の婚姻習俗になかったし、農耕地域のモンゴル人の生活に合わない要素だと思う。筆者は第一章の第二節において満州国時代の東モンゴルに関する資料を取り上げたように、1910年代にホルチン地域は、定住生活の農業形態の村落がすでに形成していたのである。すなわち100年間はずっと、農業形態、定住生活を送り、前述したような牧畜地域の要素は、なかったといえる。

『中国少数民族の婚姻と家族上巻』では内モンゴルは草原が主で、牧畜モンゴル人の生活を送っている印象を与えるために、モンゴル語、民族服装、モンゴル料理などを強調したと思う。一方『ホルチン風俗』では、モンゴル族の婚姻習俗の流れや各要素を細かく書いているが、草原、牛乳、羊肉などが上げられている。『ホルチン風俗』の著者である古日拉沙氏は、ホルチン地域は、20世紀に農耕化したととりあげているのに、婚姻習俗に牧畜地域の要素が含まれているが、農耕地域の要素が見られない。筆者は実際に調査した事例と矛盾がある。ホルチン地域といえば、ランブントブ村落の事例で解明したように、1910年代からホルチン地域は農業が主で、定住生活で固定部屋に住んでいるのが主である。

『中国少数民族の婚姻と家族上巻』で内モンゴルの西部地域では新郎の力と知恵を試すために、煮込んだ羊の首を割ってもらう儀式があると書かれているが、『ホルチン風俗』で同じように書かれているのである。ここからわかるように、ホルチン地域の習俗や婚姻習俗をできるだけ「公認」の「伝統文化A」に近づけて書かれているのではないかと思う。なぜかというと、「本物のモンゴル人」は草原、牧畜生活、羊肉を食べるなどの要素がなければならぬという考え方が「流行」しているし「公認」されている。「本物のモンゴル人」として言われるために「伝統文化A」から離れたくないといった著者たちの意図を察知できる。筆者の取り上げた婚姻習俗の先行研究は、農耕地域のモンゴル人の現地調査に基づいて、書かれたものは、ほぼなく、ただの資料整理である。筆者は1910年代の村の形成から2000年代までの調査では、「伝統文化A」に取り上げている草原、モンゴル語、牛乳、羊肉などは見られない。

筆者事例1から事例11までの各年代の婚姻習俗の流れを見ていくと、結婚が決定してから女性側が手作りの靴を用意し、そして結婚披露宴の日取りが決定した後、シグスが到着してから女性側の結婚披露宴の準備をするという一連の流れはどの年代でもほとんど同じである。男性側でも掛け布団や敷き布団をつくり、結婚披露宴の準備をする。そして女性側の結婚披露宴の前日に、新郎と添い婿が女性側に到着すると、次の日に結婚披露宴が始まるが、始まる前に、フルゲンホビチラホをする。当日の夜は、歌を歌ったり、踊ったり、ホゴールを弾いたりして賑やかに過ごし、翌朝、新婦を新郎側に送り、新郎側に到着したら新郎側の結婚披露宴を実施する。しかし何れの事例においても、『ホルチン風俗』に取り上げているように、シグソフレゲホには、羊肉ではなく、豚肉を送るのである。フレゲンホビチラホ儀式に新郎にモンゴル民族服ではなく、新しい服かスーツを着かえてあげる。そして、羊の骨で遊ぶのではなく、豚の骨で遊ぶ。牛車やトラクターで新婦を迎え

るが、馬に乗って弓を背おって行った事例がなかった。

以上の考察した結果を整理してみる、農耕地域モンゴル人は、定住生活し、農業を営んでから、現地の実情や状況に合わせて、柔軟な態度で適用していたと思われる。すなわち生活環境に合わせて、「伝統文化B」をつくり、現代までも維持しているのである。しかし全面的に知られている「伝統文化A」の風潮に、「伝統文化A」にかみ合わない「伝統文化B」の部分を主張しないし、自覚しない問題が存在している。筆者はこの問題に直面し、農耕地域の婚姻習俗の事例を前端的取り上げ「伝統文化B」の実態を解明できたと思う。

第五節 小括

筆者は、1950年代から2000年代までの農耕地域のモンゴル人の婚姻習俗の事例を考察して、婚姻習俗の連続性や変化を解明した。その連続性といえば、結婚披露宴が何れの年代においても相当なお金をかけて実施されており、社会的に重要な位置を占めている事である。そしてそれが、村全体に互助関係がみられるコミュニティとなっていたことも分かる。一方で、変化といえば、新婦を新郎側にする際の交通手段の変化、アリヒアゴラがホ式を実施する場所の変化、結婚披露宴に客からもらう祝い品の物から現金への変化、結婚相手を決める際の、親の関わり方の変化が上げられる。それは、1980年代の土地政策により経済的に豊かになったことと大きく関係しているようである。それらの変化の中で、婚姻に対する親の関わり方の変化の原因は、経済的な変化だけでなく、人々の思想面での開放も重要な原因となっているのである。

では「伝統文化A」において、農耕地域のモンゴル人の婚姻習俗をどのように記載しているのかと問題設定して、『ホルチン風俗』に記載している農耕モンゴル人の婚姻習俗と、筆者が実際に調査した農耕モンゴル人の事例を比較した結果、実際の農耕モンゴル人の生活と離れた、牧畜地域生活向けに、草原、牧畜生活、羊肉を食べるなどの「公認」されている「伝統文化A」にわざと近づけていることがわかる。つまり、農耕モンゴル人の実態を取り上げていないし、当該地域の人たちは、「伝統文化B」を自覚していない、否定している問題が存在していることを解明した。そして農耕地域のモンゴル人の「伝統文化B」の実態といえば、農耕地域モンゴル人は、定住生活し、農業を営んでから、現地の実情や状況に合わせて、柔軟な態度で適用していたと思われる。すなわち生活環境に合わせて、「伝統文化B」をつくり、現代までも維持しているのである。

では、現代農耕モンゴル人はどのような婚姻習俗があるのか。

第三章：現代「農耕モンゴル人」の婚姻習俗

筆者は本章で、現代の「農耕モンゴル人」の婚姻習俗の事例を取り上げ、第二章第一節で提示した 1950 年代から 2000 年代までの婚姻習俗と比較し、婚姻習俗の連続性と変化を考察する。そして、その変化した原因やそのあり方を解明していきたい。

第一節 農村の婚姻習俗事例

第二章で提示した 2000 年代以前の「農耕モンゴル人」の婚姻習俗の事例においては、さまざまな業者が発展していなかったため、自作業や村内の行事を村内の人たちが相互に手伝う形でしていた。一方、2000 年代以降になると、経済発展や都会化により、「農耕モンゴル人」は、大学進学や出稼ぎといった「移動性」が高くなってきた。その原因を本章の第三節において考察する。前述した状況に面して、現在の「農耕モンゴル人」の婚姻習俗も大きな変化が起こってきた。ではどのような変化が起こったのか、以下では、婚姻習俗の流れである、知り合ってから結婚までの過程、女性側の結婚披露宴を実施する前の儀式、女性側の結婚披露宴の現場、女性側の結婚披露宴後の儀式、ウヒンフレゲホ（送親）、男性側結婚披露宴を実施する前の儀式、男性側の結婚披露宴の現場、男性側の結婚披露宴後の儀式といった流れを事例を提示しながら、考察していきたい。

現代の婚姻習俗では結婚披露宴は重要な地位を占め、農村地域の地元で一回実施してから、都会の職場でもう一度実施するのが一般的になっている。そのため以下では、現代「農耕モンゴル人」の地元・農村における婚姻習俗の事例と都会地域居住者婚姻習俗の事例と分けて考察していきたい。

1.1 現代「農耕モンゴル人」の地元・農村における婚姻習俗の事例

事例 1

新郎の包玉喜（ホウ ギョクキ）氏は 32 歳で、新婦の其其格（チチゲ）氏は 33 歳で、二人はヒンガン盟ジャルト旗の出身であり、同じ大学の内モンゴル師範大学を卒業した。現在二人は日本に留学している。2012 年 9 月 12 日地元に戻って、結婚披露宴を実施した。筆者は包氏の結婚披露宴の前後の過程を、参与調査と聞き取り調査をしたので、以下のよう整理できる。

A) 知り合ってから、結婚までの過程

包氏と其其格氏は、高校時代の同級生で、大学時代に付き合った。三年間付き合ってから、お互いの実家の両親を訪問した。包氏は大学を卒業後、2011 年に日本に留学し、その後、其其格氏も日本に留学し、まもなく、二人は結婚することを決定し、両親に伝えたと

ころ、二人の両親は、面会して、結婚のことを話した。婚資は、二万元あげた。包氏の両親はウゾーチのところに行き、結婚披露宴の実施するめでたい日を見てもらった。

B) 女性側の結婚披露宴を実施する前の儀式

① 新郎の包氏は、ダガッサンフレゲンと新婦側の結婚披露宴日の前日に、新婦の其其格氏の実家に行った。その時、村のたくさんの人々が集まり、ホゴールタタホ（村の年配の人が集まり、三胡を引きながら歌う）、若い人たちはダガッサンフレゲンをからかったり、歌を歌わせたりし、民族芸能の雰囲気であふれていた。

② フルゲンホビチラホ儀式

結婚披露宴が始まる前に、フルゲンホビチラホ儀式を行う。床に敷き布団を引き、上に小米（アワ）でモンゴルの模様を描き、その上に、新郎を座らせ、二人のベルゲン（兄嫁）が新郎をモンゴル民族服に着替させた。着替え終わったら、新郎の帯に赤い色の布で巻く。その帯に、ハダク（白い布）タマヒのアゴタ（タバコの袋）をつける。これも昔から伝わってきた習慣である。特に、タマヒのアゴタは新婦のお婆さんが作ってくれるのが一般的である。その後、年配の方にお辞儀し、客にタバコの火をつける。

③ 新婦の其其格氏は化粧した。

新婦は化粧の専門的家を呼び、化粧させた。

C) 女性側の結婚披露宴の現場

朝 7 時に結婚披露宴を開始した。現在村においてほとんど宴会用のレストランができていたので、レストランの中で実施した。そして、漢族の司会人を一人と撮影する人を一人頼んで、撮影してもらった。結婚披露宴に参加する客は到着したらすぐ礼金（結婚祝い金、こちら側も結婚祝い金をもらうように入口側に一人座って紙に名前を記入する）を払って席に座る。同時に席に料理ものせられるようにする。すると、司会者の指示に従い新郎の包氏と新婦の其其格氏は年配の方から順番に酒を進めた（一人二杯ずつ飲む）。其の間に歌手は歌を歌ったり、踊り者は踊ったりする。

このように、結婚披露宴は、昼十一時頃に終了した。終了すると村の人たちが帰宅する。遠いところからきた親戚も徐々に帰ったりする（新婦を送ると決められている方が帰らない）。新婦の其其格氏側では、夕方に新郎、新婦ダガッサンフレゲン、沿い嫁四人オンドルに座って餃子を食べる。その後、其其格氏の親戚たちは、荷物を整理してもらい荷物の中に現金を入れていた。

D) ウヒンフレゲホ(送親)

① 新婦を新郎側に送る。

新婦の母の話では「新婦を新婦の父が送ってはいけない話がある。新婦を送る団体が出発する前に、新婦の父がハゴライボダガ（モンゴル民族の伝統的な食べ物アワの形をしている）

を茶碗に入れて娘を三回まわり、ハゴライボダガを青空の方に散らす。これは娘を送る途中の安全を祈っている行動である。また娘が新郎の方に出発する直前に、必ず泣く習慣があった。昔はもし新婦が泣かなかつたら母が棒で頭を三回たたいて泣かせることもあったそうだ」。しかし現代社会には、そのように泣く人がほぼいなくなった。

② 新婦を迎いにくる。

新郎の包氏と新婦の其其格氏の家は遠いので、途中で一晩泊まらないといけないので、ホテルに泊まって、ホテルから新郎の包氏の家族が8台の車で向かえにきた。車の上に大きな「喜喜」と新鮮な花を貼ってきた。

E) 男性側結婚披露宴を実施する前の儀式

- ・新婦を乗せた車は新郎の庭に到着すると同時に、数多くの爆竹をならす。
- ・新郎は新婦を抱き新部屋に行き、オンドルに腰かけた。
- ・新郎、新婦は真新しい赤い色の洗面器（中にたくさんの銭をいれてある）に手を洗う。
- ・新婦を送ってくれた親戚の方を新郎側が必ず尊敬してオンドルの真ん中に招待する。
- ・新郎の母は新婦に赤い布で巻いた斧を渡した。それは中国語の発音では、斧と福が同じ発音なので福が来るようにと祈っている習慣だといっていた。
- ・親戚との記念写真をとる。

F) 男性側の結婚披露宴の現場

司会者はめでたい言葉をいい、結婚披露宴を始めさせる。

モンゴル民族服を着た一人の中国語で話す司会者と一人モンゴル語を話す司会者だった。司会者の話に沿い。新郎、新婦が舞台上に登場する。司会人が新郎、新婦をそれぞれに喜ばしい言葉やめでたい言葉をいう。その後、新郎の両親が登場する。司会人の案内に添って、新郎の両親が椅子に座り、新婦は新郎の母の頭に赤い花をつけてあげる。花をつけるのも、ルールがあり左につけたら男の子、右が女の子、真ん中だと両方ともほしいという話がある。普通は真ん中につける。それから、新婦は初めて新郎の両親をアーバ(父)、エージ(母)と呼ぶと、お母さんの方から1111元のお金をあげる。これは、千人の中から選んだよい嫁ということである。それから、両親に新夫婦が三回お辞儀する。その後、指輪交換し、新郎新婦手を交叉してワインを飲む。そして新郎新婦お互いに三回お辞儀する。それで、司会が終わり、歌手が歌い始める。新郎新婦は来場したお客さんに酒を進める。

・ウヒンをトシヤホ（新婦の親戚が送ってくれた娘を新郎の両親に預けてもらうこと。新婦の親戚が新郎の両親に娘の将来の事等について話してあげ、娘他人を尊敬する事を教える。話が終わったら新郎側が新婦の親戚を送る。このときに限って新婦は見送らないようにしている。

G) 男性側の結婚披露宴後の儀式

客は帰った後、二人のベルゲンは、うどんを作り、新郎の包氏と新婦の其其格氏食べる。
 以上のように、包氏と其其格氏の婚姻習俗の流れの事例を提示した。以下では、その事例を表で示すと以下のように整理である。

表 10. 事例 1 の包氏、其其格氏の婚姻習俗の流れ

知り合ってから、結婚までの過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同級生同士での恋愛 ・ お互いの両親を訪ねる ・ 自ら結婚を決めた ・ 女性側の両親、男性側の両親が面会する。 ・ 婚資 2 万元あげた ・ 男性側の両親は結婚披露宴のめでたい日を見てもらう。
新婦側の結婚披露宴を実施する前の儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・ 結婚披露宴の前日に新郎は到着し、夕方になるとダガッサンフレゲン、新郎、村の人たち集まって、歌を歌ったり、ホゴールタタホをする。 ・ フルゲンホビチラホ儀式をする。 ・ 新婦が化粧する
女性側の結婚披露宴現場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 村内のレストランで結婚披露宴を実施した。 ・ 司会者は結婚披露宴の全般を司会する。 ・ 新郎新婦客に酒を勧める。 ・ 歌手が歌を歌う、踊り者は踊る。
女性側の結婚披露宴後の儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新郎新婦が餃子を食べる。 ・ 新郎の親戚は新婦の荷物を整理してあげる。
ウヒンフレゲホ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新婦側の親戚は新婦を新郎側に送る。 ・ 新郎新婦の実家は遠いので、途中ホテルに泊まる ・ 次の朝新婦側から車で迎えに来る。

結婚披露宴を実施する前の儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・新婦を乗せた車が新郎側に到着する。 ・赤い色の盆で手を洗う。 ・新郎の母は新婦に斧を渡した。
男性側の結婚披露宴の現場	<ul style="list-style-type: none"> ・村内のレストランへ移動した。 ・レストラン内でモンゴル服を着た二人の司会者は、本日のことを伝える。 ・新郎新婦を舞台に登場させる ・新婦は義理の母の頭に赤色の花をつけてあげる ・新婦は義理の母から 1111 のお金をもらった。 ・新郎新婦が両親にお辞儀する。 ・新郎新婦がお互いに三回お辞儀する ・指輪交換する。 ・ワイン交換する。 ・客に酒を勧める ・ウヒントシヤホ儀式 ・歌手が歌を歌う ・踊り者が踊る
結婚披露宴後の儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・新郎新婦は長いうどんを食べる

以上のように、包氏と其其氏は、「農耕地域出身」で、大学卒業後、外国留学した。そして結婚を決定して地元に戻って結婚披露宴を実施した。彼らは、結婚することを自ら決定し、両親は披露宴を用意してくれた。結婚披露宴の前後の過程は、二三日前後かかった。結婚披露宴の全般は司会者に頼み、料理や披露宴に使う道具などはレストランに頼むようになっている。包氏の婚姻習俗の流れの表を見ていくと、結婚披露宴は、専門的な司会者が司会し、司会者は「新婦は義理の母に花を付けてあげる、嫁から義理の父母を父母と呼び、義理の母は嫁に 1111 の現金をあげる、指輪交換、ワイン交換」などの決まりを結婚披露宴で実施するようになっている。

事例 2

新郎の馬太平（バタイヘイ）は 26 歳で、新婦の韓艶君（カンエンゲン）は 26 歳で、二

人は、通遼氏ホルチン左翼中旗出身である。馬氏は、現在舎伯吐鎮で床屋を経営している。高校を卒業後、2009年に、散髪技術を学び、2013年に実家から近い舎伯吐鎮（馬氏の実家と舎伯吐鎮は3kmの距離がある）に床屋を経営し始めた。2016年12月3日に舎伯吐鎮で結婚披露宴を実施した。馬氏から聞き取り調査した結婚披露宴の前後の過程を下のように整理した。

A) 知り合ってから結婚までの過程

馬氏は2013年の冬、友人の結婚披露宴に参加したとき、美人の韓氏に一目ぼれして、連絡先を交換した。その後ずっと連絡を取って、付き合うことになった。半年間付き合い、お互いの実家を訪問した。その後、お互いの両親は面会して、訂婚のことや婚資のことを話した。そして2014の1月にアリヒアゴラガホ式（訂婚）を実施し、妻に5万円の婚資あげた。訂婚式に200人近くの親戚や友人を招待した。筆者「現在もアリヒアゴラガホ式を実施しているの」馬氏「地元にいる人はほとんど実施する。」結婚披露宴の日はウゾーチによって縁起のよい日を見てもらい、2016年12月3日に決定した。

B) 女性側の結婚披露宴までの儀式

12月2日の夜中3:30に馬氏とダガッサンフレゲン（添い婿）は、実家を出発した。それで夜中4:00頃（占い師に見てもらった時間帯）新婦の韓氏の実家に到着した。到着すると、何人か家の前に立ち、私たちを入れさせないようにした。いろいろと冗談話の質問があり、それにこたえて、紅包（赤い封筒にお金を入れている）をあげるとドアを開けてくれた。やっと入れたら馬氏は韓氏の両親に、二本の酒とハダックを渡した。そして朝の6時に2人のベルゲン（兄にあたる人物の嫁）フレゲンホビチラホ（新郎に新しい服を着せる）をした。着替え終わったあと、2人のベルゲンに紅包をあげた。その後馬氏とダガッサンフレゲンが来客にタバコの火をつけてあげた。

C) 結婚披露宴現場

馬氏の話では「レストランに移動して、嫁側の結婚披露宴を実施した」。筆者は結婚披露宴の順番を聞いたところ馬氏は、「業者に頼んでいるので、順番は司会者決めている、そして、順番はみんな同じ」といった。

D) 結婚披露宴後の儀式

結婚披露宴が終わった後、夕方になると馬氏とダガッサンフレゲン2人は、皆に冗談話やいじわるをされた。12時ごろになるとベルゲンたちは餃子を作り、馬氏とダガッサンフレゲン、新婦の韓氏と添い嫁四人座って餃子を食べた。その後、村の人たちといっしょに、歌ったり、踊ったりする。年配の芸能人たちはホゴールをタタホをした。

E) ウヒンフレゲホ

馬氏話では、「12月の3日の朝に嫁の実家から私の実家に移動する準備をした。このときもいろいろといじわるをされる。たとえば、私は嫁に靴を履かせてあげるときに、靴を奪

ってどこかで隠す、その時に紅包をあげたら、出してくれるなどである。このようにいろいろと苦労してようやく終わったら、嫁の家を出発した」という。

F) 男性側の結婚披露宴までの儀式

馬氏の話では「私の実家に到着すると、母が最初に迎えにくる、このときに、嫁は母に花をつけてあげ、母は嫁に花をつけてあげる。新婚の部屋に入ったら、銭が入った赤い盆に水を入れて、一人の女性が持ってくる、もう一人の女性は赤い雑巾を持ってくる。そして私と嫁が2人手を洗って銭をとる。多く取れた方が、今後家の中で金の権利をもつという意味である。その後、嫁側親戚が席に座ってお茶を飲んだりする」。

G) 結婚披露宴現場

レストランでは司会者が司会の順番どおり行った。レストランでのことを全部済ませてから、嫁側の親戚が帰る時間になったので、ウヒントシヤホ（女性側の親戚が男性側に娘を渡す）という儀式がある。

H) 結婚披露宴後の儀式

結婚披露宴当日の夕方になると、馬氏の友人が来て、妻の韓氏に冗談を言ったり、いじわるしたりする行為がある。それが終わると、2人のベルゲンは、長いうどんを作ってくれ、新郎の馬氏と新婦の韓氏が食べた。

表 11. 事例 2 馬氏の婚姻習俗の流れ

知り合ってから結婚までの過程	<ul style="list-style-type: none"> ・パーティーで知り合い、付き合った。 ・お互いの両親を訪ねる ・女性側の両親、男性側の両親が面会する。 ・アリヒアゴラガホ儀式を実施した。 ・婚資 5 万元あげた ・男性側の両親は結婚披露宴のめでたい日を見てもらう。
女性側の結婚披露宴までの儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・ダガッサンフレゲンと新郎新婦側に行く ・エグデブゲレホ儀式 ・フレゲンホビチラホ儀式 ・客にタバコの火をつけてあげる
結婚披露宴現場	司会者が司会している、業者によって違う。馬氏は結婚披露宴の司会について、言ってくれなかった。
結婚披露宴後の儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・新郎とダガッサンフレゲン四人で餃子を食べる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・歌を歌ったり、踊ったりする。
ウヒンフレゲホ	新婦の荷物などを準備し、新郎は新婦に靴をはかせるときに、冗談話がある。
男性側の結婚披露宴までの儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・新婦は義理の母に赤い花を付けてあげる。 ・新婦は赤い盆で手を洗う。
結婚披露宴現場	<ul style="list-style-type: none"> ・司会者の言う順番で司会する。 ・ウヒントシヤホ儀式
結婚披露宴後の儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・「鬧洞房」をする。 ・新郎新婦うどん食べる



写真1、馬氏の結婚披露宴の現場

写真2、司会者が司会している様子

以上のように、馬氏の事例は、「農耕地域出身」だが、地元に住んでいない、地元から近い鎮にマンションを購入し、鎮で床屋を営んでいる。馬氏は、妻と自ら知り合い、結婚を決め、舍伯吐鎮のレストランに結婚披露宴を実施した。馬氏は「現在の司会者の司会の順番は同じといい」結婚披露宴の現場のことを言ってくれなかったため、結婚披露宴の順番などを他の事例から読み取ることにする。

事例3

新郎の白 紅星（ハク コウセイ）氏は31歳、通遼氏ホルチン左翼中旗の出身、内モンゴル師範大学政治学部を卒業した、現在フフホト市の食品会社の社員である。新婦の張

烏雲（チョウ オヨン）31 歳、白氏と同じ出身地で、同じ大学の日本語学部を卒業した。現在フフホト市の日本語専門学校で日本語教師を担当している。

A) 知り合ってから結婚までの過程

新婦の張氏と新郎の白氏は、高校時代の同級生で、同じ師範大学に入学し、大学を卒業後、2009 年から付き合った。2010 年の正月に、張氏は、白氏の実家を訪問し、二日間泊まってから、二人で張氏の実家を訪問した。その際に両側の両親から 1000 元の礼金もらった。その後、新郎の白氏の両親は、張氏の実家を訪れた。2014 年に、張氏と白氏の二人で結婚することを決め、両親に伝えたら、両側の両親の方から、結婚披露宴の準備をした。そして結婚披露宴の日をウゾーチに見てもらった。張氏たちは、実家の方で女性側、男性側の結婚披露宴を 2014 年 1 月 20 日と 21 日に実施し、同年の 6 月 7 日勤務地のフフホト市において、もう一度結婚披露宴を実施した（フフホト市における結婚披露宴を次の節に提示する）。

B) 女性側の結婚披露宴までの儀式

新郎の白氏の方から半分の豚肉と二ケース酒を張氏の実家に送った。20 日の朝、白氏は張氏の実家に到着した。到着後、チャンガンイデゲのハゴライボダガ、牛乳、ヨーグルトなどを混ぜて食べさせた。白氏は、張氏の実家の玄関を入ろうとしたときに、ウゲデブゲレホ儀式をした。そのときに、女性側の若い人たちは、白氏に冗談やいじわるをした。白氏は「紅包」をあげたらやっと、張氏の実家の玄関に入ることができた。その後、白氏に二人のベルゲンは、フレゲンホビチラホ儀式をした。床に敷き布団を敷き、上にタブンタリヤンウレ（農作物の種）をまいた。この儀式を終わってから、白氏は張氏の親戚たちにタバコをつけてあげる。

C) 女性側の結婚披露宴

張氏の実家の保康鎮（保康鎮の農村地域に居住していたが 2011 年に鎮でマンションを購入して、移住した）のレストランで、張氏の話では「私の結婚披露宴は漢族風で実施した。でも披露宴では、モンゴル服を着用した。司会者は中国語で司会し、何人かの歌手が歌を歌い、私たちは、客に酒勧めた。」。

D) 結婚披露宴後の儀式

結婚披露宴の夜に、若い人たちが来て、歌を歌ったり、新郎とダガッサンフレゲンにいじわるしたり冗談を言ったりした。そしてダガッサンフレゲンに歌を歌わせたりした。夜遅くなると、新郎新婦と沿い婿添い嫁の四人は餃子を食べた。餃子食べていたときにも、若い人たちは、新郎、ダガッサンフレゲンに冗談やいじわるをする。たとえば、座っているときに、敷き布団とズボンと一緒に、糸で結んだりする。

E) ウヒンフレゲホ

新婦を新郎側に送る儀式である。6 台の車で 20 人近くの親戚が送ってくれた。

F) 新郎側の家での儀式

新郎側に車が到着すると、車から降りるときに、新婦の靴は地面につかないようにする言い方があるので、新郎は新婦を抱っこして、部屋のオンドルまで行く。新婦は義理の母の頭に、赤色の花をつけてあげた。すると義理の母から「紅包」をもらった。その後、二人で新しい赤い盆に手を洗った。

G) 結婚披露宴の現場

現在は村の中でほとんど宴会用のレストランが出頭しているので、村内のレストランで結婚披露宴を実施した。そのときもモンゴル服を着用した。宴会に中国語で司会し、新郎新婦は客に酒を勧めてあげた。その後、ウヒントシヤホ儀式をした。新郎の親戚たちと新婦の親戚たちは、一つの席に座り、新郎新婦の今後の幸せについて話合う。

H) 結婚披露宴後の儀式

結婚披露宴が終了後、夕方になると、新郎の白氏と新婦の張氏にうどんを食べさせた。食べていたときに、茶碗を交換する行為もあった。結婚披露宴の三日後に、ウヒンをイリギフ（娘を見にくる）儀式があるが、現在結婚する二人の実家の距離は遠いので、実施しなくなった。しかし、張氏と白氏の実家は近いので、張氏の両親は、娘の結婚披露宴の三日後に、お土産を持っていった。

表 12. 事例 3 張氏の婚姻習俗の流れ

知り合ってから結婚までの過程	<ul style="list-style-type: none"> ・同級生同士 ・張氏と白氏はお互いの実家を訪問した。 ・両側の両親が面会した ・張氏と白氏は結婚を決めた。 ・新郎の白氏の両親が結婚披露宴の日をウゾーチにて見てもらった。
女性側の結婚披露宴までの儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・シングソフレゲホ儀式 ・新郎にチャガイデゲを上げた。 ・ウゲデブゲレホ儀式 ・フレゲンホビチラホ儀式 ・新郎の白氏は客にタバコをつけてあげた。
女性側の結婚披露宴	<ul style="list-style-type: none"> ・レストランで実施した。

	<ul style="list-style-type: none"> ・新郎新婦はモンゴル服を着用した。 ・司会者は中国語で司会した。 ・新郎新婦は客に酒を勧める。
女性側の結婚披露宴後の儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・新郎とダガッサンフレゲン歌を歌う。 ・新郎新婦ダガッサンフレゲン、添い嫁餃子食べる
ウヒンフレゲホ	6台の車で20人送った。
新郎側の家での儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・新郎は新婦を抱っこして内に入る。 ・新婦は義理の母の頭に花をつけてあげる。 ・新郎新婦赤い盆に手を洗う。
結婚披露宴の現場	<ul style="list-style-type: none"> ・村内のレストランで結婚披露宴を実施した。 ・司会者は中国語で司会した。 ・新郎新婦は客に酒を勧めた。 ・ウヒントシヤホ儀式
結婚披露宴後の儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・新郎新婦はうどんを食べた。 ・ウヒンをイリギフ

以上のように、3人の婚姻習俗の流れの事例を提示した。事例1と事例3は、「農耕地域」出身で、大学卒者であり、現在都会に住んでいる人の事例である。事例2は、「農耕地域」出身で、農耕地域で暮らす人の事例である。しかし、事例2の馬氏は、実家から近い舎伯吐鎮で床屋を営んでいる。すなわち農業を営んでいない。2000年代以降になると、農耕地域出身の人は、出稼ぎや大学進出者が頻繁になってきて、実家に暮らす若い人は激減した。彼らは、結婚披露宴を出身地で一回実施し、都会の職場近くでもう一度結婚披露宴を実施するのである。2000年代以前と現代の結婚披露宴の比較は、第二節において考察していく。では都会に移住した人たちや、都会人と結婚して都会に住んでいる人たちはどのような結婚披露宴を実施しているのか、以下では都会のレストランに実施した結婚披露宴の事例を提示する。

1.2 都会地域居住者婚姻習俗の事例

以上のように、農耕地域の人が地元において実施した事例を提示した。では、都会居住している「農耕モンゴル人」はどのような結婚披露宴を実施したのか。

事例 1

新郎の芩少君（きん しょうくん）32歳で、フフホト市出身で呼和浩特市公安分局に勤めている。新婦の杭晓荣（こう しょうえい）31歳、通遼市ホルチン中旗出身、内モンゴル師範大学を卒業し、現在フフホト市の銀行に勤めている。2014年5月4日にフフホト市の呼和浩特市草原城大汗宮というレストランで結婚披露宴を実施した。杭氏の結婚披露宴の前後の過程は以下のように整理できる。

A) 知り合ってから訂婚までの過程

新婦の杭氏と新郎の芩氏は、杭氏の同僚の紹介で知り合い、2012年10月中旬頃に初めて会い、お互いに印象がよかったので付き合った。半年間付き合ってから二人で話合ってから結婚することを決めた。その後、新婦の杭氏の両親は、フフホト市に来て、新郎の芩氏の実家に訪問した。その後、訂婚を決め、2013年7月に、新婦側の親戚、新郎側の親戚がフフホト市のレストランで、アリヒアゴラガホ儀式を実施した。男性側から新婦に婚資として、現金6万元、マンション、車、金のアクセサリ、金の指輪、金のピアリング等を贈った。

B) 結婚披露宴までの準備の段階

結婚披露宴の日が決定後、男性側から女性側に四色の贈り物を持っていった。それは酒二本、モンゴルチーズ二個（大きいサイズ）、飴、茶二袋ずつであった。

結婚日はウゾーチに見てもらった。決定してから、結婚日の一ヶ月前にレストランを予約し、新婚の部屋を片付け、家で使う電気製品、家具などを購入した。そして結婚披露宴に着るウィデイリングドレス、モンゴル民族服なども予約した。それから客に招待状を送った。

C) 女性側の結婚披露宴までの儀式

杭氏の話では「5月3日に私の叔父の家でシグスフルゲホ儀式（肉を送るしきたり）をした。私の実家は呼和浩特市から遠いので、夫側からフフホト市在住の叔父の家に届けるようにした。そのシグスとは、一匹の羊（羊を赤いリボンで結ぶ）、二ケースの酒である」という。

D) ウヒンフレゲホ

杭氏は叔父家にいたので、5月4の朝新郎の芩氏は迎えに行った。7台の車で迎えにきた。車の台数は、奇数ではなければいけないのである。そして最初の一台の車は白い色で、次は全部黒色だった。それは白頭偕老（一生離れない）という意味で、新婦の側は1台の車で送り、偶数にする。最近同種の車をそろえて迎親するのが、流行している。そして高級車で迎えたら面子にもいいし、結婚当事者の地位をあらわしている。そこで、高級車を結婚披露宴にレンタルしてくれる会社もある。私たちは知り合いから借りたので一台につき200元あげた、業者から借りると一日600元だよ」筆者「車に青い色のハダックを結んでいるのはどういう意味？」杭氏「私たちの司会者は漢民族は結婚する際に車に花を飾るが、

モンゴル人は、ハダックで飾るんだよと伝えたからだ」

・新郎が新婦側につくと、新婦側はフルゲンホボチラホ（新郎を着替える）儀式をした。新郎が着替える際に、床に敷き布団を敷き、その上にタブンタリヤンウレ（五つの農作物の種）を散らし、その上に新郎を座らせ、二人のベルゲンは着替えてあげる。

E) 女性側の結婚披露宴の現場

杭氏の場合、両親は、通遼市に移住したので、実家に帰って結婚披露宴を実施しなかった。実家の親戚はみんな、フフホト市に来て、ひとつのレストランにまとめて、結婚披露宴を実施した。この場合、レストランの中の席は女性側、男性側と分けられている。

F) 男性側の結婚披露宴までの儀式

・新郎は家まで新婦の足を地下につかないように抱っこし、家に入ったら二人でベッドに座る。すると、新郎の妹に当たる二人の女性が、新婦に赤い洗面器と赤い手拭を渡す。新婦は手を洗い終わったら妹に紅包（お金 200 円）あげる。

・新郎の母は茶碗にうどんを入れて持ってくる。うどんを食べる際に、新郎は新婦に先に一口食べさせる、それから新婦は新郎に一口食べさせる。それから二人で同時に食べる。

・家族記念写真をとる、それから新婦を送ってくれた客を招待し、新郎の母は茶碗に牛乳を入れて新婦に飲ませて、嫁をこれから自分の娘のように愛する意義を伝える。

G) レストランでの結婚披露宴の流れ

披露宴の開始時間は、12 時 58 分である。

11：30－12：30 馬頭琴の演奏をし、客を歓迎している意味を表す。

12：00 に新郎新婦の写真やビデオを LED の大画面に映す。

12：30 レストランの前で爆竹を鳴らす。

12：30 新婚夫婦や来客にモンゴル民族のスペシャルなパフォーマンスが始まる。

- ・歌を歌う。
- ・ホーマイ（モンゴル族の伝統的な歌）
- ・踊り

司会者は、四人の代東³⁹を舞台へ招待し、二人の「代東」が祝詞を発表する。すると、司会者は、「代東」に酒を注ぎ、ハダックをあげ感謝の意を表す。筆者「代東」何人ですか、誰が担当したの？」杭氏「夫の側から三人、私の側から三人で、夫の側の三人の代東は夫の父の友人が担当した。私の側の三人の代東は私の勤める銀行の店長が二人、内モンゴル師範大学の教師が一人だった。」

³⁹来客者を接待したりする世話人を指す。

12：40 料理を出し始める。

12：50－12：58 結婚披露宴が正式に始まる。

舞台にチンギスハーン像を置き、その前面に酒つぼ、長命灯、線香、乳製品、銀の茶碗、鼻煙壺（嗅ぎタバコ）、弓を置く。

1. 司会者の話に添い、馬頭琴を引く。その間新郎、ダガッサンフレゲンが舞台に登場する。それから両側の両親が登場する（新郎、ダガッサンフレゲンは迎えに行く）。先にチンギスハーン像にお辞儀し、乳製品を食べる。それから来客に両側の両親を紹介する。

2. サガダホモラダホヨソ（配弓取親儀式）

新郎は弓を背中に背折り、迎親儀式を行い、その間女性歌手が長調を歌う。司会者、新郎、ダガッサンフレゲンが新婦を迎えに行く。しかし新婦の友人がたちゲルの前に立ち、新郎の邪魔をする。司会者の話に添い、新郎新婦が無事に面会できる。その後、新郎新婦二人で、火の神様にお辞儀し、チンギスハーン像にもお辞儀する。

3. 司会者は新郎新婦に祝詞を言い、両手にハダックを持ち、その上の銀碗に酒を注ぎ、空にあげ、大地にあげそれから一口飲むのである。

4. 新郎新婦が両親にお辞儀する。両親に酒を注ぎハダックを贈る。両親に感謝の意を表す。司会者は漢民族であれば、両親から紅包をもらう（改口費）といていた。

5. 新郎新婦は鼻煙壺を交換する儀式をする。司会者がモンゴル民族の伝統的な習慣といていた。

6. 新郎新婦、ダガッサンフレゲン添い嫁が乳製品を味わう。

7. 新郎新婦は一つの茶碗のものを食べる。司会者はこれはモンゴル民族の伝統的な習慣といていた。

8. 司会者の祝詞に添い、新郎新婦はモンゴルゲルに入る。

9. 司会者は来客にチャガンイデゲ（モンゴル乳製品）をあげる儀式を行う。



写真 3. 新婦の杭氏と新郎の芩氏



写真 4. 新婦を乗せている車の団体



写真 5. 新郎は新婦をモンゴルゲルから迎えている様子

表 12. 事例 1 の杭氏の婚姻習俗の流れ

知り合ってから結婚まで	<ul style="list-style-type: none"> ・同僚を通して知り合った。 ・杭氏芩氏結婚することを決めた ・アリヒアゴラガホ儀式 ・婚資として、現金 6 万元、マンション、車、金のアクセサリ、金の指輪、金のピアリング ・男性側は結婚披露宴の日をウゾーチに見てもらった。
結婚披露宴までの準備の段階	<ul style="list-style-type: none"> ・男性側から四種類の贈り物を女性側に持っていった。 ・新婚夫婦の家を掃除、家庭用品を購入した。 ・レストランの予約、客の招待をした。
女性側の結婚披露宴までの儀式	シグスフルゲホ儀式
女性側の結婚披露宴	杭氏の実家の親戚がフフホト市に来て、男性側

	の結婚披露宴と一緒に実施した。
ウヒンフレゲホ	<ul style="list-style-type: none"> ・男性側は7台の高級車で杭氏を迎えに行った。 ・フルゲンホボチラホ儀式
男性側の結婚披露宴までの儀式	<ul style="list-style-type: none"> ・新郎は新婦を車から抱っこして家に入る。 ・赤い盆で手を洗う ・新郎新婦でうどんを食べる ・義理の母が牛乳を新婦に飲ませる
レストランでの結婚披露宴の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・司会者の話に添い、馬頭琴を引く ・サガダホモラダホヨソ（配弓取親儀式） ・司会者は新郎新婦に祝詞言い、両手にハダックを持ち、その上の銀碗に酒を注ぎ、空にあげ、大地にあげそれから一口飲むのである。 ・新郎新婦が両親にお辞儀する。 ・新郎新婦は鼻煙壺を交換する儀式をする。 ・新郎新婦、ダガッサンフレゲンと添い嫁が乳製品を味わう。 ・新郎新婦は一つの茶碗のものを食べる。 ・司会者の祝詞に添い、新郎新婦はモンゴルゲルに入る。 ・司会者は来客にチャガンイデゲ（モンゴル乳製品）をあげる儀式を行う。

以上のように、杭氏は「農耕地域」出身で、大学卒業後、フフホト市に就職し、フフホト市在住の人と結婚し、結婚披露宴は女性側男性側一つまとめて、モンゴルレストランで実施した。筆者「モンゴル服を着て、結婚披露宴を華やかに行ったね」といったら、杭氏は「フフホト市でモンゴル人の結婚披露宴は、モンゴル風で実施しているのが多い、たとえば、モンゴル服を着て、モンゴルゲルを建てたりしている。私の披露宴を司会した司会者は、フフホト市で有名な司会者である。私の友たちは歌手として活躍しているので、友の紹介で、有名な司会者を使うことができた」という。杭氏の結婚披露宴のように、フフホト市さらに通遼市といった都会で、モンゴル人は「モンゴル風」の結婚披露宴を実施して

いる。以下では、もう一つの都会で実施した結婚披露宴の例を見ていきたい。

事例 2

新郎の白紅星（ハク コウセイ）と新婦の張烏雲（チョウ オヨン）の事例を第一節で提示したが、それは地元で実施した結婚披露宴であった。同年 6 月 7 日に、勤務地のフフホトで再び結婚披露宴を実施した。

張氏の話によると、呼和浩特市内には、モンゴル人向けのレストランがたくさんある。例えば、バインデルハイ（モンゴルレストランの名前）、バヤンホルワ（モンゴルレストランの名前）、蒙古大嘗等があげられる。これらのレストランではモンゴル風の結婚披露宴を実施できるように装備されている。張氏達の場合は、一週間前に、披露宴に提供する予定の料理を注文した。レストランの予約が終わってから、司会会社を探した。張氏の話によると「私の知っている限りでは、呼和浩特市内には「モンゴル風」の結婚披露宴の司会しているのは六ヶ所がある。彼らのやっているのは、漢族の司会会社みたいに、専門とは言えないわりに値段が高いが、私は知り合いがいたので 650 円で頼んだ。普段は 1000—2500 元だよ。」張氏の話によると「披露宴実施の一週間前に、レストランを決定後、親戚、同僚、友達（大学時代、高校時代、）に電話で知らせた。結婚の披露宴の順番は以下のとおりで実施した。

まず客人の接待である。新婚夫婦は、モンゴルレストランの入り口の前で、客を接待し、客と握手する。そして馬頭琴演奏者は民族音楽を引いてお客を接待し、温かい気持ちで客を歓迎している意味を表す。それから来客者は、礼金を集めている席に向い、礼金（300—1000 元）をあげてから自分の席に座る。次に司会者舞台いに上がり、「光栄及び尊敬すべき両親…略…遠くから来られたお客様皆様ご機嫌いかがでしょうか（ホウサインシイイイ（モンゴル語の東地方の弁））。また中国語で「尊敬的各位来宾、女士们先生们大家晚上好、…略…表示满意热烈的欢迎」中国語の発音をわざとモンゴル語のアクセントに入れ、客を笑わせている。

来客者は席に座り、司会者は、四人の代東（だいとう）を紹介する。その四人の代東の代表者二人が祝詞を発表する。筆者「代東とはどのような人が担当するの？そして役割は？」張氏「私たちの披露宴に四人の代東を依頼した。それぞれは、大学生の担任の先生、高校時代の友達、夫の同僚、夫の大学時代の友達である。そして彼らの役割は、客を招待し、客の面倒を見ることである。それぞれあてられた客数がある。たとえば、担任の先生は、大学時代の先生たちを招待してくれるのである。それから司会者の話に従い、新郎、ダガッサンフレゲンが舞台へ登場する。張氏の話によると「新郎の背中に背負っているサガダゴモラダホ（弓を引くこと）は、最近の研究で、それはホルチンホリム（婚姻）に重要な一部分であったことが明らかになったが、ホルチン地域の人々は、まだその習慣を知らないのが多い。それに対しオロドス人はその習慣はオロドス（ホリム）の重要な要素である

と強調しているのである。しかし実際その習慣は、ホルチンホリムからオロドスホリムに伝わったのである。オロドスホリムといえば、モンゴル貴族たちのホリムなので、サガダゴモラダホという習慣がなかった」筆者「サガダゴモラダホとはどういう意味？何を表しているの？」張氏「ホルチンとは弓という意味なので、ホルチン地域の地名の由来は、弓と関連があるんだ。その詳細は歴史の本をめくらないと分からないんだ」。

主司会者は、新郎、ダガッサンフレゲンを連れ、舞台の東から上がり、副司会者氏は新婦添い嫁たちと舞台の西側に立ち、新郎たちが迎えに来るのを待つ。それで一人の司会者の男性グループは副司会者の女性のグループに「サインノ？サインノ？（こんにちは）」と挨拶する。しかし女性グループを代表するシ氏はなかなか声を返してくれない。その際男性グループを代表する司会者は粘り強く何回も挨拶し、冗談話をはじめる。すると女性グループの司会者は結局返事してくれる。そして男性グループの司会者にたくさんの問いを投げかけ、答えがあっているかどうかを確認する。二人の司会者の問い答え式の話は、ホルチン地域の民間話で、笑い意味が込められている。男性グループは女性グループの問いに全部正しく答えられたら、女性グループの司会者の許可をもらい、新郎新婦が面会できるのである。それと同時に、ダガッサンフレゲンが背負っていた布袋に入っていた物を新婦側に婚資としてあげる。

前述したように、新郎新婦はいろんな邪魔（冗談話）を経てようやく面会できる。それから、司会者は、新郎新婦、ダガッサンフレゲン、添い嫁を紹介する。その後、新郎新婦はチンギスハーンにお辞儀する。その際司会者はユルゲルウゲヘレホ（励む言葉）をする。司会者の話に沿い、新郎新婦は来客にお辞儀する。その後、新郎新婦は、両親にお辞儀し両親からユルゲルウゲもらう。

上述したすべての式が終了後、司会者の話に沿い、来客の地位や年齢に従い酒を注いで回る。この間、舞台に馬頭琴の演奏や歌、踊りの公演が始まる。またモンゴル語（東部地域）でのお笑い芸人も話をする。張氏の話によると「披露宴で恥ずかしながら新疆の踊りをしたんだよ、本当はモンゴルの踊りを願いたいのだが、司会者の知り合いが新疆の踊りだけを知っていたからだ、しょうがないんだよ」



写真 6. 張氏夫婦、沿い婿、添い嫁

表 14. 事例 2 張氏のフフホト市における結婚披露宴

① 新郎新婦はレストランの玄関に立ち、客を招待する
② レストランの玄関で演奏者は馬頭琴を引く
③ 客は新婚夫婦に祝い金を贈る。
④ 司会者は舞台上で披露宴の始まりの言葉を言う。
⑤ 四人の代東が舞台上上がる。
⑥ 新郎、ダガッサンフレゲンが舞台へ登場する。すなわち、サガダゴモラダホ（弓を引くこと）をする。
⑦ エグデブゲレホ儀式
⑧ 新婦はモンゴルゲルから出てきて、新郎と面会する。
⑨ 司会者、新郎新婦舞台上上がる。
⑩ 司会者は新郎新婦を客に紹介する。
⑪ 新郎新婦がチンギスハーンにお辞儀する。
⑫ 新郎新婦が客にお辞儀する
⑬ 新郎新婦が両親にお辞儀する
⑭ 新郎新婦は客に酒を勧める
⑮ 舞台上で歌手や踊り者は歌ったり、踊ったりする。

以上のように、張氏は地元で一回結婚披露宴を実施したが、勤務地のフフホト市でもう一度結婚披露宴を実施した。張氏の話では「フフホト市での結婚披露宴は、フフホト市における、親戚や友人、中学校、高校時代、大学時代の友達、職場の同僚たちの集まりである」という。このように、友人の集まりのように、モンゴルレストランで、司会者を頼み、盛大に行っている。張氏の話では「実家の結婚披露宴は、兄がしてくれたので、全部漢族の司会者で保康鎮の有名な漢人の司会者を頼んだ。しかし私はモンゴル人であれば、モンゴル民族の特徴を持つべきだと思い、モンゴル服を着用した」という。ここからわかるように、結婚披露宴を非常に重視し、結婚披露宴の位置づけの重要性も読みとれる。第四章では司会者中心に事例を集めて考察していきたい。

以上の事例は、現代の都会における「農耕モンゴル人」の事例で、事例 1 と事例 2 は、フフホト市の大学を卒業後、フフホト市で就職して結婚した人たちである。事例 2 の張氏は、通遼市の農村地の実家において一回結婚披露宴を実施し勤務地のフフホト市でもう一度結婚披露宴を実施したのである。ではなぜ近年民族風で結婚披露宴を実施するようになったのか。その原因を本章の第三節において解明していきたい。以下では、2000 年以前の

婚姻習俗と現代のモンゴル人の婚姻習俗を比較してみたい。

第二節 2000年以前と現代の婚姻習俗の比較

第二章ですでに1950年代から2000年代までの事例を提示したが、以下では、1950年代から2000年代までの婚姻習俗を現代の婚姻習俗と比較してみたい。

表 15. 1950年代から2000年代までの婚姻習俗の流れ

知り合いから結婚まで過程	<ul style="list-style-type: none"> ① 求婚 ② 仲人を決める ③ ゲルウジェホ 女性側が男性側の暮らしの状態を見に行く。 ④ 订婚の準備 アリヒアゴラガホする（この式に男性側から婚約者に婚資を贈る。1950年代には洋服を作る布、現金を贈っていたが、2000年代ごろになると生活用品、金のアクセサリなどを贈るようになった。 ⑤ 男性側から婚約者の女性を借りる。 ⑥ 男方が女方に結婚披露宴の日を伝える。 ⑦ 結婚の準備（新婦側は手作りの靴、掛け布団、敷き布団を作り、新郎側も掛け布団、敷き布団を作る。そして結婚披露宴に使う、テーブル、椅子、茶碗などを村内から借りる。）
女性側の結婚披露宴までの儀式	<ul style="list-style-type: none"> ⑧ シグソトシヤホ 結婚披露宴の日が決定したら結婚披露宴の何日前に新郎側から新婦側に酒と肉を送る。 ⑨ フレゲンホビチラホ儀式
女性側の結婚披露宴	<ul style="list-style-type: none"> ⑩ 新婦側の結婚披露宴
女性側の結婚披露宴後の儀式	<ul style="list-style-type: none"> ⑪ 夕方に新郎新婦がうどんや餃子を食べる。村内の人たちが集まって新郎とダガッサンフレゲンに歌を歌わせたりする。

ウヒンフ レゲホ	⑫ 新婦側が新婦を新郎側にする ⑬ 男性側が新婦を迎えに来る。
男性側の 結婚披露 宴	⑭ 新郎側の結婚披露宴 ⑮ 新婦にムルゲレケサンエージ紹介してあげる（新婦が嫁に行くとき、新郎側が、新婦に相性が合う「母」を紹介してあげる）。 ⑯ ウヒントシヤホ
男性側の 結婚披露 宴後の儀 式	⑰ 鬧洞房 ⑱ 結婚披露宴の三日後ウヒンイリギホ ⑲ ウヒンジゲルホ（女性側が結婚した娘を借りる）。

表 16. 現代の婚姻習俗の流れ

知り合っ てから結 婚まで過 程	① 知り合う。 ② 恋人同士の両親が面会する。 ③ アリヒアゴラガホ儀式。女性側が男性側から婚資をもらう 男性側から女性側に結婚する日を伝える。 ④ 結婚の準備（結婚記念の写真を撮ったり、結婚披露宴のレストランの予約や客の招待をする）
女性側の 結婚披露 宴までの 儀式	⑤ シグソトシヤホ ⑥ フレゲンホビチラホ儀式
女性側の 結婚披露 宴	⑦ 新婦側の結婚披露宴（ほとんどの場合、農村だったら村内にレストランがあればレストランで実施し、レストランがなかったら、テントを建てている会社に頼んで、テント内で結婚披露宴を実施する。いずれの場合でも司会者や歌手を別で頼む。都会の場合、レストランで結婚披露宴を実施する。

女性側の結婚披露宴後儀式	⑧ 夕方に新郎新婦がうどんや餃子を食べる。村内の人たちが集まって新郎ダガッサンフレゲンに歌を歌わせたりする。
ウヒンフレゲホ	⑩ 送親する（新婦側が新婦を新郎側にする）。 ⑪ 新郎側が新婦を迎えにくる（新郎新婦の家が遠い場合、新婦がホテルに一晩泊まって、次の日に新郎側が複数の車で迎えにくる）。
男性側の披露宴までの儀式	⑫ 新郎は新婦を抱っこして家にはいる ⑬ 新婦は義理の母に花をつけてあげる ⑭ 新郎新婦赤い盆に手を洗う。
男性側の結婚披露宴	⑮ 新郎側の結婚披露宴を実施する（新婦側と同じように、レストラン内で実施する。新郎側の結婚披露宴は新婦側より華やかに実施するのが一般的である）。
男性側の結婚披露宴後の儀式	⑯ 鬧洞房（夜に村の若者達が新婦をからかうこと）。

2.1. 婚姻習俗の連続性や変化

以上のように、2000年代前後の婚姻習俗の流れを提示した。二つの表を見ていくと、知り合ってから結婚、女性側の結婚披露宴までの儀式、女性側の結婚披露宴、結婚披露宴後の家における儀式、ウヒンフレゲホ、男性側の結婚披露宴、結婚披露宴後の儀式といった基本的な流れは変化していない。2000年代以前の婚姻習俗では、恋人同士が仲人を通して知り合うことが多かった。特に1990年代までは、ほぼ仲人が重要な役割を果たしていた。しかし、現代婚姻習俗の中で、恋人同士が自ら知り合うことが多くなったので、2000年代以前の①から④までの儀礼が消えている。さらに、ウヒンジゲルホ（男性側が女性を借りる）とウヒンイリギフ（娘を見にくる）などの儀礼も消えている。その背景には、2000年代になると人々が自ら恋愛をして結婚相手を見つけ、お互いの家を訪問するようになったこと、そして、交通手段が便利になり、お互いの家にいつでも行けるようになったことがある。

以下では、1950年代から2000年代までの婚姻習俗の流れに沿って、現代の婚姻習俗までの事例分析を通して、婚姻習俗の具体的な変化を考察していきたい。

A) 知り合いから結婚まで

① 求婚

男性側の両親や女性側の両親が子供の結婚相手を探すこと。第二章に提示した事例で、1990年代までほとんど、親が子供に気に入った結婚相手をさがしていた。結婚相手を探すときに、親のかかわりが非常に大きかった。しかし、現代の事例では、みんな同級生同士、パーティーでの知り合い、友人からの紹介などさまざまな方法で知り合うようになっている。親はほとんどかかわっていない。

② 仲人を立てる。

男性側は仲人を立てて、気に入った女性側⁴⁰に行かせる。仲人は女性側に行く際に贈り物を持っていく。2000年代以前の事例の11人の中では、事例1、事例3、事例4、事例10は仲人を通じて知り合って、事例2、事例5、事例6、事例7、事例8、事例9、事例11の結婚は事例9以外は村内での結婚だった。そして仲人を通じ婚姻関係が成立した。すなわち当時、結婚に仲人が非常に重要な役割を果たしていた。しかし、現在の結婚では、仲人を通じて知り合うのが非常にまれになっている。たとえば、1.1の事例1と事例3の人は、同級生同士で知り合って結婚し、事例2の人は、結婚相手とパーティーで知り合い、結婚を決定している。仲人の代わりに友人の紹介によって、恋人と知り合う場合もある（都市居住者の事例2）。また近年、ネットの発展に伴い、サイトなどさまざまな形で知り合うことができるようになっている。

③ ゲルウゾホ（家を見ること）。

2000年代までは、女性側は男性側の暮らしの状態を見に行き、今後の订婚について仲人と男性側の両親、女性側の両親、親戚たちが集まって話をする。1.1の事例1、事例2、事例3と1.2の事例1からわかるように、恋人だけが互いの家を訪ねる。その際に双方の両親からプレゼントもらう。2000年代までは、男性側の両親と仲人が女性側に行き、結婚の相談をしていた。現在は、恋人は自分たちで結婚を決定する。結婚を決定後、男性側の両親は贈り物を持って女性側を訪ねる。

④ アリヒアゴラガホ（酒を飲ませる）。

アリヒアゴラガホとは、订婚式を指す。男性側でその儀式を行い、男性側から女性側（新婦）に婚資、を用意する。2000年以前はなくてはならない儀式だったが、現在の事例では、1.1の事例2の馬氏と1.2の事例1杭氏は実施したが、ほかの事例では、実施していないという。表で示したように、現在は婚資として車やマンション、現金をもらうのが一般的になっている。馬氏と杭氏の事例では一つの共通点がある、馬氏は地元から近距離のところ

⁴⁰女性側から男性側に仲人を行かせる場合もあるが、ほとんどの場合男性側から女性側に仲人を行かせる。

に居住し、杭氏の夫はフフホト氏出身である。すなわち、実家で居住している人たちは、アリヒアゴラガホ儀式を実施していると思われる。それは、実際の状況をあわせて、儀式を実施したり、省いたりしている様子が見られる。

⑤ ウヒンをジゲルホ（男性側が女性を借りる）。

2000年以前は、男性と女性が訂婚してから、男性側が女性を一週間から十日間ほど借りる。当時訂婚しても、結婚していないと、恋人同士は普段あえないので、男性側から借りる形で、短期間に会うことができた。現在は、恋人同士は毎日会えるので、男性側からわざわざ女性を借りるという習慣がなくなった。

⑥ 結婚披露宴の日取りを決めて、女性側に伝える。

男性側がウゾーチ⁴¹（占い師）にめでたい日を見てもらい、披露宴の日取りを決める。そして女性側の披露宴はその決めた日の前日に行く。現在も結婚披露宴を行う吉日をウゾーチに決めてもらっている。たとえば、1.1の事例1、事例3、1.2の事例1、事例2は結婚披露宴の日をウゾーチに見てもらった。しかし、農村地域は農業の忙しい時期や収入時期を勘案して、1月前後に実施するのが一般的である。都会の場合は仕事の都合で土日に実施する場合が多い。

⑦ 結婚の準備

2000年代までは、経済や市場がそれほど発展していなかったし、農村地域では、ほとんど自営自給だった。ゆえに、結婚するときに、新婦は、新郎側に大量の手作りの靴を作らないといけない。また新郎新婦用の掛け布団、敷き布団を全部自らで作ったりする。そして結婚披露宴の前日に、宴会に使う、テーブル、椅子、茶碗などを村内から借りる。現代では、結婚生活に使うものを全部市場から購入する。そして、宴会に使うテーブルや茶碗などを業者に頼めばよいのである。2000年代以前の婚姻習俗の事例9の妻の包氏の話によると、「昔テント会社やレストランがなかったとき、結婚披露宴の料理は全部自分で用意していた。当時大変だったけれど村の人たちみんな自主的に手伝いにきてもらって、とても楽しかった」。確かに、現代社会の経済発展に伴って、サービス業が発展し、金さえ使えば便利な社会になっている。しかしそれに伴って人間関係も薄くなりつつある。

B) 女性側の結婚披露宴までの儀式

⑧ シグソトシャホ儀式、結婚披露宴の日が決定したら結婚披露宴の何日か前に新郎側から新婦側に酒や肉を送る。

この儀式は現在も実施している。2000年代以前は、半分や四分一の豚肉や酒二本を贈っていたが、現在は豪華になっている。たとえば1.2の事例1では、杭氏の実家は遠いので、

⁴¹ウゾーチは、農村地域で人気を集めている占い師である。

杭氏の叔父の家に羊一匹と酒2ケース（1ケースに12本入っている）届けていた。1.1の事例3は半分の豚肉と二ケース（1ケースに12本入っている）の酒届けた。

⑨ フレゲンホビチラホ儀式

女性側の両親は、新郎に新しい服を買ってあげて、結婚披露宴を行う前に、着せてあげる。新郎に必ず二人か四人のベルゲンが着せてあげる。この儀式は、1950年代から今まで変化していない。ただし、着用する洋服が変わったのみである。現在モンゴル人の結婚披露宴では、新郎新婦はモンゴル服を着るようになっている。

C) 女性側の結婚披露宴

⑩ 新婦側の結婚披露宴

2000年代以前は、結婚披露宴は自宅で実施し、新郎新婦は客人のタバコに火をつけてあげたり、酒を注いであげたりしていた。現在は結婚披露宴を実施するテント会社に頼んで庭にテントを建てるか、レストランで実施するようになっている。筆者の調査した事例では、村のレストランや近所の市鎮のレストランに行き、結婚披露宴を実施していた。結婚披露宴の儀式の全般を業者に頼み、業者が司会者を決めている。その詳細を第四、五章において考察していきたい。

D) 女性側結婚披露宴後の儀式

⑪ 披露宴終了後の夕方に新郎、新婦は餃子を食べる。新郎、ダガッサンフレゲン⁴²が歌を歌ったり、ホゴールタタホしている。この習慣は現在まで変化していない。

⑫ ヒンフレゲホ

新婦側の人々が新婦を新郎側に送ることを指す。2000年代以前は、村内の結婚や近隣の村と結婚だったので、1990年代以前は、牛車や馬車で送っていた。1990年代以降になるとトラクターといった自動車で送るようになった。現在は村内の結婚は非常に稀になり、遠い距離での結婚が多い。なので、現在自家用の車やレンタルの車で送親するようになっている。ただし、高級車が人気になっている。

⑬ 郎側が新婦を迎えにくる。

2000年代以前は、送親側と男性側の人たちが一緒になって、男性側に新婦を送っていたが、現在は遠いところに送親するので、途中でホテルに泊まる必要が生じた。なので、男性側がホテルから新婦や新婦の親戚を迎えに来る。たとえば、1.1の事例1の新婦の其其格氏はホテルに一泊して、朝早い時間帯に男性側から向かえに来ている。

⁴² 添い婿を指す。結婚披露宴で新郎につく未婚の若い男性で、歌、言葉が上手な人が担当するのが一般的である。

E) 男性側の結婚披露宴前の儀式

2000年以前は、結婚披露宴前後の儀礼を家の中で実施していた。筆者は2000年以前に姉の結婚披露宴に参加したことがある事例では、新婦が新郎側に到着したら新郎は抱っこして、オンドルに座らせる。その後、新婦は義理の母に花をつけてあげる。その後、赤い盆に新郎新婦は手を洗っていた。現在もこのような習慣があるが、新婦は赤い盆を持ってきた人に「紅包」（赤い封筒に現金を入れている）をあげる事例も見られる。

F) 男性側の結婚披露宴

新郎側の結婚披露宴も、新婦側の結婚披露宴のように、大きな変化がある。其中で、2000年以前の婚姻習俗では、新婦に⑭ムルゲレケサンエージを紹介してあげていたが、現在ほとんどなくなっている。それは、新郎側が、新婦は他の村から見知らない村に移住して、さびしくならないようにするために、新婦に「母」を紹介してあげ、新婦の面倒を見る習慣だった。しかし、現代は、新郎新婦は結婚しても、村に住むことが少なくなり、都会にマンションを購入し、都会に住むことが多くなっている。また、通信が発展している時代になったので、新婦はいつでも、手軽に実家の両親と連絡を取ることができる。

⑮ ウヒントシヤ儀式

筆者の調査した事例でも、現れているので変化していない。

G) 男性側の結婚披露宴後の儀式

⑯ 鬧洞房（夜になると村の若者達が新婦をからかうこと）。

2000年以前は、村の若い人たちが新婦と冗談したりしていた。現在も変化せずに実施されている。

⑰ ウヒンイリギフ（娘を見にくる）

2000年代までに、女性側は、娘が結婚披露宴を実施した三日後に、プレゼントを持って会いに行く習慣があった。現在は、遠い距離の人と結婚するのが多くなったので、移動時間が長くなる。そして、現在ネットや通信が発展しているので、いつでも手軽に、連絡が取れる。

⑱ ウヒンをジゲルホ（男性側が結婚した娘を借りる）。

2000年代女性側が娘を結婚一ヶ月後に、二週間から40日借りる習慣があった。しかし現在はこの習慣がなくなっている。ネットや交通手段の発展に伴い、いつでも連絡取れる。そして現在仕事の都合にあわせて、新婦は両親とあいに行ったりする。

2.2 婚姻習俗の変化の原因

上述したように、2000年代以前と現代の婚姻習俗の各段階の流れを表にて並べ、その中

の各要素を比較した。以下ではその変化の原因を整理していきたい。

2000年代以前は、恋人同士は村内の中で知り合うは、仲人を通して近隣の村人と知り合うことによって婚約が成立し、地元で結婚披露宴を実施し、地元で生活していたことが多かった。しかし、現代は、恋人はさまざまな地域、さまざまな方法で知り合い、婚約が成立後、結婚披露宴は従来の女性側、男性側の2回実施し、それに加えて、新郎新婦の勤務地域でも行われることが多くなった。特にモンゴル語教育を受けた大学卒者は都会でモンゴル民族の衣装を着用し、モンゴル文字を使用する結婚披露宴を実施している。すなわち、結婚披露宴は重要な位置づけを占めている。

婚姻習俗の流れでは、ウヒンジゲルホ（男性側が女性を借りる）と アリヒアゴラガホ 儀式（訂婚式）、ウヒンイリギフ（女性側の両親が娘を見にくる）ウヒンジゲルホ（女性側が結婚した娘を借りる）、結婚披露宴の三日後ウヒンイリギホ（女性側の親戚から娘を見舞いに来る）などの要素が消えていることが分かった。すでに述べたように、2000年代になると自由恋愛の後に結婚相手を自ら見つけ、お互いの家を訪問するようになり、さらには交通手段も便利になったため、わざわざ特定の日を設定せずとも、いつでも行き来できるようになったことが背景にあると考えられる。

また2000年代以前、結婚披露宴は自宅で実施され、披露宴に使う道具等をすべて村の人々から借り、村人の手伝いによって結婚披露宴の実施が可能になっていた。しかし現在は、結婚披露宴の準備や運営をテント会社や司会会社に頼むようになっており、結婚披露宴を担う村人の役割や労力の提供は大きく減少したと言える。経済発展に伴い、様々の業者が頻出していることがわかる。

婚姻習俗の中での要素を確認すると、2000年代以前の婚資は、現金、金のアクセサリや指輪等が主であったが、現在ではマンションや車などに変わっている。また上述したようにかつての交通手段はトラクターやマイクロバスであったが、いまでは自動車になっている。このように、経済発展や都会化に伴い、生活に重要とされるものが婚資贈られるようになっている。

以上のように、地方に住む若い人たちの減少、婚姻習俗の簡略化、業者の多様化、特に大卒者が勤務地で結婚披露宴を実施する際には、民族衣装を着用したり、民族食品を用意したり、そのほかにも馬頭琴の演奏やモンゴル文字の使用などモンゴル民族に特徴的な要素を取り入れている結婚披露の流行の傾向が現れている。このように婚姻習俗の変化の原因を整理してみると、それは国家の経済発展に伴い業者が頻出し、様々なタイプのサービスを提供できるようになったためと思われる。そしてまた、「モンゴル風」結婚披露宴の実施の流行は、国家民族政策や、インターネット、情報発進と関係があると思われる。

では、いつから都市化が進んだのか、いつ、何のきっかけで都会への進出者が多かったのか。そして、いつから「モンゴル民族の特徴」の結婚披露宴が流行したのか。

第三節 経済発展について

前述したように、婚姻習俗の各要素の変化の原因は、中国の経済発展と関連がある。では具体的にどのような政策のもとで、著しい経済発展をもたらしたのか。

李氏らの著書である『中国経済ハンドブック 2004』において、中国経済にとってのキー・ファクターとは、西部大開発戦略の展開、WTO の加盟、IT 革命（情報化）への挑戦であると取り上げている（李ら 2004 : 24）。

1970 年代末から、中国は「改革・開放」への政策転換し、経済の高度成長を達成してきた。しかしそれはもっぱら沿海部において、輸出振興と外資誘致に成功し、市場経済への移行をはたしてからであり、他方では、少数民族の集中している西部地域を含む広大な内陸部が取り残されたままである（李ら 2004 : 85）。2000 年に西部大開発プロジェクトが正式に発動し、東部沿海地域と西部内陸地域の格差を是正し、内陸経済の自律的発展条件を整備した。（大西 2004 : 41）。西部開発の範囲は、陝西省、甘肅省、寧夏、青海省、四川省、重慶市、雲南市、貴州省、チベット自治区、新疆及び内モンゴル広西の 12 省・自治区・直轄市を含む地域を指す（中国 21 編集部 : 3）。大型国有企業が 990 社、中型国有企業が 1990 社もあり、資産総額は 15000 億元に達するといった、西部大開発の一つの突発口である（李ら 2004 : 125）。

2001 年 12 月に、中国は世界最大級の経済貿易組織である WTO に 143 番目の加盟国・地域として正式に加盟した。WTO 加盟は、中国に様々なチャンスとリスクをもたらし、中国経済を国際経済にこみ入ることによって、外部からの力を借りて改革・開放の完遂を加速し、更に中国の近代化のプロセスを加速させた。WTO に加盟後 2002 年に、中国のマクロ経済は全体として安定した成長を維持した。通年の GDP は 1200 億ドルを超えて前年度より 8% 増加し、一人当たり平均 GDP は約 1000 ドルに達成した。1 月～10 月、輸出総額が 5002.61 億ドルに達成し、2001 年の同期間より 19.7% 増加した（李ら 2004 : 78-81）。

2002 年は中国の電子情報産業にとって、世界的な IT 不況の逆風の中で著しい成長を果たした一年であった。急速に成長し続けている電子産業は中国経済の索引エンジンとなった。中国の電子情報産業は、過去数年間の急成長を経て、2002 年にはいくつかの分野で世界 1 位を記録した。電話自動交換機、携帯電話、カラーテレビ、DVD プレーヤの生産高は世界 1 位になり消費面でも、固定電話と携帯電話数がそれぞれ世界 1 位になった（李氏ら 2004 : 130）。

中国の改革、変転、変化は中国人が最も常用する「世人矚目」（世界が注目するとなる）という四字成語に喩える。改革、開放、発展は東部の沿海地域から西部、内陸部にかけて、段階的に推し勧められて来た。中国の 960 万平方キロメートルの国土は、十数億人を巻き込んだ巨大な工事現場と化した。同時に世界経済、特に先進国の経済が低迷している状況の下で、中国という最大の発展途上国において日々拡大する市場と経済成長は東アジア、

ひいては世界経済のための重要な要素となり、国際資本を集める最も強い磁力となっている（中国 21 編集者部：1）。

以上のように、2000 年以降の中国の諸政策は、中国の経済、グローバル化、通信ネットに著しい発展をもたらした。では上述した政策は、内モンゴル自治区の経済発展にどのような影響を見せたのか。

内モンゴルでは、西部大開発を実施後、牧畜業が著しき発展してきた。現在家畜、食肉、ミルク、綿毛などの総合生産力は全国五大牧畜区のトップに位置する。農産物は、小麦、米、トウモロコシ、コーリャン、大豆、麻類、煙草、甜菜などである。企業では石炭、鉄鋼、機械工業、食品加工、医薬、電子といった軽工業の発展と草原の環境の特性を活かす産業の発展も目立っている。そして食品、果実酒、乳製品などの健康食品は全国各地において好評を博し、輸出国も 20 数カ国に上がっている。対外貿易の面では、国境を 18 カ所で開放し、全面的な対外開放のための配置を行った（李ら 2004：273-276）。このように、内モンゴルでは、草原の特色を利用した産業、モンゴル族の牧畜業、乳製品の発展を促した。そして農業や外交などの発展をもたらした。

3.1 出稼ぎ・大学進出

以上のように、内モンゴルも、国家の政策のもので、著しい発展を果たしている。筆者の調査した婚姻習俗の事例では、2000 年以降になると、農村にはトラクタや自動車が普及し、結婚披露宴に、様々サービスを提供するようになっていく。筆者自身もその時代を経験したことがあるので、農村の生活水準アップや都市化、企業の進入、インターネットの普及をしみじみと感じた。更に国家から 2005 年に農村の農業税を完全に免税し、土地を農民に与え、30 年不変の権力を与え、人口により土地を均等に分配した（郝、包 2010：273）。この政策により、農村の貧富の差を整え、農民の積極性を引っ張り、そのうえに、農業用の各道具により、以前人間の労働力を大量に使っていた作業が、現在は、全部機械で済ませるようになった。その結果、農業作業に以前のように大量の労働が不要になってきた。そこで、あまった労働力は都会に出稼ぎに行き、都会への移動が頻繁になった。

郝氏の『体制政策とモンゴル族農村社会変遷』では、農村の出稼ぎのことを取り上げている。白村の事例では、85%の人が出稼ぎを好んでいる。当村では、若い人たちが近所の都会に出稼ぎに行くか、冬農村の休業時期に都会に出稼ぎに行くか、土地を他人にレンタルして都会に出稼ぎに行く事例が多い（郝、包 2010：248）。筆者の地元での例を挙げれば、筆者の父は四人兄弟で、同じ村に居住していた。筆者は三人の兄弟で、筆者と筆者の姉は、大学進学で、都会に行った。筆者は 2009 年までにフフホト市に滞在していたが、2009 年に日本に留学した。筆者の姉は大学を卒業後、オロドス市に就職した。筆者の妹は中学を卒業後、姉のところに出稼ぎに行った。2010 年筆者の両親は、村の家を売り、土地をレンタ

ルして、オロドス市に移住した。そして叔父の家族も通遼市に出稼ぎに行った。その叔父に二人の子供がいて、一人はフフホト市の大学を卒業して、フフホトにいる。もう一人は、高校を卒業後、通遼市に仕事している。もう一人の叔父に二人の娘がいて、一人はフフホト市に出稼ぎに行き、もう一人は上海に出稼ぎに行った。このように、2000年以降に、地元の人たちは、出稼ぎで都会へ移住、若い人たちの学校進学や出稼ぎが頻繁になってきた。2012年の内モンゴル統計年鑑による市、鎮人口と、農村人口を以下のように並べる。

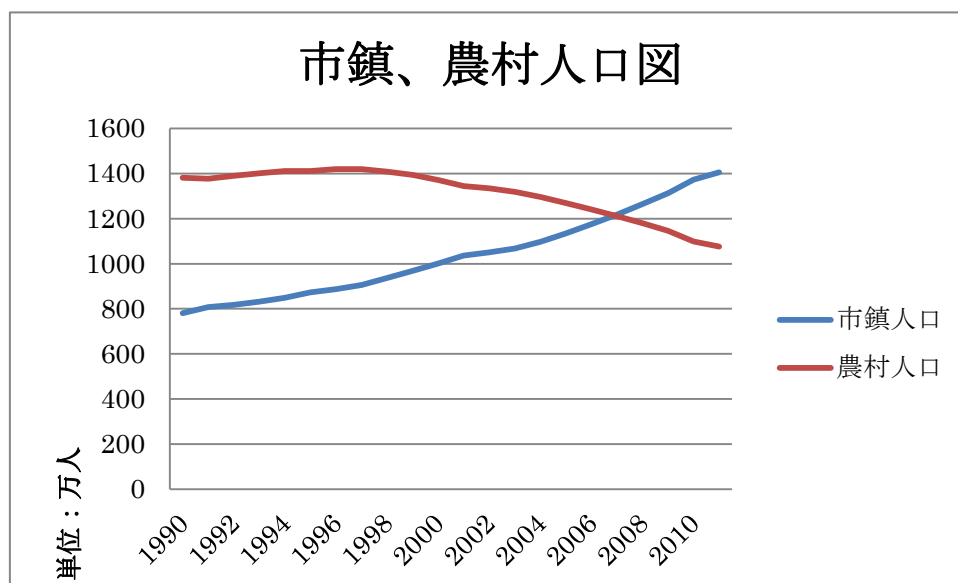
表 17. 内モンゴルにおける市鎮、農村人口変化表

単位：万人

市鎮農村人口	1990	2000	2010
市鎮人口	779.69	1013.88	1372.02
農村人口	1365.96	1361.66	1098.61

出所：2012年内蒙古統計年鑑 p p. 97 により筆者作成

図表 7. 1990年から2010年までの内モンゴルにおける市鎮、農村人口の変化図



出所：2012年内蒙古統計年鑑 p p. 98 により筆者作成

以上のように、市鎮における人口は、10年ごとに大幅に増加しつつある。すなわち、26%増加していることが分かる。一方、農村における人口は、2000年になると、少々減少する傾向が現れ、2010年になると大幅に減少している。すなわち19%減少している傾向がある。さらに1990年から2010年までの市鎮、農村人口の図からわかるように、2000年をさかい

に、急激に変化しているのが一目瞭然である。また筆者の地元であるホルチン中旗のある村の2000年の人口は1200人、今年の2016年に1080人になっている。このように農村人口は大幅に減少していることが分かる。その減少の大きな原因は、前述したように出稼ぎによる都会への移住である。もう一つの理由としてあげられるのは、農村の収入アップや2003年の国家から大学への拡招(募集を拡大する)政策による大学進学人数の増加である。以下では、1990年以降の大学や専門学校への進学者の変化を確認したい。

表 18. 内モンゴルにおける大学、中専、高校進学人数変化表 単位：万人

教育状況	1990	2000	2010
大学本科	10.83	24.47	91.99
大学専科	20.90	65.88	160.20
中専 ⁴³	42.97	89.66	
高校	173.07	237.22	373.69

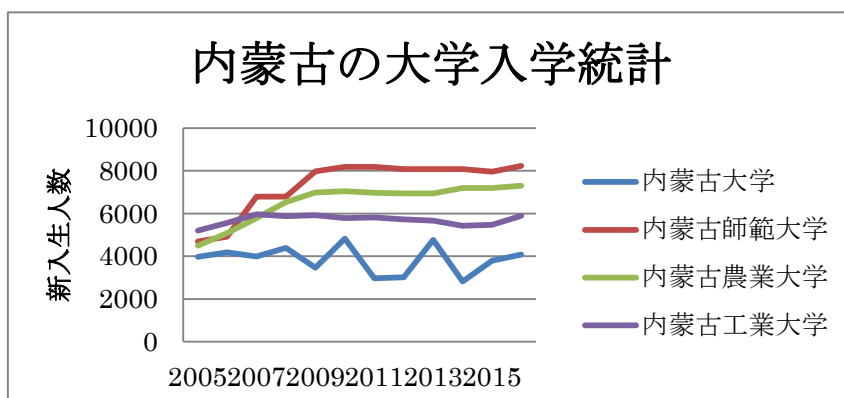
出所：2012年内蒙古統計年鑑 p p. 97により筆者作成

大学本科とは、国立大学をさし、2000年と2010年の大学入学者の人数を確認してみると、2010年の大学入学者人数は、2000年の大学入学者の4倍弱増加している。大学専科とは、主に私立学校や専門学校を指す。2000年と2010年の進学人数を確認すると、2010年の入学者の人数が2000年の入学者人数より25倍増加したことが分かる。更に、内モンゴルの四つの大学の2005年以降の入学人数を以下の図表で作成してみると、内モンゴル大学を除くと、他の大学の進学率は増加する一方であることが分かる。

⁴³つまり専門学校を指す。中学校を卒業後、試験を通して、中専に入学し、2年から3年の学年である。様々な分野の専門があり、主に、教師、会計の専門が多い。2002年から解除された。

図表 7. 内モンゴルの大学の新生入学生統計

単位：人



出所：各大学のホームページより筆者作成

3.2 業者の隆盛

以上のように、21世紀を迎えた中国は経済、外交、教育の方面で急激な発展や成長を見せた。2000年以前の結婚披露宴は地元で実施し、結婚披露宴に使う道具や男性側から女性側に贈るもの、女性側が男性に贈るものは全部手作りであった。つまり、当時自給自足時代で、手作りのものが主だった。しかし、2000年以降になると、農村にレストランが作られ、自動車でも新婦を迎え、結婚披露宴の全般を業者に頼むようになった。さらに、モンゴル人（漢族も行っ場合もあるが少ない）は都会のレストランにおいて結婚披露宴を「モンゴル風」で実施している。ではなぜ、結婚披露宴まで「モンゴル風」で実施するようになったのか。それは、国家の民族政策と関係があると思われる。

2003年胡錦濤出席は、第10期中国政治協商会議第一回会議に参加した少数民族委員と会見したとき、「共同団結奮闘と共同繁栄発展」を新世紀新段階における民族工作の主体として提議した。そして、四つの主要任務を提示した。①科学的発展観を確立し、実行し、少数民族と民族地方の経済社会の発展を加速させること、②民族地方の人材開発と少数民族幹部陣営を強化すること、③民族の団結を強化し、祖国の統一を擁護すること（段 2008：265）。このように、国家主席から、民族地方の経済発展を重視し、民族政策に力を入れた。更に「国家は少数民族の文化を重視し、保護し、少数民族の優秀な文化の継承・発展とイノベーションを各民族の文化交流を行うことを奨励する」と主張した（段 2008：267）。前述したように、国家主席から、少数民族の経済発展に力入れながら、民族文化継承や発展を重視した。そして、少数民族の進学、産児、農業、商業育成政策など民族の優遇政策をも実施し、民族文化、観光文化の発展を奨励した。

21世紀に入ると、ユネスコが全世界で非物質文化遺産の保護に力を入れた。それによっ

て、民族集団やエスニック集団同士の線引きに使われていた「嫌われ者」は、一気に全世界の人々が享受できる富となった。中国は、この非物質遺産の選定作業を実施した。中国は多元的な文化という枠組みの中で、少数民族も自民族の文化を発展させる一定の放擲空間を手に入れた。内モンゴル自治区の少数民族も全国各地の人々とともに非物質文化遺産に力入れた（内モンゴルを知るための 60 章 45 : 297）。以下では、具体的な国家非物質文化遺産あるいはどのようなものは非物質文化遺産に登録されたのか、『通遼市文化誌』を取り上げて見ていきたい。

『通遼市文化誌』によると、21 世紀以降、通遼市政府の『通遼市 2004—2010 年ホルチン文化大都市建設発展項目』で、市の 6 の国家級文物保護単位、25 の自治区級文物保護単位、10 の非物質文化遺産が国家級の非物質文化遺産に登録され、21 の自治区級文化遺産に登録された。そして「ホルチン草原旅行」といった、ホルチン芸術祭、哲里木（通遼市旧名）競馬祭、大青沟旅行祭、安代芸術祭、草原文化祭などの祭りを行うようになった（通遼市文化誌 2008 : 1—4）。2007 年にホルチン婚姻習俗は、自治区級非物質文化遺産になり、2008 年に国家級非物質文化遺産に登録された。そして 2010 年に、上海世博の舞台でホルチン婚姻習俗は舞台劇の形で出演することが出来た（阿 2010 : 32）。オロドス市では、2006 年までに 57 項目の文化が、国家級文化遺産に登録され、35 項目の文化が自治区級の文化遺産に登録された。その中で、オロドス婚礼は、全国の 20 以上の省・市・区や 10 以上の国々で出演し、大きな成功を博している（張路 2007 : 1—3）。このように、国家民族政策に伴い、内モンゴル各地における民族の文化、観光事業が著しく発展を遂げた。特に、民族文化は非物質文化遺産に登録され、世間の人々の注目を浴びている。其中で、婚姻習俗は国家非物質遺産になるにつれ、モンゴル族さらに漢族まで、結婚披露宴を「モンゴル風」で華やかに実施するようになっている。

第四節 小括

本章では、現代「農耕モンゴル人」の婚姻習俗の事例を提示し、その事例を第二章で提示した 2000 年以前の婚姻習俗の事例と比較してみた。その結果、現在は結婚披露宴を、地元で一度実施してから、都会の勤務地で再び実施する人が多くなってきた。すなわち結婚披露宴は婚姻習俗の中で重要な地位を占め、それを全部業者に頼むようになっている。その理由としては、2000 年以降の国家の各政策下での著しい経済発展により、現代の農耕モンゴル人は、出稼ぎ、進学（特に大学進学）が増加し、地元で暮らす人は激減している点が挙げられる。そして、婚姻習俗の簡略化、業者の多様化、特に大卒者が勤務地で結婚披露宴を実施する際には、民族衣装を着用したり、民族食品を用意したり、そのほかにも馬頭琴の演奏やモンゴル文字の使用などモンゴル民族に特徴的な要素を取り入れている結婚披露の流行の傾向が現れている。このように婚姻習俗の変化の原因を整理してみると、そ

れは国家の経済発展と関連し、経済発展に伴い業者が頻出し、様々なタイプのサービスを提供できるようになったためと思われる。そしてまた、民族風で結婚披露宴の実施が流行しているのは、国家の民族政策や、インターネット、情報発信と関係があると思われる。

以上のような背景を持ち、モンゴル民族の文化の中で、国家非物質文化遺産に登録されたものも多数現れてきた。特に、オロドス婚姻習俗、ホルチン婚姻習俗は国家級非物質文化遺産に登録されたことに伴い、中国各地域や外国に演出の形で広まるようになり、多くの人々の心をつかみ感動させた。それでテレビ番組の司会者、オボ祭りの司会者たちは、「民族風」の色合いを入れた結婚披露宴を司会するようになったのではないかと思われる。その詳細を、第四章で都会における「モンゴル風」の結婚披露宴の事例を提示し、その実態を解明していきたい。

第四章：司会業の隆盛にみる都市発の「伝統文化」の創出傾向

筆者は第三章で、現代「農耕モンゴル人」の婚姻習俗の事例を提示し、その事例を第二章で提示した2000年以前の婚姻習俗の事例と比較してみた。その結果、現在は結婚披露宴を、地元で一度実施してから、都会の勤務地で再び実施する人が多くなってきた。すなわち結婚披露宴は婚姻習俗の中で重要な地位を占め、それを全部業者に頼むようになっていくことが明らかになった。その理由としては、2000年以降の国家の各政策下での著しい経済発展により、現代の農耕モンゴル人は、出稼ぎ、進学（特に大学進学）が増加し、地元で暮らす人は激減している点が挙げられる。特に大学卒者のモンゴル人は結婚披露宴を「モンゴル風」で華やかに実施しているのが興味深い。ではそのような結婚披露宴を企画している司会者や文化メディア会社の人はどういうようにして結婚披露宴の舞台を装飾し、流れを作っているのか。本章で「モンゴル風」の結婚披露宴の司会者と業者の事例を取り扱い、司会者はどのように、結婚披露宴を企画し、モンゴル族の諸要素をどのように取り入れようとしているのかを解明していきたい。そして司会者が言う結婚披露宴に取り入れた「伝統文化」とは何を指しているのか、そして都市ではどのように「伝統文化」を創出しているのか。

第一節 都市「農耕モンゴル人」の司会業

筆者は、2012年から2016年までの四年間で、結婚披露宴の前後の過程の流れに参与調査を行い、結婚する本人、結婚する本人の家族に対して聞き取り調査を実施した。第三章1.2事例1、事例2を見ていくと、都会のモンゴルレストランにおいて、モンゴル族の司会者を頼んで、結婚披露宴を実施している。では、モンゴル人の司会者はどのような思いで、ど

のようにしてモンゴルの文化を結婚披露宴に取り入れたのか。以下では、筆者は2015年10月から11月まで、東モンゴル地域のモンゴル人で司会業を営んでいる人々に内モンゴルの首都フフホト市、通遼市、ホルチン中旗舎伯吐鎮において、聞き取り調査した事例を取り上げたい。まず調査地選択の理由は以下の通りである。

フフホト市は、内モンゴル自治区の首都で、政治、経済、文化、教育等の中心都市であり、モンゴル語で「青い城」と言う意味を表す。教育の中心地であるがゆえに、内モンゴル大学、内モンゴル師範大学、内モンゴル農業大学といった有名大学が多く存在している。それらの大学は、内モンゴルの各地域さらに自治区県外のモンゴル民族高校から入学するモンゴル人教育の中心となっている。第三章に提示した表を参照すると、2005年からフフホト市における各大学の入学人数が急増していることがわかる。そのようなモンゴル人学生の急増にともない、フフホト市では、モンゴル人向けのさまざまなサービス業が展開されている。たとえば、モンゴル民族料理店、モンゴル族の民族衣装の販売店、モンゴル族の写真屋、民族生活用品店、馬頭琴教育の塾、「モンゴル風」結婚披露宴会社、モンゴル族の司会者塾などが現れている。

筆者はフフホト市において、結婚披露宴の司会業を調査した結果、30人近くの司会者・文化メディア会社がいる。その中で25人近くの司会者は、東地域出身のモンゴル人である。フフホト市の各大学でのモンゴル人学生の中で、80%は東地域のモンゴル人である。このように、東モンゴル人は内モンゴルの大都会で、非常に活躍していることがわかる。東モンゴル地域のモンゴル人の中で、通遼市には42.27%の割合を占めるモンゴル人がいる（第一章の第一節1.2の表1を参照）。このように、東モンゴル地域では、通遼市はモンゴル人が一番多い地域で、内モンゴル民族大学という有名な大学があるため、通遼市にはモンゴル人大学生も多くいる。そしてモンゴル料理店、モンゴル族の写真屋が多くあり、さらに近年モンゴル族の司会者や「モンゴル風」の結婚披露宴の会社が盛んになっている。

筆者の調査では、フフホト市、通遼市といった都会では、司会業が発展していたが、ホルチン中旗にはまだ発展していなかった。ただし、ホルチン中旗の中で、舎伯吐鎮に2015年から「モンゴル風」結婚披露宴会社ができたということを通遼市の司会者から聞き、舎伯吐鎮に調査地域対象にした。

1.1 フフホト市における司会業

司会者の事例

王金河氏は53歳（1962年生まれ）の男性。第三章の第一節の1.2事例1の杭氏の結婚披露宴の司会者である。内モンゴル通遼市庫倫旗出身で、内モンゴル財經大学を卒業し、現在内モンゴルの呼和浩特市における内モンゴル民政局婚姻登記所に勤めている。彼は、婚

姻登録所に勤めているので、ほぼ毎日新婚者たちと面を合わしている。仕事の関係で、新婚者たちに結婚証明証を配りながら、結婚披露宴の司会をしたいとずっと考えていた。1992年に友人の結婚披露宴を司会してから、彼の知名度は高まり、たくさんの宴会を司会するようになった。司会を始めたころは、新郎新婦にイルゲルウゲ（めでたい言葉）を言うぐらい単純な方法で司会していた。当時結婚披露宴にモンゴル族の各習慣を取り入れてなかった。しかしだんだん人々の生活状況や認識が高まってくるにつれて、そのような単純な司会方法では時代から遅れると思い、結婚披露宴でもっと多くのモンゴル族の文化を取り入れようと決心した。そこでモンゴル族の密史、チンギスハーンの諺、モンゴル習慣、モンゴル人向けのテレビ番組、モンゴル文化雑誌、『モンゴル文化通史』、彼自身の東地域の経験、年配の人へのインタビューなどを参照し、モンゴル族の文化の中で一番特徴となると思った17の習慣を結婚披露宴に取り入れたのである。そしてモンゴル民族の独特の披露宴を企画した。そして彼は、仕事の休みの期間を利用し、司会を副業としてやるようになった。彼は現在結婚披露宴の司会だけではなく、誕生日会、歳の祝いなど各宴会を中国語、モンゴル語両方で司会している。王氏の飾った舞台の装飾品を以下のように示す。



写真7. 司会者王氏の舞台の装飾

真8. レストランの中に置いているモンゴルゲル

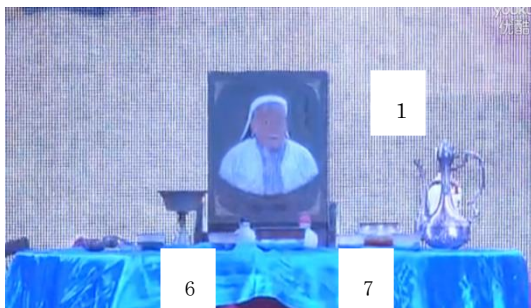


写真9. チンギスハーンの像

写真7、写真8、写真9を参照してみると王氏の舞台の装飾には、七つの要素が入っている。それは、①チンギスハーンの像②ハダック③スルデ（モンゴル族の剣）④モンゴル食⑤トラガ（火が燃えているなべ）⑥フフル（嗅ぎタバコ）⑦モンゴルゲルなどを結婚披露宴を司会するとき並べている。王氏の話では、スルデを白色と黒色両方入れたが、白色は、平安を祈り、黒色は悪いものをなくすという意味で使っている。モンゴル人は昔から、ホリム（婚姻習俗）行うときにはいつも、妖怪がついているという話があるので、黒いスルデをおくことによって、妖怪を除外している意味でつけた。

では、王氏は結婚披露宴の司会の流れではどのようなモンゴル族の要素を取り入れているのか。王氏は司会の全部の流れを言わずに、直接取り入れたモンゴル族の諸要素を言ってくれた。

表 19. 王氏の司会の流れの諸要素

①ボルハン、テンゲリ、ダガン、ムルグホ、ボッタエジェンムルグホ（天、チンギスハーンにお辞儀する）
②サチョリハヤホ（モンゴル食を天地に挙げる）
③ヘイモリ、マンドラゴラホ（運をよくする）
④ブヘイン、ソヨルイ、マンドラゴラホ（シャーマンを演じる）
⑤サガダゴ、エグレジョ、ピリトサホ（弓を背中にし、嫁を迎いに行く）
⑥ガルイン、ボラハン、ダガンムルグホ（火の神様にお辞儀する）
⑦エジョンボッタ、アボエジ、ダガンムルフホ（両親にお辞儀する）
⑧エヘイン、チャガン、スウギ、ハリゴラホ（母への授乳期の感謝）
⑨新郎新婦をイルゲホ（めでたい言葉を言う）
⑩チャガン、イデゲアマサゴラホ（白い色のモンゴル食を味わう）
⑪フフル、ソリチャゴラホ（嗅ぎたばこを交換する）
⑫新郎新婦がニゲ、トゴガンエチェ、ボダガ、イデゲホ（一つの容器から食事する）
⑬ボッダイン、ソルガル、フルテゲホ（チンギスハーンのいった言葉で新郎新婦に教える）
⑭ウグデ、ダラホ儀式（モンゴルゲルに入る邪魔をする行為）
⑮新郎新婦はモンゴルゲルに入る
⑯ フルゲンホビチラホ（新郎にモンゴル族の伝統的な飾り物をつけてあげる）。
⑰ 新郎お互いにお辞儀する。

では、王氏は、以上の17の習慣をどのような思いで取り入れたのか。以下では王氏の各習慣の説明を取り上げていきたい。

- ① ボルハン、テンゲリ、ダガン、ムルグホ、ボッタエジェンムルグホ（天、チンギスハーンにお辞儀する）

王氏の話によれば「モンゴル人は天の力に浴して、天の恩恵をもらい、天の後代として伝わってきた。そのため、天の神様にお辞儀し、今後のよりよい生活を祈るのである」。

- ② サチョリハヤホ（モンゴル食を天地に挙げる）

王氏の話によれば「モンゴル人は昔からイベントや祭り、記念のできことの際に、手に牛乳を入れたバケツを持ち、10方向の天の神様に対して、牛乳をまき、物事が順調に行われ、より良くなっていくのを祈る行為をした。たとえば私は子供のころ、遠く出かけるときいつもお祖母から、サチョリハヤホ（モンゴル食を天地に挙げる）行為を行っていた。私はこの習慣を結婚披露宴に取り入れ、新婚夫婦の今後の新生活のめでたいことを祈っている意味を表している」。

- ③ ヘイモリ、マンドラゴラホ（運をよくする）

王氏の話によれば「これはモンゴル人の偉大な習慣である。その意味としては万事が順調に実施できるようにと祈るのである。モンゴル人はいつもブヘイ（モンゴルのシャーマン）からイルゲル（めでたい言葉）させてもらっていた。私は結婚披露宴で、馬頭琴手にトメンアッタン、ツベレゲン（一万匹の馬）という曲を演奏させてもらい、ヘイモリ、マンドラゴラホという意義を表し、新郎新婦、参加者たちの今後の運がさらによくなり、物事が順調に行われるようにと祈っている」。

- ④ ブヘイン、ソヨルイ、マンドラゴラホ（シャーマンを演じる）

王氏の話によれば「これはモンゴル人の宗教で、昔から信じられてきた。そしてブヘイ（シャーマン）だけは天の神様と会話でき、天の神様の教えを人間に伝える能力がある。そしてブヘイは魔除けをする能力もあると言われてきた。モンゴル人の間では、結婚披露宴に限ってお化けがついてくるといううわさがある。そのため私は結婚披露宴でブヘイを演じ、ブヘイの動作をまねして、結婚披露宴についてきたあらゆるお化けを除害している意味を表している」。

- ⑤ サガダゴ、エグレジョ、ビリトサホ（弓を背中にし、嫁を迎いに行く）

王氏の話によれば「この習慣は東モンゴル地域にある習慣である。現在でも東モンゴルの牧畜地域で行われている。モンゴル族では男性が結婚する際に、その男性の力を試してみる習慣があるのである。たとえば、弓を引かせる、羊の首をひねらせる、羊の足の骨をひねらせて中の汁を出してもらおうといったことを通し、男性としての力を試す習慣である。私の企画した結婚披露宴の司会では弓を引かせて男性の力を試す儀式を選んだのである。その理由は、レストランの舞台では、新郎は羊の首や足骨をひねる儀式は不可能と思って、

新郎に弓を引くふりをさせて、新郎の力を試している意味を表す。また昔は草原で新郎は新婦をモンゴルゲルから、馬に乗って迎えていたが、レスランの舞台で馬に乗るのは、不可能なので、新郎は馬のタシゴル（馬の鞭）を手に持ち、馬を代表させ、新婦を迎えに行くのである」。

⑥ ガルイン、ボラハン、ダガンムルグホ（火の神様にお辞儀する）

王氏の話によれば「これは男性側の結婚披露宴では非常に重要である。火の神様に新人として増えた嫁を紹介してあげて、今後この家の火の神様のお世話になると願っている。そしてこの儀式を通して、新婦はこの家のガルゴロマラタ、ダガン、ジャラゴマジラホ（子孫後代をつなげていく）という意味を表している」。

⑦ エジョンボッタ、アボエジ、ダガンムルフホ（両親にお辞儀する）

モンゴル人は正月や結婚披露宴に両親にお辞儀する習慣がある。「現在はエジアボ、ダガン、ムルグホ（両親にお辞儀する）という儀式の形が変化している。自宅で結婚披露宴を実施していた時、新郎新婦が両親にひざを曲げてお辞儀していたが、現在はヨソラホ（体を45度ぐらいまげてお辞儀）になっている。しかしその両親を尊敬しているという意義は変化していない。新郎新婦が両親にお辞儀して両親からイルゲルウゲ（めでたい言葉）もらうことで、今後のより良い生活を祈る」という。

⑧ エヘイン、チャガン、スウギ、ハリゴラホ（母への授乳期の感謝）

人間はこの世に生まれて母乳を飲んで、徐々に育っていき大きくなるのである。要するに母より子供にあげる授乳する期が一番大切で、感謝すべきであるとモンゴル人の中に伝わってきた。結婚披露宴に、新郎新婦から母にプレゼントを用意し、その上にハダックを被って、その上に牛乳をおき、母に挙げて、新婦の赤ちゃんの頃の授乳してくれた母に感謝しているという気持ちを表している。現在エヘインチャガンスウギハリゴラホ（母への授乳期の感謝）は現在男性側の家で行う場合もあれば、結婚披露宴の舞台で実施する場合もある」。

王氏はチンギスハーンの本を参照した内容をエヘイン、チャガン、スウギ、ハリゴラホ儀式に使っている。それは、チンギスハーンの妹が結婚する際に、チンギスハーンが、娘にたいして言った「必ず実家の美德をもち、嫁ぎ先の稼業を発展させる」という偉大な言葉である。王氏は新婦の母の代わりにチンギスハーンの本の言葉をかりて、新婦に伝えている。

⑨ 新郎新婦をイルゲホ（めでたい言葉を言う）

イルゲルウゲとは、年輩や目上の方が後輩の方にめでたいことを言う行為を指す。ムンヘ氏の話によれば「それはモンゴル族にしかない習慣で、年配の方は後輩の人に対し、めでたい言葉で、今後はかがやかしい人生を送るようにと伝える。モンゴル人は親切で、心が優しいので、いつも自分よりも他人を優先的に考え、よいことをみんなと一緒に分け

合うのを好む。女性が一生一度しかない大事な結婚披露宴にイルゲホをして彼女の今後の輝かしい生活を祈っているのである」。

⑩ チャガン、イデゲアマサゴラホ（白い色のモンゴル食を味わう）

王氏の話によると「モンゴル人は客を招待する時、チャガンイデゲ（白い色の食）を最初にだし、おもてなしをする。モンゴル族のチャンイデゲは天然で無添加安全な食べ物である。チャガンイデゲを出し、純潔な恋愛、純潔な人生、純潔な友情、純潔な家庭になっ
てほしい、あらゆる物事はチャガンイデゲのように純潔になるようにと祈っている」。

⑪ フフル、ソリチャゴラホ（嗅ぎたばこを交換する）

王氏の話によると、「モンゴル人は昔国と国の間で、国の代表人物同士は、相互にフフル、ソリチャゴラホをし、平和を祈っている意味を表す。また久しぶりに会う友人の間では、フフル、ソリチャゴラホをする。欧米式の結婚披露宴では、新郎新婦はガラスにワインを入れて交換するが、私はモンゴル人として結婚披露宴に嗅ぎたばこを交換すべきであろうと思った。それは、新婚夫婦や両側の家族、親戚たちの親交を祈っている意義を表すため、この習慣を結婚披露宴の舞台に取り入れたのである。

⑫ 新郎新婦がニゲ、トゴガンエチェ、ボダガ、イデゲホ（一つの容器から食事する）

王氏の話では「この習慣は主に東モンゴル地域⁴⁴で昔から結婚披露宴に実施していた。新郎新婦一つの家族になるためにまず、一つの容器からごはんを食べる。そして正式に夫婦になり、新生活を始めさせるという意味である。私の場合はトラガ（火）の上に容器を乗せ、その中にお茶を入れ、さじで新郎新婦に一口ずつ味わわせて、今日から一つの家族になったという意味を表している」。

⑬ ボッダイン、ソルガル、フルテゲホ（チンギスハーンのいった言葉で新郎新婦に教える）

王氏の話によれば「結婚披露宴には司会者から新郎新婦にめでたい言葉を言うのが一般的である。私の場合は新郎新婦に対して、チンギスハーンのことを借りて、歴史的な意義を含めて、伝える。それは、チンギスハーンがあらゆるモンゴル人に対し、自分の領地を守り、自分の嫁を守り、自分の後代を守り、年輩を尊敬し、友人を大切にすると伝えていたということわざを借りて、新婚夫婦に伝える。

⑭ ウグデ、ダラホ（モンゴルゲルに入る邪魔をする行為）

⁴⁴通遼市、赤峰市、ヒンガン盟の他その周辺の遼寧省や吉林省、黒竜江省に暮らすモンゴル人をまとめて「東モンゴル人」と呼ばれることがあり、農耕モンゴル人の総括したニュアンスが含まれている「ボルジギン・ブレンサイン 2003」

王氏の話によれば「新郎はモンゴルゲルから新婦を迎えに行く際、若い男女たちが新郎にいろいろな冗談の言葉を言い、新郎を邪魔する行為をする」。

⑮ 新郎新婦はモンゴルゲルに入る

王氏の話によれば、「漢民族は結婚披露宴の最後に新婚夫婦は二人きりの新部屋に入る儀式があったように、私は、モンゴル人の新婚夫婦は結婚披露宴の最後にモンゴルゲルに入るという儀式を作り、モンゴルゲルで新生活が始まるという意義を示している、モンゴルゲルはモンゴル人の昔から生活に欠かせないものなので、舞台に入れて、モンゴル風にした」。

⑯ フルゲンホビチラホ（新郎にモンゴル族の伝統的な飾り物をつけてあげる）。

王氏の話によれば「東地域のモンゴル人は新郎に新しい服を着せ、赤い色の帯にハダック、たばこの袋などをつけてあげる習慣がある。しかもベルゲン（新郎や新婦の兄の妻）がつけてあげる決まりがある」。

⑰ 新郎新婦お互いにお辞儀する。

新郎新婦お互いに軽くお辞儀する行為を指す。「このような儀式は漢民族や他の民族にもある。しかし司会者によって、説明も異なると思う、新郎新婦お互い同士の大切な宴会に、お辞儀する行為でお互いを尊敬しているという意味を表す。それは新婚夫婦が今後お互いに仲良く、尊敬しあっていくことの始まりである。」



写真 11. 王氏の舞台の装飾



写真 12. ウグデダラホ儀式



写真 13. 新郎弓を背負っている姿



写真 14. 新郎新婦チンギスハーンの像に拝礼



写真 15. 新郎新婦から母への授乳期の感謝

写真 16. フフルを交換する



写真 17. 新郎新婦は一つの容器からごはんを食べる。写真 18. 新郎新婦ゲルに入ること

王氏は、フフホト市で一番有名なモンゴル族の司会者であり、フフホト市以外の内モンゴルの各地域、さらに県自治区外の北京といった大都会にも招待され、結婚披露宴の司会を担当している。王氏は、①③⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬習慣をモンゴル族に普遍的に存在している習慣から自分なりの意思をこめて作ったという。すなわち、テレビ宣伝や本に記載しているものを取り入れて、めでたい意味で表している。たとえば、モンゴル族のチャガンイデゲ（乳製品）を結婚披露宴に取り入れて、純潔な愛、純潔な人生、純潔な友情、純潔な家庭という意味をこめている。そして白い色のスルデを平和の意味、黒色のスルデは悪いものをなくすというそれぞれを王氏は自分なりの意思を入れ込めて舞台に取り入れている。②④⑤⑫⑭⑯の習慣を王氏は、東モンゴル地域出身なので、自分の地域の文化を自分で経験したこと、年配から聞いた話をまとめて、自分なりの意味をこめて取り入れている。⑩⑮⑱の習慣は、漢族の結婚披露宴で実施していたものを、モンゴル族の要素を取り入れて、「モンゴル風」にしたという。このように、王氏は「モンゴル族の特徴」となる文化、「東モンゴル文化」、「漢族のものをモンゴル要素」と入れ替えるという三つの手段で結婚披露宴の全体を作っていると思う。王氏の話では「私はモンゴル族の婚姻習俗の一番特徴となる文化を結婚披露宴に取り入れたので、どこの地域にも当てはまる。そのため、いつでも、誰にも文句を言われたことがない」という。では王氏が言う「特徴となる伝統文化」、モンゴル要素と何を指しているのか。本章の3.1で解明していきたい。

筆者は 2015 年 10 月にフフホト市で調査を行ったとき、王氏を通じて、多くの司会者と知り合った。そして、彼らとモンゴルレストランで食事しながら、現代の都会におけるモンゴル族の結婚披露宴のことを話した。現在はフフホト市在住のモンゴル人、さらに漢民族もモンゴル人の司会者を呼び「モンゴル民族の特徴」となる結婚披露宴を実施していることがわかった。そして王氏から婚礼文化メディア会社⁴⁵を建てた必席日楽図氏を紹介してもらった。必氏は、結婚披露宴の舞台の装飾や司会の流れを作るとき、主に、王氏と相談し、つくったという。そして主に、東モンゴル地域の特徴をもっているという。



写真 19. 筆者は司会者の手伝い人役をしている。



写真 20. 筆者は司会者の手伝い人役をしている。

⁴⁵結婚披露宴や宴会などを企画する会社を指す

婚礼文化メディア会社の事例

必席日楽図は、34歳の男性、通遼市奈曼旗出身である。第三章の1.2事例2張氏の結婚披露宴の司会者である。現在フフホト氏のテレビ局に勤めている。必氏は、2009年に内モンゴル民族大学を卒業した。卒業後フロンボイル市に就職した。必氏のお爺さんは、有名なホゴールチン（楽器を弾く人）ので、必氏も子供のころから、ホゴールタタホ（楽器を弾くこと）が優れていた。大学時代に、宴会にホゴールタタホをしていた。2014年に必氏は、フフホト市に行き、妻と文化メディア会社を建て、宴会、結婚披露宴などの舞台を装飾し、司会をしている。現在モンゴル人のお笑い芸人としても有名である。必氏の舞台装飾、写真を参照すると、チンギスハーンの像、ジョラ（蠟燭みたいなもの）、ハダック、スルデ、トラガ、モンゴルゲル、弓の飾り物などを舞台に飾っている。王氏の舞台装飾と変わらぬ要素が並べている。それら舞台装飾品の選択性については、必氏は「年配の王氏と相談し、テレビや本から見た民族特徴となるを取り入れた」という。確かに、必氏の舞台の装飾を見てみると、ジョラ（蠟燭みたいなもの）、弓の飾り物以外は全部王氏の舞台装飾と同じである。必氏の結婚披露宴の司会の流れを表で並べると以下のようなになる。

表 20. 必氏の司会の流れ

① 馬頭琴を引いて宴会を開始する。
② 司会者は舞台上がり宴会を始める言葉を言う。
③ 新郎と添い婿が舞台にあがる
④ 司会者は新郎と添い婿とチンギスハーンの像に酒上げ、線香をつけ、新婦を迎える途中での安全を祈る。
⑤ ウグデ、ダラホ儀式。二人のベルゲンはモンゴルゲルの前に立つ。モンゴルゲルの中に新婦が座っている。
⑥ アラドアマンウリゲル＝ホロバガウゲ（民間話の講演）
⑦ 司会者から新郎新婦をイルゲホ
⑧ 新郎新婦がチンギスハーンの像の前に、蠟燭をつけてから、お辞儀する。
⑨ 新郎新婦が両親にお辞儀する
⑩ 新郎新婦が火にお辞儀する
⑪ 新郎新婦が客に拝礼する
⑫ 司会者はホゴールタタホする。
⑬ 舞台上に歌手や踊り者は歌ったり、踊ったりする。



写真 21. 馬頭琴を引いて客を歓迎している



写真 22. 四人の代東①スルデ②トラガ



写真 23. 新郎、添い婿の舞台への登場



写真 24. サガダゴモラダホ



写真 25. ウグデダラホ儀式



写真 26. チンギスハーンの像 (③はンギスハーンの像④はハダック)



写真 27. 結婚披露宴の舞台の飾り



写真 28. 新郎新婦チングスハーンにお辞儀する



写真 29. 新郎新婦両親にお辞儀している



写真 30. 新郎新婦火にお辞儀している



写真 31. 披露宴での歌手



写真 32. 司会者はホゴールタタホする

必氏の司会者の流れは王氏の司会の流れの要素に含まれているが、⑥と⑫を東モンゴル地域の文化とう。必氏は「現在モンゴル族の特徴となる結婚披露宴ははやっているの、私は特徴となる部分を入れた。ホゴールタタホこと（ホルチン人にふるさとの楽器でホゴールをタタホしてあげる）と、アラドアマンウリゲル=ホロバガウゲ（民間話の講演）はホルチン地域の文化を取り入れた。そしてホルチン人の言葉は西地域の言葉と違うので、ホ

ルチン言葉で司会している」そうである。筆者の知っている限りでは、アラドアマンウリゲル＝ホロバガウゲとホゴールタタホは東地域の宴会などでよく現れていた。たとえば、筆者が調査した1950年代以降の事例では、ホゴールタタホするのが、披露宴前後の過程でよく現れていた。筆者は1990年代の結婚披露宴に参加していたときに、ホゴールタタホをしながらアラドアマンウリゲル＝ホロバガウゲ（民間話の講演）をしていたことがよくあったと記憶している。

第三章の1.2事例2の張氏の結婚披露宴の司会では、必氏は「光荣及び尊敬すべき両親…略…遠くから来られたお客様皆様ご機嫌いかがでしょうか（ホウサインシイイイ（モンゴル語の東地方の弁））」。また中国語で「尊敬的各位来宾、女士们先生们大家晚上好、…略…表示满意热烈的欢迎」中国語の発音をわざとモンゴル語のアクセントに入れ、客を笑わせている。そして、ウグデ、ダラホ儀式に、二人の司会者のアラドアマンウリゲル＝ホロバガウゲ（民間話の講演）といったホルチン地域の民間話で、笑いの意味を込めている。このように、必氏の司会は、「モンゴル族の特徴的文化」と「ホルチンモンゴル文化」を合わせて、結婚披露宴を司会している様子が伺える。

1.2 通遼市における司会業

筆者は、2015年11月に通遼市に調査に行ったとき、モンゴル人の司会者であるオドントヤ氏と知り合った。彼女の紹介で、多くの司会者や婚礼文化メディア会社の人と知り合った。通遼市に3軒の婚礼文化メディア会社があって、10数人のモンゴル族の司会者がいるという。筆者は、5人の司会者たちと一緒に食事しながら、近年のモンゴル族の結婚披露宴のことを話した。彼らの話では通遼市に2012、13年から、モンゴル族の結婚披露宴が「モンゴル民族風」で実施するのが流行してきた。以下では何人かの司会者の事例を取り上げていきたい。

司会者の事例

オドントヤ氏は、32歳の女性。通遼市扎魯特旗出身で、2003年オロドス市幼児師範大学を卒業し、2004年通遼市テレビ局の蒙漢新聞放送局に就職した。彼女は在学時から、司会の才能があったので、仕事の合間を利用し、豊富な語学力に生かして、宴会を司会している。

オドントヤ氏の話では「通遼市でのモンゴル風の結婚披露宴は、ほとんど二人の司会者がいる、私は中国語で司会を担当し、もう一人のモンゴル語の司会者がいる。私は地域の民族習慣を尊敬して司会している。民族特色の現代婚礼は現代社会の発展に伴って、もっと良くなる傾向がある。しかし、現在通遼市でモンゴル風の結婚披露宴の舞台の装飾や民

族特色は単一で、ほとんど類似している。お互いの模倣があり、オリジナリティーがない問題点が存在している」。筆者は通遼市へ調査に行ったとき、オドン氏は10月28日に、ヒンガン盟のウランホト市（通遼市からウランホト市までは、車で6時間ぐらい離れている）に移動して司会していた。このように個人の司会者は内モンゴル各地域の司会会社から呼ばれることがあるので、各地域に移動して司会しているのである。そしてオドン氏は通遼市の「モンゴル風」の結婚披露宴類似している」「舞台の装飾、民族特色は単一オリジナリティーがない」といっている。それは、結婚披露宴に取り入れた「伝統文化」は普遍的で、新しい「伝統文化」を探る必要があるという意味が読み取れる。

エルデンダライ氏は31歳の男性。赤峰市アルホルチン出身で、2010年内モンゴル民族大学の政治経済学部を卒業し、2011年通遼市テレビ局ラジオ放送センターに司会者として就職した。エルデンダライ氏の話では司会の知識をモンゴル国の有名な司会者であるグレ・バソルとシリソグの有名な司会者のチン・バートルから習得した。二人の先生から主に、イルゲルウゲ（モンゴル族特有のめでたい言葉）を専門として勉強した。彼は通遼市各旗や赤峰市各旗、シリソグ市など内モンゴル各地域に移動して結婚披露宴や宴会などを司会している。エルデン氏の話によると「私は赤峰市の牧畜地域に育ったので、伝統的なモンゴル人の婚姻習俗を分かっていて、年配の方や本などからも勉強している」。エルデンダライ氏は、「近年通遼地域では、ホルチン習俗を重視し、伝統的な婚姻習俗を舞台に取り入れているが多くなっている。また現代人の要求やニーズに合わせ、伝統的なモンゴル人の婚姻習俗を西洋のロマンティックな結婚披露宴と併用し新しい新鮮なものを作り上げている」という。また彼の話では「私の司会の順番や使う言葉は、伝統的婚姻習俗を理解したうえで、歴史的な名句等を引用しながら司会している。私はいくつかの司会会社と契約を結んでいるので、司会者の仕事も彼らから呼ばれる」。彼の司会の流れを以下の表で並べる。

表 21. エルデンダライ氏の司会の流れ

①司会者舞台に上がる
②新郎添い婿舞台に上がる
③司会者と新郎添い婿モンゴルゲルから新婦を迎えに行く
④司会者からイルゲルウゲ言う。
⑤四人のベルゲンエグデダラホ儀式をする。
⑥新郎添い婿、新婦添い嫁舞台に上がり、司会者から紹介する
⑦新郎新婦の両親が舞台にあがる
⑧新郎新婦から両親、客に拝礼する

⑨新郎新婦チンギスハーンにお辞儀する

⑩ 郎新婦火にお辞儀する。

⑪ 頭琴引き、歌を歌う。



写真 33. 司会者のエルデンダライ氏



写真 34. 司会者のオドン、吉、エルデンダライ



写真 35. エルデニ氏の司会や舞台の装飾



写真 36. エルデニ氏の舞台の装飾

写真で提示したように、エルデニ氏の舞台の装飾として、チンギスハーン、スルデ、トラガ、ハダック、モンゴルゲル、テーブルにモンゴル乳製品が置かれている。

エルデン氏は、「牧畜地域に生まれたので、モンゴル族の伝統文化を知っている」、「モンゴル国やシンリンゴル盟の有名な司会者から習った」「年輩の方、本から習った」「伝統的な文化を取り入れている」と言っている。彼の話から牧畜地域の文化はモンゴル人の伝統文化、という考え方がうかがえる。すなわち、牧畜地域生まれの人たちは自分たちこそモンゴル人の伝統文化を保存していて、知っている人間であるという強い見方だろう。

司会の流れについて 3.1 において、考察していく。

吉仁太氏は 28 歳の男性。赤峰市アルホルチン出身である。2011 年内モンゴル民族大学政治経済学を卒業した。卒業後通遼市テレビ局に就職し、主に司会者の仕事をして、お笑い芸人としても活躍した。2015 年仕事を辞職して友人と一緒に婚礼文化メディア会社を建て、2016 年 9 月に個人で婚礼文化メディア会社を建てた。

吉氏はモンゴル風結婚披露宴を司会し始めたきっかけは三つあると言っていた。一つは、モンゴル人は出稼ぎで都会に行くか、大学卒者は都会で就職するなどの原因で、内モンゴルの各地域の都会にモンゴル人が急増した。そこで、結婚する際に、モンゴル風の結婚披露宴を実施しようという人たちが増えたので、その需要に合わせて結婚披露宴の司会会社を作った。二つ目の原因としては、経済的な収入を得たうえで、民族の文化を伝えることもできる。三つ目の原因は、多くのモンゴル人に就職先を提供していくためである。筆者「なぜ通遼市に結婚披露宴の会社を立てたのか」吉氏「近年内モンゴルの各地域では、地域ごとの習慣に合わせたモンゴル風の結婚披露宴の司会会社がたくさんあるが、通遼地域ではあまりなかった。それはホルチン地域は漢人や他の少数民族と混住しており他県省に含まれていた歴史的な原因があり、モンゴル族の文化は、一時的に消失していた。現在はちょうどモンゴル族の文化を再発見している段階である。近年ホルチン地域では、モンゴル人の人口が多く、モンゴル人のモンゴル文化に対する意識が強まっているので、モンゴル風の結婚披露宴だけではなく、モンゴル服、モンゴル族の食べ物、モンゴル風の建物などが増加している。そして今後もますます増加する傾向があることを信じているし、必ずそうなる」。また吉氏に結婚披露宴の舞台の装飾を聞いてみたら、吉氏「自分の牧畜地域で育った経験、年輩の方や先生たちから聞いた話、昔の本などによりつくっている。チャンガンスルデ（白いスルデ）、トラガ、新婚夫婦は結婚することは一番幸せな瞬間なので、モンゴル宮廷のような環境が必要なので、モンゴル要素のものを使って宮廷のように作った。そして、牧畜民のモンゴルゲルとモンゴルゲルの中で日常的に使うものを舞台に取り入れた。それは、男性が使うもの（馬鞍）などを置き牧畜民の生活の状況を見せる。またテーブルに、チャガンイデゲ、羊肉を置く」

吉氏の司会の流れや取り入れたモンゴル族の要素を聞くと以下の表のように言ってくれた。

表 22. 吉氏の司会の流れ

① 新郎添い婿舞台にあがる
② 新郎と添い婿モンゴルゲルから新婦を迎えるすなわちサーダモラダホである。
③ モンゴルゲルの前に四人のベルゲン立ってエグデダラホ儀式をする
④ 新婦はモンゴルゲルから出てきて新郎と会う

⑤ 新郎新婦が舞台上がる
⑥ 新郎新婦を客に紹介し、新郎新婦は客にお辞儀する
⑦ 新郎新婦は両親にお辞儀する。
⑧ エヘイン、チャガン、スウギ、ハリゴラホ（母への授乳期の感謝）
⑨ 新郎新婦が火にお辞儀する
⑩ 新郎新婦がチンギスハーンにお辞儀する。
⑪ 司会者はモンゴル詩を読んだ
⑫ 歌手は歌を歌い、踊り者は踊ったりしていた。

吉氏は「以上の並べた司会の流れは、普遍的に、都会のモンゴル人の間ではやっているが、私は、結婚披露宴で使う言葉に特に力を入れている。たとえば、⑥番の新郎新婦を紹介するとき、新郎新婦の故郷の歴史的な由来、苗字のことを紹介してあげる。そして『モンゴル秘史』で記録しているモンゴル人の男、女性の姿、ありかたはどうであるべきかを伝える。⑦番の新郎新婦は両親に酒をあげ、お辞儀したら、漢人の司会では、両親から改口費（新郎新婦からお互いの両親をはじめて、父、母と呼ぶ）が渡されるが、これは漢人の習慣なのである。それは商売の意味があると思う。牧畜地域、ホルチン地域でも、新郎が女性側に行く際に、女性側の母は新郎にチャガンイデゲ上げる、新婦は男性側に行く際に、男性側の母は、新婦にチャガンイデゲ食べさせるので、私は、舞台上で新郎新婦の母が、新郎新婦に牛乳を飲ませる儀式を取り入れた、⑧番では私は、母は子供を生んでから18歳まで育てたというモンゴル詩を作って、新郎新婦から母への感謝を表す」。



写真 37. 吉氏の舞台の装飾



写真 38. 吉氏の結婚披露宴舞台の装飾

吉氏は、彼自身が牧畜地域に生まれたので、舞台の装飾に、牧畜生活に使っていたものを取り入れたという。そしてモンゴル民族の本、歴史の本から、地域の歴史、モンゴル苗字の由来まで結婚披露宴の舞台に取り入れているという。吉氏は、通遼市は漢化していたが、近年モンゴル族の雰囲気があふれている、モンゴル意識が高まっているという。そしてモンゴル人が多い通遼市で結婚披露宴を司会することを通じて、モンゴル文化を広めるという。そして吉氏もエルデン氏が言うように、牧畜地域生まれなので、モンゴル文化を知っていると強調しているのが注目すべきである。

以上の三人の司会者は若い世代の人たちで、オドン氏はテレビ局に勤めているので、豊富な語学力の才能を利用して司会している。エルデン氏もラジオ放送局に勤めているので語学力を持ち、モンゴル国、シリングル盟の有名な司会者からイルゲルウゲ習った人である。吉氏はお笑い芸人として活躍し、婚礼文化メディア会社を作り、ホルチン地域にモンゴル人が多いという市場を利用して、モンゴル文化を普及させ、経済面でも重要性を強調した。この三人の司会者は内モンゴルの各地域に移動して、司会している。筆者が調査していたとき、年配の司会者たちから、現在の若い司会者たちは、モンゴル族の文化を知らないままで司会しているという声をよく耳にしたことがある。以下で通遼市の年配の司会者はどのような取り組みしているのかを調査していきたい。

牧仁氏は63歳の男性。通遼市中旗出身。内モンゴル大学の新聞放送学科を卒業し、1981年から現在まで通遼市テレビ放送局に勤めている。1988年から司会を始めた。牧仁氏の話では「私は司会を通して都会のレストランでどのようにモンゴル族の文化を表現すればよいのかとずっと考えてきた。司会を始めた最初の頃は、現在のようなモンゴル風の結婚披露宴を実施できていなかった。当時西洋風・漢族風の結婚披露宴を中国語、モンゴル語で司会していただけだった。その後、地方で行われていたホルチンモンゴルの伝統的な婚姻習俗を徐々に都会のモンゴル風の結婚披露宴の舞台に取り入れたのである。都会の舞台では、地方で行っていた①サーダモラダホ儀式すなわち新郎添い婿が新婦の実家に行く、②フレゲンホビチラホ儀式（舞台で全部着替えるのではなく、帽子をかぶせる、腰にハダックやタマヒの袋をつけてあげる）、③新郎が新婦の父母に酒やタバコをささげる、④新郎新婦が火にお辞儀する、⑤チンギスハーンにお辞儀する⑥新郎側の両親に新郎新婦がハダックタイアリヒ捧げる（ハダックをささげながら酒を勧める）ことなどを全部簡略化して都会の舞台に取り上げたのである。私は通遼市ではじめてホルチンモンゴル族の婚姻習俗を舞台に取り入れた人物である。」「通遼市は漢族とモンゴル族が混住したところなので、司会する時に、モンゴル語中国語で司会する。でもモンゴル語で言う割合が中国語より多い、私は漢人に知らせたいモンゴル文化のことを中国語で言う、そして漢人がわからないと思っている部分だけを中国語で言う、昔男性側、女性側のそれぞれのホルムのヘレムチ（現在の司会の役割）がイルゲホしていたが、現在その代わりに司会者はイルゲルウゲ言っている」。

牧仁氏は都会の結婚披露宴、文化メディア会社について「以前は通遼市にモンゴル風の婚慶会社はなかった。漢族の宴会会社は多かったので、漢族の宴会会社にモンゴル風の結婚披露宴の依頼があった場合に私を司会者として呼んでいた。しかし現在モンゴル風の婚慶会社ができてからほとんど私を呼ぶようになっている」。現在通遼市にモンゴル族の文化メディア会社も三軒できているが、若い人たちが多く、彼らは、モンゴル族の文化習慣もあいまいな感じである。モンゴル服を着て、モンゴル風の飾りをすればモンゴル風の結婚披露宴だと思っている人が多いが、本当はそうではないんだ、必ず中身や詳細なところまで把握しなければならない。通遼市に赤峰市出身の若い司会者たちがいるが、彼らは牧畜地域で育ったので、伝統的な習俗を知っていると思う。農耕地域は、牧畜地域のようにモンゴルの習慣をあまり保存していない」。

牧仁氏の婚姻習俗についての学習は「主にホルチン婚姻習俗に関する本を読んだ。そして、テレビで流しているオロドス婚礼や、ネットでモンゴル族の婚礼を見た。また故郷の年輩の人から聞いた話や自分の長年の経験を生かした。特に私は自分で通遼市のジャルト旗の牧畜地域に調査しに行ったことがある。ジャルト旗の牧畜地域ではモンゴル族の伝統習慣を深く保存している所である。このようにして実際の生活で実施していた婚姻習俗のうち興味深いもの、歓迎できるものを舞台に取り入れたのである。私の司会の独特な点としては、新郎新婦が舞台に上がったら、必ず両親にハダックを捧げ、酒を捧げること、また西洋風の結婚披露宴で新郎新婦はお互いに指輪交換するが、私の司会では、男性が女性に指輪を贈るが、女性は男性にホルチン風のタバコの袋を贈るようにさせている。」そして牧仁氏は「私はモンゴル族の伝統文化の独特な、特徴となる部分を選択して結婚披露宴に取り入れている。たとえば、モンゴル舞台の装飾では、馬頭琴、ハンガイ車、スルデ、モンゴル草原の写真、モンゴルオボの写真、馬の飾り物、モンゴルゲル、弓などモンゴル特徴となるものを取り入れた。音楽の面でも、モンゴル族の歌、ホーマイ、ホルチン民族の歌などと合わせてモンゴル族の特徴をさらに出している」という。

表 23. 牧仁氏の司会の流れ

① サーダモラダホ
② フレゲンホビチラホ儀式（舞台で全部着替えるのではなく、帽子をかぶせる、腰にハダックやタマヒの袋、モンゴル刀をつけてあげる）
③ 新郎新婦をイルゲルウゲする
④ 新郎が新婦の父母と挨拶する。両親にお辞儀する。
⑤ 新郎新婦が新郎側の両親にハダックタイアリヒを捧げる（ハダックをささげながら酒を勧めること）
⑥ 新郎新婦が火にお辞儀する

- | |
|------------------------------------|
| ⑦ 新郎新婦がチンギスハーンにお辞儀する |
| ⑧ 男性は女性に指輪を贈り、女性は男性にホルチン風のタバコの袋を贈る |

以上のように、牧仁氏は、ホルチンモンゴルの習俗に関する本、テレビ、オロドスの婚姻習俗、自分自身の経験から、表に並べた八つの習慣を入れたという。特に②番と⑧番はホルチンモンゴルの習俗として、舞台に取り上げている。牧仁氏は、現在の農耕モンゴル人は都会へ行き、牧畜地域のモンゴル人と交流し、ネットの発展に伴い牧畜地域のモンゴル人の生活を見て、民族の伝統文化をわかり、復興しようとしているという。さらに、農耕地域は漢化し、牧畜地域は伝統文化を保存しているという見た方を持っている。結婚披露宴に取り入れた諸要素も特徴となる部分、客に興味深い部分を見せるという。

文化メディア会社の事例

巴雅爾氏は28歳の男性。蒙古礼儀文化メディア会社の社長である。巴雅爾氏は通遼市奈曼旗の出身で、2010年通遼市ホルチン芸術職業学院を卒業して、大卒後ダンサーとして活躍した。2011年4月14日に、通遼市で初めての「モンゴル族風」の結婚披露宴の企画会社を作った。彼は、モンゴル風の結婚披露宴の企画会社を設立した時、それほど人気ではなかったが、友人、メディアの宣伝によって、知名度が高まり、だんだん経営状況がよくなってきた。現在一日5、6回の結婚披露宴の舞台の装飾をする。巴氏の会社は、通遼市で有名で、前述した司会者は巴氏の会社に登録し、司会者として雇用されることが多い。

筆者「あなたの企画している結婚披露宴はどのような特徴がありますか。結婚披露宴に使う道具には何がある、そしてその道具をどこから輸入したの？」

巴雅爾氏「私の企画している結婚披露宴は、主にホルチンモンゴルの特徴を持っている。主にホルチンモンゴル婚姻習俗を専門とする先生や本、地元の老人を参考にして企画している。そして結婚披露宴の司会を担当しているみんなとネットを通じてお互いに意見交換しながら、参考にし、改善する。隣の高雅文化メディア会社の社長と仲のよい友人関係なのでいつもお互いに意見を交換してもっとよいものを客に提供できるようにしている。結婚披露宴に使う道具は、伝統的なものを現代時代と合わせて自分で設計して作っている。たとえば、スルデ、ハダック、トラガラ、モンゴル車論、ゲル、フフル、ノモソモ、モリンホゴールなどである。現在モンゴル人が結婚するときにわれわれの提案で行う場合もあれば、彼ら自身の提案もあり、その通り行ってほしいと要求される場合もある。たとえば、ウマに乗りながら新婦を迎えに行くとか、新婦の座る馬車など様々な要求がある。そのような道具が家がない場合は、知り合いの会社から道具を借りる。漢人の結婚披露宴の会社がモンゴル風で実施する場合には、私たちから舞台装飾の道具を借りる。その際に道具のレンタル料金をもらう。結婚披露宴の舞台の装飾や司会撮影などの料金は、5000元からス

タートして、使う道具や要求が多いほど料金的に高い」。



写真 40. 馬車で新婦を迎えに行く。



写真 41. 木造のハサク車



写真 42. ハサク車（手作り木造の車）



馬の飾り

写真 43. 結婚披露宴の道具を車に乗せて移動



写真 44. 内モンゴル自治区旗の風船



写真 45. 手作りの羊



写真 46. 舞台の装飾



写真 47. モンゴルスルデ

以上のように巴氏は、蒙古礼儀文化メディア会社を設立し、モンゴル族の舞台の装飾品を作っている。そして司会者を雇い、結婚する人に結婚披露宴の全部の過程のサービスを提供している。司会者や結婚する人が使いそうな道具を全部用意している。では、前述した道具をどのように作ったかについては「ホルチンモンゴルの特徴を持っている。主にホルチンモンゴル婚姻習俗を専門とする先生や本、地元の年配の人を参考にして企画している。そして結婚披露宴の司会を担当しているみんなとネットを通じてお互いに意見交換しながら、参考にし、改善する」という。筆者は巴氏の会社に行き調査したとき、フフホト市の王金河氏の写真を壁に貼っていた。筆者は、「王氏とどのような関係があるの」と聞いたら、「王氏はフフホト市で有名な司会者なので、私のモンゴル道具は王氏の意見を参考にしたのが多い」という。このように巴氏は、ホルチン風俗の本、専門の先生の意見を参考にして、舞台装飾を作っている。モンゴル族の伝統と現代を組み合わせで作っているという。たとえば、内モンゴル自治区の旗のマークをレストランの風船に作っている。舞台に適した羊の飾りのものを作った。そして、結婚披露宴の舞台の装飾品を車に載せて、通遼市付近の多くのところに行っている。

1.3 ホルチン左翼中旗における舎伯吐の司会業

筆者は通遼市の司会者の吉氏から、舎伯吐鎮のモンゴル族の司会者を紹介してもらった。そこで、筆者は通遼市から舎伯吐鎮に移動して調査を実施した。すると、舎伯吐鎮の司会者たちは、通遼市の司会者たちとほとんど知っていて、お互いに連絡をとり、一緒に結婚披露宴を司会したり、舞台装飾の道具をお互いに借りたりしていたという。

司会者の事例

満達胡 36 歳、通遼市中旗の出身、2001 年に内モンゴル民族師範学苑（呼和浩特市）を卒業した。卒業後呼和浩特市や二連浩特市で貿易関係の仕事をしていた。2011 年舎伯吐鎮の中心小学校に音楽の教師として就職した。2012 年、舎伯吐鎮の友人と音楽系のグループ作り、たくさんの宴会に参加し、彼は司会者として活躍している。2015 年 10 月に包康鎮のテレビ局に転職した。

満達胡氏は、結婚披露宴を司会する様子や順番について「私が司会する時はほぼモンゴル語で言う、でも客の要求によって中国語を入れる場合もある。私は田舎で司会する場合に、舞台の装飾をせずに、村内のレストランで司会する。その順番は、①新郎新婦が舞台上がる②新郎新婦を紹介する③新婦新郎の両親が舞台上がる④新郎新婦が両親にお辞儀して改口（新郎か新婦は初めてお互いの両親を父母と呼ぶこと）儀式を行う⑤新郎新婦お互いに誓う⑥新郎新婦が指輪を交換する⑦新郎新婦がワインを交わす⑧新郎新婦がお互いに感謝の言葉を言う⑨新郎新婦が舞台から降りて着替えをしに行く。⑩馬頭琴手が馬頭琴を弾き、歌手が歌い始める。私たちの地域での結婚披露宴はほとんどこのように実施している。漢族とモンゴル族の結婚披露宴の順番はほぼ変わらないが、現在モンゴル村では、新婚夫婦はモンゴル民族の服を着用しているのが多くなっている。そして馬頭琴手、ホゴールタタホ（胡を弾く）を呼ぶのも多くなっている」。

都会でモンゴル風の結婚披露宴を司会する場合「①新婦はモンゴルゲルにいる②新郎が舞台上がり新婦をゲルへ迎えに行く③司会者はイルゲルウゲ（めでたい言葉）を言う。④新郎新婦が舞台の真ん中に立つ⑤新郎新婦が空にお辞儀する⑥新郎新婦がチンギスハーンにお辞儀する⑦新郎新婦が両親にお辞儀し、ハダックを持ちながら酒をささげる⑧民族歌を歌う⑨民族踊りをする。」

満達胡は、司会の知識の勉強について「私は司会を専門的に勉強していなかった。ネットでモンゴル風の結婚披露宴司会の順番や司会の方法を習った、またネットで通遼市の有名な司会者たちのビデオを見てならった。またモンゴル族の伝統的習慣の本を参考にして、イルゲルウゲや伝統的な民族習慣を勉強し覚えた。そしてそれを自分なりの特徴と合わせて結婚披露宴の舞台に応用している。私は結婚披露宴というのは結婚する本人にとっても、客にとってもめでたいことなので、笑い話をたくさん使ってみんなを笑わせて楽しく過ごすのがいちばんだと思っている。自分の司会はモンゴル族の伝統的な習慣はあまり入っていない。私たちの地域ではモンゴル語での漫才のような形式で司会するのは人気がある。たとえばブレンバヤルという有名なお笑い芸人が司会するのは人気があって、私はその人を模倣している部分が多い」。また満達胡の話では「私たちのところで漢人の司会会社は早い時期に発展していたので、早時期から漢族の司会を見て勉強した人が多い。モンゴル人はモンゴル風で司会しているけど、漢族の司会をそのままモンゴル風にしている。たとえば、漢族がスーツ・ウィディングドレスを着ていたらモンゴル族は民族服を来て、司会の言

葉もそのままモンゴル語に通訳しているだけだよ」

満達胡の話では「農村地域では、結婚披露宴だけは便利さを考量して、司会会社に頼んでいているが、結婚披露宴までの各段階はほぼ変わっていない。たとえば、ハダックタビホ儀式（订婚）がある、その後にシグソフルゲホ（新郎側が新婦に肉類を送る）など重要な儀式はまだあるし、変わっていない。都会ではこのような儀式を普段行わないので、結婚披露宴の舞台に取り入れているのである。

表 24. 地方での結婚披露宴の司会の流れ

①新郎新婦が舞台上がる儀式
②新郎新婦を紹介する
③新婦新郎の両親が舞台上がる
④新郎新婦が両親にお辞儀して改口（新郎か新婦は初めてお互いの両親を父母と呼ぶこと）
⑤新郎新婦がお互いに誓う
⑦ 新郎新婦が指輪を交換する
⑦新郎新婦がワインを交わす
⑨ 新郎新婦がお互いに感謝の言葉を言う
⑩ 馬頭琴手が馬頭琴を弾き、歌手が歌い始める。

表 25. 都会のモンゴル人の結婚披露宴の司会の流れ

① 新婦はモンゴルゲルにいる
② 新郎が舞台上がり新婦をゲルへ迎えに行く
③ 司会者はイルゲルウゲ（めでたい言葉）を言う。
④ 新郎と司会者がモンゴルゲルへ、迎えに行く。すなわちサガダホモラダホ儀式。
⑤ エグデダラホ儀式。
⑥ 新郎新婦が舞台の真ん中に立つ
⑦ 新郎新婦が空にお辞儀する
⑧ 新郎新婦がチンギスハーンにお辞儀する
⑨ 新郎新婦が両親にお辞儀し、ハダックを持ちながら酒をささげる
⑩ 民族歌を歌う
⑪ 民族踊りをする。

満達胡氏は以上のように地方で司会する順番と都会で「モンゴル風」で結婚披露宴を実施する場合の順番をいい、地方では完全に「モンゴル風」の結婚披露宴を知らない人が多いが、現在の人にはモンゴル民族服を着て、馬頭琴を引き、ホゴールタタホするのが普及している。満達胡氏は、司会の知識を専門的に習っていない、本、テレビ、ネットなどをみて、彼自身の特徴であるユーモアとあわせ司会をしている。モンゴル族の結婚披露宴の流れは主にネットでみたという、そして彼は、モンゴル族の特徴的なものを選んだが、自分の司会は伝統的ではないという。結婚披露宴の雰囲気を高めて、笑わせて楽しいのが一番重要という。

婚礼メディア会社の事例：

王芳 27 歳の女性、通遼市中旗の出身、高校卒業後大学まで進学せず、呼和浩特市の行って化粧技術を勉強した。彼女は歌、ダンスや司会が学生の時代から得意だったので、それを生かした仕事をしたいと考え、2008 年に故郷の舍伯吐に帰り、婚慶会社（文化メディア会社）を立てた。婚慶会社を設立した。婚慶会社を設立した当初は漢族風、西洋風で実施していて、モンゴル人村での司会はモンゴル語、中国両方を使っていた。2015 年からモンゴル族風の結婚披露宴の舞台の装飾道具を取り入れた。その道具はモンゴルゲル、スルデ、トラガなどである。王芳「結婚披露宴の装飾にモンゴル風の装飾を取り入れたので、今後うちの婚慶会社はもっとよくなるだろうと私は思っている。これらのモンゴル族の道具は私自身が呼和浩特市に行って取り入れたのである」筆者「それらのモンゴル風の結婚披露宴の舞台の道具は呼和浩特市のどこで購入したの？」王芳「呼和浩特市大昭寺の辺にモンゴル族の舞台の道具を売っているところがたくさんある」筆者「売っていたのはモンゴル人ですか」王芳「漢族です、このような市場の状況は漢族が詳しいですよ」王芳は自社のモンゴル風の結婚披露宴の司会の順番は以下の通りであると言っていた。

「私は司会して、新郎新婦はモンゴルゲルにいて、オルートンダゴオ（長調）歌って、ハダックを持ち、イルゲルウゲを言う、新郎新婦がモンゴルゲルから出て舞台上がってくる。司会者は新郎新婦を紹介する。それからホーマイを歌う、馬頭琴を演奏する。などである」筆者「あなたの司会はどこの誰から勉強したの」王芳「私の夫は呼和浩特市で司会会社に勤めていたので、夫からいろいろ教えてもらった。そして、私の親戚の叔母はフフホト市の学校で、ホーマイの教師を担当している、姉はモンゴル歌手で、弟はモンゴルダンサーとして活躍している。また呼和浩特市に行って何人かの司会者の司会様子を見て習った。またネットにモンゴル式の結婚披露宴のビデオがたくさんあるのでネットで習ったのが多い。そして私は海拉爾、集寧などの地域などでも観察に行った。現在モンゴル風の結婚披露宴の舞台の道具を取り入れたが、まだモンゴル風で実施しようという人があまりないので、親戚や知り合いの人に無料でしてあげて、たくさんの人々に知らせて広げたい

と思っている」。また筆者は一か月後に王氏ももう一度インタビューしてみたところ、王氏は「私たちはホルチン中旗で初めて、モンゴル風の結婚披露宴の舞台の装飾品を導入し、モンゴル風で結婚披露宴を実施している。最初の頃はあまり人々に知られていなかったが、現在すごく人気が高まり、毎日予約が入って一か月の日程は詰まっている状態になっている。モンゴル風の司会をする前は、漢族風や西洋風中心であったが、現在ほとんどモンゴル風でしてくださいと言われるようになっている。モンゴル人はやはりモンゴル風のものが好きだね。モンゴル風の道具を導入してよかったと思う、今後もっと広げられると思う」

王氏は司会者として活躍しながら、夫と婚礼の司会会社を設立した。最初は「漢族風」「西洋風」で結婚披露宴の舞台を装飾していたが、2015年からフフホト市からモンゴル風の舞台の装飾を取り入れた。王氏夫婦はホルチン中旗で始めてモンゴル風の結婚披露宴の道具を導入した人たちである。現在人気が高まっているという。

表 26. 王氏の司会の順番

① 新婦はモンゴルゲルにいる
② オルトンダゴオ（チンギスハーンの長調）を歌って、ハダックを持ち、イルゲルウゲを言う司
③ サガダホモラダゴ儀式。
④ エグデダラホ儀式。
⑤ 新婦はモンゴルゲルから出て新郎新婦舞台に上がってくる。
⑥ 司会者は新郎新婦を紹介する。
⑦ それからホーマイを歌う、
⑧ 馬頭琴を演奏する。



写真 48. 王氏の結婚披露宴の舞台の装飾 写真 49. 民族の帽子でモンゴルゲルを作っている



写真 50. スルデの形の風船

写真 51. 王氏の結婚披露宴の舞台の装飾

第二節 司会業のネットワーク

2.1 司会者、婚礼文化メディア会社、結婚する人との関係

以上のように、フフホト市、通遼市、ホルチン中旗舎伯吐鎮における司会者、文化メディア会社の事例を紹介した。以下では、事例を詳細に考察していきたい。

まず司会者と文化メディア会社とはどのような関係があるのか、そして客はどのように

結婚披露宴のことを決めて、実施するのかといった関係性を考察していきたい。

現在の中国人はみんなウェチャットをやっているので、司会者はウェチャットのタイムラインに、名刺や「モンゴル風」の結婚披露宴の画像を載せアピールする。結婚披露宴を実施しようと思っている人は、ウェチャットのタイムラインや知り合いから司会者のことを知り、司会者と連絡をとり、結婚披露宴の司会を頼む。あるいは、婚礼文化メディアといった会社いき直接頼む。婚礼文化メディア会社の場合、結婚披露宴の舞台装飾の道具を用意し、結婚披露宴の全過程を全部録画し、写真を撮り、モンゴル民族服も用意している。通遼市の司会者牧仁氏の話によると「結婚する人は直接婚慶会社に連絡して、婚慶会社は司会者を頼む。もう一つの方法として、結婚する人が司会者に頼み、司会者が婚慶会社から舞台の装飾をレンタルする。婚慶会社は、司会者の意見を聞いて舞台の装飾をする。婚慶会社は自分で舞台の装飾をする場合もある。私の場合は、私の設計した通りに舞台を装飾させる。モンゴル文化を知っている人たちは、私の司会の流れの中に入れてほしい内容を要求する場合もある。しかし、モンゴル文化をあまり知らない人たちは、要求なしで私の司会の流れや舞台の装飾を受け入れるのである」。第三章の1.2の事例1の杭氏は直接司会者を頼んだ。1.2事例2の張氏は文化メディア会社に頼んだ。どれにしても、モンゴル人の司会者、馬頭琴手、歌手たちがウェチャットを利用して、グループを作っているので、司会者個人に頼んでも、会社に頼んでも、彼らはウェチャットのグループから、結婚披露宴に出演できるグループとなる歌手、馬頭琴手たちを呼び寄せている。司会者に頼んだ場合に、司会者は文化メディア会社から舞台の装飾品をレンタルする。ただし、司会者自身で舞台の装飾品を持っている人もいる。客が文化メディア会社に頼んだ場合、会社の人は、会社に登録している司会者を呼び寄せる。舞台装飾や結婚披露宴の流れの中で、客の意見も尊重される。司会者、文化メディア会社の間には強いネットワークがあり、客の便利さを図っている。各地域のみならず内モンゴル全体の司会業の人たちがウェチャットにグループを作っている。筆者は、通遼市のウェチャットのグループに入ったことがある。結婚披露宴の司会者あるいは婚礼文化メディア会社の人は、結婚披露宴の司会を頼まれたとき、グループの中で、歌手、馬頭琴手の必要人数と舞台装飾品の必要品を書き込み、結婚披露宴を実施可能にしていた。このように、現在はネット重要な役割を果たしており、業者たち間での連携関係がうかがえる。

筆者の調査では、フフホト市の王氏は内モンゴルの各地、更に自治区県外にも招待されている通遼市の調査に行ったとき、司会者のオドン氏はヒンガン盟のウランホト市に司会者として招待され、吉氏はジャルト旗に司会者として招待され、舎伯吐鎮の王氏は通遼市の吉氏とジャルト旗と一緒に司会者したことがある。このように、司会者、文化メディア会社の人たちはネットを利用して、地域関係なく密接な関係を持っている。すなわちネットを通して経済利益を保っている。結婚披露宴のときの連絡のみではなく、ネットを通じて多くの司会者や婚礼文化メディアの会社の人たちは交流し、情報交換している。

フフホト市の王氏は、フフホト市で有名な司会者で、彼の司会をネットやテレビで流していた。彼の司会や舞台装飾を通遼市の巴氏は知り、王氏に尋ねたのである。また筆者の通遼市におけるジャルト旗出身の司会者の調査では「ネットで、呼和浩特市の王金河氏の司会を見て、王氏と連絡を取って、結婚披露宴の司会や道具順番について尋ねた。私の道具は全部王氏の舞台の装飾を模倣して、設計して作った」という。通遼市の司会者のオドン氏は「現在通遼市のモンゴル風の結婚披露宴の舞台装飾や民族的特色は単一で、ほとんど類似している」という。このように、司会者たちのネットでの交流や相互参照により、結婚披露宴の舞台装飾や司会の方法は類似していることが分かる。では、具体的にどのような類似性があるのか以下の表で並べる。フフホト市の司会者必氏はホルチン文化を取り入れているといい、通遼市の司会者牧仁氏はホルチン文化を舞台に取り入れたという。このように、司会者たちは自分なりの独自性をアピールしているもの見られる。以下では、各司会者、文化メディア会社の舞台の装飾品や流れを比較しながら考察していきたい。

表 27. 司会者・文化メディア会社の情報

司会者・文化メディア会社	出身地	居住履歴と勤め先	舞台装飾品	司会に取り入れたモンゴル要素	
フフホト市	王金河	通遼市 庫倫旗	フフホト市民政局に勤めている	チンギスハーンの像、ハダック、スルデ、モンゴル乳製品、トラガ、フフル、モンゴルゲル	表 19 を参照
	必席日樂図	通遼市 奈曼旗	フロンボイル市から呼和浩特市に移動、現在フフホト市のテレビ局に勤めている	チンギスハーンの像、ハダック、スルデ、トラガ、モンゴルゲル	表 20 を参照
通遼市	オドントヤ	通遼市 扎魯特旗	オロドス市から通遼市に移動、現在通遼市テレビ局に勤めている	舞台装飾しないで中国語で司会している	なし

	エルデンダライ	赤峰市アルホルチン（牧畜地域）	通遼市テレビ局ラジオ放送に勤めている	チンギスハーン、ハダックスルデ、トラガ、テーブルに置くモンゴル乳製品を、モンゴルゲル	表 21 を参照
	吉仁太	赤峰市アルホルチン（牧畜地域）	テレビの局を辞職、文化メディア会社を設立した	スルデ、ハダックモンゴルゲルのハナ（壁）、机、車輪、トラガ、モンゴル乳製品	表 22 を参照
	牧仁	通遼市中旗	フフホト市滞在していた。通遼市テレビ局に勤めている	馬頭琴、ハンガイ車、スルデ、モンゴル草原の写真、モンゴルオボの写真、馬の飾り物、モンゴルゲル、弓	表 23 を参照
	巴雅爾	通遼市奈曼旗	蒙古礼儀文化メディア会社を設立した。	スルデ、ハダック、トラガラ、モンゴル車論、ゲル、フフル、ノモソモ、モリンホゴール、羊	なし
舎伯吐鎮	満達胡	通遼市中旗	フフホト市、エレンホトに滞在していた。現在保康テレビ局に勤めている。	舞台装飾していない	表 24 と表 25 を参照
	王芳	通遼市中旗	フフホト市に滞在していた。現在舎伯吐鎮で文化メディア会社を設立した。	チンギスハーン像、モンゴルゲルのハナ、スルデ、トラガ、モンゴルゲル	表 26 を参照

上述した表に並べたように、9人のインフォーマントの中で、7人が仕事の合間を利用して司会（吉氏は仕事の合間で司会をしていたが、2015年から文化メディア会社を設立した）をしている。そして、6人はテレビ局・ラジオ関係の仕事している。そして彼らはフフホト市、オロドス市滞在していた。すなわち、通遼市のみではなく、内モンゴルの各地域を移

動していた人たちののである。牧仁は「現在、経済が発展し、交通が発達し、内モンゴルさらに全国の各地域に行けるようになったので、視野が広がり、各地域のモンゴル人との交流ができるようになった。大学進学でフフホト市に行った農耕地域の人は牧畜地域の人たちと出会って、文化交流し、結婚することができる」という。簡単に言うと、交通が便利で、テレビやネットも手軽に見られ、文化人の書いた本があり、農耕地域の人たちと牧畜地域の人との結婚などもある。

このように、農耕地域の人たちは、内モンゴルの牧畜地域の人と出会い、テレビ、ネット、本からモンゴル人の民族文化を再認識しているといえる。司会者の吉氏は、「ホルチン地域は漢人や他の少数民族と混住しており、他県に含まれていた歴史的な原因があり、モンゴル族の文化は、一時的に消失していた。現在はちょうどモンゴル族の文化を再発見している段階である」と述べている。このように、吉氏のような司会者たちは、通遼市はモンゴル文化を喪失し、モンゴルの雰囲気がないと思い、またモンゴル風の結婚披露宴の司会、モンゴル民族服の店といった市場の重要性も考量し、各方面でモンゴル文化を発見、導入している。牧氏、吉氏は、モンゴル人はもともと牧畜文化、草原、モンゴルゲルといった草原のものがモンゴル文化であると思い、通遼市といった農耕地域で、牧畜文化を「再」発見、「再」認識するといっている。しかし筆者の論じたとおり、1910年から農耕地域形直後から、彼らが言う牧畜文化はすでになかったといえる。ではなぜ、農耕地域の人たちは結婚披露宴にモンゴルの要素を取り入れることが「伝統文化」であるという強い認識を持っているのだろう。彼らのいう「特徴」的なモンゴル文化はいったい何を指しているのだろう。本章の第三節で解明していきたい。

各司会者・文化メディア会社の舞台装飾を見ていくと、チンギスハーン像、ハダック、スルデ、モンゴルゲル、トラガ、モンゴル乳製品が上げられている。吉氏は、宮廷のように飾り、牧畜民のモンゴル王室のように豪華に作り、新婚夫婦の幸せな瞬間を祈っている。巴氏の舞台装飾には羊、馬の飾りもの、ハサック車などを作り舞台に入れている。このように、「農耕モンゴル人」が一生懸命「牧畜地域」のものを舞台に取り入れている様子が見られる。

司会の流れの要素では、フフホト市の王氏はモンゴル民族の独特となる17の文化を選択し、内モンゴルのどこの地域にも当てはまる文化といい、その選択理由をひとつずつ言った。ほかの司会者たちは文化の選択理由を言えず、ネット、本、自分が知っている、牧畜地域の人を参考にしたという。通遼市の司会者牧氏はホルチン地域の新婦は新郎手作りのタバコの袋をあげる習慣や、フレゲンホビチラホ習慣などがあり、それらを舞台に取り入れたという。フフホト市の司会者の必氏は、ホゴールタタホ、アラドアマンウリゲル＝ホロバガウゲ（民間話の講演）をとり入れたという。このように全モンゴルの「伝統文化」を取り入れ、「伝統文化」＋「ホルチン文化」を選択するといった行動が見られる。具体的なことを第三節において考察する。

2.2 司会者の弟子養成と師弟関係

上述した司会者たちは、ネットで交流し、情報交換しているのもいれば、直接年配の司会者や牧畜地域の司会者から習っているのもいる。

筆者はフフホト市の王氏が司会する結婚披露宴で参与調査していたとき、二人の人が王氏を手伝っていた。王氏に聞くと「彼らたちは今後司会者になりたいので、私の司会を見て、学んでいる、彼らのように、私から学ぶ人が多い。ヒンガン盟出身の一人の学生は私から2年間婚姻儀礼に関する知識を勉強し、現在はヒンガン盟のウランホト市でモンゴル風の司会会社を設立した。もう一人の学生は通遼市でも司会をしている。このように私は、モンゴル風の結婚披露宴を内モンゴル全土で広げたいと思う」。このように年配の司会者は、弟子を養成し、弟子たちは、地元に戻り結婚披露宴や宴会を司会している。

通遼氏の牧仁氏は司会者の塾を開き、司会者を養成している牧氏の話では「ホルチンモンゴルホリムの舞台化に伴い、モンゴル風で結婚披露宴を行う人たちが増加し、モンゴル族の司会者たちもモンゴル語で司会しようという人が増加したのである。当時私から司会の知識やホルチンモンゴルホリムについて尋ねる人が非常に多くなってきた。そこで、私はモンゴル族の司会者の教育を目指して2008年に塾を作った。主に市、旗、テレビ局やラジオ局の司会者を養成していた。特に遼寧省、吉林省、黒龍江省のモンゴルテレビ局の司会者を養成した。モンゴル語の標準語、モンゴル語でどのように表現するのか、ホルチンモンゴルホリムはどのような特徴があるのか、地方のモンゴルホリムをどのように司会するか、都会のモンゴルホリムをどのように司会するのかを教える。ホリム以外に歳を祝をどの様に司会するか、各年代の人たちにどのような言葉を使うのかなども教える。大きな規模の塾ではないが、三十人ぐらいの学生を養成している」。牧氏は通遼市に初めて「モンゴル風」結婚披露宴を司会した人物で、牧畜地域や本ネット、ホルチン地域の文化を合わせて、オリジナル的な司会の流れを作ったというが、それを数多くの弟子に伝えている。弟子たちは、主に通遼市一帯であるが、遼寧省、吉林省、黒龍江省といった地域のモンゴル人にまで広がっている。

舎伯吐鎮の満達胡氏「私は司会で内モンゴルの東地域のあちこちに行くので、去年ヒンガン盟のザライト旗出身の20代の男性が私から司会の勉強をしたいと頼んできた。それで今まで私の司会の仕方を習っている。」このように、弟子は、実際に披露宴に参加して、司会者の司会をすてきだと思ったら先生としてお願いして習っていることが伺える。

通遼市のエルデンダライ氏は「司会の知識をモンゴル国の有名な司会者であるグレ・バソルとシリンドルの有名な司会者のチン・バートルから習得した。二人の先生から主に、イルゲルウゲ（モンゴル族特有のめでたい言葉）を専門として勉強した」。このように、モンゴル国やシリンドルの先生から習って農耕地域の通遼市行って司会者をしている。エルデン氏の話では「私が地方の結婚披露宴を司会していたとき、標準モンゴル語で言うと、

私の言葉がわからない人が多かった。農耕地域の方言で言ってやっとわかった」このように、牧畜地域のものを習ってそのまま農耕地域に使っても、地方の人たちに通用できていないのがわかる。

以上のように、司会者は弟子を育ててモンゴル文化を伝播していることがうかがえる。では彼らはいったいどのような「伝統文化」を伝播しているのか。

第三節 都市「農耕モンゴル人」の「伝統文化」の創出傾向

3.1 司会者の「伝統文化」と「伝統文化 A」

筆者は第一章の 3.2 で取り上げた『中国少数民族』（人民出版社）、『内蒙古通史綱要』（人民出版社）『中国少数民族の信仰と習俗』、「4 モンゴル族」（第一書房）を見ると、内モンゴルは、大草原、モンゴルゲル、馬、オボ、モンゴル相撲、牧民、ハンガイ車、乳製品などが特に紹介されている。一方筆者が示した表で、司会者たちの舞台の装飾品として置かれているのは、スルデ、ハダック、モンゴルゲル、机、車輪、トラガ、モンゴル乳製品などである。それらは一見して「伝統文化 A」から取り上げられていることが分かる。すなわち、内モンゴル全体のモンゴルのこととして本、テレビやマスコミなどで宣伝されている牧畜地域のものを、現在の司会者は舞台に取り入れている。必氏の舞台の装飾品の写真 27 を見て、必氏に「それは見たことのないものだけど」といったら、必氏は「それは、モンゴル人の弓とハンガイ車の輪をまとめて作った。モンゴル族の特徴を現すだけのものだ」と答えた。このように、司会者たちは、草原、牧畜地域に使っていたものをそのまま、取り入れて舞台の装飾をすることもあれば、その形を用いて舞台の装飾として「モンゴル族風」にしている。このような舞台の装飾から、司会者たちは「伝統文化 A」から取り入れた要素を用いて、「文化を創造」していることがいえる。

では、司会者が結婚披露宴の司会の流れに取り入れた諸要素はどこから来たのか。以下では、『中国少数民族の婚姻と家族上巻』「4 モンゴル（蒙古）族—内蒙古自治区」と『ホルチン風俗』（呼日樂巴特、烏仁其木格 2012、内モンゴル人民出版社）に記載しているモンゴル族の婚姻習俗を整理して、各司会者の司会の流れの諸要素と比較してみたい。

第一章第三節 3.2.2 に取り上げた『中国少数民族の婚姻と家族上巻』「4 モンゴル（蒙古）族—内蒙古自治区」（第一書房）に記載しているモンゴル婚姻習俗を見ていくと、A. 男方はハダックを女性側にあげる、B. モンゴルゲルを用意する C. 美酒と嗅ぎたばこを整え、モンゴル袍、モンゴル靴、馬鞍、モンゴル刀、金銀の食器を準備する D. 新郎新婦がモンゴル服を着る E. 新郎新婦が馬に乗る F. 女家の戸口が閉まる儀式 G. 新郎新婦が釈迦仏と竈神に拝礼する H. 新郎新婦が両親にお辞儀する I. 新郎新婦が親戚友人と嗅ぎたばこの壺を交換して

挨拶する J. 新郎新婦が二つの篝火の間を並んで通る K. 新郎新婦が天地を拝し、親戚友人を拝礼する。

第二章第三節に取り上げた『ホルチン風俗』（呼日樂巴特、烏仁其木格 2012、内モンゴル人民出版社）では、男性女性の婚約決定後から、結婚披露宴までの実施過程を整理すると、A. サガダグモラダホー花嫁を迎えに行く準備する。新郎は、火の神様に、酒を捧げ、三回お辞儀し、結婚披露宴の全般が安全に実施できることを願う。その後、弓を背負って、馬に乗り、新郎の親戚、ヘレムチ、歌手たちが一緒に女方に向かう。B. 女方が男女のサガダグモラダホ人たちを待ち、彼らが女方に着く前に、馬に乗り、ハダックポリヤホ（布を略奪する）行為をやる。C. 男性側が女性側に到着後、女性側がエゲデダラホ儀式をする。このとき、男方のヘレムチと女方のヘレムチと婚姻習俗について言葉のやり取りを行う。D. 新郎が女方に到着すると、新郎を火の神様にお辞儀させ、新婦の祖父祖母、両親、叔父叔母に会い、酒を進める。E. 男方のヘレムチと女方のヘレムチは席の西側東側に座り、銀碗に牛乳を注ぎ、新郎新婦に牛乳を飲ませる。席に羊肉を置く。F. フレゲンホビチラホ儀式、新郎をモンゴル民族服に着替えさせて、帯をつけ、帯にナイフ、タマヒオゴタ（タバコのきみを入れていた袋）、タオルなどをつけてあげる。そしてゴトル（モンゴル靴）を履かせる。G. オッタゴル ホリム（男方が送親側を向かう儀式）—送親側が到着しようとしているときに、男方が草原に式布団を敷き、その上にテーブルを置き、テーブルに酒、肉、ハゴライボダガ（モンゴル族の独特のご飯である粟の形をしている）、チャガンイデゲなどを置く、火をつけて、送親側を待つ。この儀式が終わったら、男方がみんなを家に連れて行く。男方についたら、ミルクティ、チャガンイデゲ、ハゴライボダガを供応する。H. 新婦が車に乗っているときに、新郎の母が迎えに行き、牛乳、バタを食べさせ、車から家まで、式布団を敷き、新婦が敷布団の上に歩いているときラマは教を読む。I. 新婦が新郎側の年輩の方々にお辞儀し、自分の手作りの靴やタマヒオゴタを贈る。J 新郎新婦の長寿を祈願して、うどんやおかゆを食べさせる。

以上のように、「伝統文化 A」に記載しているモンゴル族の婚姻習俗を取り上げた。ではそれは、司会者たちの司会の流れに取り入れた婚姻習俗とどのような、関係があるのか。

まず王氏の司会の流れから、取り入れた要素を見ていくと、①⑦⑩⑭の習慣は『中国少数民族』に記載している K、I、F に対応する。⑤⑥⑩⑫⑭⑯の習慣は『ホルチン風俗』に記載している A、E、J、C、F に対応する。②③⑧の習慣は、王氏が言う『モンゴル民俗百科全書』（民俗編集委員会）に記載している内容を自分なりの意味合いで司会の流れに入れている（民俗編集委員会 2011：161－261）。すなわち 17 習慣の中 12 の習慣が本から取り入れていることが分かる。そして④の習慣は『中国少数民族の信仰と習俗』では、モンゴル族の宗教はブヘイであることを紹介している。そしてチンギスハーンのドラマでもチンギスハーンはブヘイを信じて戦争に出ていたと王氏は言っていた。そして⑧⑬で王氏は、モンゴル秘史に記載しているチンギスハーンという言葉、チンギスハーンの母の教え言葉を新

郎新婦に使っている。王氏は、⑪⑮⑰は漢族の結婚披露宴に実施していたのを、モンゴル要素で入れ替えたという。たとえば、漢族の結婚披露宴で新郎新婦は指輪を交換するが、王氏は、モンゴル族のハマルタマヒを交換することで入れ替えた。漢族の新郎新婦がお互いに拝礼する習慣をモンゴル人はモンゴル民族服を着て、お互いに尊重しあうという意味で司会の流れに取り入れた。そして、漢族の新郎新婦は花屋⁴⁶に入るが、王氏は、モンゴルゲルに入ることにした。このように、王氏の入れ替えたモンゴル要素の17習慣の家、14習慣は婚姻習俗の本から取り入れている。残りの3の要素は漢族が実施していた儀式に、モンゴルゲル、ハマルタマヒといった要素を入れたのである。

王氏の話によると「私の司会は地域の特徴なしで、世界にいる全モンゴルに全部当てはまる習慣を選択したのである、そして一番特徴となる部分をとった」という。ここからわかるように、王氏が、全モンゴル人に当てはまる習慣、独特となる部分とっているのは、明らかに「伝統文化A」から取っているということが読み取れる。しかし、王氏はひとつの本から取り入れているのではなく、いろいろなところから「独特」な部分を取り、王氏なりの婚姻習俗を作っている。つまり王氏が言う「モンゴル族の特徴」となる文化、「東モンゴル文化」、「漢族のものをモンゴル要素に入れ替える」、「西欧の文化をモンゴル族の要素に入れ替える」といった手段で結婚披露宴の全体の流れを作っている。

さらに必氏、エルデンダライ氏、吉氏、牧氏、満達呼氏、舎伯吐鎮の王氏の流れをまとめると以下の表のように整理できる。上述した王氏の司会の流れも基本的に以下の表で並べた順番で司会している。現在の司会者の流れほとんど以下の表に並べた基準で司会している。ただ司会者により、自分なりの「特徴」的なものを取り入れている。

⁴⁶結婚披露宴の舞台に飾った小屋である。

表 28. 各司会者たちの司会の流れ

① 司会者が舞台上がり、結婚披露宴当日のことを伝える。
② 新郎と添い婿が舞台にあがる
③ 新郎と添い婿がモンゴルゲルで新婦を迎えるすなわちサーダモラダホ儀式をする。
④ エグデダラホ儀式をする
⑤ 新郎新婦を客に紹介し、新郎新婦は客にお辞儀する
⑥ 新郎新婦が両親にお辞儀する。
⑦ 新郎新婦が火にお辞儀する
⑧ 新郎新婦がチンギスハーンにお辞儀する。
⑨ 歌手は歌を歌い、踊り者は踊ったりしていた。

必氏は、以上に並べた要素に、エグデダラホ儀式では、アラドアマンウリゲル＝ホロバガウゲ（民間話の講演）を取り入れている。『ホルチン風俗』でのCでは、二人のヘレムチは言葉のやり取りをすると記載しているが、必氏は、結婚披露宴で二人の司会者とホロバガウゲを取り入れた。そして特に、ホルチンモンゴル人の言葉で言っている。そして、ホゴールタタホ（中国語で四胡という。ホルチンモンゴル人が引く楽器）をホルチン地域の文化として取り入れている。必氏の取り入れた二つの習慣は、東地域の民間の生活ではよく現れていた。特に宴会では、年配の人たちが集まって、ホゴールタタホ活動をしていた。そして、テレビでも、元旦、春節のテレビ番組に出演していた。ホゴールタタホは、筆者は第二章で取り上げた事例に現れていた。それは特に、結婚披露宴の前日の夜や結婚披露宴が実施後の夜の余興では、東地域の年配の人たちはよくホゴールをタタホ活動していた。面白いことに、通遼市文化志を確認すると、2006年にホゴールのウリゲル（楽器を弾きながら民族の諺をいう）が国家級非物質文化遺産の項目に入り、2008年にアラドアマンウリゲル＝ホロバガウゲは、自治区級非物質文化遺産の項目に登録された（通遼市文化志編委会 2012: 75）。このように、必氏は、二つのホルチン文化を舞台に取り入れているが、それは非物質文化遺産になっているもの、すなわちホルチン文化として、内モンゴル全体に知られているものを取り入れている。このように、必氏は、結婚披露宴の司会に「伝統文化 A」を取り入れる傍ら、非物質文化遺産になっているホルチン文化を取り入れて、ホルチン人のアイデンティティを守っているのだろう。ただし、ホルチン文化として知られている「権威」的なものを取り入れているが、現地人の実践している習慣「伝統文化 B」は取り入れようとしていない。つまり「権威」付けのないものを取り入れていないといえる。

エルデンダライ氏は、表に並べた流れの中に、シリソグ盟の先生やモンゴル国の先生か

ら習った、イルゲルウゲを新郎新婦に言うようにしている。そして、本から有名なモンゴル詩を覚えて、結婚披露宴で読んでいる。すなわち、本に書いてあるモンゴル詩やイルゲルウゲを覚えて、結婚披露宴に使っている。

吉氏は、新郎新婦を紹介するときに、新郎新婦の故郷の歴史的な由来、苗字のことを紹介する。そして『モンゴル秘史』で記録しているモンゴル人の男、女性の姿、ありかたはどうであるべきかを伝えている。また舞台で新郎新婦の母が、新郎新婦に牛乳を飲ませる儀式を取り入れている。それは、『ホルチン風俗』でのEに当てはまる習慣になる。母が子供を生んでから18歳まで育てたことをモンゴル詩として作って、新郎新婦から母への感謝を表している。これは、フフホト市の司会者王氏の司会にあったが、本に記載していた習慣であることを王氏の事例では明らかにした。吉氏の儀式では、自作のモンゴル詩を披露宴で読んでいるという。このように、吉氏も歴史の本から取り入れているのが主である。筆者は吉氏をインタビューしているとき、フフホト市の司会者の王氏の司会を口に出すと吉氏は、「王氏の司会に取り入れているモンゴル文化は根拠がなく、自分の思いで司会しているよ」といった。吉氏の言う根拠とは、やはり、歴史の本、民族文化の本をさしていることがわかる。すなわち、歴史の本や民族文化などに記載されていることが、権力的な言い方になると思われる。そして、モンゴル人の間では、民族の文化を知っている人たちといえば、まず、モンゴル族の歴史の本を読んでいるか、民族文化の本を読んでいる人が挙げられる。すなわち、読書の量により、民族文化を知っているかどうかを量るのである。

エルデン氏と吉氏はモンゴル族の牧畜生活のものを取り入れたというが、結局本から取り入れている。すなわち全モンゴルの特徴となっている牧畜地域の「伝統文化A」を集めて、「伝統文化」を創造している。

牧氏は、「私の司会の独特な点としては、新郎新婦は舞台上がったら、必ず両親にハダックト酒を捧げること、また西洋風の結婚披露宴で新郎新婦はお互いに指輪交換しますが、私の司会では、男性は女性に指輪を贈るが、女性は男性にホルチン風のタバコの袋を贈るようにさせている」という。このように、牧氏の取り入れた習慣では、ハダックを捧げることは、テレビマスコミや日常生活によく現れている。タバコの袋は、筆者の調査では、新婦側が新郎の腰に赤い布を締めてあげ、その上に、手作りのタバコの袋をつけてあげる習慣があった。そして、婚約した女性は、男性側に手作りの靴やタバコの袋を作ってあげる習慣もあった。2000年以降経済発展、市場の流通に伴い、手作りのものがだんだんなくなり、靴やタバコの袋を作る人も少なくなった。通遼市文化志を確認するとホルチンの織物は2008年に自治区級非物質文化遺産になっている。その中で代表的なものは、タバコの袋であった。(通遼市文化志編委会 2012: 89)。このように、牧氏の取り入れた要素の中でも「伝統文化A」から取り入れており、さらにホルチン地域の「権威」付けられた習慣を取り入れていることがわかる。

満達呼氏は「地方で司会するとき、普段舞台の装飾をしていない、都市のレストランに

において客から「モンゴル風」で結婚披露宴を実施したいという願いがあったら、舞台の道具を婚礼文化メディア会社からレンタルして、モンゴル語で司会している。自分なりの特徴的な物は入れていないが、言葉に注意している。たとえば、客を楽しくすることを重視し、笑い話を入れるのに力を入れている」という。満達呼氏は「地方では、婚姻習俗の流れは変わっていいない、ただ現在漢族の業者に頼んでいるだけである。都会では、地方みたいに何日間も続けて結婚披露宴を実施することができず、限られた時間で結婚披露宴を実施しているので、モンゴル要素を取り入れていると思う」という。このように、満達呼氏は地方の婚姻習俗は変化しておらず、結婚披露宴の業者は漢族が営んでいるのが多いので、結婚披露宴だけ業者に頼んでいるという。満達呼氏の話では「私たちのところで漢人の司会会社は早い時期に発展していたので、早時期から漢族の司会を見て勉強した人が多い。モンゴル人はモンゴル風で司会しているけど、漢族の司会をそのままモンゴル風にしている。たとえば、漢族はスーツ・ウィディングドレスを着ていたらモンゴル族は民族服を着て、司会の言葉もそのままモンゴル語に通訳しているだけだよ」という。このように、地方の婚姻習俗は以前から変わりなく行われているが、結婚披露宴のみは、漢族業者に頼むか、モンゴル族業者に頼むかにより、結婚披露宴の性質が違う。しかし、満達呼氏の話では、「地方のモンゴル人の結婚披露宴を漢族の業者に頼むと、結婚披露宴は漢族風に実施されるが、現在は新郎新婦モンゴル服を着ている人が多くなっている」という。また結婚披露宴に馬頭琴を引くのも一般的になっている。つまり、地方の農耕地域では「伝統文化 B」に「伝統文化 A」差し込んでいることがうかがえる。

舎伯吐鎮の王氏の夫はフフホト氏の婚礼会社に勤めていたので、フフホト氏の司会の要素をそのままの司会の流れとして作った。王氏はもともと漢族風、西洋風で司会をしていたが、フフホト市に滞在していた夫の経験を重ねて、フフホト市から道具を取り入れている。すなわち、王氏は、自分なりの「特徴」とするものをいれず、ネットやほかの人の司会をそのまま使っている。そして、それを地方の人たちに広めている。つまり「伝統文化 A」を地方でも広めようという試みだろう。

以上のように、現在の都会結婚披露宴は、主に「伝統文化 A」を結婚披露宴の流れに取り入れ、現在流行している欧米式の結婚披露宴の流れに「伝統文化 A」におけるモンゴル族の要素を「埋め込んで」「モンゴル風」の結婚披露宴の流れを作っている。牧畜地域生まれのエルデニ氏と吉氏は、牧畜地域で使っていたものや「伝統文化 B」を取り入れたというが、それは結局全面的に宣伝している「伝統文化 A」と無関係ではない。東地域の必氏と牧仁氏にはホルチン地域の日常の習慣を取り入れる行動が現れているが、それは、「権威」付けられたホルチン文化を「伝統文化 A」とまぜて「ホルチン風」の結婚披露宴といい、ホルチン人のアイデンティティを守っている。満達呼氏の話では地方の婚姻習俗は大きな変化がなく、業者を使っているだけという。ただしどちらの業者を使っても、新婚夫婦はモンゴル服を着て、馬頭琴を引いている。これは、「伝統文化 B」に「伝統文化 A」を差し込む形になっている。

以上のように、農耕モンゴル人の都会発の伝統文化の創造は「伝統文化 A」に「権威付けされホルチン文化」を差し込む形で定着つつある。一方、農耕地域の地方では、「伝統文化 B」に「伝統文化 A」を差し込むか、「伝統文化 A」を広めるという形で文化を創造している。

3.2 司会者の「伝統文化」と「伝統文化 B」

以上のように、本に記載されており、テレビやマスコミで宣伝されている「伝統文化 A」を司会者たちはモンゴル族の「伝統文化」として認識し、「伝統文化 B」に差し込む形で文化を創造している。では、歴史の本を読んでいない人たち、学校に進学していない人たち、特に農耕地域の農民たちは「伝統文化」を知らないのか。

通遼市の司会者牧氏は「現在通遼市にモンゴル族の文化メディア会社も三軒できているが、若い人たちが多く、彼らは、モンゴル族の文化習慣もあいまいな感じである。モンゴル服を着て、モンゴル風の飾りをすればモンゴル風の結婚披露宴だと思っている人たちが多く、本当はそうではないんだ、必ず中身や詳細なところまで把握しなければならない。通遼市に赤峰市出身の若い司会者たちがいるが、彼らは牧畜地域で育ったので、伝統的な習俗を知っている。農耕地域は、牧畜地域のようにモンゴルの習慣があまり保存されていない」という。牧氏の話から、牧畜地域の人にはモンゴル民族の文化を知っているが、農耕地域の人たちはモンゴル文化を知らないという意味が読み取れる。そして二人の牧畜地域生まれの二人の司会者の話を見ていくと、エルデニ氏は、「牧畜地域に生まれたので、モンゴル族の伝統文化を知っている」、「モンゴル国やシンリンゴル盟の有名な司会者から習った」という。吉氏は「牧畜地域に生まれたので、モンゴルゲルの中もの、牧畜生活に使うものを舞台に取り入れている」という。つまり牧畜地域の「伝統文化 B」も「伝統文化 A」として見られている。一言で言えば、牧畜地域の文化のすべて「伝統文化 A」と見られている。筆者は吉氏に「現在も実家のところでは牧畜しているの？」と聞いたら「私の子供のころは夏だけトボに移動していたが、現在すべて移動していない。全部固定屋にすみ、観光地だけモンゴルゲルとしてたてている」という。このように、牧畜地域に生まれた人といっても、現在移動生活を行っていないし、現在中国内モンゴル本土で移動生活をしている人たちはいないし、モンゴルゲルにすんでいる人もいないといえる。

筆者は第二章第三章で農耕地域の形成を取り上げ、1950年代から現代までの婚姻習俗の調査してきた。現在から100年200年さかのぼっても、ホルチン地域ではモンゴルゲルにすみ、羊肉を食べ、牧畜生活していた形跡が見られない。筆者が調査した婚姻習俗の中でも、司会者たちの取り上げているモンゴルの要素は当該地域で見られなかった。つまり農耕地域のモンゴル人は、地域に適合した生活様式や地域ごとの習慣「伝統文化 B」を形成させてきたといえる。

筆者は第三章で農耕地域の婚姻習俗の流れは変化していないが、経済発展や業者の進入により、要素が変化したことを述べた。たとえば、結婚披露宴に提供するさまざまなサービスが入ってきた。第四章で「モンゴル風」結婚披露宴の事例を取り上げたフフホト市といった大都会では、結婚披露宴の流れに、モンゴルの要素として「伝統文化 A」を取り入れそれがネット発信や弟子育成により、都市から地方まで伝播している。「伝統文化 A」をモンゴル人学生は学校で習っていたので当たり前と思うが、実際地方で農業をいとなんでいる「伝統文化 B」を持っているモンゴル人にとって「伝統文化 A」は「異文化」に近いだろう。司会者のエルデニ氏は地方に行って司会したときに、「きれいな標準語で言っているのに言葉を理解できず、その地方の言葉で言ったらやっとわかった」という。司会者たちの言う「伝統文化」を地方の人たちにわかってほしいという気持ちが読み取れる。そして彼らのいう「伝統文化 A」を知らないときに、モンゴル人なのに、モンゴル人の文化を知らないと非難する。さらに「本物のモンゴル人」ではないという。それに対し、大都会にしているモンゴル人、大学入学者は、自分は「伝統文化 A」を習ったので、「本物のモンゴル人」の列に入れるという考え方をとる。つまり、現在の内モンゴルでは「伝統文化 A」を持っている人たちは「本物のモンゴル人」、「伝統文化 B」を持っている人たちは「本物のモンゴル人」ではない。ただし、それは農耕モンゴル人に限られている。

牧畜地域に生まれた人たちも、結婚披露宴の司会の流れに「地元の年配の人たち、お爺さんから聞いた話」を取り入れたといっても、実際本に記録しているモンゴル族の慣習しか舞台に取り入れていないのである。すなわち、どこの地域のモンゴル人でも、本に記録しているものこそ「伝統文化」として扱っていることが読み取れる。「伝統文化 B」を持ち出して、われわれのモンゴル人の「伝統文化」だというのは、かなりのハードルが必要だろう。農耕地域の人たちが 100 年間以上続けているその地域に沿った「伝統文化 B」は他地域のモンゴル人に完全に漢化したと否定されている。しかもそれは、「権威」付けられた「伝統文化 A」と対比された結果である。実際のことを言うと、農耕地域の人たちは、本当はいきなり入ってきた「伝統文化 A」に「カルチャーショック」を受け、それを「新鮮なモンゴル文化」だと思っているのである。

以上のように現在の人々は、モンゴル文化として宣伝されている、本に載っている、記載されているのが「伝統文化」であるとして認識しているが、それ以外のものは特に農耕地域のものは漢化として否定し、地域の人の生活実践である「伝統文化 B」はある程度無視している状況である。

第四節 小括

第三章において、都会における「現代モンゴル人」、特に大学卒者のモンゴル人は結婚披露宴を「モンゴル風」で華やかに実施していることがわかった。ではそのような「モンゴ

ル風」の結婚披露宴を企画している司会者や文化メディア会社の人はどうにして結婚披露宴の舞台を装飾し、流れを作っているのか、という問題設定を行い、筆者は、本章で「モンゴル風」の結婚披露宴の司会者と業者の事例を取り扱い考察した。その結果、都会の農耕モンゴル人の司会者たちは、歴史の本、テレビマスコミ、ホルチン文化などをまとめて、「伝統文化 A」＋「漢族文化をモンゴル要素に取り入れる」＋「西洋文化をモンゴル要素に取り入れる」＋「権威付けたホルチン文化」といった「異種混合」的な文化をまとめて、新たな「伝統文化」を創出しているといえる。そして、お互いの強いネットワークを通して、司会者たちがいう、婚姻習俗の「伝統文化」を流通させ、伝播させている。そしてそれは、ネットワークを通じて大都会から小規模の都市、地方に近い鎮まで影響を与えている。

つまり、農耕モンゴル人の都会発の「伝統文化」の創造は「伝統文化 A」に「権威付けられたホルチン文化」を差し込む形で定着つつある。一方、農耕地域の地方では、「伝統文化 B」に「伝統文化 A」を差し込むか、「伝統文化 A」を広めるという形で文化を創造している。現在の人々は、モンゴル文化として宣伝されている、本に載っている、記載されているのが「伝統文化」であるとして認識しているが、それ以外のものは特に農耕地域のものは漢化として否定し、地域の人の生活実践である「伝統文化 B」はある程度無視している状況である。ではそれはなぜか。以下の章で説明していきたい。

第五章：農耕地域独自の「伝統文化」

筆者は第一章から第三章まで、婚姻習俗を事例として、農耕地域の「伝統文化 B」の形成から、連続性と変容を論じ、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」を比較した。特に、第三章において第二章に提示した、農耕地域の 1950 年代から 2000 年代までの婚姻習俗と現代の婚姻習俗を比較した結果、現代の婚姻習俗に大きな変容が見られた。それは、2000 年以降の中国の諸政策の下で、中国の経済、グローバル化、通信ネットが著しく発展したことが理由としてあげられる。特に、さまざまな業者、サービスの提供が進んだ結果、婚姻習俗の中での結婚披露宴はさまざまな形になってきた。それに伴い、「モンゴル風」の結婚披露宴が、モンゴル人の間に流行し、結婚披露宴運営会社の人や司会者は、あらゆるところから、モンゴル族の「伝統文化」を選択し、モンゴル族の婚姻習俗の「伝統文化」を創った。それを筆者は本論で、都会発の「伝統文化」と呼ぶ。一方、農耕地域の独自の「伝統文化 B」は自覚しないままになっているが、それはなぜ、自覚しないし、認識しないのか。そして「伝統文化 A」はどのように権威付けられているのか。どのようにしたら「伝統文化 A」と「伝統文化 B」をバランスよく保つことができるのか。

第一節 都市発の「伝統文化」

改革・開放政策以降、中国の民族政策は新たな展開に移った。「伝統的」な文物に対する負の評価が見直されていく中で、少数民族の「固有」文化や社会慣習の再評価の動きも現れるようになった（瀬川 1999 : 87）。経済発展と現代化を国是として追及する国家全体の指向性の中で、多くは後発的な辺境地域に居住している少数民族の地方幹部たちが、観光開発というものを自分らの経済的発展のための重要な戦略の一つとして据えたことによる（瀬川 1999 : 87）。このように、筆者は第三章の第三節に取り上げたように、近年モンゴル族も草原を利用した旅行開発、モンゴルゲルのレストラン、草原におけるモンゴルゲル宿泊などの旅行商品が現れてきた。筆者は、「モンゴル風」結婚披露宴の司会者や婚礼メディア会社を中心に調査し、考察した結果、都市農耕モンゴル人は、結婚披露宴を司会することを通して、新たな「伝統文化」を創出する活動が現れていることを指摘した。都会の農耕モンゴル人の司会者たちは、歴史の本、テレビマスコミ、ホルチン文化などをまとめて、「伝統文化 A」＋「漢族文化をモンゴル要素に取り入れる」＋「西洋文化をモンゴル要素に取り入れる」＋「権威付けたホルチン文化」といった「異種混合」的な文化をまとめて、新たな「伝統文化」を創出しているといえる。そして、お互いの強いネットワークを通して、司会者たちがいう、婚姻習俗の「伝統文化」を流通させ、伝播させている。

第四章の事例で取り上げた舎伯吐鎮の満達胡氏は「農村地域では、結婚披露宴だけ便利さを考量して、司会会社に頼んでいるが、結婚披露宴までの各段階はほぼ変わっていない。たとえば、ハダックタビホ儀式（订婚する）があり、その後にシグソフルゲホ（新郎側が新婦に肉類を送る）など重要な儀式はまだ残っているし、変わっていない。都会ではこのような儀式を普段行わないので、結婚披露宴の舞台に取り入れているのである」。このように地方では、筆者が第二章で取り上げた、婚姻習俗の流れで実施しているが、結婚披露宴だけは、業者に頼んでいる。舎伯吐鎮の王氏は、「漢族風」「西洋風」で結婚披露宴の舞台を装飾し、中国語で司会していたが、2015 年からフフホト市からモンゴル族の特徴とする舞台の装飾を取り入れた。王氏の話では「モンゴル風の司会をする前に、漢族風や西洋風中心であったが、現在ほとんどモンゴル風で司会するようになっている。モンゴル人はやはりモンゴル風のものが好きだね。モンゴル風の道具を輸入してよかったと思う、今後もっと広げられると思う」。このように、満達胡氏や王氏は、ネットを通じて、「モンゴル風」の結婚披露宴の司会や舞台の装飾を知り、「モンゴル風」で司会するようになっている。王氏の夫は、フフホト市の婚礼文化メディア会社に勤めていたので、フフホト市から舞台の装飾品を導入し、フフホト市で見た司会の流れで「モンゴル風」で司会している。このように、結婚披露宴司会業者は、ネットワークを通じて大都会から小規模の都市、地方に近い鎮まで影響を与えている。

太田氏は「情報ネットワークの世界規模での展開、交通手段の飛躍的な向上と庶民化な

どをとおして、自らが生まれた社会の文化と永続的な関係を結ばずに生活できるオプションが選択可能になった。そのようなオプションの選択が可能になったということは、裏をかえせば、自己形成は個人の責任で行われなければならない、という激しい社会状況の発生を意味する。雑多な文化要素が入り乱れる社会においては、自己アイデンティティの希求はさらに高まるだろう」[太田 1993 : 400]と述べている。このような背景に関連して、近年中国の多民族社会、特に漢民族が多数を占める社会に生活しているモンゴル族は、「モンゴル風」結婚披露宴を広めることによって、自民族の特徴、アイデンティティを探求しているといえる。

司会者たちは自民族の文化を結婚披露宴に意図的、意識的、操作的に取り入れている。すなわち、文化を担う主体が文化を意図的、操作的に取り入れている。それを大田氏の概念で、文化を客体化として解釈できるだろう。しかし、司会者たちは、婚姻習俗の「伝統文化」を客体化しているが、それは結局主に「伝統文化 A」が表に出し、「純粋」な文化「正統」な文化として取り上げてきた。その一方彼らがあまりにも「伝統文化 A」を強調した結果「伝統文化 B」が否定され、無視されている問題点が現れている。先行研究では、伝統文化の創造論⁴⁷にしても、近代化論⁴⁸にしても、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」を混同して論じていると思う。柄木田氏は「伝統文化の本質主義を調査地側の立場に立って、伝統文化」を「表象する権利は誰にあるのか」を検討したが、伝統文化は多方面が持っている結論をだした⁴⁹。結局、「伝統文化 B」の存在を無視したので、島々の中の対立問題が出てきたといえる。すなわち、内モンゴルのモンゴル人の「伝統文化」は「伝統文化 A」のみではなく各地域の「伝統文化 B」が存在している。しかし、「伝統文化 A」を強調したあまり、「伝統文化 B」の位置づけが弱まり、無視され、更に、地方の人自身も自覚しなくなったのである。では農耕モンゴル人はどのような独自の「伝統文化」を持っているのか。

⁴⁷エリック・ホブズボウムは、伝統を「本来の伝統」と「創り出された伝統」とわけ、「旧来の慣行（本来の伝統）は、特定の拘束力の強い社会的慣行である。創り出された慣行は、印刻した集団の成員資格の価値や権威や義務の性質、つまり「愛国精神」「忠実生」「義務」「規則遵守」「学校の精神」などである」（ホブズボウム 1992： 20-21）。と定義している。

⁴⁸エリック・ホブズボウムは、「伝統」とは、近代において「創り出された」ものであり、近代の必要性によって作り出されるのである。近代化の動態的過程における民族間の関係や民族と国家とのかかわり、更に市場の拡大といった現象が交差する中で伝統が作り出されるのであると指摘している（ホブズボウム 1992： 11-14）。富川氏は、近代化について、特定の民族文化における「伝統スポーツ」が社会の近代化に伴って、当該社会の文脈の中で、「主体的な営み」によって仕掛けられた「歴史」的過程であると定義している。そして「伝統」と「近代」を対比的な視点で捉えるのではなく、ブフの伝統は長い歴史の中で養われた確信的な「文化遺産」であると定義している。

⁴⁹柄木田氏は、会議が開かれることによって、島間の海面権に関する不一致・対立を噴出させた。つまり、特定の社会内においても、創られた伝統に対する批判が生じている。それは各島の多面的文化確認を無視したからである。ここから、伝統文化の再生産は一枚いたでは捉えられない、他者を表現する権利は誰にあるのかという問題は、研究者と調査地の間にだけでなく、調査地に競われる問題であると指摘した（柄木田康之 1997： 87-99）。

第二節 農耕地域独自の「伝統文化」の位置づけ

ボルジギン・ブレンサイン氏は、「東部モンゴル人社会は、排除することなく多民族を積極的に受け入れ、彼らの移住により各文化要素が持ち込まれた。そして絶え間なくモンゴル社会にその文化要素を浸透させ続けたのである。しかし、内モンゴルの東部モンゴル民族は、まるまる彼らの文化要素を受け入れたのではなく、自文化を継続しながら多文化を受け入れてきた」（ブレンサイン 2003：336-338）と指摘している。筆者は、第一章では、ブレンサイン氏が取り扱った満州国時代のランブントブ村落の史料を取り扱い、内モンゴルの東部地域のモンゴル人村落が形成された過程を論じ、村落形成時点での、移住関係に注目し、漢人が形成した村落とモンゴル人が形成した村落を比較した。その結果、モンゴル人が形成した村落は、漢人が形成した村落と居住している空間的な面から見ても、移住関係、親戚関係、姻族関係、農業形態の経済関係から見ても、大きな相違点が存在していることが明らかになった。

既述したように、現在から 100 年さかのぼる、農耕地域の実情を知る貴重な史料である満州国時代の興安四省資料からうかがえるように、1910 年前後から、内モンゴル東部農耕モンゴル人村落は活発に形成されていた。そして、農耕モンゴル人は漢人から農耕農業要素を積極的にいれながら、定住生活を送った。農耕用に使う家畜を養い、その時代、その地域にあわせた生き方や生活方式をとった。筆者の 1950 年代から 2000 年代までの婚姻習俗の調査においても、モンゴル族の婚姻習俗の流れに、男性側から女性側にシグソフレゲホ儀式には、羊肉ではなく、豚肉を送る、フレゲンホビチラホ儀式には、床に敷き布団を敷き、その上にタブンタリヤンウレ（五種類の農耕物の種）を散らす、豚の骨で遊ぶ、男性側が女性側に婚資として衣類用の布を贈る、すなわち当時は現地に使うもの、現地から取れるものを利用して重要な儀式を実施していたといえる。

上述した状況を踏まえ、近年内モンゴルのモンゴル人について、多様化に関する研究が進んでいる。すなわち、牧畜モンゴル人、農耕モンゴル人、都市モンゴル人といったモンゴル人の存在を認め多様化していることを指摘している⁵⁰。しかし、内モンゴルのモンゴル人は、あらゆる方面で多様化しているといいつつも、西地域の「牧畜」モンゴル人、標準語しゃべるモンゴル人こそ「本物のモンゴル人」であるとする志向が強く存在している。つまり、多様化の裏に、「単一」モンゴル⁵¹志向すなわち、「伝統文化 A」に偏っているの

⁵⁰ボルジギン・ブレンサイン氏は、民族の分断の歴史と開発、近代化の波にさらされた今日のモンゴル世界はもはや騎馬民族や遊牧民族という言い方で表現しきれなくなるほど多様化が進んだと指摘している。（ブレンサイン 2003：1）。斯日古楞氏も農耕モンゴル人の食に関する用語や調理方法を分析し、農耕モンゴル人は漢人に「同化」したモンゴル人ではなく、食生活から、遊牧モンゴル人、漢人と異なる「農耕モンゴル人」の食生活であることを解明している（斯日古楞 2013：102-125）。

⁵¹シンジルト氏は、モンゴルの「多様」が取り上げられているのは、「単一であるべき」という研究者たちのイデオロギーによるものである。一見してモンゴルとされる人々のためであるかのように見えるこのイ

ある。しかし、実際のところ、西地域のモンゴル地域・牧畜モンゴル地域は、「伝統文化 A」と全部合致するわけではなく、どこの地域においても、現地人の実践する習俗である「伝統文化 B」が存在している。しかし、既述したように、モンゴル族の伝統文化の中で「伝統文化 A」のみが知られ、認められ、「伝統文化 B」が無視され、自覚されていないのである。

ではなぜ「伝統文化 B」は否定されるのか、しかも自覚もしないまま、「伝統文化 A」に合わせて、単一志向の「伝統文化 A」を求めるのか。実は、「伝統文化 A」はモンゴル人の伝統文化として「権威」付けられているからである。前述したようなことは、モンゴル民族のみではなく、中国さらにほかの国々に存在している。簡単にたどってみると、中国は、外国にパンダの国、チャイナ服としてイメージが強いかもしれない。しかし、実は、パンダは四川省、しかも西部のチベット族地域との境界付近にしかない。チャイナ服はめったに着用していない上、そもそも満州服である。日本は桜の国、といっても、日本では桜がない地域もある。韓国はキムチを食べる国、といってもキムチ嫌い人も多数いる。

筆者は、外見からのイメージや本、テレビマスコミの「伝統文化 A」の宣伝によって一つの民族や国のことを理解するより、実際の現地人の生活の実践である習俗である「伝統文化 B」を知ることは、その民族のこと、国のことを理解する重要なことだろうと考えている。そして、現地人も「伝統文化 A」のみではなく、「伝統文化 B」も主張することにより、自分自身の存在している文化を大切にすることこそ、自分への正しい認識ができるだろうと思う。そして同じ民族の間で、各地域の「伝統文化 B」の存続を重視し、尊敬することにとり、民族の団結、今後の健全な発展をもたらすことができるだろう。

しかし、どんなに民族文化の多様性、「伝統文化 B」の存在意義を論じても、「伝統文化 A」を持ち出し、民族の「純粋な」文化を求める傾向は存在するだろう。その文化を持たない民族の人や、いわない人は民族の「裏切ら者」として扱われる。では、「伝統文化 A」はどのように「権威」付けられているのか、なぜ「伝統文化 A」に直面した農耕モンゴル人は、自分たちを「漢化」したと述べ、農耕地域独自の「伝統文化 B」を見直そうともしないのかを検討していきたい。

第三節 なぜ「伝統文化 A」は「権威」付けられているのか

筆者が第一章の第三節で西地域・牧畜地域のモンゴル人、東地域・農耕地域のモンゴル人に対して、「伝統文化」に関する認識をインタビューした内容を見ると、牧畜地域のモンゴル人にしても、農耕地域のモンゴル人にしても、モンゴル人の「伝統文化」を「本を読

デオロギーがいったいどう結果をもたらすのか。多様を主張する行為の背後にあるにある単一志向がそのイデオロギーの根幹にある以上、多様化した人々が必ず、変化せずモンゴル文化や伝統の真髄の担い手とされる「本物のモンゴル人」に想定かされたのである（シンジルト氏：2003）。

む」、「ネットから調べる」「知らない」といった答えが多かったことがわかる。とりわけ、農耕地域のモンゴル人は、「東地域のモンゴル人は漢化したので、牧畜地域の人たちが伝統文化を知っている」と答える一方、牧畜地域の人たちは「本を読まないと分からない」「モンゴル文化を知っている人から聞く」という。すなわち、農耕地域のモンゴル人は、「伝統文化」＝牧畜地域という考えであり、牧畜地域の人たちは「本に記録している牧畜地域に関する文化」＝「伝統文化」という認識である。つまりどこの地域の人にしても「伝統文化A」を取り上げ、現地人の生活の実践されている「伝統文化B」を自覚していないという。しかも、西地域・牧畜地域といっても、現在牧畜をして、モンゴル語にすんでいる人たちはほぼいない等しい。では、なぜ、どのようにして本、テレビマスコミが宣伝している「伝統文化A」は、内モンゴルの人々の間で「権威」付けられたのか。

まず、民族教育が挙げられる。内モンゴルのモンゴル民族は、シリングル盟チャハル地域の言葉を標準モンゴル語として教育された。そしてシリングル大草原は有名な草原地域なので、「伝統文化A」の性質を持っている。

二つ目は、オロドス市には、チンギスハーンの陵をたて、西地域の人々こそモンゴル人の後代として、アピールしている。

三つ目は、牧畜地域は「伝統文化A」を上げて、草原の観光開発している。

四つ目は、「伝統文化A」は、教科書、歴史の本に生き生きと書かれ、テレビマスコミに多めに宣伝されている。

五つ目、国家民族政策で主に「伝統文化A」を取り上げている。

以上の五つの原因により、「伝統文化A」を知っている人たち、「伝統文化A」に近い地域の人たちは、「伝統文化A」の「権威」を言う権利があると思っているだろう。

しかし実際のところ、富川氏が指摘したように、「モンゴルブフの近代化における内実は、ブフに共通する「失ってはならない」「内なる精神」である。その「内なる精神」は民族の文化伝統に深く根づいている精神文化であり、その「内なる精神」を失わない限り、ブフの「伝統」はいつの時代にも維持されると考えられる」（富川 2002：182）。すなわち、伝統は変わらない、変わってはいけないという内なる精神である。

また渥美氏は、カナダのサーニッチ族は復興している神話、地名、個人名を考察することにより、先住民の『伝統文化』は、過去にあったと「想像」される伝統と今日までに「創造」してきた伝統である。そして先住民の伝統が継承するだけの固定的伝統ではなく、二つの仕方で「ソウゾウ」された伝統文化は、「主観的」に「語る」行為も、本来持っていたものではなく、先住民がユーロカナディアンとの接触した結果生まれたものである。先住民が「正しい」（彼らが思う）イメージを選択し、『伝統文化』の「名乗り」を正当なものとするために、『伝統文化』を復興している（渥美 1996：105-125）という。このように、伝統文化を主張しても本来「想像」「創造」した結果になる。

筆者は第四章において、司会者のモンゴル族の伝統文化の取り入れについて聞き取り調査した結果、司会者たちは、ほとんど、歴史の本、民族の習俗の本を読んだと答えている。そして伝統文化の基準を歴史の本、民族の本に置いている。では、歴史の本、民族の本に書いていることは全部事実か。福井氏は伝統文化の真実性と歴史認識について、「島民たちの考える「かつての姿」を歴史資料を用いて多面的考察するが、彼らの認識は必ずしも「事実」ではないかもしれない。ただし「事実」かどうかではなく、伝統文化を図るときメクルマールとして実際に機能している」（福井 2005：47）と指摘している。すなわち、歴史の本、民族の本といっても「事実」といえない。そして、書き手によって「事実」さが違う。そして民族の習俗といっても、民族全体のことを含まず、ある時期、ある地域の事例として書かれたものかもしれない。

もちろん歴史を重視し、それを覚えること、民族の習慣を知ることが、大事なことだが、それをもって、その時代に戻ることが出来ないし、その文化を復元することも出来出ない。ただし、現在のモンゴル人は、モンゴル族の伝統文化を知っている、持っているという理由で自分を「権威」付けて、民族のエリート人とし、鼻を高くすることに向いている現実が存在する。

今後、モンゴル族の伝統文化を現在状況に合わせて、どのように柔軟に対応していくかは大切なことだろう。

第四節 なぜ「伝統文化B」は無視、無自覚なのか

筆者は、農耕モンゴル人を対象に婚姻習俗の調査をしていたとき、多くのモンゴル人から「東モンゴル地域は、もう「漢化」して「モンゴル文化」を保存していないのに、調査意義がない」、「オロドス、シリングル盟といった大草原にいったら、草原の婚礼が行われており、そちらに行ったらきれい」「本を読めば全部わかるよ、農耕地域にモンゴル文化が保存されていない」といった言葉をよく耳にする。そして、それらの言葉は、ほとんど、東モンゴル人自身が、言っている。筆者が第一章の第三節でモンゴル族の「伝統文化」について、聞き取り調査したときも、農耕地域の人たちからは、「漢化」したという発言が多かった。つまり、農耕地域の人たちは、自分自身が生活しているところを完全に「漢化」したと思い込み、「伝統文化B」を自覚していないし、「権力」付けられた「伝統文化A」に対して、完全に自信をなくしている。第四章で取り上げたように、都会に行った農耕地域の一部のモンゴル人は、結婚披露宴の舞台を「モンゴル風」で飾り、結婚披露宴を「伝統的」に実施している。さらに、わざわざ草原に行き華やかに「モンゴル風」で結婚披露宴を実施している。また、都会に馬、牛をレンタルして持ってきて、「モンゴル風」に実施しようと必死に考えている（通遼市婚礼メディアの事例）。一方、地方に広まっていた「モンゴル風」の結婚披露宴を、農耕地域の地方の人たちは、「きれい、新鮮」と思って、われわれの

モンゴル人の「伝統文化」はすばらしいと思っている(舍伯吐鎮の婚礼メディアの王の話)。筆者は農耕地域の司会者のインタビューで、「モンゴル風で司会するのは好きだけど、農耕地域の農民は、それはめんどくさい、簡単に済ませてといわれる。結局、モンゴル風の舞台の装飾などせずに、普通のレストランで実施するのが多い」と言われた。このように、エリートの人には必死に「伝統文化 A」の要素を、結婚披露宴に取り入れている。「伝統文化 A」をもつことによって、「純粋」なモンゴル人になっていることを証明したいわけである。それに対して、農耕地域の農民たちは、農業を営み、豚肉を食べて、草原なしのところは「純粋」なモンゴル地域ではないと思込み、取り入れた「伝統文化 A」を遠いところから見ているだけになる。すなわち、彼らは、自分たちの衣、住、食と完全に違う「伝統文化 A」と対比して、われわれは「漢化」したと見るわけである。

シンジルト氏は、青海省の河南モンゴル人について、「幹部、民衆を含む社会全体がモンゴル語を初めとするソグ C (内モンゴルのモンゴル人) 的なものを導入し、モンゴルの振る舞いを学び始め、ソグ C の標準規格をあわせ、言い換えればソグ C をソグ M (モンゴル人の総称) に同一視することによって、ソグ H (チベット族と対象に河南蒙旗にすんでいるモンゴル人) とソグ M のみぞを埋めようとした。だが、その動きはソグ M への追求のあまり、自己への否定にいたる。つまり「ソグ C 的なもの」を導入することは「ソグ H 的なもの」の排除につながる。重要なのは、ソグ H とソグ M の対立か整合かにはなく、むしろ、ソグ M の基準を持って自らのソグらしさをはかろうとする認識にあった。もし、諸々の「ソグ H 的なもの」がもはや自らのオリジナルでなくなるとしたら、さまざまな「ソグ C 的なもの」に象徴されるソグというカテゴリーへの領有もはや成り立たなくなる。ソグの基準点を「ソグ C」的なものに移動させた際に、その担い手とみなされるソグ M に見習う必要が生じる(シンジルト 2003: 292) と述べる。

このように、河南モンゴルは、内モンゴルのモンゴル人を「伝統文化 A」とみなし、「伝統文化 A」を導入することで、内モンゴル人のモンゴル人と同等なモンゴル人になりたいわけである。それによって、「伝統文化 B」を排除し、否定する危機に陥った。東農耕地域のモンゴル人の都会に住む人たちは、大学進学した人たちは「伝統文化 A」を積極的に導入し、「モンゴル人らしさ」を演じている。しかし、実際の地方に住んでいる人たちは「伝統文化」を知らない「漢化」したといい、自信をなくしている。それは、「伝統文化 A」の導入により自らを否定し、排除していることになる。

また内モンゴルのモンゴル人の間では、モンゴル語の標準語や、漢語を入れないモンゴル語すなわち「純粋」なモンゴル語を操ることによって、モンゴル人らしさを測るのである。東モンゴル地域は、筆者は第一章で取り上げたように、東モンゴル地域の商業地域は漢人が多く、市場で商業を営んでいる。そのような影響により、東モンゴル人の日常生活で使うモンゴル語では漢語を混ぜて使われている。筆者も、そのような環境に育ったので、モンゴル語より中国語を流暢にしゃべれることを望んでいた。しかし、フフホト市に行き、

西モンゴル人と出会うことによって、モンゴル語の標準語をしゃべれない、漢語を挟まないでモンゴル語をしゃべろうとしたら、言葉がでないことになる。そのときに、自分をよく、責めていた。なぜ、自分は中国語もうまくしゃべれないし、モンゴル語もうまくしゃべれないのかと思っていた。これは、東モンゴル人地域の一番キーとなる部分である。すなわち、流暢なモンゴル語を操らないで、中国語を混ぜていう。すなわちモンゴル語と中国語が混ざっていることを「漢化」の一番の目印としてみている。しかし、それは、100年間生活しているうちに、農耕モンゴル人が普段の生活で、実用性にあわせて、選択的に作った一つの言葉ではないのか。日本語を見ても、中国語、英語を混ぜて使っている現状がある。ではそれは、「漢化」「欧米化」したのか。中国語にも外来語がたくさん入っている。そしてモンゴル国のモンゴル語にもロシア語の単語がたくさん入っている。ここでいいのは、その地域に住む人たちは、生活上の必要性、影響力があるものを選択的に取り入れて、ひとつの言葉、文化を作っているということである。

すなわち、言葉や文化の「純粹」さを持っているかどうかで、ひとつの民族の文化をはかり、民族の中で、不理解、和解することをいち早くやめてほしい。それは、地域ごとの矛盾や、争いをもたらし、同じ民族人への間の否定、文化的な戦争になり、健全な発展をもたらすことができない問題を起こす。すなわち「伝統文化 B」を尊敬し、全体のモンゴル人の発展を目指すことが大切だろう。

第五節 「伝統文化 A」と「伝統文化 B」のバランス

以上、筆者は、「伝統文化 B」の重要性、位置づけを論じてきた。裏を返せば、「伝統文化 B」のみを取り上げて、「伝統文化 A」を無視してもよいのか、という問いである歴史をさかのぼると、元時代、モンゴル帝国という統一した国の下に、大元ウルス、ジョチ・ウルス、チャガダイ・ウルス、フレグ・ウルスといった⁵²多数の小規模国が分かれていた。そして、モンゴル政権は、特定のイデオロギーや理念を民衆に押し付けることがほとんどなかった。モンゴル治下の社会は、他種族が共存するハイブリット状態にあった。「ノンイデオロギーの共生」といってもよい状態が全モンゴル帝国領域を覆った（杉山 1996：198）。すなわち「伝統文化 A」を押し付けしなかった、各地域の「伝統文化 B」で共存した国であったといってもよいだろう。しかし、「伝統文化 A」を押し付けなかった結果、各地域の分裂状態に陥り、結局皇位争いが戦争にいたった。

清時代のとき、モンゴル人に土地を与え、牧畜をさせていた。ただし、特定の地域内に

⁵²ウルスとは、モンゴル語で、国という意味。杉山正明氏の『モンゴル帝国の興亡<下>』1996：180頁の地図を参照。

決め、各地域に親王を配置し、各地域のモンゴル民の交流、移住を禁止していた（王玉海 1999：5）。すなわち、清朝時代は、モンゴル人の力を分散させ、統一を防ぐため、地域ごとに「伝統文化 B」を保持していたが、交流がなく、他地域のモンゴル人のことを知らない状態であった。

以上のような歴史的な状況からわかるように「伝統文化 B」のみを強調して、「伝統文化 A」を無視すると、各地域の分裂状態を招く可能性がある。「伝統文化 A」を強調過ぎると、離脱、孤立する危険性がある。すなわち、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」のどちらかを極端に強調することによって、ひとつの国、ひとつの民族に、非常に大きな被害を招く可能性があることをあらかじめ表明していきたい。

総じていうと、もし「伝統文化 A」ではなく、地域ごとの「伝統文化 B」を全国、さらに外国に広めていくと、ひとつの国のイメージがなくなり、国や民族がばらばらになってしまう危険性をもたらすかもしれない。国であれ、民族であれ、「伝統文化 A」の民族の精神、イメージを作らないといけないのが事実である。しかし、「伝統文化 A」のみ強調し、それのみに偏ると、「伝統文化 B」を持つ地域の人々が、離脱、孤立させられ、無視され、自信をなくし、民族のためにがんばっていく意義がなくなる。それゆえ、「伝統文化 A」「伝統文化 B」どちらにしても、無視せず、バランスよく保つことが大事なことだろう。ではどのようにしていけば、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」のバランスを保つことができるのか。

筆者の調査では、現在の内モンゴルのモンゴル人は、「伝統文化 A」をモンゴル族の「純粋」な文化、草原地域に住んでいる人たちこそ「本物のモンゴル人」として見ている。その一方、農耕モンゴル人は「漢化」したモンゴル人、農耕モンゴル人自分自身も「漢化」したと思い、モンゴル人としてのアイデンティティをなくしている。そのような問題に直面したモンゴル人は、「伝統文化 B」の重要性、位置づけを理解しなければならない。たとえば、草原、牧畜、羊肉、ミルクティ、乳製品などを持たない、農耕、豚肉などの特徴を持つ人たちも、一種のモンゴル人であることを認めて、その地域の文化を尊重することが大切である。すなわち「伝統文化 A」を持ち上げるとともに、地域ごとの「伝統文化 B」の存在を認め、尊重することによって、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」の関係を保ち、民族のアイデンティティ、健全な発展ができるだろう。

終章：総括と今後展望

筆者は本論で主に「伝統文化」を、歴史関連の本、テレビ等のマスコミを中心に流布している表象群である「伝統文化 A」と現地の人たちにより実践される習俗である「伝統文化 B」に分けて、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」を比較し、「伝統文化 B」の位置づけや重要性を解明してきた。それとともに、「伝統文化 A」と「伝統文化 B」のバランスを保つことが、一つの民族、国家の健全な発展であることを示した。

「伝統文化」と言えば、地域や国を問わず「伝統文化 A」あげられて、「権力」的になり、それは、一つの民族、一つの国家のイメージを表出している。しかしその一方「伝統文化 B」は、本やテレビなどで宣伝していない、実際の現地の人々の日常生活に存在している。「伝統文化 B」を認識せず、知らなくなっている恐れがある。そして、日常的な文化さえも忘却される傾向が見られ、「伝統文化 A」の肥大化したイメージが、モンゴル族の現状との間に食い違いを見せている。それゆえ、現地人の実践された習俗を記録し、後代に伝えることに、意義がある。それによって、ひとつの国、ひとつの民族のワンパターンのイメージではなく、より現実に近いイメージを提供できると思う。更にいうと「伝統文化 B」を伝える、知ることによって、一つの民族や国のことを素直に理解でき、今後の紛争や戦争を避けることができるという意味で研究の価値があると思う。

第一章では、筆者は内モンゴル東部地域のモンゴル人村落が形成された過程を論じ、漢人が形成した村落とモンゴル人が形成した村落を比較し、モンゴル人が形成した村落の特徴を検討した。内モンゴル東部地域のモンゴル人村落は、漢人が形成した村落と居住している空間的な面から見ても、移住関係、親戚関係、姻族関係、農業形態の経済関係から見ても相当違っていることが明らかになった。そして、第三節において、モンゴル族の「伝統文化 A」を検討した結果、草原、牧畜、モンゴルゲル、牛乳、馬、相撲といったものしか取り上げられていないことが判明した。では、内モンゴルのモンゴル人は、「伝統文化」をどのように思っているのか。筆者のインタビューの結果、牧畜地域のモンゴル人にしても、農耕地域のモンゴル人にしても、モンゴル人は「伝統文化」について「本を読む」、「ネットから調べる」「知らない」といった答えが多かったことが明らかになった。とりわけ、農耕地域のモンゴル人は、「東地域のモンゴル人は漢化したので、牧畜地域の人たちが知っている」と考える。一方、牧畜地域の人たちは「本を読まないと分からない」「モンゴル文化を知っている人から聞く」という。すなわち、農耕地域のモンゴル人は、「伝統文化」＝牧畜地域という考え方であり、牧畜地域の人たちは「本に記録している牧畜地域に関する文化」＝「伝統文化」という認識である。つまりどこの地域の人にしても「伝統文化 A」を取り上げているといえる。

農耕地域のモンゴル人のいうように、「伝統文化」＝牧畜地域の文化なのかについて、筆者は、牧畜地域の婚姻習俗の事例と、「伝統文化 A」に記載しているモンゴル族の婚姻習俗と比較した結果、相違点が多数存在していたことが明らかになった。つまり、「伝統文化」＝牧畜地域の文化ではない、各地域の「伝統文化 B」が存在して、「伝統文化 A」はモンゴル族のイメージとして作られているといえる。その一方で農耕地域の「伝統文化 B」がどのように形成したのかについて、筆者は、村落形成してから、定住生活をし、農業を営み、時代、地域の状況に合わせて、柔軟な対応をとり、独特な文化を形成したのではないかと思う。

第二章では、筆者は、1950年代から2000年代までの農耕地域のモンゴル人の婚姻習俗の

事例を考察して、婚姻習俗の連続性や変化を解明した。その連続性は、結婚披露宴が何れの年代においても相当なお金をかけて実施されており、社会的に重要な位置を占めている事である。それにより、村全体に互助関係がみられるコミュニティが形成されていたことも分かる。一方で変化は、新婦を新郎側に送る際の交通手段の変化、アリヒアゴラがホ式を実施する場所の変化、結婚披露宴に客からもらう祝い品の物から現金への変化、結婚相手を決める際の親の関わり方の変化が上げられる。それは、1980年代の土地政策により経済的に豊かになったことと大きく関係しているようである。それらの変化の中で、婚姻に対する親の関わり方の変化の原因は、経済的な変化だけでなく、人々の思想面での開放も重要な原因となっているのである。

では「伝統文化 A」において、農耕地域のモンゴル人の婚姻習俗はどのように記載されているのか。『ホルチン風俗』農耕モンゴル人の婚姻習俗として記載されているものと、筆者が実際に調査した農耕モンゴル人の事例を比較した結果、前者は実際の農耕モンゴル人の生活と離れ、牧畜地域の生活、草原、牧畜生活、羊肉を食べるなどの「公認」されている「伝統文化 A」にわざと近づけていることがわかる。つまり、文献は農耕モンゴル人の実態を取り上げていないし、当該地域の人たちは、「伝統文化 B」を自覚せず、否定している問題が存在する。農耕地域のモンゴル人の「伝統文化 B」の実態は、農耕地域モンゴル人は、定住生活し、農業を営んでから、現地の実情や状況に合わせて、柔軟な態度で従来の文化を適用していたと思われる。すなわち生活環境に合わせて、「伝統文化 B」をつくり、現代まで維持しているのである。

第三章では、現代「農耕モンゴル人」の婚姻習俗の事例を提示し、その事例を第二章で提示した 2000 年以前の婚姻習俗の事例と比較した。その結果、現在は結婚披露宴を、地元で一度実施してから、都会の勤務地で再び実施する人が多くなってきた。すなわち結婚披露宴が婚姻習俗の中で重要な地位を占め、それを全部業者に頼むようになっていることが明らかになった。2000 年以降の国家の各政策下での著しい経済発展により、現代の農耕モンゴル人は、出稼ぎ、進学（特に大学進学）が増加し、地元で暮らす人が激減している点が理由として挙げられる。そして、婚姻習俗の簡略化、業者の多様化、特に大卒者が勤務先で結婚披露宴を実施する際には、民族衣装を着用したり、民族食品を用意したり、そのほかにも馬頭琴の演奏やモンゴル文字の使用などモンゴル民族に特徴的な要素を取り入れた結婚披露が流行している傾向が現れている。このような婚姻習俗の変化の原因を整理してみると、それは国家の経済発展と無関係ではない、経済発展に伴い業者が頻出し、様々なタイプのサービスを提供できるようになったと思われる。そしてまた、民族風の結婚披露宴が流行しているのは、国家の民族政策や、インターネット、情報発信と関係があると思われる。

以上のような背景により、モンゴル民族の文化の中で、国家非物質文化遺産に登録されたのも多数現れてきた。特に、オロドス婚姻習俗、ホルチン婚姻習俗は国家級非物質文化

遺産に登録されたのに伴い、中国各地域や外国で演出の形で広まるようになり、多くの人々の心をつかみ感動させた。それでテレビ番組の司会者、オボ祭りの司会者たちは、「民族風」の色合いを入れた結婚披露宴を司会するようになったのではないかと思われる。

第四章では、「モンゴル風」の結婚披露宴を企画している司会者や文化メディア会社の人々がどのようにして結婚披露宴の舞台を装飾し、流れを作っているのか、という問題設定を行った。本章では「モンゴル風」の結婚披露宴の司会者と業者の事例を取りあげ、考察した結果、都会の農耕モンゴル人の司会者たちは、歴史の本、テレビマスコミ、ホルチン文化などをまとめて、「伝統文化A」＋「漢族文化をモンゴル要素に取り入れる」＋「西洋文化をモンゴル要素に取り入れる」＋「権威付けたホルチン文化」といった「異種混合」的な文化をまとめて、新たな「伝統文化」を創出していることを指摘した。そして、お互いの強いネットワークを通して、司会者たちがいう、婚姻習俗の「伝統文化」を流通させ、伝播させている。そして、それは、ネットワークを通じて大都会から小規模の都市、地方に近い鎮まで影響を与えている。

つまり、農耕モンゴル人の都会発の「伝統文化」の創造は「伝統文化A」に「権威付けられたホルチン文化」を差し込む形で定着つつある。一方、農耕地域の地方では、「伝統文化B」に「伝統文化A」を差し込むか、「伝統文化A」を広める形で文化を創造している。現在の人々は、モンゴル文化として宣伝、本に載り、記載されているもののみ「伝統文化」として認識しており、それ以外のもの、特に農耕地域のものは、漢化として否定し、地域の人々の生活の実践である「伝統文化B」をある程度無視する状況が現れている。

第五章では、都市の結婚披露宴でモンゴル族の「伝統文化」を取り入れる意味を太田氏の文化の客体化の概念を借用して検討した。さらに、農耕地域の独自の「伝統文化B」の位置づけと重要性を指摘し、「伝統文化A」と「伝統文化B」のバランスを保つべきであると述べた。つまり、「伝統文化A」のみ偏って強調すると、「伝統文化B」を持つ地域の人々が、離脱、孤立させられ、無視され、自信がなくなり、民族のためにがんばっていく意義がなくなる。その一方で、「伝統文化B」のみが全国、さらに外国に広まっていくと、ひとつの国のイメージがなくなり、国や民族がばらばらになっているしまう危険性をもたらす可能性がある。国であれ、民族であれ、「伝統文化A」レベルの民族の精神、イメージを作らないといけないのが現実である。しかし、それゆえ、「伝統文化A」「伝統文化B」どちらも無視せず、バランスよく保つことが大事なこととなる。

以上のように「伝統文化A」と「伝統文化B」の特性を提示し、「伝統文化B」の重要性を取り上げ、両方のバランスを保つことの重要性を指摘した。しかし、実際の内モンゴルのモンゴル人は日常生活の中で、多くの問題点に直面している。

第一章の第三節、3.2.1 現地の人々のモンゴル族の伝統文化の語りで30代の女性L氏は、「現在モンゴル人の文化、モンゴル人の食べ物、たとえばモンゴル乳製品、乾し牛肉を作って売っているのは全部漢人だよ」と語り、第四章で取り上げた、舎伯吐鎮の婚礼メデイ

ア会社の王氏は、「呼和浩特市大昭寺の辺にモンゴル族の舞台の道具を売っている」「売っているところは漢族です、このような市場の状況は漢族が詳しいですよ」と語った。このように、モンゴル人は「伝統文化 A」を取り上げているが、モンゴル人の「伝統文化 A」や「伝統文化 B」を利用して、漢人が商業的展開し、利益を得ているケースが多い。すなわち、モンゴル人は自分自身の文化を現代社会において、実用性につなげる方策を考えていないといえる。

思沁夫氏は、内モンゴル大学のモンゴル族大学生の就職状況を調べ、内モンゴル大学の九つの学院の中で、モンゴル学院の就職率は一番低く、そして就職難が続いている（思沁夫 2004：155）と指摘している。すなわち、モンゴル語で教育を受け、モンゴル語を専門として勉強しても、就職できず、モンゴル語で生活できないという問題が存在する。シンジルト氏は「ソグらしさ」にとどまらず、「正統なモンゴル人らしさ」を取り戻そうとする願望は教育運動を通じて実践化し、結果的に、内モンゴルまで進出する河南蒙旗の若者が現れた。しかし、河南蒙旗の人々が、想起する完璧なモンゴル人は内モンゴルに存在せず「内モンゴルはテレビや教科書で見たのと違う、イメージのモンゴル人と違う。モンゴル語やモンゴル語は内モンゴルでもの珍しくなっている」（シンジルト 2003）ことを発見した。すなわち、河南モンゴル人は、一生懸命モンゴル語を勉強して、内モンゴルの首都にいったが、モンゴル語は使われておらず、テレビや教科書でみたイメージとは違う。すなわち想像していた「伝統文化 A」と現実の「伝統文化 B」の衝突といえる。

つまり内モンゴルのモンゴル人は、「伝統文化 A」を取り上げ、「本物のモンゴル人」を争い、「純粋なモンゴル文化」を身につけ「標準語」を話すモンゴル人こそ「正統」なモンゴル人であるといい、「伝統文化 B」を否定し、無視しているが、これは無意味である。それより、モンゴル人のあらゆる伝統文化の重要性、実用性を探ることが現在の課題だろう。そして、多くのモンゴル人により多くの職場を提供し、モンゴル語、モンゴル民族の実用性を発揮することが、民族の存続やアイデンティティを守る手段となるだろう。

ゆえに東西モンゴル文化の差異を強調し、モンゴル族の正当「伝統文化」を追求するより、全土のモンゴル人が心をひとつにし、モンゴル人に活躍できる環境を用意することこそ、今後の民族の発展につながるだろう。

謝辞

本論文を作成するにあたり、終始適切な助言、ご援助や激励していただいた多くの方々に、ここに記して、深く感謝の意を表します。

まず、本研究を進めるにあたり、指導教官の尾崎孝宏先生から、四年間、夏休み冬休みなしの丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。筆者の博士課程後期の研究分野は、博士前期過程の研究分野と違うので、尾崎先生の指導なしに新しい分野における学問、研究方法などをいち早く知ることがなかったと思っています。特に、学会論文の書き方、学会発表までやさしく指導してくれて、私の失敗や不十分なところまで、優しく受け入れて、励ましてくれました。また指導教官の桑原季雄先生からも、いつも暖かい、激励の言葉をいただき、研究の意欲をかき立ててくれました。そして、文化人類学の学問、フィールド調査方法などをやさしく教えてくれました。特に、一年生のプロジェクト研究発表後、多くの方々の中で、筆者を「韓さんは二か月の赤ちゃんがいて、子育てと研究を両立しながらがんばっている」といつてくれました。そのときの私は感動のあまり涙が出てしまいました。

毎週木曜日に開かれる合同ゼミでは、兼城糸絵先生からもたくさん有意義な質問やコメントをいただき、大いに研究を進めることができました。同じ研究室の先輩である現在は鹿児島大学特任助教の熊華磊さんは、研究の相談相手になってくれ、パソコンの基礎知識や論文に使う地図作成の方法を丁寧に教えてくれました。ほかにも同じ研究室の先輩の片野田優子さんに研究の相談に乗っていただき、激励されてきました。特に、「立ち止まらない」、「めげない」、「あきらめられない」の言葉をいただき、私の一生忘れられない激励の言葉になりました。論文を作成中も、困難や戸惑いがあったとき、片野田さんが教えた言葉を胸にし、前に向けてがんばりました。また同じ研究室の先輩の加塩里美さんからも、研究の悩みの相談に乗っていただき、激励の言葉をいただき、現在までも英語を指導してもらっています。

地域政策科学専攻の教務補佐員の遠矢さんにも、日常生活での悩みやいろんなことでの相談相手になっていただき、遠矢さんは「現在の苦しみは、将来の宝物になる」という偉大な言葉で励ましていただくなど、お母さんのような存在でした。また法文学部大学院系の清田あゆみさんも、優しい言葉をかけていただき、いろいろな書類を丁寧に説明してくれました。ほかにも、同じゼミの先輩の方や、後輩の方からもたくさんの支援と激励をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

次に調査地のフフホト市のインフォーマントの王金河氏は筆者の調査に非常に積極的に対応してくださり、「私はモンゴル文化が大好きで、モンゴル人のためにがんばる若い人を全力で応援する」と言ってくださり、私の調査にいつも積極的に対応してくれました。特に、私がフフホト市に調査に行ったとき、結婚披露宴の司会の現場に参加させていただき、現地の写真や資料を得ることができました。また王氏が、フフホト市以外のほかのインフォーマントを紹介くださったおかげで、筆者の現地調査は順調に実施できました。他に

も、中国にいる友人たちや親戚たちは積極的に筆者の調査に対応してくれて、順調に調査を進めることができました。

日本留学を支持し、支えてくれた天国にいる父に涙を流しながら、大きな声で、「博士論文を書き終わった」と報告したい。筆者が日本に留学中、突然他界したことは、心の中の病、一生の悔いになったが、今後一生懸命頑張って天国の父に報告するのは、一番の親孝行だろうと考えています。また、母と家族のみんなも精神的に支えてくれて、感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、博士前期課程から博士後期課程まで、長年全力で支えてくれて、家事育児まで全部積極的に協力してくれた夫の彭徳春さんと、いつも笑顔で、おりこうにしてくれる息子の阿鹿思くんは、筆者の一日の疲れを解消してくれました。なので、筆者は、育児の辛さを味わっているのではなく、育児の楽しさばかり味わったとも言えます。さらに、育児を全力で支えてくれた、西紫原保育園の先生の方々にも感謝いたします。

参考文献

日本語

綾部恒雄

1997『文化人類学最新術語 100』弘文堂

青木富太郎

1952「内モンゴルハルハ右翼旗の結納、持参物—特にウムチ・ホビ関係の習慣」
『牧畜民族の社会と文化—ユーラシア学会研究報告』113-128

渥美一弥

1996『『伝統文化』を「名乗る」こと：カナダ・サーリッチ族の神話、地名、個人名の
今日的意味』『民族学研究』61-1

柄木田康之

1997「オレアイ環礁における文化確認とその余波」『民族学研究』62-1 : 87-99

石橋純

1999「民族文化の客体化と真正性保証政策—ベネズエラ、サンミジャンにおけるアフ
ロ系文化運動の事例から」『ポピュラー音楽研究』2-18

伊賀上菜穂

2013『ロシアの結婚儀礼—家族・共同体・国家』彩流社

太田好信

1993「文化の客体化—観光を通じた文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57
(4) : 383-410

尾崎孝宏

1996「モンゴル牧民の社会的結合に関する一試論—20世紀前半の東南南モンゴルに
おける調査資料より」東京：『民族学研究』60(3) : 234-248

温都日娜

2007『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の続載婚姻に関
する社会学的研究—』溪水社

烏力吉図、百田弥栄子、曾士才、栗原悟

2004「4モンゴル（蒙古）族—内蒙古自治区」『中国少数民族の婚姻と家族上巻』第一
書房 68-84

王桂蘭

2012『中国内モンゴルにおける生業変化に伴う文化変容』岡山大学大学院社会文化科
学研究科提出博士論文

兼城糸絵

2009「婚姻儀礼と社会変化—中国福建省福州市の調査ノートより」『沖縄民俗学会』
沖縄民俗研究 (27) : 69-95

駒井洋子

2004「人の移動と地方文化の客体化 : ミクロネシア連邦の事例より」常民文化 (27) :
1-28

小坂みゆき

2011「中国朝鮮族における婚姻儀礼の変化」『研究論集』51-69

シンジルト

2003『民族の語りの文法—中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社

暁剛、池上彰英

2015「近現代における内モンゴル東部地域の農業変遷—遊牧に夜牧畜業から定住放牧
と耕種農業に至る過程—」『明治大学農学部研究報告』64 (3) : 67-86

杉山正明

2006『モンゴル帝国の興亡<下>』講談社

鈴木正崇

2011「少数民族の伝統文化の変容と創造—中国貴州省トン族の場合」『現在宗教』258
—282

斯日古楞

2013「中国・内モンゴル自治区におけるモンゴル人の多様性について—内モンゴル東
部の「農耕モンゴル人」を事例として」『千葉大学人文社会科学研究所』102-125

瀬川昌久

1999「中国南部におけるエスニック観光と「伝統文化」の再定義」『東北大学アジア研
究センター』(3) : 85-111

則竹賢

2003「ヤップのやり方、昔のやり方、ヤップの格好 : ミクロネシア・ヤップ社会にお
ける「伝統」概念の分析」『年報人間科学』87-105

ソロンガ

2012「「伝統」の継承、再創造、移植 : 内モンゴル自治区における「白いスウルデ」祭
儀の「復興」をめぐる」『ヒマラヤ学誌』211-223

覃光広著、王汝瀾 (訳)

2012「4 モンゴル族」『中国少数民族の信仰と習俗』第一書房 36-58

東美晴

2001 「現代中国における伝統文化の復興と観光の関係についての考察—上海郊外のケースから」『東アジア研究』31-41

富川力道

2002 『ブフ文化とその再構築過程に関する文化人類学的研究』千葉大学大学院社会文化科学研究科博士論文

2004 「伝統的モンゴル相撲の近代的再生をめぐる」『スポーツ人類学研究』19-40

福井栄二郎

2005 「伝統文化の真正性と歴史認識—ヴァヌアツ・アネイチュム島におけるネテグと土地をめぐる—」『文化人類学』47-74

ホブズボウム (E. H o b s b a w m) 著、前川啓治、梶原景昭 他訳

2002 『創られた伝統』紀伊國屋書店

フリーランド著、愛宕松男訳

1990 「西北モンゴルナロバンチン寺領における牧畜モンゴルの経済・社会生活」『キタイ・モンゴル史』三位書房 375-473

ボリジギン・セルゲレン

2002 「満州国の東部内モンゴル統治」『本郷法政 紀要』11: 73-114.

ボルジギン・ブレンサイン

2003a 『近現代におけるモンゴル民族農耕村落社会の形成』風間書房

2015 b 『内モンゴルを知るための60章』明石書店

武藤康弘

2011 「1930年代から40年代に日本人が記録したモンゴル民族誌の悉皆調査」『奈良女子大学文学部研究教育年報』(8): 85-95

段瑞聡

2007 「グローバル化と中国の少数民族政策の変容—胡錦濤政権を中心に」慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集 257-270

中村純子

2005 「ニューカレドニア土産工芸品にみる民族多様性と文化変容—「文化の客体化」概念の地域的再検討」182-205

轟莉莉

1992 『劉堡』株式会社三陽社

前川啓治

1997「文化の構築—接合と操作」『民族学研究』616—642

山本達也

2008「ダラムサラで構築される「チベット文化」：チベット歌劇ラモと祭典ショトン
をめぐる記述と言説の考察を通して」『日本文化人類学会』73(1)：49-69

吉田順一

2007 モンゴル研究所『近現代内モンゴル東部の変容』雄山閣

劉梅玲

2002「文化活動を通じた地域文化の再創造—台湾南部村落の事例から」神戸大学社会学研究会社会学雑誌(19)：124-137

李瑞雪、史念、俞嵘

2004『中国经济ハンドブック 2004』全日出版株式会社

和田正平

1968「Iraqw 族の婚姻儀礼」『民族学研究』33(2)：126-139

中国語

阿荣高娃

2010a「科尔沁婚俗旅游开发研究」『内蒙古大学学报(社会科学版)』35(5)：32—33

2013b「科尔沁婚俗文化内涵及旅游价值分析」『内蒙古民族大学学报』15—18

策・哈斯毕力格图

2006『鄂尔多斯婚礼』内蒙古大学出版社

杜峥嵘

2012「内蒙古东乌珠穆沁旗乌里雅斯太镇蒙古族婚礼仪式音声的田野调查」『内蒙古大学艺术学院』38—44

国家民委民族問題五丛书编辑委员会

1981『中国少数民族』人民出版社

郭雨桥

1999『郭氏蒙古通』「婚礼宴」作家出版社

郝維民・齊木德道爾吉

2006『内蒙古通史綱要』人民出版社

郝亞明・包智明

- 2010『体制政策与蒙古族乡村社会变迁』中央民族大学出版社
- 黄利霞
- 2006「传统的断裂与复兴巴彦浩特镇蒙古族婚礼仪式的变迁」『文化空间』76—77
- 黄喜林、王格日樂吐
- 2012『科爾沁左翼中旗地名志』政協科左中旗委员会科左中旗民政局
- 吉国秀
- 2005『婚姻礼仪变迁与社会网络重建—以辽宁省东部山区清源镇为个案』中国社会科学出版社
- 李静宇、阿荣高娃
- 2013「试论少数民族婚俗文化资源的旅游开发—以科尔沁婚礼为例」『产业经济』25—29
- 李宏、陈永春
- 2014「试论内蒙古东部地区汉族移民蒙古化现象—以李姓一家为例」『前沿』(1): 130—131
- 荣娥
- 2007「农村婚姻礼仪的社会功能与变迁—以鄂中荣村为个案」『华中科技大学』硕士学位论文
- 陶健ほか(編)
- 2006『内蒙古区情』内蒙古民族出版社
- 通遼市文化志編委会
- 2008『通遼市文化誌(1992—2008)』通遼市文化局
- 唐孝辉
- 2011「科尔沁非物质文化遗产文化生态环境保护研究」『内蒙古民族大学学报(社会科学版)』99—102
- 王玉海
- 1992a「清代内蒙古农业村落的形成和特点」『中国边疆史地研究』28—35
- 2000b『發展与改革—清代内蒙古東部由牧向農的轉型』内蒙古大学出版社
- 2001c「清代内蒙古东部农业村落的规模和布局」『内蒙古社会科学』41—44
- 王志清
- 2008a「农区蒙古族村落的蒙古贞婚礼仪式变迁—以烟台营子村为个案」『民俗研究』46—52
- 2010b「集体的再习俗化农区蒙古族聚居村落形成的民族志—以阜新烟台营子村为例」『学术交流』194(5): 189—192

希・青龙

2008『嫩科尔沁蒙古族风俗』内蒙古人民出版社

薛亚利

2009「婚礼礼仪：一个多学科分析框架」社会科学

闫天灵

2004「论汉族移民影响下的近代蒙旗经济生活变迁」『内蒙古社会科学』18—22

姚慧

2010「霍爾其格嘎查蒙古族婚姻儀礼と婚姻儀礼の歌の現状の調査と研究」『内蒙古大学艺术学院学报』44—53

張路、荣婷

2007「让非物质文化遗产鲜活起来—从[鄂尔多斯婚礼]到[鄂尔多斯蒙古大婚]」『中国文化报』(003) 1-3

张桂娜、张丽萍

2013「内蒙古民族文化的视角传播策略—以鄂尔多斯婚礼为例」『前沿』7：189—191

株颯

2007a「喀喇沁扎萨克衙门档案与移民史研究—以早期汉族移民管理与移民稽查制度为中心」『蒙古史研究（第九辑）』217—227

2009b『18—20世紀初東部内蒙古農耕村落研究』内蒙古人民出版社

モンゴル語

Hurelsha

2014《horqin zang uila》ubur monggol un heblel un buluglel ubur monggol un shinjilehu ohagan tighig mergejil un horiya

Chi・hasbiligtu

1999《monggol horim un degeji》ubur monggol un heblel un buluglel ubur monggol un arad un heblel un horiya

Hurelbagatur/ureenchimeg

2012《horqin u jang agali》ubur monggol un heblel un buluglel ubur monggol un arad un heblel un horiya

参考資料

国家民委民族問題五種丛书编辑委员会

1981『中国少数民族』人民出版社

滿州国国務院公安局

1939『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』「統計編」東京：新京

滿州国国務院公安局

1939『興安南省扎賚特旗実態調査統計編』東京：新京

滿州国国務院公安局

1939『興安西省奈曼旗実態調査統計編』東京：新京

滿州国国務院公安局

1939『興安西省阿魯科爾沁旗実態調査統計編』東京：新京

内蒙古自治区統計局

2012『内蒙古統計年鑑』中国統計出版社

内蒙古自治区地圖製印院

2016『中国分省系列地圖冊中国—内蒙古』中国地圖出版社